

# 白滝遺跡群 XIV

第2分冊（本文Ⅲ章・石器実測図・分布図編）

遠軽町 旧白滝3遺跡

旭川紋別自動車道遠軽町遠軽地区埋蔵文化財発掘調査業務報告書

## Ⅲ 遺構と遺物

### 1 遺 構

- ### 2 遺 物
- (1) 遺物分布と石器ブロック・区域
  - (2) C4-14区の石器
  - (3) BC15-17区(Sb-1)の石器
  - (4) BD18-23区(Sb-2~7)の石器
  - (5) EH22-25区(Sb-8~13)の石器

平成26年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

# 白滝遺跡群 XIV

第2分冊（本文Ⅲ章・石器実測図・分布図編）

遠軽町 旧白滝3遺跡

旭川紋別自動車道遠軽町遠軽地区埋蔵文化財発掘調査業務報告書

## Ⅲ 遺構と遺物

### 1 遺 構

- ### 2 遺 物
- (1) 遺物分布と石器ブロック・区域
  - (2) C4-14区の石器
  - (3) BC15-17区(Sb-1)の石器
  - (4) BD18-23区(Sb-2~7)の石器
  - (5) EH22-25区(Sb-8~13)の石器

平成26年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



## 記号等の説明

- 1 接合資料の中で、剥片石器や石核の素材である剥片もしくは原石を分割したものについては「個体A」「個体B」・・・と呼称した。
- 2 接合資料は、剥離工程を理解し易くするために模式図を作成し、実測図と共に掲載した。模式図は同一段階の剥離群毎にトーンを変え、剥離の流れを番号で示した。但し、切り合い関係がなく、前後関係が明らかでないものにおいても便宜上番号を付けたので、詳細は個々の説明を参照願いたい。
- 3 一部の接合資料実測図においては、視覚的に図を理解し易くするために接合剥片の腹面側をトーンで示した。また、接合資料内に剥片素材の個体が存在する場合、全体の剥離の腹面と区別するために、個体の調整剥片腹面を目の粗いトーンで示した。
- 4 剥離模式図の縮尺は原則1：5である。模式図中の矢印（）は接合剥片の剥離方向を示すが、接合剥片の打点側が欠損している場合は切れた矢印（）、重なって見えない部分は破線の矢印（）で示した。また、折れの場合は加圧部分に▲を付けている。
- 5 尖頭器・舟底形石器などの製作石器が欠落した接合資料で、その形状が復元可能な場合は剥離工程模式図に太実線で輪郭線を復元している。
- 6 調査区域図および遺物分布図などの方位記号は平面直角座標の北を、数値は標高（単位はm）を示す。
- 7 遺構や石器ブロックについては以下の略号を使用した場合がある。  
**Sb**：石器ブロック    **F**：焼土    **Cb**：炭化木片ブロック    **Fc**：フレイク集中
- 8 遺物分布図では以下の記号を用いた。また、母岩別資料の挿図に掲載した母岩情報表と模式図には、括弧内に示した器種略称を用いている。  
●：剥片（FK）    ●：石刃（BL）    ●：縦長剥片（LF）    +：削片（SP）  
✦：細石刃（MB）    ✦：細石刃核（MC）    ◆：舟底形石器（BT）    ▲：尖頭器（PT）  
◆：両面調整石器（BF）    ▲：彫器（BU）    ■：搔器（ES）    ◆：錐形石器（DR）  
▼：二次加工ある剥片（RF）    ▼：削器（SS）    ☒：石核（CO）    ☒：石刃核（BC）  
\*：楔形石器（PE）    ▲：石鏃（AH）    ✕：赤色顔料原材    □：台石・石皿  
□：原石・礫
- 9 遺物分布図の記号横の数字は遺物番号を示している。また、分布図中に示した遺物実測図横の数字は掲載番号である。
- 10 石器ブロック別分布図、母岩別接合資料分布図では、全体の遺物を網かけで示している。
- 11 接合資料の接合分布図では、折れ面接合を実線で示した。
- 12 石質は掲載遺物の一覧表に示したが、黒曜石については、以下の五種類に分けて示した（口絵16）。  
黒曜石1：黒色    黒曜石2：梨肌    黒曜石3：黒色に茶色が混じる（黒＞茶）  
黒曜石4：茶色に黒色が混じる（茶＞黒）  
黒曜石5：黒色に紫色もしくは紫色がかった茶色が混じる（黒＞紫・茶）  
接合資料の一覧表ではスペースの関係上、上記の黒曜石1～5についてそれぞれを1～5の数字のみで示した。
- 13 黒曜石以外の石質については、実測図番号の下に以下の略号で示した。  
安山岩：**An**    めのう：**Ag**    珪質頁岩：**Si-Sh**    珪岩：**Qu**

## 第2分冊（本文Ⅲ章・石器実測・分布図編）目次

Ⅲ 遺構と遺物	1
1 遺構	1
2 遺物	15
(1) 遺物分布と石器ブロック・区域	15
(2) C4-14区(Sbなし)の石器	95
(3) BC15-17区(Sb-1)の石器	102
(4) BD18-23区(Sb-2~7)の石器	104
(5) EH22-25区(Sb-8~13)の石器	150

## 第2分冊（本文Ⅲ章・石器実測・分布図編）挿図目次

<b>Ⅲ章 遺構と遺物</b>	
図Ⅲ-1 遺構分布図、焼土・炭化木片ブロックの 平面・断面図(1)	2
図Ⅲ-2 焼土・炭化木片ブロックの平面・断面図(2)	4
図Ⅲ-3 炭化木片ブロックの平面・断面図(3)	8
図Ⅲ-4 炭化木片ブロックの平面・断面図(4)	12
図Ⅲ-5 焼土・炭化木片ブロックの放射性炭素年代と 共伴石器群	14
図Ⅲ-6 遺物分布図、石器ブロック・区域設定図	50
図Ⅲ-7 白滝I群以外 属性別遺物分布図 礫面・ 被熱・石材(1)	51
図Ⅲ-8 白滝I群以外 属性別遺物分布図 石材(2)	53
図Ⅲ-9 白滝I群以外 属性別遺物分布図 石材(3)・ 器種(1)	54
図Ⅲ-10 白滝I群以外 属性別遺物分布図 器種(2)	55
図Ⅲ-11 白滝I群以外 属性別遺物分布図 器種(3)	58
図Ⅲ-12 白滝I群以外 属性別遺物分布図 器種(4)、 母岩別接合資料分布図 剥離技術(1)	59
図Ⅲ-13 白滝I群以外 母岩別接合資料分布図 剥離技術(2)	60
図Ⅲ-14 白滝I群以外 母岩別接合資料分布図 剥離技術(3)	61
図Ⅲ-15 白滝I群以外 母岩別接合資料分布図 剥離技術(4)	64
図Ⅲ-16 白滝I群以外 母岩別接合資料分布図 剥離技術(5)	65
図Ⅲ-17 白滝I群以外 母岩別接合資料分布図 剥離技術(6)	66
図Ⅲ-18 白滝I群以外 母岩別接合資料分布図 剥離技術(7)	67
図Ⅲ-19 白滝I群以外 母岩別接合資料分布図 剥離技術(8)・原石形状	68
図Ⅲ-20 白滝I群 属性別遺物分布図 自然面・ 被熱・石材(1)	69
図Ⅲ-21 白滝I群 属性別遺物分布図 石材(2)・ 器種(1)	70
図Ⅲ-22 白滝I群 属性別遺物分布図 器種(2)、 母岩別接合資料分布図 剥離技術(1)	71
図Ⅲ-23 白滝I群 母岩別接合資料分布図 剥離技術(2)・原石形状	72
図Ⅲ-24 母岩別接合資料分布図 石器群(1)	73
図Ⅲ-25 母岩別接合資料分布図 石器群(2)	74
図Ⅲ-26 アルファベットライン立面図の位置対応図 (南西-北東方向)	76
図Ⅲ-27 アルファベットラインの立面図(1)	77
図Ⅲ-28 アルファベットラインの立面図(2)	78
図Ⅲ-29 アルファベットラインの立面図(3)	79
図Ⅲ-30 アルファベットラインの立面図(4)	80
図Ⅲ-31 アルファベットラインの立面図(5)	81
図Ⅲ-32 数字ライン立面図の位置対応図 (北西-南東方向)	83
図Ⅲ-33 数字ラインの立面図(1)	84
図Ⅲ-34 数字ラインの立面図(2)	85
図Ⅲ-35 数字ラインの立面図(3)	86
図Ⅲ-36 数字ラインの立面図(4)	87
図Ⅲ-37 数字ラインの立面図(5)	88
図Ⅲ-38 数字ラインの立面図(6)	89
図Ⅲ-39 数字ラインの立面図(7)	90
図Ⅲ-40 数字ラインの立面図(8)	91
図Ⅲ-41 数字ラインの立面図(9)	92
図Ⅲ-42 数字ラインの立面図(10)	93
図Ⅲ-43 数字ラインの立面図(11)	94
図Ⅲ-44 石器群の重層的出土状況に関わる平面・ 立面図(石器群別)	96
図Ⅲ-45 石器群の重層的出土状況に関わる平面・ 立面図(被熱石器別)	97
図Ⅲ-46 C4-14区分布状況(平面・断面図)	99
図Ⅲ-47 C4-14区の石器(1) 尖頭器・舟底形石器・ 削器・石刃核	100
図Ⅲ-48 C4-14区の石器(2) 石刃核・石核、 白滝I群(石核)	101
図Ⅲ-49 Sb-1分布状況(平面・断面図)	103



## 第2分冊(本文Ⅲ章・石器実測・分布図編)表目次

<b>Ⅲ章 遺構と遺物</b>	
表Ⅲ-1 遺構一覧……………	13
表Ⅲ-2 器種別点数・重量集計結果(1)……………	17
表Ⅲ-3 器種別点数・重量集計結果(2)……………	18
表Ⅲ-4 器種別点数・重量集計結果(3)……………	19
表Ⅲ-5 器種別・石質別点数・重量集計結果(1) ……………	20
表Ⅲ-6 器種別・石質別点数・重量集計結果(2) ……………	21
表Ⅲ-7 器種別・石質別点数・重量集計結果(3) ……………	22
表Ⅲ-8 器種別・石質別点数・重量集計結果(4) ……………	23
表Ⅲ-9 器種別・石質別点数・重量集計結果(5) ……………	24
表Ⅲ-10 器種別・石質別点数・重量集計結果(6) ……………	25
表Ⅲ-11 器種別・石質別点数・重量集計結果(7) ……………	26
表Ⅲ-12 器種別・石質別点数・重量集計結果(8) ……………	27
表Ⅲ-13 器種別・石質別点数・重量集計結果(9) ……………	28
表Ⅲ-14 器種別・石質別点数・重量集計結果(10) ……………	29
表Ⅲ-15 器種別・石質別点数・重量集計結果(11) ……………	30
表Ⅲ-16 器種別・石質別点数・重量集計結果(12) ……………	31
表Ⅲ-17 石質別・石器ブロック別出土点数・ 重量集計(1)……………	32
表Ⅲ-18 石質別・石器ブロック別出土点数・ 重量集計(2)……………	33
表Ⅲ-19 石質別・石器ブロック別出土点数・ 重量集計(3)……………	34
表Ⅲ-20 器種別・石器ブロック別出土点数・ 重量集計(1)……………	35
表Ⅲ-21 器種別・石器ブロック別出土点数・ 重量集計(2)……………	36
表Ⅲ-22 器種別・石器ブロック別出土点数・ 重量集計(3)……………	37
表Ⅲ-23 自然面付遺物・石器ブロック別出土点数 ……………	38
表Ⅲ-24 被熱遺物・石器ブロック別出土点数……	39
表Ⅲ-25 母岩別接合資料の剥離技術別・ 石器ブロック別出土点数(1)……………	40
表Ⅲ-26 母岩別接合資料の剥離技術別・ 石器ブロック別出土点数(2)……………	41
表Ⅲ-27 母岩別接合資料の剥離技術別個体数……	42
表Ⅲ-28 区域別接合資料個体数・遺物点数……	42
表Ⅲ-29 剥離技術類型別原石形状別個体数……	43
表Ⅲ-30 石器群別・石質別集計結果……………	43
表Ⅲ-31 石器群別・器種別集計結果……………	43
表Ⅲ-32 石器群別・区域別集計結果……………	44
表Ⅲ-33 石器群別・石器ブロック別 母岩別剥離面 接合資料点数・重量集計結果(1)……………	45
表Ⅲ-34 石器群別・石器ブロック別 母岩別剥離面 接合資料点数・重量集計結果(2)……………	46
表Ⅲ-35 母岩別資料の剥離技術類型と定義(1) ……	47
表Ⅲ-36 母岩別資料の剥離技術類型と定義(2) ……	48
表Ⅲ-37 母岩別資料の原石形状と定義……………	48
表Ⅲ-38 母岩別資料の搬入形態と定義……………	48

## III 遺構と遺物

### 1 遺 構

旧白滝3遺跡では焼土(F)5か所、炭化木片集中(Cb)19か所を検出した。大半が25～28ライン標高348m前後の狭い範囲にまとまってみられた。この範囲は包含層に厚さがあるため、遺構同士の上下差について以下の①～⑥の関係性を確認できた。①F-2の下位にCb-18(図III-28・36・37)、②F-4の下位にCb-9(図III-28・40・41)、③Cb-4の下位にCb-10・19(図III-27)、④Cb-6の下位にCb-10(図III-27・38)、⑤Cb-14の下位にF-5(図III-31・33)、⑥Cb-16の下位にCb-18(図III-28・36・37)となっている。

炭化木片ブロックは土層中に炭化木片がまとまった状態であり、集中部の土層はやや暗褐色となっていることが多い。

焼土・炭化木片集中の土層は全て採取し、堆積と重量を計測後、フローテーション作業を行った。選別後の集計結果は表III-1の通りである。これらの内、40点のサンプルにAMSによる<sup>14</sup>C年代測定を行った(IV章3)。測定結果を前述の①～⑥に当てはめ対比すると、いずれも下位のものが古い値となっており、出土状況の上下関係と年代的な新旧関係は矛盾していない状況である。

遺構と近接する石器ブロックの関連性については、①石器ブロックと近接し両者の出土レベルが同様であること、②近接する石器ブロックの内容が明確であること、③測定年代が旧石器時代の範囲に入ることを条件とすると、11か所の遺構について五つの石器群との関連性を積極的に認定することができる(図III-5、表III-1)。白滝I群：Cb-10・17・19(約26,900yrBP ※Cb-10・19は測定なし)、広郷型細石刃核石器群：Cb-4・6・9(約16,500～18,000yrBP)、服部台型石刃石器群：F-4(約15,700yrBP)、有舌尖頭器石器群：F-1・2(10,000yrBP代前半)である。また、Cb-5(17,000yrBP代後半)とCb-8(約14,800yrBP、約16,000yrBP)は「服部台型石刃石器群もしくは広郷型細石刃核石器群」との関連性が高いと思われる。

以下、遺構毎に記したAMS測定年代値yrBPは全て $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行った値で、較正年代値calBPはIntCal13によって較正した1 $\sigma$ の値である。

F-1(図III-1、図版11-1・2)

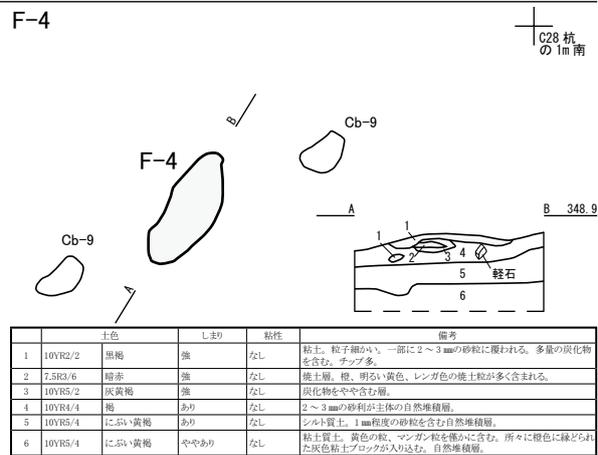
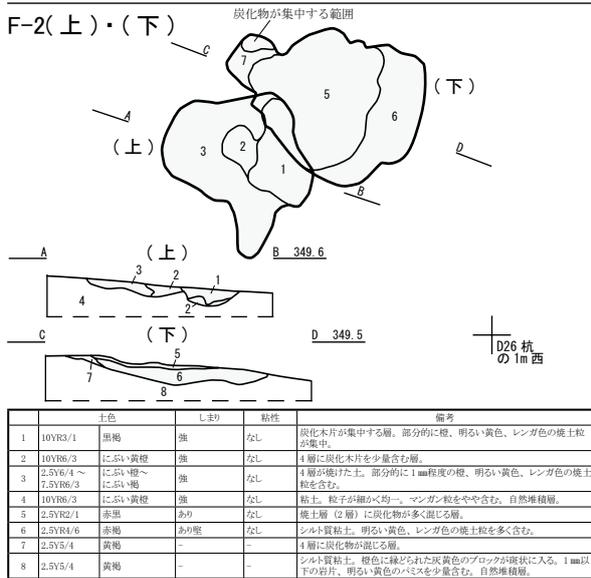
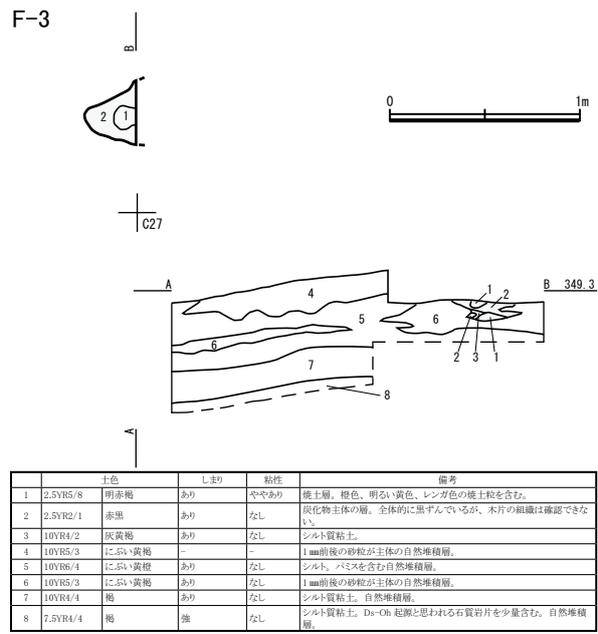
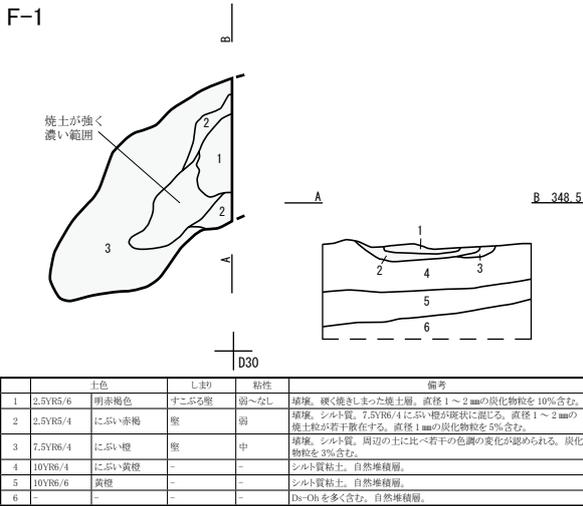
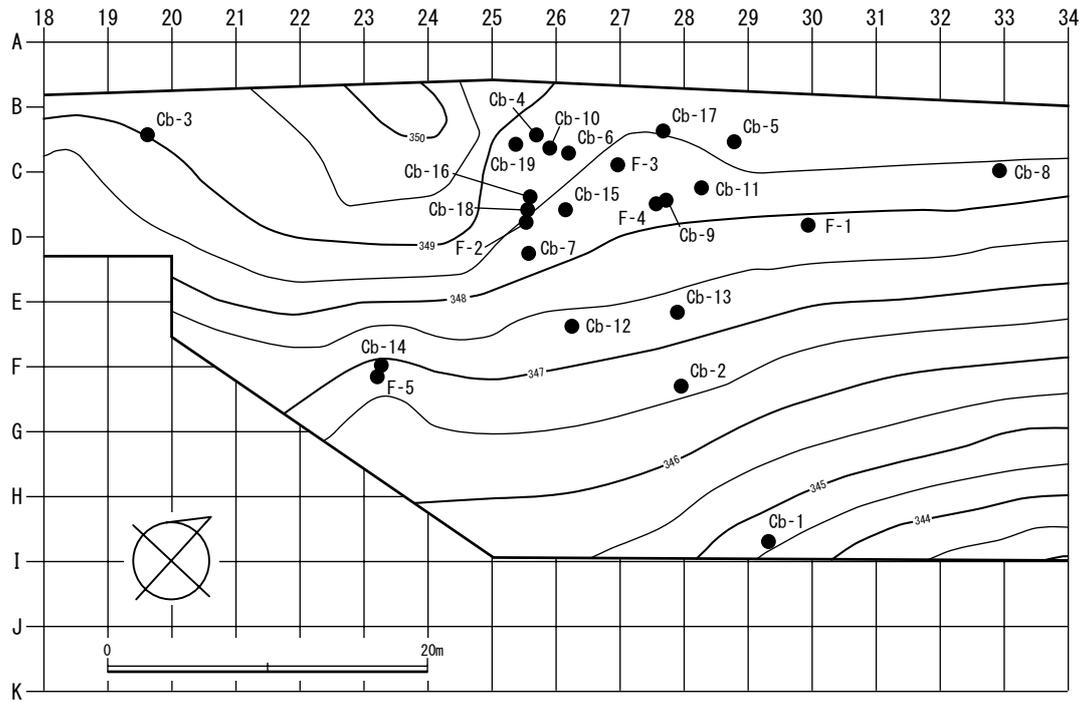
位 置：DH27-29区およびBH30-34区(C29・30区) Sb-37 規 模：(1.2)×0.6×0.08m

調査・特徴：C29区II層掘削調査中にしまりの強い明赤褐色土を検出し、断面観察によって炭化木片を含有する状況を確認後、焼土遺構F-1と認定した。炭化木片の分布は中央部40cmほどの範囲に最も密に認められ、発色の強い硬化した土層も同範囲が最も明瞭であった。赤褐色土の分布は本来C30区へと連続するが、遺構調査段階ではすでに重機調査によってC30区が掘削されていたため、範囲を確認することはできなかった。土層堆積状況は、上位に炭化物粒を伴う層厚5cmほどの焼土層が硬く焼きしまった状態で認められ、下位には若干の炭化物粒と焼土粒が5cm弱の層厚で散在していた。

遺 物：フローテーション作業のため採取した土層から2,149点・15.1gの黒曜石製細片を抽出した。また、Sb-37のII b類舟底形石器や大型石刃などが付近に分布し垂直分布も概ね同レベルとみられるが、共伴性については不明である。

時 期：2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-164(IAAA-82703)に10,240±50yrBP・12,076-11,828calBP、SHIRA-165(IAAA-82704)に10,100±50yrBP・11,921-11,416calBPの年代

1 遺構



図Ⅲ-1 遺構分布図、焼土・炭化木片ブロックの平面・断面図(1)

値が得られた。

F-2 (上)・(下) (図Ⅲ-1、図版11-3～6)

**位置**：BD24-26区 (C25区) Sb-15      **規模**：(上) 0.9×0.8×0.09m、(下) 1.0×0.8×0.1m

**調査・特徴**：F-2は一旦調査を終了し、包含層の掘削を再開した後、すぐ北側に再び焼土のまとまりを確認した。両者の直接のつながりは確認できていないが、連続するような形状で斜めにずれて存在するため元々は同一の焼土が周氷河現象等により分断されたものと推定し、F-2(上)・(下)と認定した。

F-2(上)はⅡ層掘削中に焼土の広がりを確認した。平面形は不整形である。断面はレンズ状で、東側の炭化物の多い部分はやや深く、下部に焼土層の落ち込みが見られる。

F-2(下)は東西方向にやや間延びした不整形で、断面はレンズ状であった。

**遺物**：遺構内の土壌から細片を中心に16,530点・316.3gの一括遺物を回収した。本遺構と同レベル且つ重複する範囲に有舌尖頭器石器群が出土している。

**時期**：近接する遺物の出土状況から有舌尖頭器石器群と同時期のものと考えられる。2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-175 (IAAA-82714) に10,140±50yrBP・11,957-11,645calBP、SHIRA-176 (IAAA-82715) に10,080±50yrBP・11,797-11,409calBPの年代値が得られた。出土状況から有舌尖頭器石器群に伴う可能性が高く、得られた年代値もある程度確度が高いものと思われる。

F-3 (図Ⅲ-1、図版12-1・2)

**位置**：BD24-26区 (B26区) Sb-18      **規模**：(0.4)×(0.2)×0.09m

**調査・特徴**：Ⅱ層の包含層を調査中に焼土と炭化物集中の広がりを確認した。半分以上はB27区に広がると思われる。B27区の調査が先行していたが、焼土は確認できなかった。推定される全体的な平面形は楕円形に近いものと思われる。断面は中央の上部と最下部に炭化物層があり、その周辺の下位に焼土層が北側へと潜り込む形で広がってみられた。

**遺物**：遺構内の土壌から細片を中心に580点・17.9gの一括遺物を回収した。また、本遺構より15cm程下位に広郷型細石刃核石器群の濃密なまとまりが出土している。

**時期**：2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-154 (IAAA-81788) に15,820±70yrBP・19,166-18,972calBP、SHIRA-166 (IAAA-82705) に16,040±70yrBP・19,473-19,245calBPの年代値が得られた。出土状況から本遺構は広郷型細石刃核石器群の年代を示すものではなく、それ以降に形成された焼土と思われる。

F-4 (図Ⅲ-1、図版12-3・4)

**位置**：BC27-29区 (C27区) Sb-29      **規模**：0.7×0.3×0.1m

**調査・特徴**：Ⅱ層の包含層中に炭化物集中の広がりを確認した。平面形は楕円形で、断面は炭化物集中の範囲の下部に焼土層がレンズ状に堆積していた。

**遺物**：遺構内の土壌から細片を中心に13,275点・197.5gの一括遺物を回収した。本遺構と同レベルかつ重複する範囲に服部台型石刃石器群が出土している。

**時期**：2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-167 (IAAA-82706) に15,770±70yrBP・19,098-18,915calBP、SHIRA-168 (IAAA-82707) に15,710±70yrBP・19,034-18,865calBPの年代値が得られた。出土状況から服部台型石刃石器群に伴う可能性が高く、得られた年代値も確度が高いと思われる。



F-5 (図III-2、図版12-5・6)

位置：EH22-25区 (F23区) Sb-9 規模：0.5×0.3×0.04m

**調査・特徴**：Ⅱ層の包含層中に焼土範囲と炭化物が散在する範囲を確認した。焼土の平面形は不整な楕円形で、断面は皿状であった。

**遺物**：遺構内の土壌から細片を中心に160点・1.3gの一括遺物を回収した。本遺構と同レベル且つ重複する範囲に有舌尖頭器石器群が出土している。しかし、この有舌尖頭器石器群は周氷河現象の影響から上下二層に分かれて包含されている。

**時期**：出土状況から有舌尖頭器石器群に伴う可能性があるものの、石器を含め周辺の土層に大きな動きが認められることから共伴石器群は不明と判断した。

Cb-1 (図III-2、図版13-1)

位置：DH27-29区 (H29区) Sb-36 規模：0.4×0.2×0.08m

**調査・特徴**：Ⅱ層の包含層中に炭化物の集中を確認した。断面は皿状の集積であった。

**遺物**：遺構内の土壌から細片2点・0.1gの一括遺物を回収した。本遺構と同レベルで、周辺に主に有舌尖頭器石器群が散在している。

**時期**：2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-179 (IAAA-91777) に $2,760 \pm 30$ yrBP・ $2,876 - 2,793$ calBP、SHIRA-180 (IAAA-91778) に $2,780 \pm 30$ yrBP・ $2,929 - 2,805$ calBPの年代値が得られた。年代値は縄文時代のものであるため後世の混入と考えられ、有舌尖頭器石器群との関連性はないと判断した。

Cb-2 (図III-2、図版13-2～4)

位置：DH27-29区 (F27・28区) Sb-34 規模：1.1×0.6×0.04m

**調査・特徴**：Ⅱ層の包含層中にやや濃密な炭化物集中を確認した。断面は皿状の集積であった。

**遺物**：遺構内の土壌から細片を中心に20点・0.5gの一括遺物を回収した。本遺構と同レベル且つ重複する範囲に服部台型石刃石器群や有舌尖頭器石器群が混在して出土している。

**時期**：1点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-158 (IAAA-82697) に $3,680 \pm 30$ yrBP・ $4,084 - 3,974$ calBPの年代値が得られた。年代値は縄文時代のものであるため後世の混入と考えられ、周辺の石器群との関連性はないと判断した。

Cb-3 (図III-2、図版13-5・6)

位置：BD18-23区 (B19区) Sb-3 規模：(1) 1.4×1.0×0.06m、(2) 0.6×0.3×0.04m、  
(3) 0.6×0.2×0.03m、(4) 0.5×0.3×0.04m

**調査・特徴**：Ⅱ層の包含層中に炭化物集中を確認し、周辺を精査したところ比較的近い範囲で4つのまとまりを確認し、Cb-3 (1)～(4)を設定した。断面は(1)の底面が波状を呈している他はいずれもレンズ状の集積であった。

**遺物**：遺構内の土壌から細片を中心に21点・0.5gの一括遺物を回収した。本遺構と同レベルで、周辺に服部台型石刃石器群が散在している。

**時期**：1点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-157 (IAAA-82696) に $5,170 \pm 40$ yrBP・ $5,987 - 5,906$ calBPの年代値が得られた。年代値は縄文時代のものであるため後世の混入と考えられ、周辺の石器群との関連性はないと判断した。

Cb-4 (図III-2、図版13-7・8)

位置：BD24-26区 (B25区) Sb-17

規模：0.7×0.3×0.03m

**調査・特徴**：B25区Ⅱ層遺物集中範囲の調査において、炭化物粒が散在する暗褐色土の分布を検出した。トレンチ調査による断面観察を行い、炭化木片を若干含む層厚5cm程度のしまりのよい暗黄灰色土の堆積を確認し、炭化木片ブロックCb-4として登録した。確認した1層と2層には炭化木片が少量ずつ含有され、層界は漸移的であった。

**遺物**：フローテーション作業のために採取した土壌から6,971点・247.6gの細片を主体とする遺物を回収した。これらには細石刃・削片のほか212点に及ぶめのう製細片が含まれている。このほか調査区の遺物として取り上げた点取り遺物が遺構周辺を含め多数出土しており、細石刃が多量に認められることや細石刃核・彫器・搔器などがまとまることが特徴としてあげられる。これらほぼ同一レベルで検出された石器はその大多数が広郷型細石刃核石器群と判断できる。また同石器群の被熱石器の分布はCb-4からCb-6にかけてまとまって認められ、遺構と被熱石器との共伴の可能性は非常に高いと考えられる。Cb-4周辺では細石刃の剥離作業や彫器・搔器などの使用が主体的に行われたものと推測される。

**時期**：2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-169 (IAAA-82708) に17,170±80yrBP・20,830-20,586calBP、SHIRA-170 (IAAA-82709) に17,380±80yrBP・21,102-20,835calBPの年代値が得られた。上記したように広郷型細石刃核石器群との共伴性が認められ、同石器群の製作集団が行った作業に伴い形成された遺構と判断している。

Cb-5 (図III-2、図版14-1・2)

位置：BC27-29区 (B28区) Sb-25

規模：1.2×0.3×0.05m

**調査・特徴**：Ⅱ層の包含層中に炭化物集中を確認した。断面は底面が波状の集積で、東西方向に傾斜して広がっていた。

**遺物**：遺構内の土壌から細片を中心に16,786点・519.0gの一括遺物を回収した。本遺構と同レベル且つ重複する範囲に「服部台型石刃石器群もしくは広郷型細石刃核石器群」と服部台型石刃石器群が混在して出土している。

**時期**：2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-181 (IAAA-91779) に17,620±80yrBP・21,455-21,158calBP、SHIRA-182 (IAAA-91780) に17,800±80yrBP・21,710-21,434calBPの年代値が得られた。本遺構と周辺の遺物の出土状況のみから伴う石器群の特定は困難である。しかし、Cb-9とF-4との上下関係、年代値およびそれぞれの遺構の周辺にある石器群を考慮すると、本遺構は「服部台型石刃石器群もしくは広郷型細石刃核石器群」に伴う可能性があり、得られた年代値もCb-9と類似した年代となっている。

Cb-6 (図III-2、図版14-3)

位置：BD24-26区 (B26区) Sb-17

規模：0.8×0.6×0.05m

**調査・特徴**：B26区のⅡ層掘削作業で暗灰黄色土中に多量の炭化物粒と黒曜石剥片が混在する状況を確認した。トレンチ調査による断面観察を行い、炭化木片が多く含まれる5cm程度の良好な堆積を確認し、炭化木片ブロックCb-6として登録した。断面観察ではCb-6堆積層と下位Ⅱ層との層界は漸移的に認められた。

**遺物**：フローテーション作業のために採取した土壌から1,767点・40.6gの細片を主体とする遺物を

回収した。これらには細石刃・削片のほか60点程度の頁岩製・めのう製細片が含まれている。このほか調査区点取り遺物が遺構周辺に多数出土しており、細石刃を筆頭に細石刃核・彫器・搔器などが多出する状況が指摘できる。これらほぼ同一レベルで検出された石器はその大多数が広郷型細石刃核石器群のものと判断できる。また同石器群の被熱石器の分布はCb-4からCb-6にかけてまとまって認められ、遺構と被熱石器との共伴の可能性は非常に高いと考えられる。これらのことからCb-4周辺では細石刃の剥離作業や彫器・搔器の使用が主体的に行われたものと推測できる。

**時期**：2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-171 (IAAA-82710) に $16,860 \pm 70\text{yrBP}$ ・ $20,462 - 20,228\text{calBP}$ 、SHIRA-172 (IAAA-82711) に $16,470 \pm 70\text{yrBP}$ ・ $19,996 - 19,751\text{calBP}$ の年代値が得られた。上記したように広郷型細石刃核石器群との共伴性が認められ、同石器群の製作集団によって形成された遺構と判断している。

#### Cb-7 (図III-2、図版14-4～7・図版15-1)

**位置**：BD24-26区 (D25区) Sb-15

**規模**： $1.8 \times 0.4 \times 0.15\text{m}$

**調査・特徴**：D25区II層掘削調査で濃密な炭化物の分布範囲を検出し、精査を行った結果周辺にも炭化物の散在と礫の出土を確認した。トレンチ調査により断面を観察し、層厚8cm程度のほぼ純粋な黒色炭化物層の堆積を認めた。炭化物層は平面が $0.6 \times 0.4\text{m}$ ほどの楕円形範囲にレンズ状の堆積でみられ、下位との層界は非常に明瞭であった。また、炭化物集中範囲の中央部には礫・礫片12点が炭化物層底面からまとまって検出され、被熱痕跡が明瞭なものが含まれていた。これらのことから、人為的に形成された $0.6 \times 0.4 \times 0.1\text{m}$ の楕円形の掘り込みに礫を配置し、火を焚いた遺構と判断した。炭化物層の厚さからは多量の有機物を燃焼させたことが推測されるが、ブロック状土の混在がほとんどみられない点からは燃焼後に遺構内を掘り返すような行為は行われなかったと考えられる。

**遺物**：フローテーション作業のために採取した土壌から399点・14.6gの細片を主体とする遺物を回収した。また礫・礫片13点が出土しており、石材は安山岩・凝灰岩・砂岩がみられる。礫の被熱状況は判別が難しいものも含まれるが、半数程度に認めることができた。これら遺構内出土遺物に石器群を特定できるものはみられなかった。遺構周辺の遺物には有舌尖頭器石器群と小型舟底形石器群に属するものが多数分布するが、垂直分布では前者がCb-7の50cmほど上位、後者が直下から10cm弱下位に位置し、共伴とは認められなかった。

**時期**：3点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-153 (IAAA-81787) に $15,900 \pm 70\text{yrBP}$ ・ $19,261 - 19,037\text{calBP}$ 、SHIRA-159 (IAAA-82698) に $15,870 \pm 70\text{yrBP}$ ・ $19,225 - 19,010\text{calBP}$ 、SHIRA-191 (IAAA-91789) に $15,920 \pm 70\text{yrBP}$ ・ $19,291 - 19,059\text{calBP}$ の年代値が得られた。

#### Cb-8 (図III-3、図版15-2・3)

**位置**：BH30-34区 (BC32区) Sb-42

**規模**： $0.4 \times 0.4 \times 0.1\text{m}$

**調査・特徴**：BC32区II層掘削中に炭化物の散在範囲を検出した。トレンチ調査による断面観察の結果、層厚10cm程度のにおい黄橙色土中に炭化物粒が含有される状況を確認し、炭化木片ブロックCb-8として登録した。下位層との層界は漸移的に認められた。

**遺物**：フローテーション作業のために採取した土壌から1,303点・75.1gの細片を主体とする遺物を回収した。Cb-8が位置するSb-42には広郷型細石刃核石器群もしくは服部台型石刃石器群が多数近接して出土しており、垂直分布でも遺構と遺物の間に大きな隔たりはみられない。またCb-8の東側に近接して珪岩製の剥片が数点まとまって認められた。



**時期**：2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-173 (IAAA-82712) に $16,010 \pm 70\text{yrBP}$ ・ $19,446 - 19,206\text{calBP}$ 、SHIRA-183 (IAAA-91781) に $14,830 \pm 60\text{yrBP}$ ・ $18,131 - 17,939\text{calBP}$ の年代値が得られた。断定的ではないが、「服部台型もしくは広郷型」の石器群 (Sb-42) との共伴の可能性が指摘できる。

Cb-9 (図Ⅲ-3、図版15-4～6・図版16-1)

**位置**：BC27-29区 (C27区) Sb-29 **規模**：(1)  $0.3 \times 0.2 \times 0.03\text{m}$ 、(2)  $0.3 \times 0.2 \times 0.03\text{m}$

**調査・特徴**：F-4の30cm程下位のⅡ層を調査中に小範囲のほぼ同レベルに炭化物集中を2か所確認し、Cb-9 (1)・(2)を設定した。断面は皿状の集積であった。

**遺物**：遺構内の土壌から細片を中心に963点・31.4gの一括遺物を回収した。本遺構と同レベル且つ重複する範囲に広郷型細石刃核石器群が出土している。

**時期**：2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-160 (IAAA-82699) に $17,910 \pm 80\text{yrBP}$ ・ $21,833 - 21,581\text{calBP}$ 、SHIRA-184 (IAAA-91782) に $17,600 \pm 70\text{yrBP}$ ・ $21,414 - 21,128\text{calBP}$ の年代値が得られた。出土状況から広郷型細石刃核石器群に伴う可能性が高い。なお、Cb-9の上位ではF-4に伴って服部台型石刃石器群が広がっており、Cb-9の年代値よりも新しい値が得られている。両者の出土状況と年代値の関係性に矛盾はみられないことから、得られた年代値も確度が高いと思われる。

Cb-10 (図Ⅲ-3、図版16-2)

**位置**：BD24-26区 (B25・26区) Sb-17 **規模**：(1)  $0.8 \times 0.7 \times 0.05\text{m}$ 、(2)  $1.3 \times 0.2 \times 0.12\text{m}$ 、  
(3)  $0.2 \times 0.1 \times 0.03\text{m}$

**調査・特徴**：B25区Ⅱ層下部 (地表から165cm下位のラミナ状砂質土層) の掘削段階で炭化木片が広範囲に散在して検出された。集中部分の断面観察により一定の炭化木片を含有する土層を確認し、炭化木片ブロックCb-10を設定した。Cb-10は平面の密集度が比較的高い範囲で分布単位を区切り、(1)～(3)に分けて調査を行った。平面形は帯状・不整楕円形などがあり不定形で、堆積は下位層との層界が漸移的に認められた。

**遺物**：フローテーションのために採取した土壌から84点・5.7gの細片を主体とする遺物を回収した。Cb-10検出層位はBD24-26区基本土層Bライン (1) の11層 (図Ⅰ-16) で白滝Ⅰ群の包含層と捉えられ、母岩196を含む白滝Ⅰ群の石器が遺構に近接して出土している。

**時期**：放射性炭素年代測定は行っていないが、平面的・層位的に白滝Ⅰ群との共伴が認められる。白滝Ⅰ群は寺崎の論考 (寺崎 2006) によれば第1期・1群石器群 (武蔵野編年第Ⅸ層段階) に位置付けられている。

Cb-11 (図Ⅲ-3、図版16-3・4)

**位置**：BC27-29区 (C28区) Sb-24 **規模**： $0.8 \times 0.5 \times 0.05\text{m}$

**調査・特徴**：C28区Ⅱ層下部掘削段階で炭化物が部分的に密に分布する褐色土を検出した。トレンチ調査による断面観察では炭化木片を含有する厚さ5cm程度の褐色土層の下位に、小礫片を多量に含む黄褐色砂質土の堆積を確認した。当初は人為的な掘り込みに礫片が投入された遺構を想定し調査を行ったが、炭化物集中範囲の外側に礫片の分布が広がって認められたため、最終的には自然堆積の砂礫層が下位に位置したものと判断した。

## 1 遺構

**遺物**：フローテーション作業のために採取した土壤から19点・0.4gの黒曜石製の細片を回収した。Cb-11の位置するSb-24には服部台型もしくは広郷型の石器群が多数出土するが、垂直分布ではCb-11の20～30cm上位に認められ、共伴関係はないものと判断できる。

**時期**：2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-185 (IAAA-91783) に $27,560 \pm 130$ yrBP・ $31,447-31,226$ calBP、SHIRA-186 (IAAA-91784) に $28,440 \pm 140$ yrBP・ $32,725-32,100$ calBPの年代値が得られた。

Cb-12 (図Ⅲ-3、図版16-5・6)

**位置**：EH26区 (E26区) Sb-28 **規模**： $0.2 \times 0.1 \times 0.02$ m

**調査・特徴**：Ⅱ層の包含層中に小規模な炭化物集中の広がりを確認した。断面はレンズ状の集積であった。

**遺物**：遺構内の土壤から細片を中心に12点・0.1gの一括遺物を回収した。本遺構の上位に有舌尖頭器石器群が散在している。

**時期**：2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-155 (IAAA-82694) に $24,990 \pm 130$ yrBP・ $29,195-28,840$ calBP、SHIRA-156 (IAAA-82695) に $24,910 \pm 110$ yrBP・ $29,067-28,764$ calBPの年代値が得られた。出土状況から本遺構は有舌尖頭器石器群の年代を示すものではなく、それ以前に形成された炭化物集中と思われる。

Cb-13 (図Ⅲ-3、図版16-7・8)

**位置**：DH27-29区 (E27区) Sb-40 **規模**： $0.8 \times 0.2 \times 0.04$ m

**調査・特徴**：Ⅱ層の包含層中に細長い炭化物集中の広がりを確認した。断面はレンズ状の集積であった。

**遺物**：遺構内の土壤から細片2点・0.1gの一括遺物を回収した。本遺構は周辺の3つの石器ブロックの集中範囲 (Sb-33・38・40) に囲まれるような位置でそれよりやや下位から検出されている。それぞれの集中範囲の内容は、Sb-33が有舌尖頭器石器群、Sb-40が服部台型石刃石器群と白滝Ⅰ群がみられ、それぞれ層位的に分離できないほぼ同一レベルで出土している。

**時期**：2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-161 (IAAA-82700) に $17,660 \pm 80$ yrBP・ $21,516-21,214$ calBP、SHIRA-187 (IAAA-91785) に $17,710 \pm 80$ yrBP・ $21,585-21,300$ calBPの年代値が得られた。出土状況から周辺の石器群との関連性が積極的に判断できず、共伴石器群は不明とした。

Cb-14 (図Ⅲ-3、図版17-1・2)

**位置**：EH22-25区 (E23区) Sb-9 **規模**： $(0.6) \times 0.6 \times 0.07$ m

**調査・特徴**：Ⅱ層の包含層中にまだらに集中する炭化物の広がりを確認した。F23区にも広がると思われるが、焼土・炭化物のまともは確認できなかった。断面は皿状の集積で東側の底部が乱れていた。

**遺物**：遺構内の土壤から細片を中心に63点・4.2gの一括遺物を回収した。本遺構と同レベルで、周辺に有舌尖頭器石器群が出土している。しかし、この有舌尖頭器石器群は周氷河現象の影響から上下二層に分かれて堆積している。

**時期**：2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-188 (IAAA-91786) に $25,060 \pm 120$ yrBP・ $29,264-28,917$ calBP、SHIRA-189 (IAAA-91787) に $24,770 \pm 110$ yrBP・ $28,919-28,661$ calBPの年

代値が得られた。出土状況から有舌尖頭器石器群に伴う可能性があるものの、石器を含め周辺の土層に大きな動きが認められることから共伴石器群は不明と判断した。

Cb-15 (図III-3、図版17-3・4)

**位置**: BD24-26区 (C26区) Sb-16      **規模**: (1) 0.8×0.2×0.09m、(2) 0.3×0.3×0.06m

**調査・特徴**: II層の包含層中に炭化物集中を2か所確認し、Cb-15(1)・(2)を設定した。断面は(1)・(2)ともレンズ状の集積で、(2)が西側に傾斜して堆積している。

**遺物**: 遺構内の土層から細片を中心に42点・0.4gの一括遺物を回収した。本遺構より上位に有舌尖頭器石器群が出土している。また、上下から広郷型細石刃核石器群が散在して出土している。

**時期**: 2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-174 (IAAA-82713) に15,950±70yrBP・19,372-19,121calBP、SHIRA-190 (IAAA-91788) に15,830±60yrBP・19,172-18,981calBPの年代値が得られた。出土状況から有舌尖頭器石器群より以前に形成されたと思われる。広郷型細石刃核石器群との関連性は可能性があるものの、少量が散在している状況であるため不明と判断した。

Cb-16 (図III-4、図版17-5・6)

**位置**: BD24-26区 (C25区) Sb-15～17      **規模**: 1.0×0.5×0.05m

**調査・特徴**: C25区II層掘削段階で炭化物粒を多く包含するにぶい黄橙色土を検出した。トレンチ調査により断面観察を行い、シルト質土中に粒径1～2cmの炭化木片が部分的に濃密に分布する状況を確認し、炭化木片ブロックCb-16を設定した。炭化物含有層は厚さ5cm程度で下位との層界は漸移的であった。なお、Cb-16の下位にはCb-18が検出されているが、両者の間には厚さ60cmほどの間層が認められる。

**遺物**: フローテーションのために採取した土層から74点・0.3gの黒曜石製の細片を回収した。またCb-16が位置する地点はSb-15～17のブロック境界が接しており、Sb-17の広郷型細石刃核石器群、Sb-15・16の有舌尖頭器石器群、Sb-15の小型舟底形石器石器群が遺構に近接して出土している。しかし、垂直分布の観察では広郷型の石器群が同位から上位レベル、有舌尖頭器石器群は40cmほど上位、小型舟底形石器石器群は概ね下位に認められた。

**時期**: 2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-177 (IAAA-82716) に18,790±90yrBP・22,748-22,503calBP、SHIRA-178 (IAAA-82717) に18,830±90yrBP・22,804-22,545calBPの年代値が得られた。下位に位置するCb-18の測定値と新旧関係において整合している。

Cb-17 (図III-4、図版18-1・2)

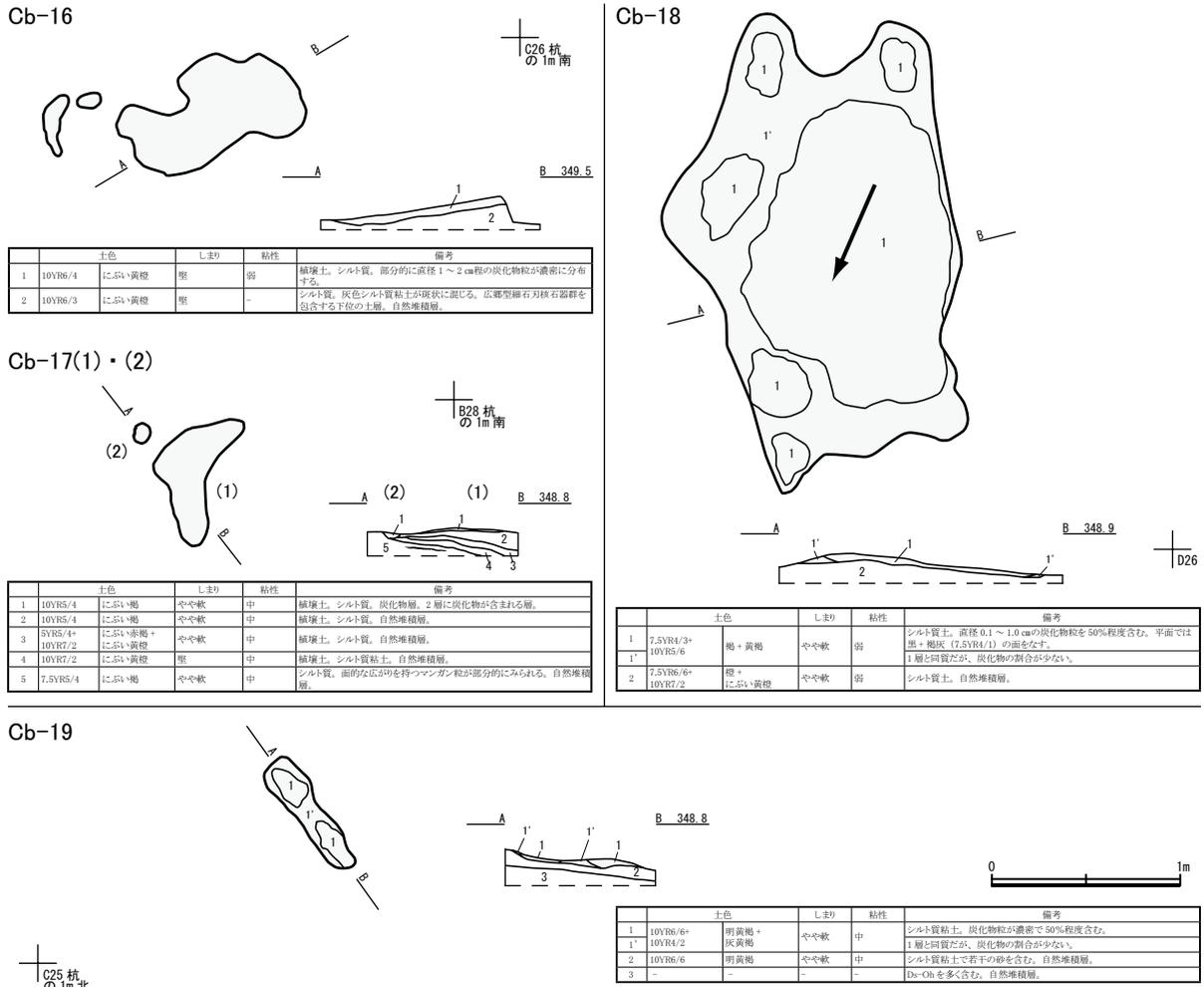
**位置**: BD24-26区 (B27区) Sb-65近接      **規模**: (1) 0.7×0.3×0.01m、(2) 0.1×0.1×0.03m

**調査・特徴**: B27区II層下部 (同区基本土層10層、図I-16) 掘削段階で、炭化物粒を含有するにぶい褐色土を検出した。断面観察により薄い炭化物含有層の堆積を確認後、炭化木片ブロックCb-17として登録した。

**遺物**: 遺構内土層から遺物は確認されなかった。Cb-17南西側には白滝I群のまとまった分布がみられ、垂直分布でもほぼ同位に認められる。

**時期**: 1点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-152 (IAAA-81786) に26,870±140yrBP・31,099-30,887calBPの年代値が得られた。また検出層位と周辺の出土遺物からは白滝I群に共伴する遺構と判断することができる。

1 遺構



図Ⅲ-4 炭化木片ブロックの平面・断面図(4)

Cb-18 (図Ⅲ-4、図版18-3・4)

位置：BD24-26区 (C25区) Sb-15・16

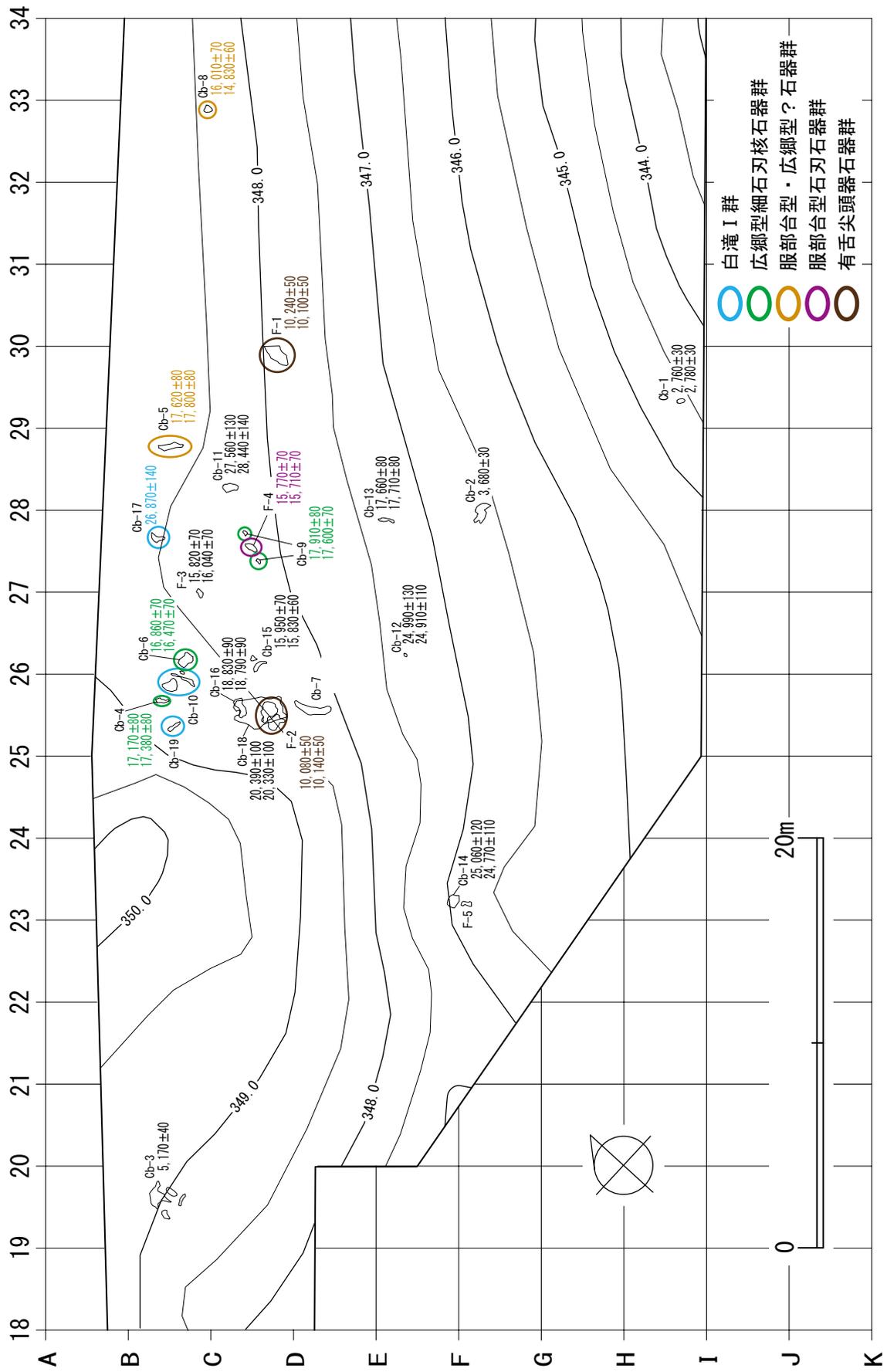
規模：2.6×1.6×0.05m

**調査・特徴**：C25区調査で、F-2・有舌尖頭器石器群→Cb-16・広郷型細石刃核石器群→小型舟底形石器群と推移した後、小型舟底形石器群の下位から長径2 mを超える炭化木片集中範囲を検出した。分布範囲内からは非常に密集した炭化木片が認められ、中央部1.5×1mほどの範囲では炭化木片の繊維が図Ⅲ-4に示した矢印方向へ揃うように観察することができた。断面観察では厚さ1.5～4 cm弱、2 cm程度が主体の薄い炭化物層が認められた。薄い面的な検出状況からは板状もしくは敷物状のものが想定できるが検証には至っていない。

**遺物**：フローテーション作業のために採取した土壌から319点・15.8 gの黒曜石製の細片を回収した。またCb-18の上位には小型舟底形石器群の遺物が出土しているが、石器群の分布は南東側に広がりCb-7の下位に連続している。このためCb-18はCb-7の下位に位置する遺構と捉えることができる。

**時期**：2点の炭化木片サンプルを年代測定し、SHIRA-162 (IAAA-82701) に20,330±100yrBP・24,550-24,260calBP、SHIRA-163 (IAAA-82702) に20,390±100yrBP・24,649-24,296calBPの年代値が得られた。Cb-18上位に検出されたF-2、Cb-7・16との測定値とは新旧関係において整合している。但し出土状況から相伴石器群を断定することはできなかった。





図Ⅲ-5 焼土・炭化木片ブロックの放射性炭素年代と共伴石器群

Cb-19 (図III-4、図版18-5・6)

位置：BD24-26区 (B25区) Sb-17

規模：0.7×0.2×0.05m

**調査・特徴：**B25区Ⅱ層下部のラミナ状に堆積する砂質土層（基本土層Bライン (1) の11層、図I-16) から下位Ⅱc層 (Ds-Oh含有) 上面にかけて掘削する段階で濃密な炭化木片ブロックを検出した。断面観察により、厚さ4cm程度の炭化木片層が砂質土層中に形成された状況を確認し、Cb-19を設定した。また断面観察では下位層との層界がやや漸移的に認められた。

**遺物：**フローテーション作業のために採取した土壌から9点・0.2gの黒曜石製の細片を回収したが、このほか遺構に近接する遺物の出土はみられなかった。

**時期：**年代と直接の相伴石器群は不明だが、層位的にはCb-10と同層であり白滝Ⅰ群に関連することが推測できる。

## 2 遺物

### (1) 遺物分布と石器ブロック・区域

#### ① 石器ブロックと区域

旧白滝3遺跡で地点を計測して取り上げた遺物（以下点取り遺物）は67,254点である。遺跡は南東側に緩やかに傾斜する河岸段丘面上に立地し、調査区域によって平坦地形や急傾斜地形など異なる様相が認められる。特にBCD25～30区の範囲には、B23区を微高地とした南東側に1～2mの良好な堆積が確認され、地形は平坦地から段丘崖へ向かう緩斜面が連続する様子が見られた。この範囲では複数の遺構とこれに伴う石器群が重層的に検出され、石器群の新旧関係を層位的に検証できる調査成果が得られた。しかし重層関係には一部、新旧関係の整合性に検討を要する箇所が認められた。これについては本項の末において詳述している。平坦地形はB地区にも認められたが、近接して深い沢が発達するなど、調査区内の地形は変化に富んでいた。また15ラインの南西側、30ラインの北東側は比較的急斜な地形であり、複数の小規模な沢状地形が確認された。こうした範囲の遺物分布状況は集中部から地形傾斜方向に伸びる帯状の連なりとして現われることが多く、周水河性のソリフラクションの影響による移動が認められる。集中域については本来の分布から大きく変化したものではないと考えられるが、帯状の遺物分布が明瞭なSb-53～59は大きな遺物の移動が推測される。

旧白滝3遺跡は第Ⅰ章で述べたように、本調査を行ったA・B地区と工事立会調査を行ったC・D地区に分けられる。石器ブロックと区域についてはA・B地区を対象に設定している。石器ブロックは遺物の密度分布（10点区切り）と接合状況を基準とし、65か所を設定した。この内Sb-64・65はBD24-26区包含層の最深部（基本土層の10・11層、Ds-Ohの上位）で検出した白滝Ⅰ群の単純石器ブロックである。区分の際には先述したソリフラクションの影響を考慮し、傾斜方向と調和的な分布のまとまりは、できる限り同一のブロックとして括ることとした。また近接するブロック間の境界は、石器組成や石器群の判別結果を参考にして調整した。

さらに近接石器ブロック同士は、石器組成と石器群、剥離面接合状況を基準として「区域」にまとめた。「区域」は純粋な石器群を反映したものではなく、複数の石器群が混在する大まかなまとまりを指し、白滝遺跡群では上白滝8遺跡などで設定された経緯がある。旧白滝3遺跡ではA地区で、C4-14区、BC15-17区、BD18-23区、EH22-25区、BD24-26区、BC27-29区、EH26区、DH27-29区、BH30-34区、CH35-39区、CH40-43区、CH44・45区、CH46-48区の13区域、B地区でDF77・78

区の1区域、計14区域を設定した。以下、各区域の内容について概観していく。

C4-14区は調査区南西端に位置する。調査方法の関係上遺物分布状況の把握が困難であり、石器ブロックは設定していない。点取り遺物の点数は181点で、全体点取り遺物点数の0.3%程度を占める。内容は白滝Ⅰ群や尖頭器・舟底形石器など複数の石器群が認められたが、遺物分布は調査区外に広がること予測され、調査では本来遺跡に遺された石器群の一部を取り上げたに過ぎない。このため当該区の二次整理作業では接合作業を行わなかった。

BC15-17区は調査区南西部に位置し、Sb-1のみで構成される。点取り遺物の点数は29点で、全体点取り遺物点数の0.04%程度を占める。点取り遺物は全て剥片でまた接合作業を行わなかったことから、石器群は判別できていない。

BD18-23区は調査区南西部に位置し、Sb-2～7と若干のブロック外遺物で構成される。点取り遺物の点数は2,713点で、全体点取り遺物点数の4%程度を占める。内容は、①白滝Ⅰ群、②蘭越型ないし美利河型細石刃核石器群、③服部台型石刃石器群、④小型舟底形石器石器群で、複数の石器群が認められる。分布は①・②がSb-6中心、③がSb-3、④がSb-5・7を中心にみられる。

EH22-25区は調査区南部に位置し、Sb-8～13と若干のブロック外遺物で構成される。点取り遺物の点数は6,997点で、全体点取り遺物点数の約10%を占める。内容は有舌尖頭器石器群が主体で、このほか小規模に川西型石刃石器群と小型舟底形石器石器群が確認されている。分布は有舌尖頭器石器群がSb-9を主体に、小型舟底形石器石器群はSb-8の一部、川西型石刃石器群はSb-9に少量確認されている。

BD24-26区はA地区中央から南西部に位置し、Sb-14～21・64・65と若干のブロック外遺物で構成される。同区域は調査区内で最も土層の堆積が厚く認められた範囲で、Sb-14～21は包含層の上位、Sb-64・65は最深部で検出されている。また大きな特徴として複数の石器群が焼土・炭化木片ブロックに伴い重層的に発掘された点あげられる。点取り遺物の点数は21,897点で、全体点取り遺物点数の約32%を占める。内容は、①白滝Ⅰ群、②広郷型細石刃核石器群、③有舌尖頭器石器群、④小型舟底形石器石器群がある。特に広郷型細石刃核石器群は多量の製品と母岩別資料を伴い、炉周辺での石器製作・消費の活動内容が詳細に復元できた。分布は①がSb-64・65、②がSb-16～18、③がSb-14～16、④がSb-15・17で主体的に認められ、石器群が重複する範囲についても垂直分布の観察により明瞭な区分が可能であった。

BC27-29区はA地区中央から南西部に位置し、Sb-22～27と若干のブロック外遺物で構成される。当該区も一部の範囲で包含層の厚い堆積が認められ、石器群が遺構に伴って重層的に出土している。点取り遺物の点数は6,360点で、全体点取り遺物点数の約9%程度を占める。内容は服部台型石刃石器群と、「服部台型石刃石器群もしくは広郷型細石刃核石器群」がみられ、分布上で両者を区分することは困難であった。後者については検討の結果、広郷型の可能性が強いものと考えている。また、当該区からは白滝Ⅰ群の出土が少量認められる。

EH26区はA地区中央から南部に位置し、Sb-28～31と若干のブロック外遺物で構成される。点取り遺物の点数は1,813点で、全体点取り遺物点数の3%弱を占める。内容は、①白滝Ⅰ群、②有舌尖頭器石器群、③小型舟底形石器石器群の可能性があるので、後二者の分布は共伴の可能性を棄却できない状況と捉えている。分布については①がSb-29主体、②・③がSb-30に認められる。

DH27-29区はA地区中央に位置し、Sb-32～40と若干のブロック外遺物で構成される。点取り遺物の点数は6,246点で、全体点取り遺物点数の約9%を占める。内容は、①白滝Ⅰ群、②服部台型石刃石器群、③ホロカ型彫器を伴う石器群、④有舌尖頭器石器群である。分布は①がSb-38・39、②





























































表 III-35 母岩別資料の剥離技術類型と定義(1)

分類	内容・定義	細分類	内容・定義	細分類	内容・定義
1	尖頭器・両面調整石器関連の母岩	A	尖頭器Ⅰ類・両面調整石器Ⅰ類を製作するもの	i	核素材のもの
				ii	剥片素材のもの
				iii	核素材及び調整剥片素材で複数個体製作するもの
				iv	分割礫素材のもの
				v	その他・詳細不明なもの
		B	尖頭器Ⅱ類(削片剥離)を製作するもの	-	-
		C	尖頭器Ⅲ類(有舌尖頭器)を製作するもの	-	-
D	尖頭器Ⅳ類(小型鋸齒縁尖頭器)を製作するもの	-	-		
E	両面調整石器Ⅱ類(断面楔形)を製作するもの	-	-		
F	その他・詳細不明のもの	-	-		
2	細石刃関連の母岩	A	剥片(石刃・縦長剥片を含む)を素材とするもの	i	石刃・縦長剥片素材のもの
				ii	両面調整石器の調整剥片素材のもの
				iii	剥片素材のもの
		B	石核を素材とするもの	-	-
		C	両面調整石器を素材とするもの	-	-
D	舟底形石器を素材とするもの	-	-		
E	その他・詳細不明のもの	-	-		
3	舟底形石器関連の母岩	A	舟底形石器Ⅰa・Ⅰa類(小型舟底)を製作するもの	i	剥片素材のもの
				ii	石核素材のもの
				iii	分割礫素材のもの
				iv	石刃技法母岩から得た石刃・打面再生剥片などを素材とするもの
				v	核素材及び粗割剥片素材で複数個体製作するもの
				vi	その他・詳細不明なもの
		B	舟底形石器Ⅰb・Ⅰb類(大型舟底)を製作するもの	i	剥片素材のもの
				ii	石核素材のもの
				iii	分割礫素材のもの
				iv	石刃技法母岩から得た石刃・打面再生剥片などを素材とするもの
				v	核素材及び粗割剥片素材で複数個体製作するもの
				vi	その他・詳細不明なもの
C	舟底形石器Ⅱc類を製作するもの	-	-		
D	その他・詳細不明のもの	-	-		
4	石刃技法関連の母岩	A	平坦打面で頭部調整がみられるもの	i	母型裏面に背稜を形成するもの
				ii	母型裏面に剥離によって平坦面を形成するもの
				iii	母型裏面に平坦な自然面・節理面など、素材面を配置するもの
				iv	母型整形がほとんどみられないもの
				v	その他・詳細不明なもの
		B	複剥離打面で頭部調整がほとんどみられないもの	i	母型裏面に背稜を形成するもの
				ii	母型裏面に剥離によって平坦面を形成するもの
				iii	母型裏面に平坦な自然面・節理面など、素材面を配置するもの
				iv	母型整形がほとんどみられないもの
				v	その他・詳細不明なもの
		C	打面調整・頭部調整がみられるもの	i	母型裏面に背稜を形成するもの
				ii	母型裏面に剥離によって平坦面を形成するもの
				iii	母型裏面に平坦な自然面・節理面など、素材面を配置するもの
				iv	母型整形がほとんどみられないもの
				v	その他・詳細不明なもの

表Ⅲ-36 母岩別資料の剥離技術類型と定義(2)

4	石刃技法関連の母岩	D	打面調整・頭部調整・頭部への擦痕がみられるもの	i	母型裏面に背稜を形成するもの
				ii	母型裏面に剥離によって平坦面を形成するもの
				iii	母型裏面に平坦な自然面・節理面など、素材面を配置するもの
				iv	母型整形がほとんどみられないもの
				v	その他・詳細不明なもの
		E	石刃核の母型を作成したもの	i	母型裏面に背稜を形成するもの
				ii	母型裏面に剥離によって平坦面を形成するもの
				v	その他・詳細不明なもの
		F	その他・詳細不明のもの	-	-
5	石核関連の母岩	A	作業面と打面を固定し、一定方向に剥離を進行するもの	-	-
				B	平坦で広い面を作業面に設定するもの
		ii	両面への粗い剥離		
		C	小口面を作業面に設定するもの	i	一方向に後退する剥離
				ii	全周的な剥離
		D	頻繁な打面転移を行なうもの	i	90度打面転移を繰り返す剥離(ねじれ面への剥離を含む) ※石核の最終形がサイコロ状となるもの
				ii	180度打面転移を繰り返す剥離 ※石核の最終形が舟底形となるもの
				iii	3面の作業面で交互剥離を行い、頻繁な打面転移を繰り返す剥離 ※石核の最終形が舟底形となるもの
				iv	打面と作業面を入れ替え交互状の剥離をするもの
		E	その他・詳細不明のもの	-	-
		6	その他の石器製作資料	A	石刃素材で石器製作・刃部再生などを行ったもの
B	剥片素材で石器製作・刃部再生などを行ったもの			-	-
C	その他・詳細不明のもの			-	-

表Ⅲ-37 母岩別資料の原石形状と定義

礫形状	内容・定義
角礫	表皮が主に岩屑面で覆われる、角柱状の礫
亜角礫	表皮がやや滑らかさを有し、角が若干磨耗したもの
転礫	表皮が主にカサブタ状を呈し、角を持たないもの
不明	-

表Ⅲ-38 母岩別資料の搬入形態と定義

形態	内容・定義
原石	原石もしくは完形の8割程度の残存が認められるもの
分割礫	礫を半割したもの
母型	目的剥片剥離開始以前の加工状態のもの
両面調整石器	両面を加工した、狭義の石器の状態のもの
石核	目的剥片剥離開始後の石核
剥片	ほぼ無加工の剥片

に分布している。

CH46-48区はA地区北東端に位置し、Sb-58・59と若干のブロック外遺物で構成される。点取り遺物の点数は962点で、全体点取り遺物点数の1%強を占める。内容は広郷型細石刃核石器群で、同一石器群が出土するCH40-43区との間に接合関係が認められる。

DF77・78区はB地区に位置し、Sb-60～63で構成される。点取り遺物の点数は15,680点で、全体点取り遺物点数の約23%を占める。とりわけSb-62からは多量の剥片と尖頭器・両面調整石器が密集して検出された。内容は有舌尖頭器石器群で、尖頭器・両面調整石器の製作母岩が多数復元されている。また、広郷型とみられる狭長・直線的な細石刃がSb-62の集中範囲Fc-1からまとも出土している。

## ② 属性別の分布状況

白滝Ⅰ群以外(66,934点)と白滝Ⅰ群(320点)に分けて属性別の分布状況の観察を行い、平面分布状況を前者は図Ⅲ-6～19、後者は図Ⅲ-20～23に示し、両者の出土点数集計結果を表Ⅲ-17～26に掲載した。集計は出土ブロックに帰属させるため、点取り遺物に限定して行っている。下記した個別の点数についても同様である。また、図Ⅲ-24・25には石器群別の分布状況を示している。

### 1) 白滝Ⅰ群以外の分布

#### 自然面を有す石器の分布 (図Ⅲ-7、表Ⅲ-23)

自然面を有す石器(以下自然面付石器)は15,806点が出土し、点取り遺物合計数66,934点の23.6%に及ぶ。主な区域別で見ると、BD18-23区865点(32.1%)、EH22-25区1,430点(20.4%)、BD24-26区4,848点(22.2%)、BC27-29区1,831点(28.8%)、EH26区365点(21.4%)、DH27-29区1,492点(24.3%)、BH30-34区281点(37.6%)、CH35-39区225点(16.1%)、CH40-43区308点(16.3%)、CH44・45区168点(50.8%)、CH46-48区179点(18.6%)、DF77・78区3,745点(23.9%)となっている。括弧内の数値は各区における自然面付石器の出現率を表しており、遺物の多寡に関わらず2割程度は認められる。全体の分布状況も各ブロックに大きな偏りなく出土がみられる。

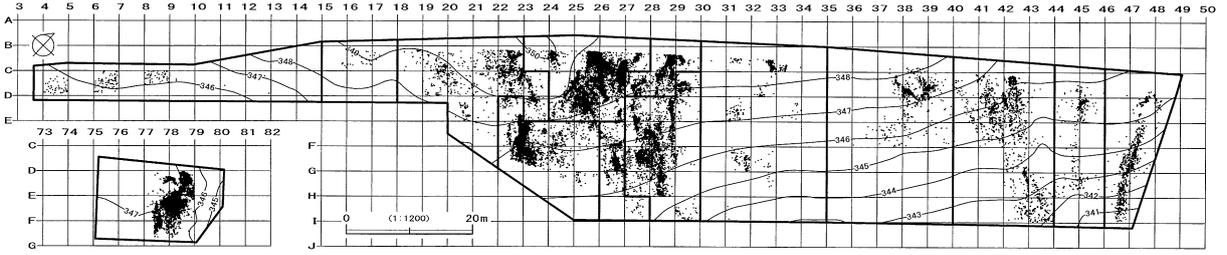
特に自然面付遺物が多い区域としては、小型舟底形石器石器群が主体のCH44・45区で半数以上に認められ、母岩が原石・自然面付の石核で持ち込まれた状況と整合する。また、DF77・78区は有舌尖頭器石器群の区域で、転礫原石から多量の尖頭器を製作した状況が復元されている。しかし当該区自然面付遺物は点数比では2割程度に留まり、重量比で57.5%の高い比率となることが認められた。こうした状況は、剥離点数の発生が少ない粗割段階では自然面付が主体で、自然面除去後の平坦剥離段階で剥離点数が増加する技術内容が関係していると考えられる。

#### 被熱石器の分布 (図Ⅲ-7、表Ⅲ-24)

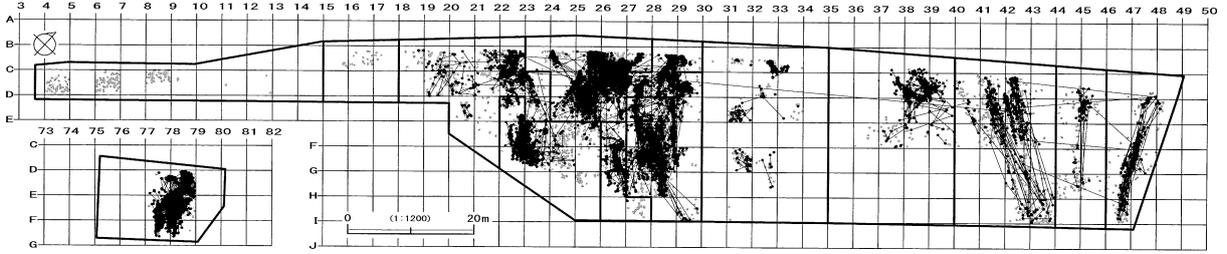
被熱石器は3,380点が出土し、点取り遺物合計数66,934点の5.0%を占める。主な区域別で見ると、BD18-23区168点(6.2%)、EH22-25区135点(1.9%)、BD24-26区1,550点(7.1%)、BC27-29区129点(2.0%)、EH26区69点(4.0%)、DH27-29区251点(4.1%)、BH30-34区110点(14.7%)、CH35-39区15点(1.1%)、CH40-43区77点(4.1%)、CH44・45区0点、CH46-48区135点(14.0%)、DF77・78区732点(4.7%)となっている。括弧内の数値は各区における自然面付石器の出現率を表しており、BH30-34区とCH46-48区を除けば8%未満の低い比率を主体として認められる。

BH30-34区の被熱石器は広郷型細石刃核石器群もしくは服部台型石刃石器群の遺物で、Sb-42・Cb-8(AMS測定値:14,830±70～16,010±70yrBP)の周辺に集中的に分布しており、両者は強い関連性を持つことが考えられる。同様に、BD24-26区Sb-17ではCb-4・6(16,470±70～17,380±80yrBP)周辺の広郷型細石刃核石器群、同区Sb-15・16ではF-2(10,080±50～10,140±50yrBP)

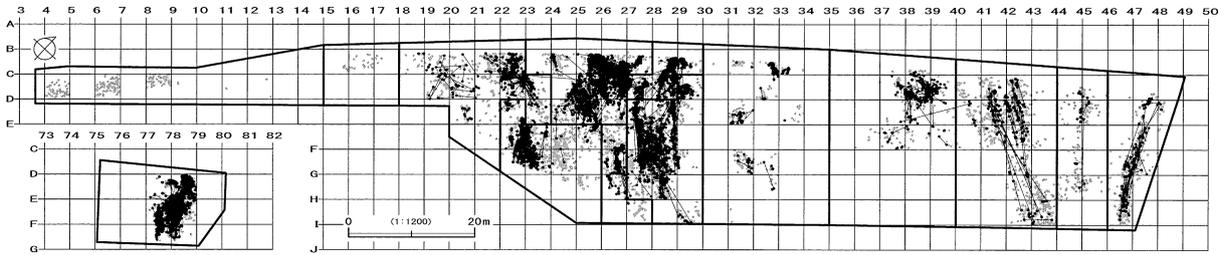
2 遺物



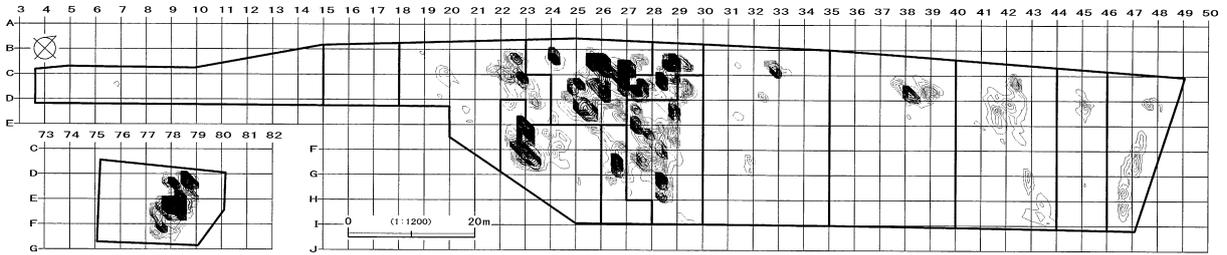
全遺物分布図



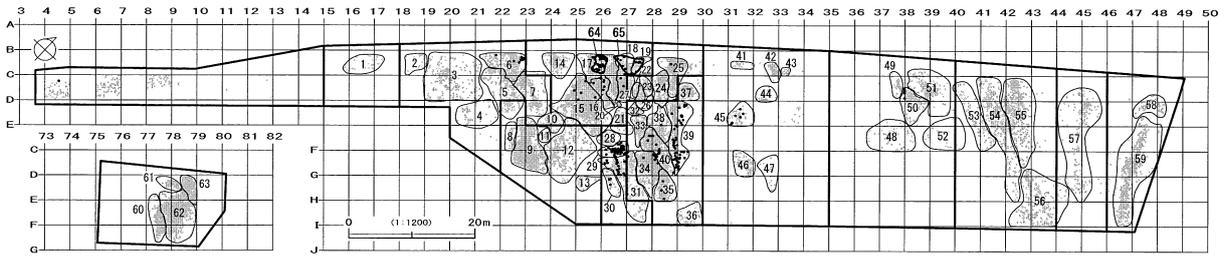
全接合遺物分布図



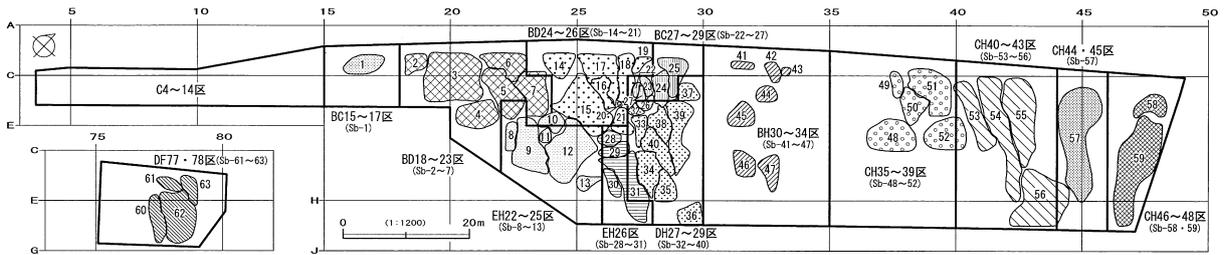
全遺物折れ面接合分布図



遺物密度分布図(1m区切り・10点単位)

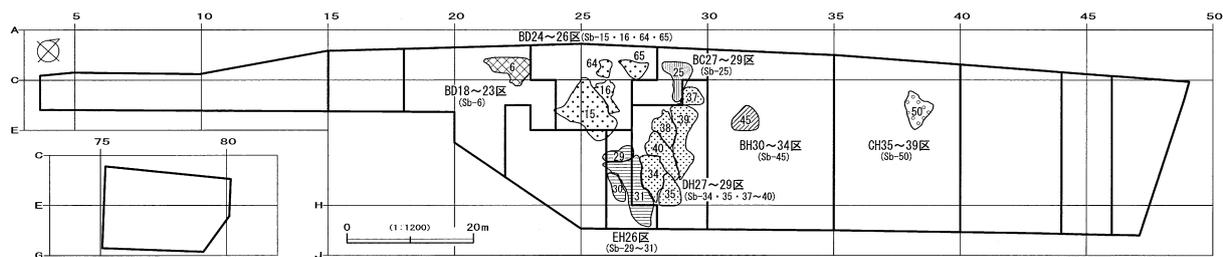


● 白滝Ⅰ群 ● 白滝Ⅰ群以外 石器ブロック設定図

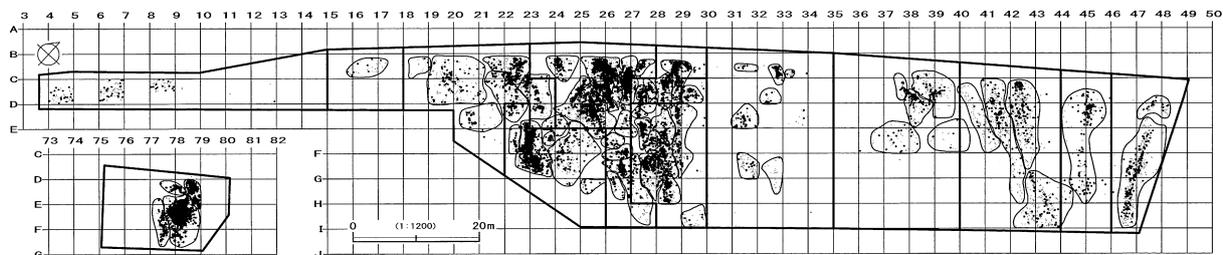


石器ブロック及び区域設定図(白滝Ⅰ群以外)

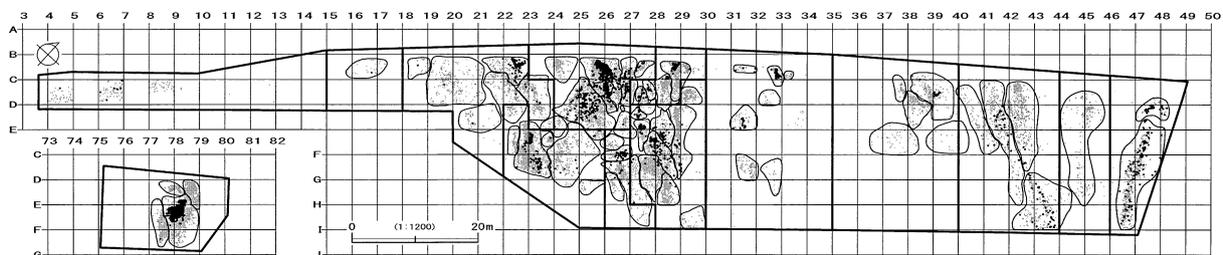
図Ⅲ-6 遺物分布図、石器ブロック・区域設定図



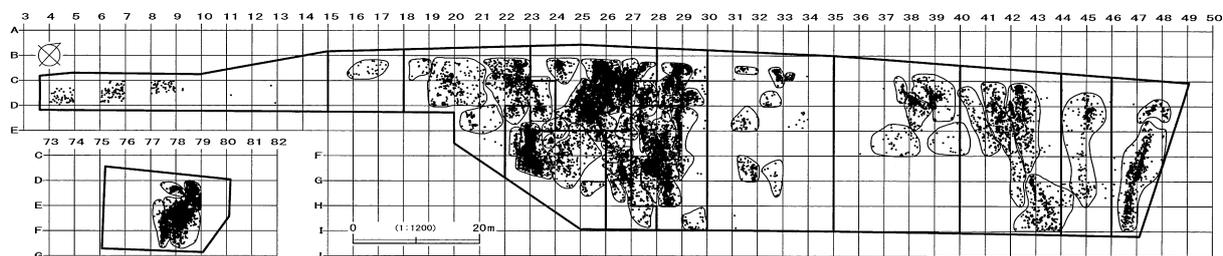
石器ブロック及び区域設定図(白滝 I 群)



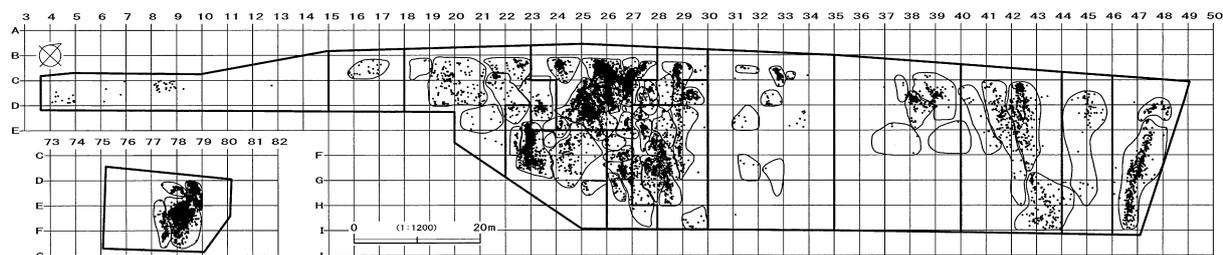
自然面付き石器



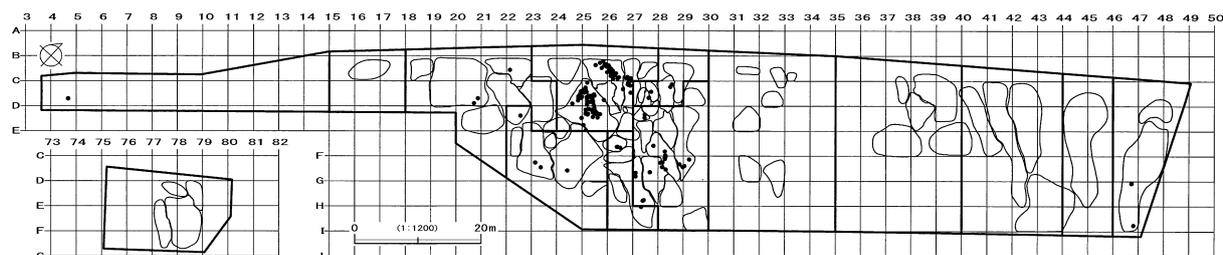
被熱石器



黒曜石1~5



黒曜石1



黒曜石2

図III-7 白滝 I 群以外 属性別遺物分布図 礫面・被熱・石材(1)

周辺の有舌尖頭器石器群、BC27-29区Sb-25ではCb-5 ( $17,620 \pm 80 \sim 17,800 \pm 80$ yrBP) 周辺の服部台型石刃石器群および「服部台型もしくは広郷型」石器群に、まとまった被熱石器の分布を確認することができた。その他少量ではあるがF-4やCb-9の周辺にも被熱石器がみられ、焼土・炭化木片ブロックと被熱石器の分布には明瞭な重複関係が認められる場合が多い。こうした状況からは石器ブロックの形成に炉が関係したことが推測できる。

### 石質別の分布 (図III-7~9、表III-17・18)

#### A. 黒曜石製の石器

黒曜石製の石器は点取り遺物で66,431点が出土し、「白滝I群以外」全体の99.2%を占める。黒曜石1が最も多く(26,050点・39.2%)、黒曜石4(21,707点・32.7%)、黒曜石5(12,612点・19.0%)の順に続く。各石質の分布に大きな偏りはなく、数量的な多寡はあるものの同様の分布傾向で各石器ブロックに認められる。但し黒曜石2についてはBD24-26区にまとまった分布がみられる。

区域別の特徴では、①BD24-26区Sb-17・18(広郷型細石刃核石器群主体)とSb-15(有舌尖頭器石器群主体)では黒曜石1・4が、②BC27-29区Sb-24・25(服部台型石刃石器群・「服部台型もしくは広郷型」石器群)では黒曜石4が、③CH40-43区Sb-55やCH46-48区Sb-59(広郷型細石刃核石器群)では黒曜石1が、④DF77・78区Sb-62・63では黒曜石1が、突出して多く出土する状況が認められる。

#### B. 黒曜石以外の石器

黒曜石以外の石材は503点で、中でも頁岩(89点・17.7%)、めのう(178点・35.4%)、砂岩(139点・27.6%)が多く認められる。但し砂岩のほとんどは礫が該当している。頁岩はBD18-23区Sb-6の蘭越型ないし美利河型細石刃核の石器群と、CH35-39区Sb-48の石刃・縦長剥片に目立って認められたほか、BD24-26区Sb-17の広郷型細石刃核石器群でも一括遺物から多数の小剥片が確認されている。めのうはBD24-26区のSb-17に集中的に分布し、同範囲から多数のめのう製母岩別資料が復元されている。まためのうはCH40-43区とCH46-48区にも分布し、広郷型細石刃核石器群との関連が強いことが考えられる。このほか広郷型細石刃核石器群に伴う石材に赤鉄鉱(赤色顔料原材)があり、これに近接して軽石が出土する状況が認められる。両者が組み合わせ関係によって機能した可能性を指摘できるかもしれない。

### 器種別の分布 (図III-9~12、表III-20~22)

#### 尖頭器・両面調整石器 (図III-9)

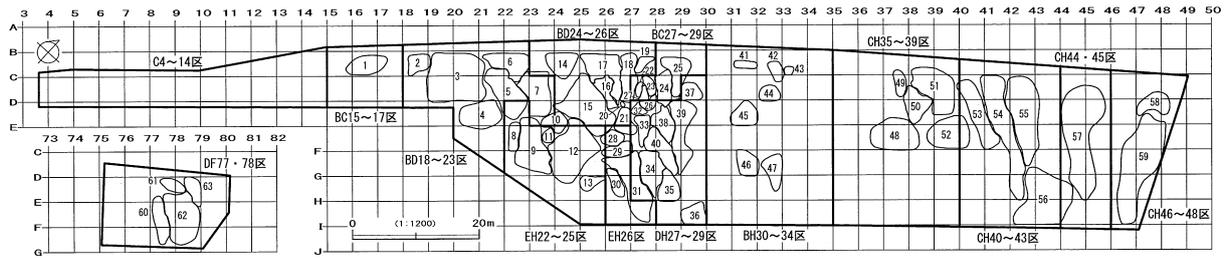
まとまった出土はEH22-25区Sb-9、BD24-26区Sb-15、DH27-29区Sb-40、DF77・78区Sb-62・63などの有舌尖頭器石器群の分布範囲に主に認められる。またBD24-26区Sb-17・18、CH40-43区Sb-54の範囲で広郷型細石刃核石器群に伴って出土している。

#### 舟底形石器 (図III-9)

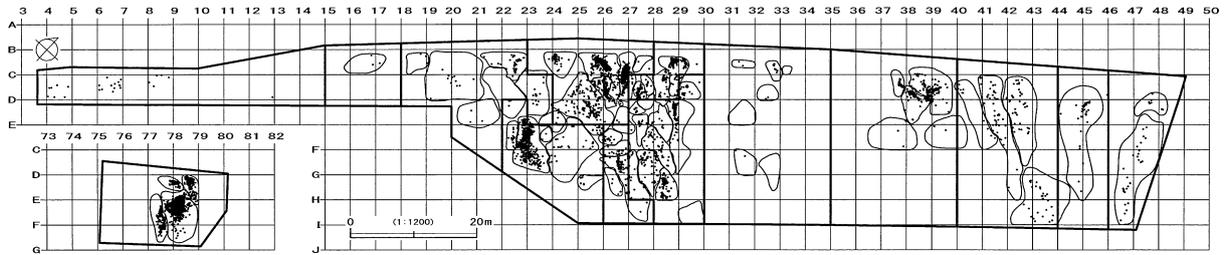
舟底形石器はI a・II a類とII b類に分けられ、前者はBD18-23区Sb-5・7、BD24-26区Sb-15・17、CH35-39区Sb-49、CH44・45区Sb-57の小型舟底形石器群の分布範囲に主に認められる。後者はBC27-29区からDH27-29区にかけてまとまって認められ、服部台型石刃石器群に共伴している。

#### 細石刃核 (図III-10)

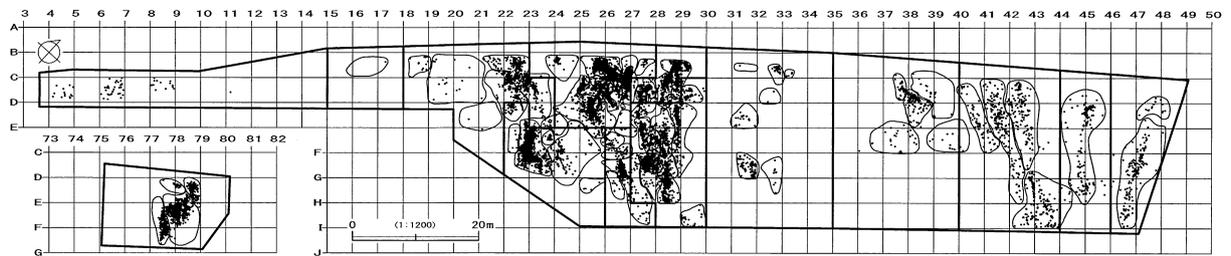
細石刃核は蘭越型ないし美利河型、美利河型、峠下型1・2類(寺崎2006、山田2006)、広郷型が確認されている。蘭越・美利河型および峠下型1類はBD18-23区Sb-6、峠下型2類はBH30-34区Sb-44から出土しており、後者には接合関係もみられた。もっとも多数が出土した広郷型はBD24-26区Sb-16~18、CH35-39区Sb-51、CH46-48区Sb-58・59に分布が認められ、とりわけSb-16~18では素材の供給から細石刃生産の過程までが接合資料によって良好に復元されている。



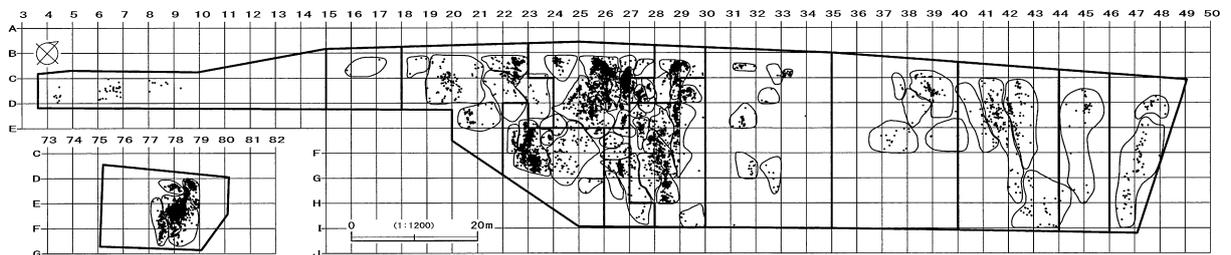
石器ブロック位置図



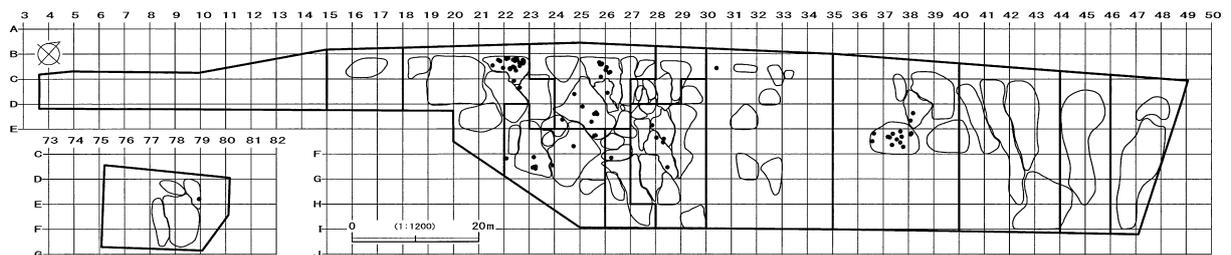
黒曜石3



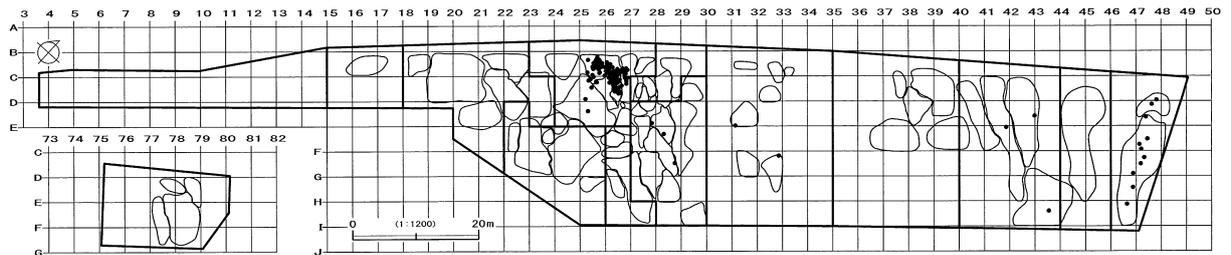
黒曜石4



黒曜石5



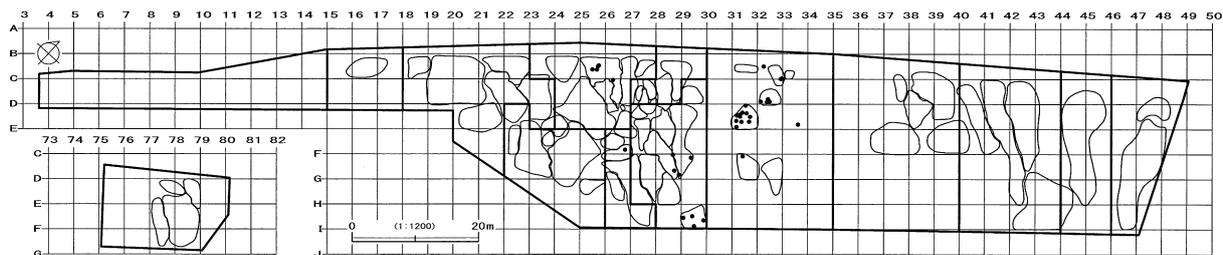
頁岩



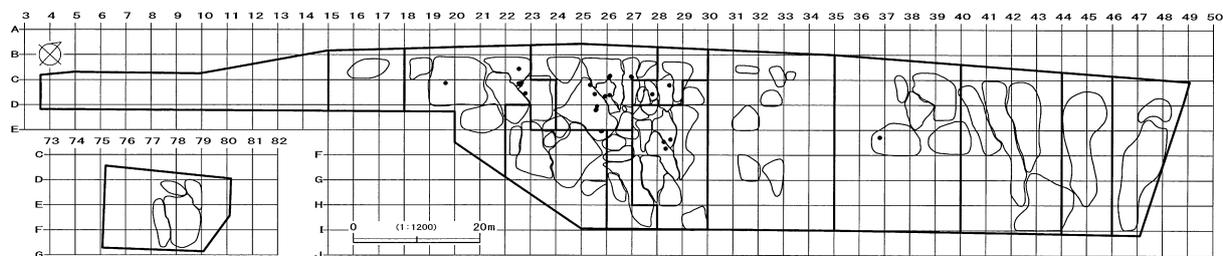
めう

図Ⅲ-8 白滝I群以外 属性別遺物分布図 石材(2)

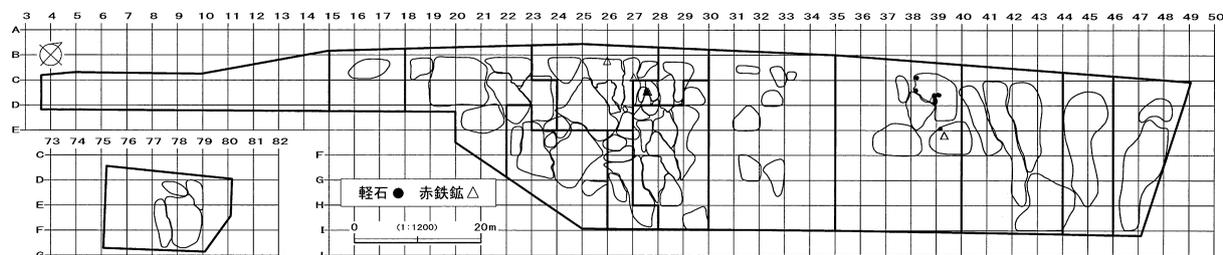
2 遺物



珪岩



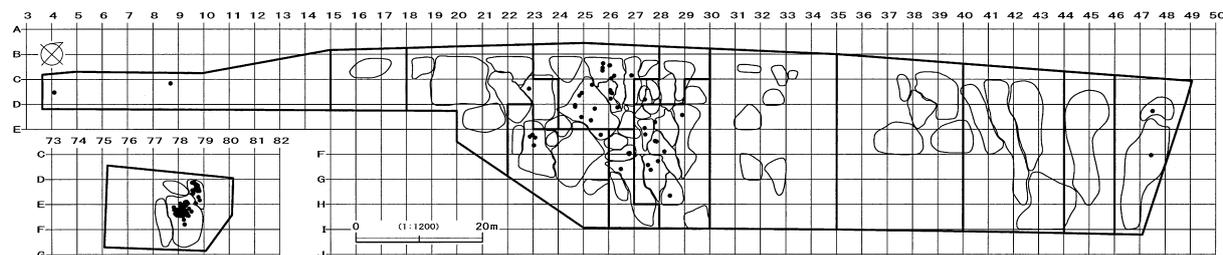
安山岩



軽石・赤鉄鉱



尖頭器

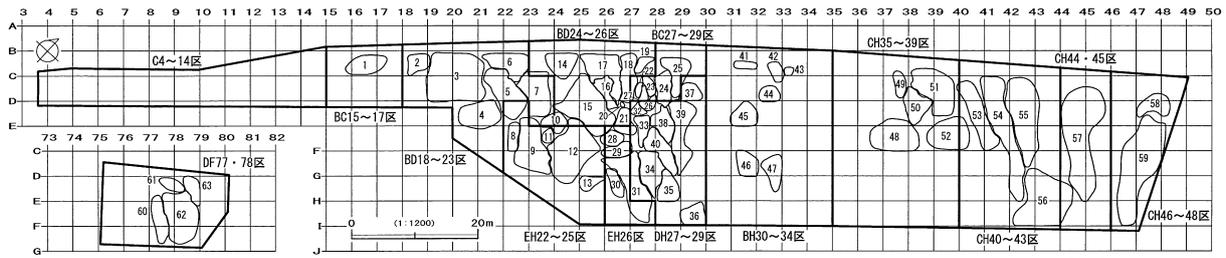


両面調整石器

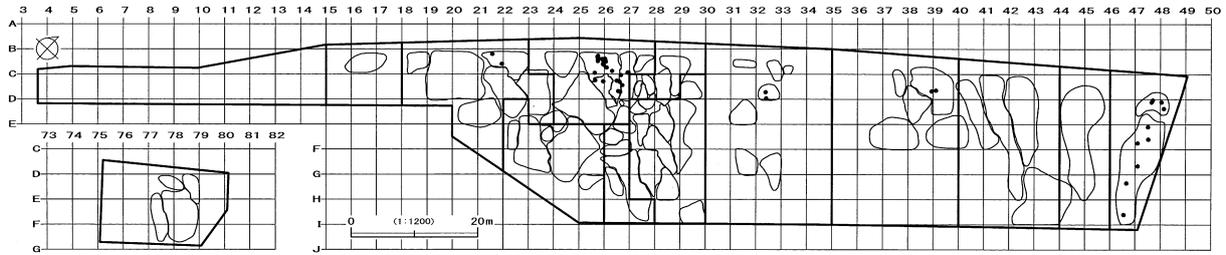


舟底形石器

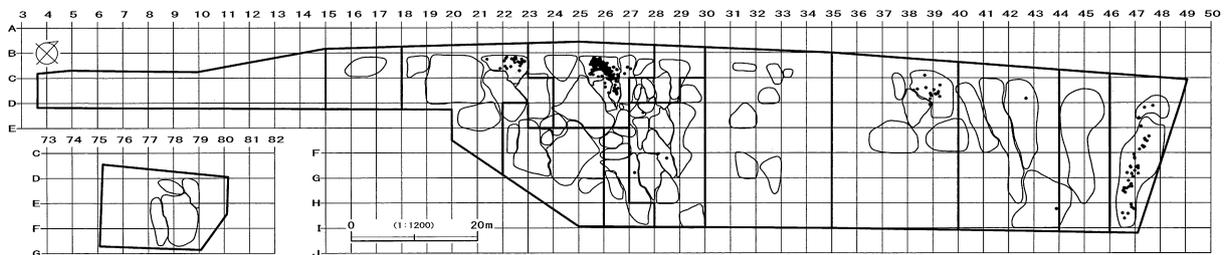
図Ⅲ-9 白滝I群以外 属性別遺物分布図 石材(3)・器種(1)



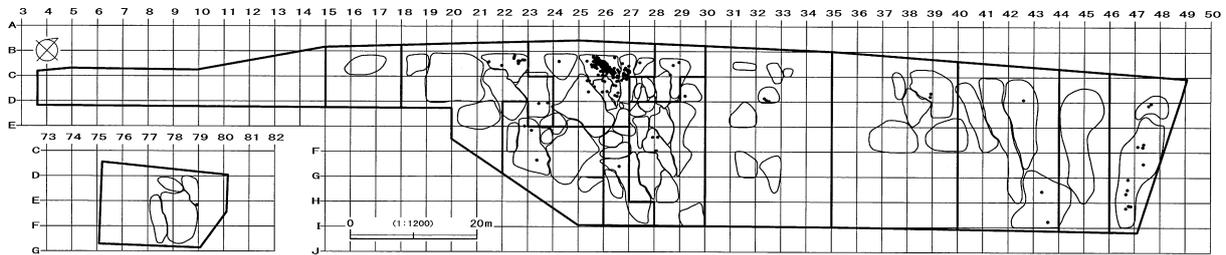
石器ブロック位置図



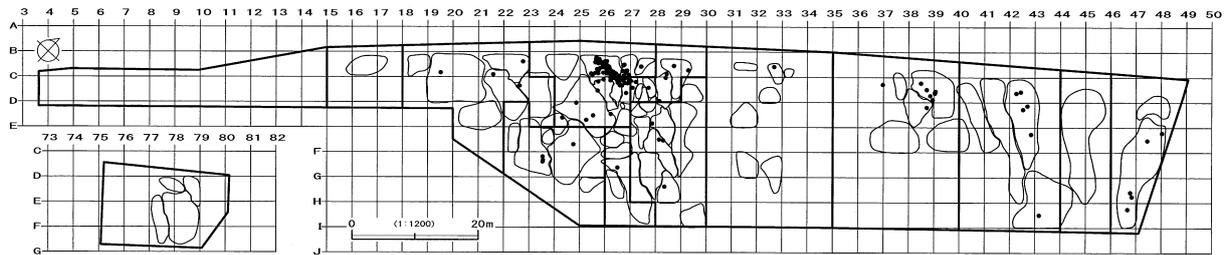
細石刃核



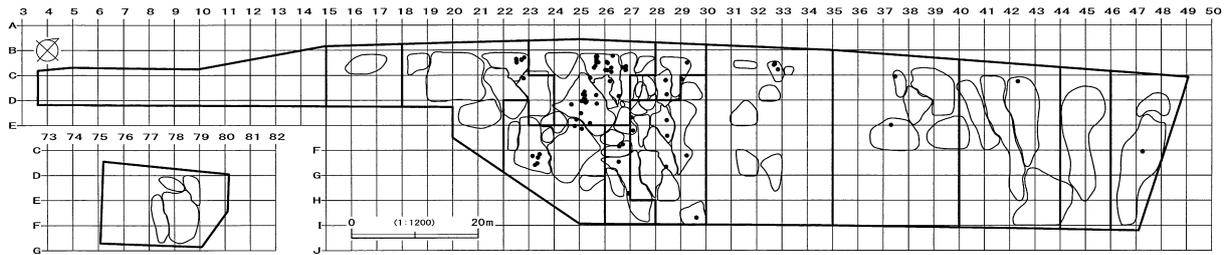
細石刃



削片



彫器



搔器

図Ⅲ-10 白滝I群以外 属性別遺物分布図 器種(2)

**細石刃** (図Ⅲ-10)

本遺跡の細石刃核には上述の各技法が確認されており、細石刃は主にこれらから剥離されたものと考えられる。分布は細石刃核とほぼ同じ範囲に認められる。とりわけSb-17では炭化木片ブロックCb-4・6の周辺の遺物集中範囲から細石刃核・削片・石刃などと共に出土が認められる。

**削片** (図Ⅲ-10)

細石刃と彫器から剥離されたものがあり、広郷技法では打面と作業面で剥離されたものに分けられる。細石刃・細石刃核および後述の彫器の分布と概ね重複している。

**彫器** (図Ⅲ-10)

彫器は細石刃核石器群(蘭越・美利河・峠下・広郷)、有舌尖頭器石器群、小型舟底形石器石器群、服部台型石刃石器群に伴って分布が認められる。特に数量が多いのは広郷型細石刃核石器群のBD24-26区Sb-17・18で、点取り彫器の7割近くが同範囲のCb-4・6周辺に集中している。

**搔器** (図Ⅲ-10)

搔器はA地区22~30ライン間の範囲で主に認められ、対してB地区では出土がみられない。まとまった分布は、BD18-23区Sb-6(蘭越・美利河型細石刃核石器群)、EH22-25区Sb-9(有舌尖頭器石器群)、BD24-26区Sb-17・18(広郷型細石刃核石器群)、同区Sb-15とEH22-25区Sb-12北端(有舌尖頭器石器群)などに確認することができる。

**削器** (図Ⅲ-11)

削器はA地区22~30ライン間とB地区Sb-62で主に認められ、A地区では①BD18-23区Sb-6(蘭越・美利河型細石刃核石器群)、②EH22-25区Sb-9(有舌尖頭器石器群)、③BD24-26区Sb-17・18(広郷型細石刃核石器群)、④同区Sb-15(有舌尖頭器石器群)、⑤BC27-29区Sb-22・23・26周辺(服部台型石刃石器群)、⑥DH27-29区Sb-34・38・40(服部台型石刃石器群とホロカ型彫器石器群)に伴っている。特徴的なものには⑤の剣菱形削器、⑥後者の連続的な平行剥離で加工された削器がみられる。

**錐形石器** (図Ⅲ-11)

出土数は10点と少なく、内8点に頁岩・珪岩・めのうなどの黒曜石以外の石材が使用されている。分布はA地区22~30ライン間に散発的にみられ、広郷型細石刃核石器群や有舌尖頭器石器群に伴うものと考えられる。

**二次加工ある剥片** (図Ⅲ-11)

二次加工ある剥片はA地区22~30ライン間とB地区Sb-62で主にみられるほか、CH35-39区、CH46-48区にもまとまりが認められる。とりわけ広郷型細石刃核石器群が分布するSb-17・18に密に分布しているが、これらは石刃を素材としたA類:使用痕があるもの、C4類:素材背面に縦長剥離が加えられるもの、が主体を占めている。同石器群の特徴的な石器として認めることができる。

**石刃** (図Ⅲ-11)

石刃はA・B地区合計で3,486点が出土しており、石刃技法母岩が主体的に多数復元されたBD24-26区(1,862点・53.4%)と、BC27-29区(947点・27.2%)に大多数が分布している。前者は広郷型細石刃核石器群、後者は服部台型石刃石器群と「服部台型もしくは広郷型」の石器群である。またCH35-39区のSb-51(広郷型細石刃核石器群)、Sb-50(有舌尖頭器石器群?)にもまとまりが認められる。

**縦長剥片** (図Ⅲ-11)

概ね石刃と同じ分布傾向で認められ、主に石刃技法か類似する剥離技術から産出されている。

**石刃核** (図Ⅲ-11)

石刃核はA・B地区合計で193点が出土しており、DH27-29区Sb-32・33に突出して多くの点数(122点)が認められる。但し122点は全て折れ接合し実質的個体数は2個体であった。これを除外した中では石刃技法母岩が主体的に多数復元されたBD24-26区(35点・49.3%)とBC27-29区(16点・22.5%)に多くが分布している。前者は広郷型細石刃核石器群、後者は服部台型石刃石器群と「服部台型もしくは広郷型」の石器群である。

#### 石核 (図III-12)

石核は有舌尖頭器石器群が主に分布するEH22-25区Sb-9(17点・11.6%)とDF77・78区Sb-62(53点・36.1%)、広郷型細石刃核石器群が分布するSb-16～18(43点・29.3%)にまとまってみられる。但しSb-62は折れ接合するものが多数あり、実質は13個体に留まる。またSb-9は非接合もしくは数点の接合に留まるものが主体であった。広郷型細石刃核石器群には、石刃技法から剥片剥離に移行し石核となったものが含まれる。

#### 剥離技術別の分布 (図III-12～19、表III-25～28)

##### 母岩別剥離面接合資料 (図III-12)

母岩別資料は点取り遺物全体で27,215点(白滝I群以外26,997点)あり、この内剥離面接合資料は19,224点で、白滝I群以外に限定すると19,051点が認められる。母岩別資料の個体数は全体で339個体、白滝I群以外では326個体を占める。I群以外資料の各区域の分布状況は以下の通りである。

BD18-23区では20母岩、1,371点の母岩別接合資料があり、全体母岩個体数の6.1%を占める。蘭越型ないし美利河型細石刃核石器群と小型舟底形石器群が主体で、分布はSb-6からSb-5・7北部にかけて集中して認められる。

EH22-25区では19母岩、2,026点の母岩別接合資料があり、全体母岩個体数の5.8%を占める。有舌尖頭器石器群が主体で分布はSb-9に集中して認められる。

BD24-26区では103母岩、8,845点の母岩別接合資料があり、全体母岩個体数の31.6%を占める。最も多くの母岩が確認できた区域である。広郷型細石刃核石器群・有舌尖頭器石器群・小型舟底形石器群が主体で、とりわけ広郷型の石刃技法母岩が豊富に復元されている。分布はSb-15～18に集中して認められ、広郷型の石器群はSb-16～18にまとまっている。

BC27-29区では28母岩、2,743点の母岩別接合資料があり、全体母岩個体数の8.6%を占める。服部台型石刃石器群と「服部台型もしくは広郷型」の石器群が主体で、分布は各ブロックに両石器群が重複して認められる。とりわけSb-24・25には高密度の分布がみられる。

EH26区では5母岩、337点の母岩別接合資料があり、全体母岩個体数の1.5%を占める。有舌尖頭器石器群が主体で、分布はSb-30・31にまとまって認められる。

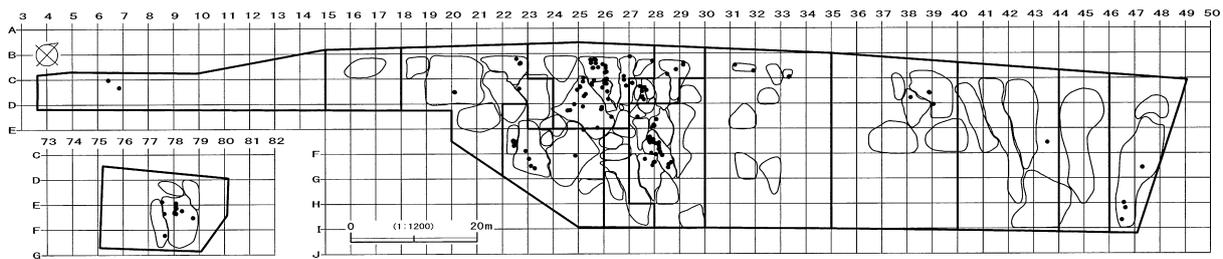
DH27-29区では33母岩、2,232点の母岩別接合資料があり、全体母岩個体数の10.1%を占める。服部台型石刃石器群と有舌尖頭器石器群が主体で、分布は前者がSb-40に、後者がその他のブロックにまとまって認められる。

BH30-34区では9母岩、411点の母岩別接合資料があり、全体母岩個体数の2.8%を占める。峠下型細石刃核石器群がみられ、区域北部のSb-44に分布している。

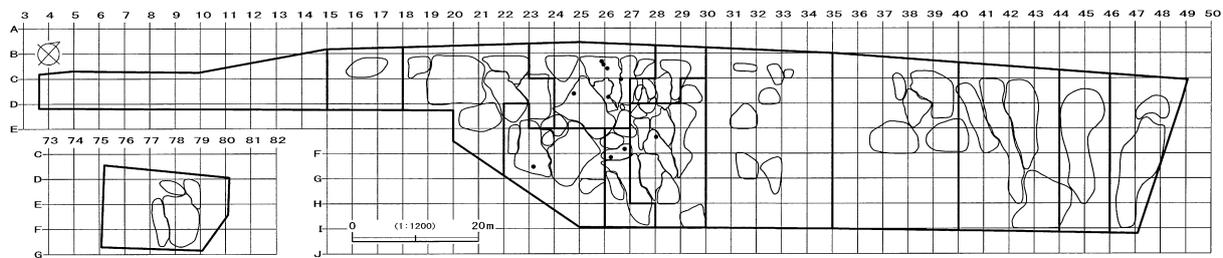
CH35-39区では16母岩、1,572点の母岩別接合資料があり、全体母岩個体数の4.9%を占める。石器群と分布は、①小型舟底形石器群がSb-49、②広郷型細石刃核石器群がSb-50、③有舌尖頭器石器群の可能性のあるものがSb-51に、主体的に認められる。

CH40-43区では4母岩、310点の母岩別接合資料があり、全体母岩個体数の1.2%を占める。広郷型細石刃核石器群が主体で、分布はSb-54・55に主に認められる。

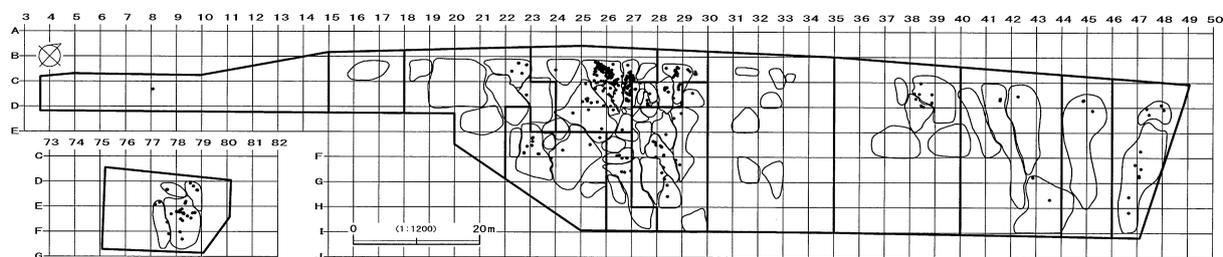
2 遺物



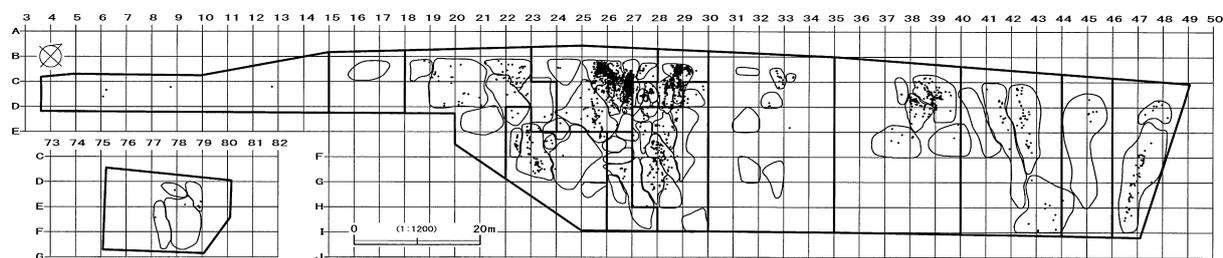
削器



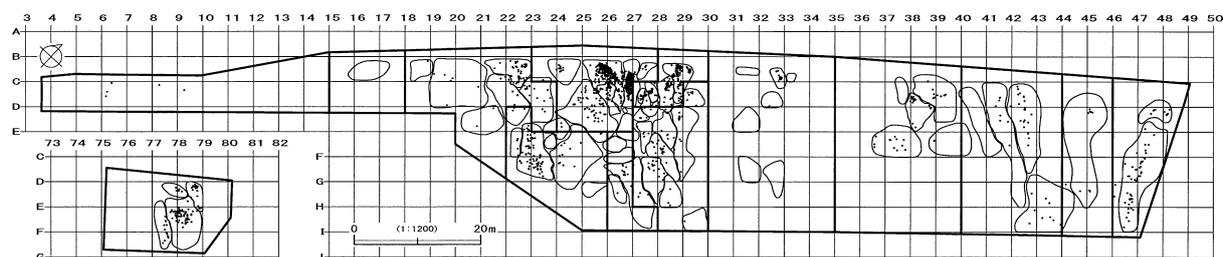
錐形石器



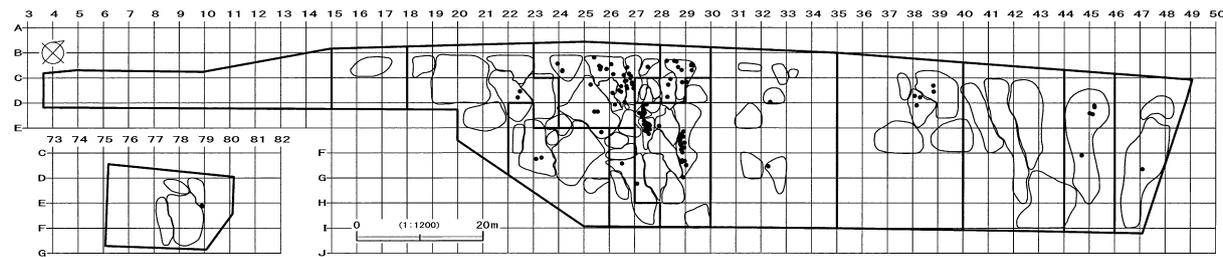
二次加工ある剥片



石刃

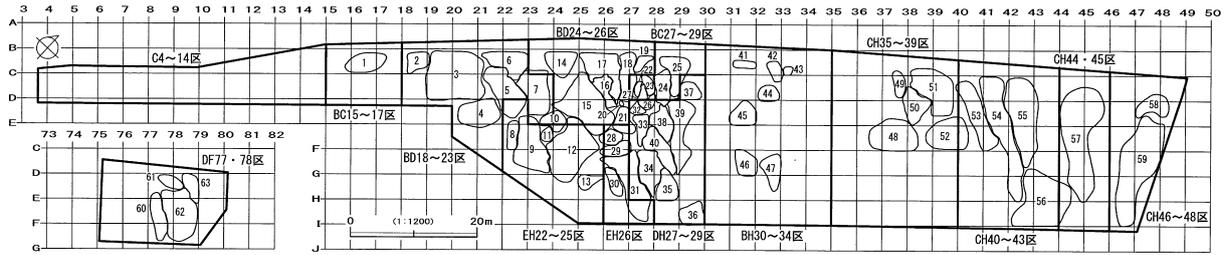


縦長剥片

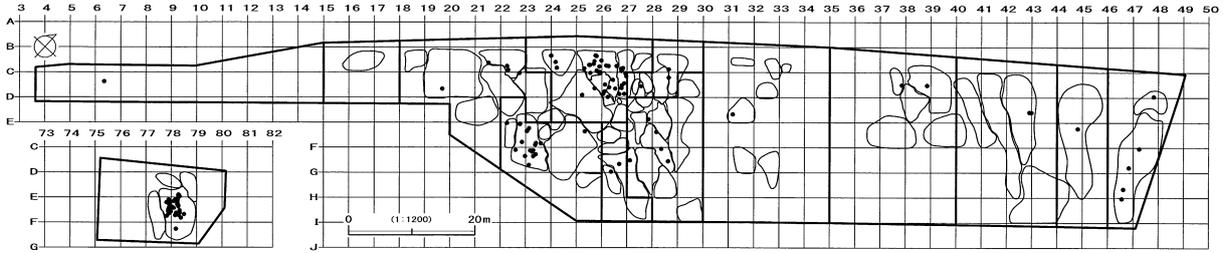


石刃核

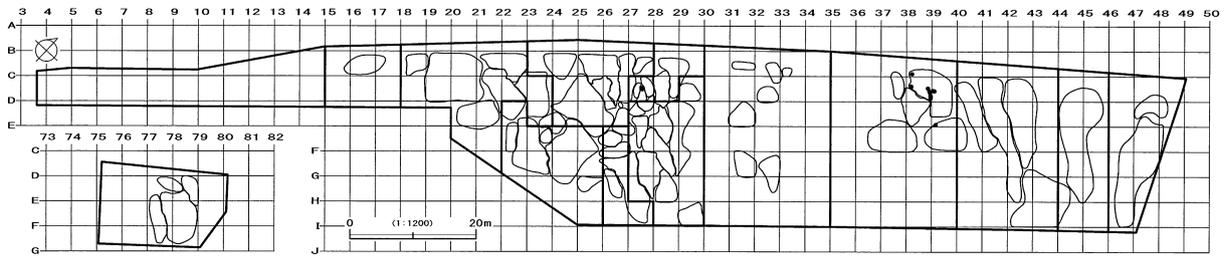
図Ⅲ-11 白滝Ⅰ群以外 属性別遺物分布図 器種(3)



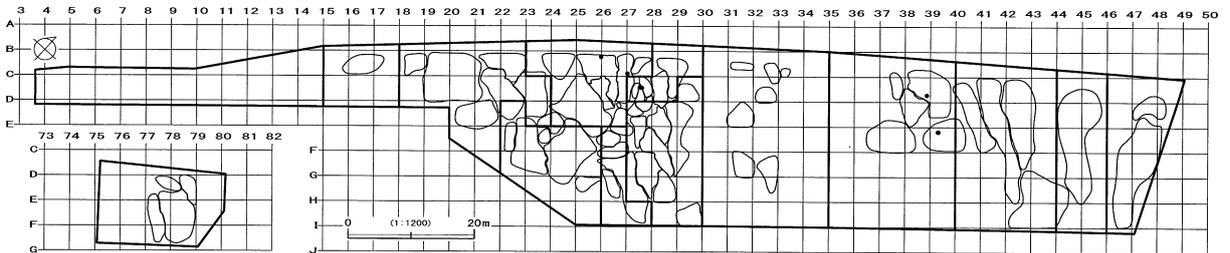
石器ブロック位置図



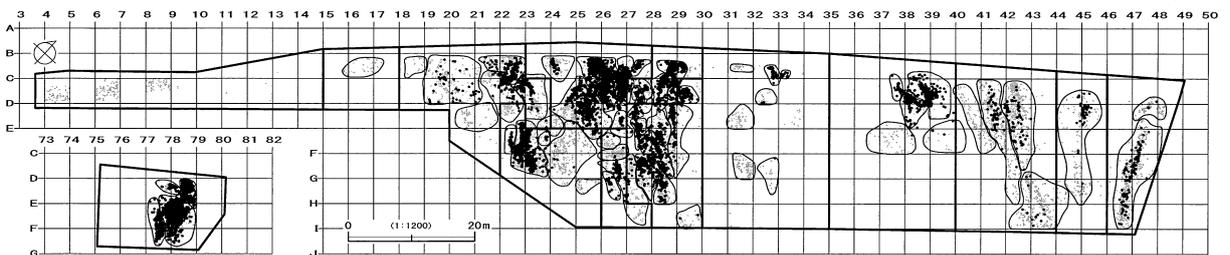
石核



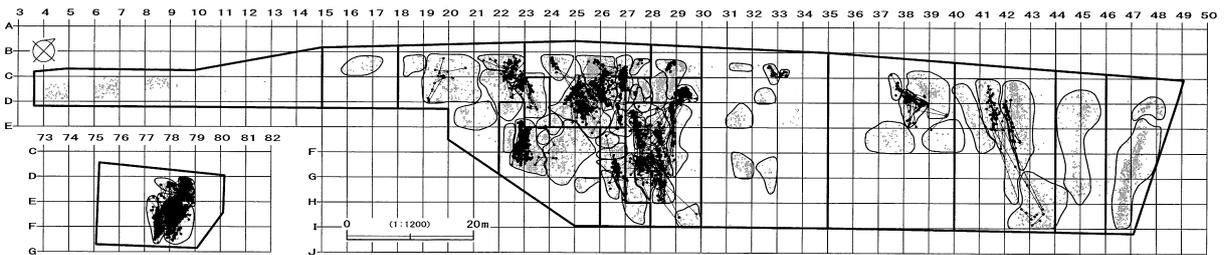
赤色顔料原材料



礫(軽石)



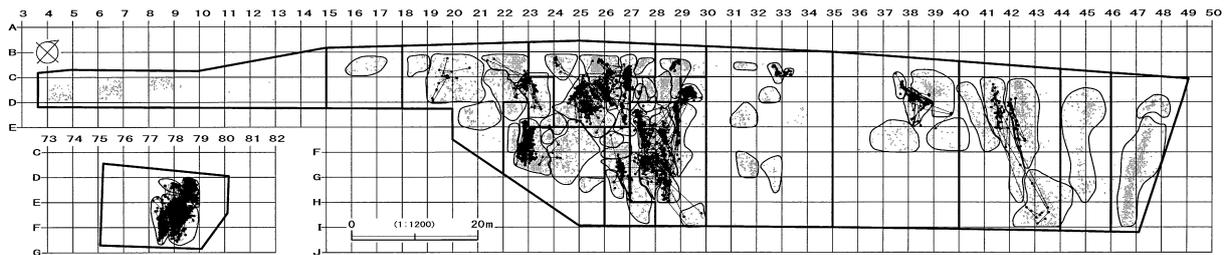
母岩別資料中の剥離面接合資料



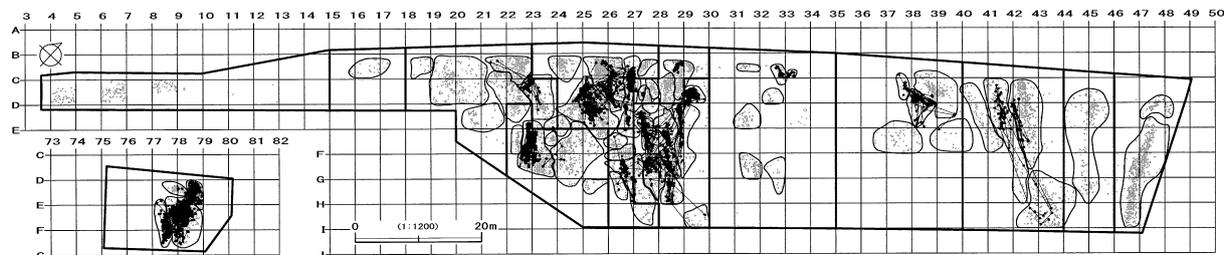
1類(尖頭器・両面調整石器製作)

図III-12 白滝I群以外 属性別遺物分布図 器種(4)、母岩別接合資料分布図 剥離技術(1)

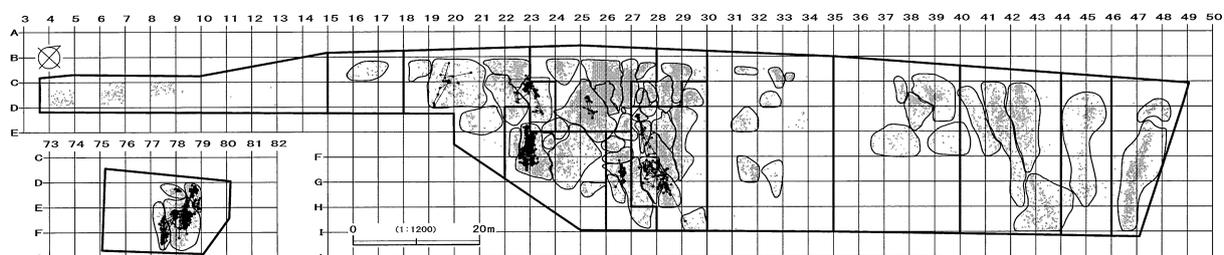
2 遺物



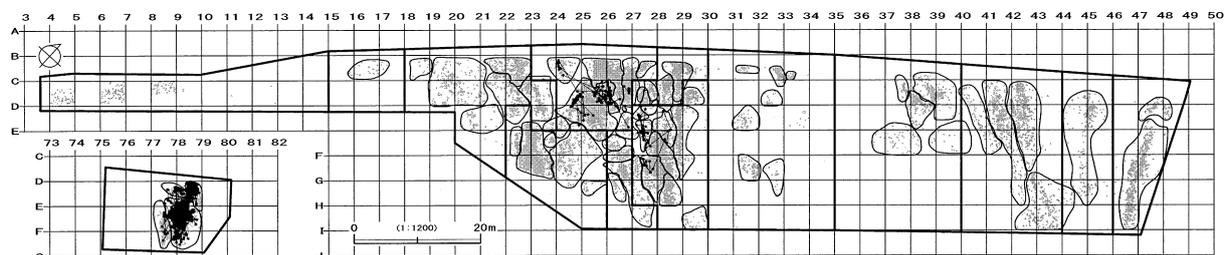
1A類(A:尖頭器・両面調整石器 I 類製作)



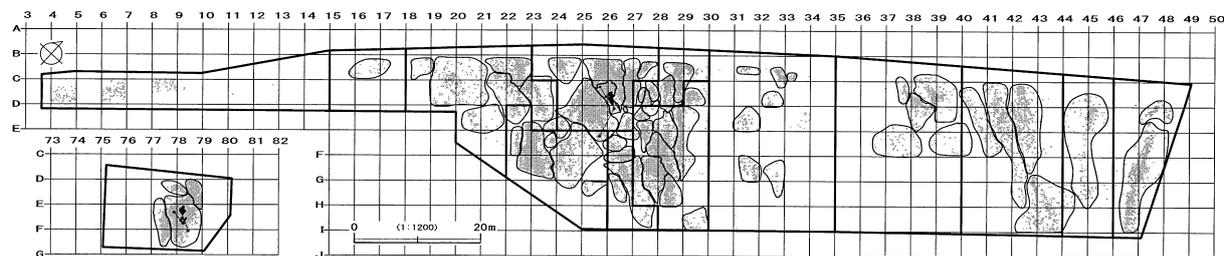
1A i 類(i:核素材)



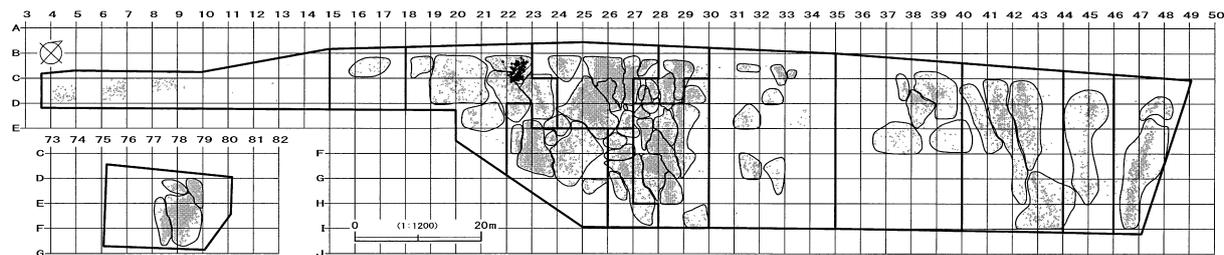
1A ii 類(ii:剥片素材)



1A iii 類(iii:核・剥片素材複数個体製作)

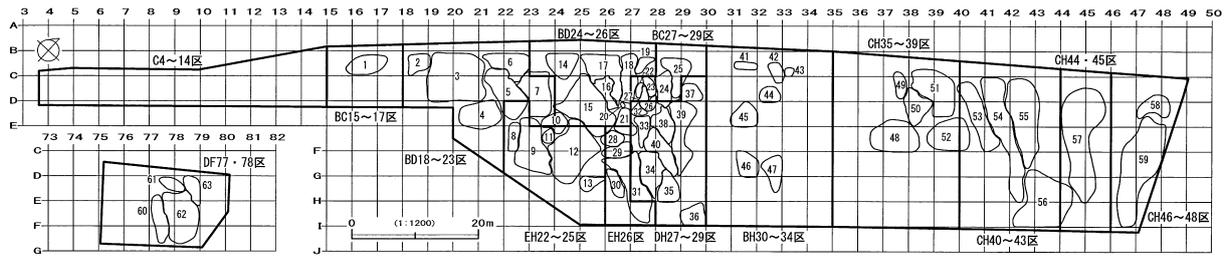


1A iv 類(iv:分割礫素材)

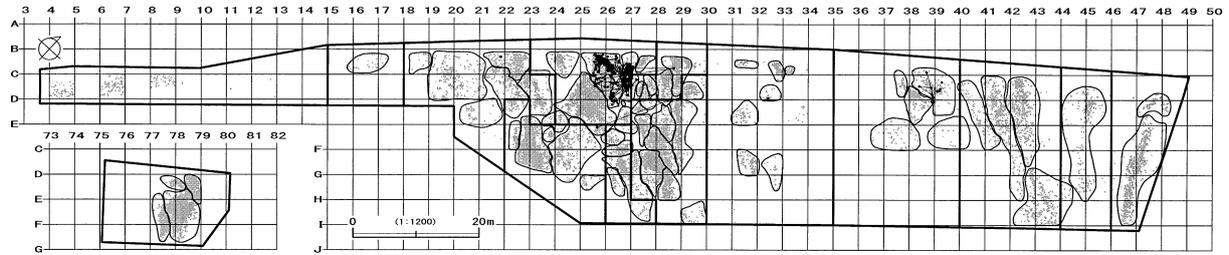


1B類(B:尖頭器 II 類削片剥離を製作)

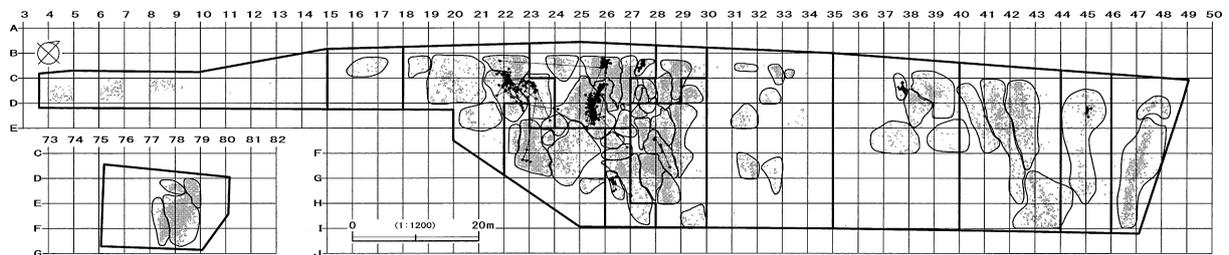
図Ⅲ-13 白滝 I 群以外 母岩別接合資料分布図 剥離技術(2)



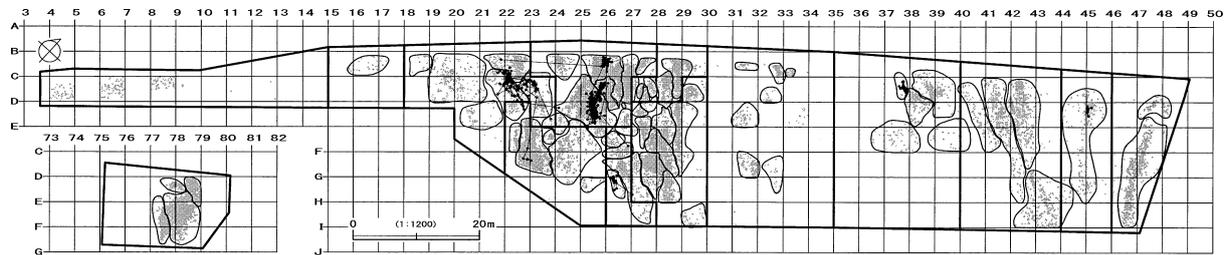
石器ブロック位置図



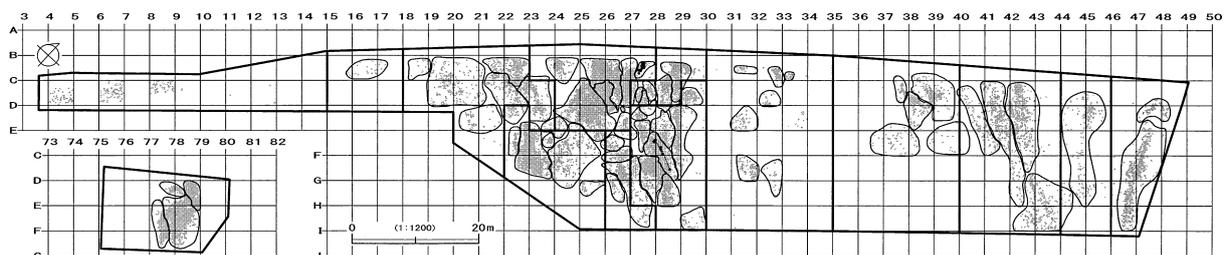
2類(細石刃生産)



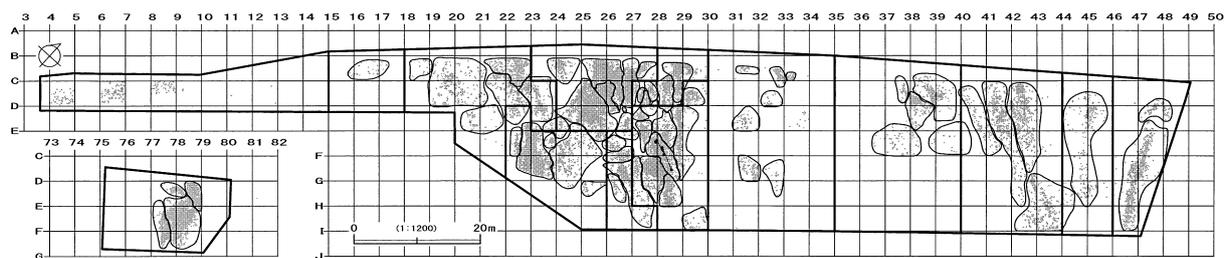
3類(舟底形石器製作)



3A類(A:舟底形石器 I a・II a類製作)



3B類(B:舟底形石器 I b・II b類製作)



3B iii類(iii:分割礫素材)

図Ⅲ-14 白滝I群以外 母岩別接合資料分布図 剥離技術(3)

CH44・45区では5母岩、78点の母岩別接合資料があり、全体母岩個体数の1.5%を占める。小型舟底形石器石器群が主体で、分布はSb-57の北部に主に認められる。

CH46-48区では4母岩、217点の母岩別接合資料があり、全体母岩個体数の1.2%を占める。広郷型細石刃核石器群が主体で、分布はSb-59に主に認められる。

DF77・78区では81母岩、9,133点の母岩別接合資料があり、全体母岩個体数の24.8%を占める。有舌尖頭器石器群が主体で、分布は各石器ブロックに高密度に認められる。

以下、作業内容（剥離技術類型）別に分布状況を観察していく。各類型に記載した資料点数は母岩別剥離面接合資料に限定した数字である。

### 1類 尖頭器・両面調整石器製作母岩（図Ⅲ-12・13）

1類資料はBD18-23区・EH22-25区・BD24-26区・EH26区・DH27-29区・CH35-39区・CH40-43区・DF77・78区でまとめて認められ、広郷型細石刃核石器群、有舌尖頭器石器群、小型舟底形石器石器群に伴っている。技術別でみると1A i類（核素材、単体製作）は各区域に認められ、1A ii・iii・iv類（核・剥片素材、複数個体製作）は有舌尖頭器が分布するEH22-25区・BD24-26区・EH26区・DH27-29区に概ね限定される。また1B類（削片剥離尖頭器製作）は小型舟底形石器石器群の分布するBD18-23区から出土している。

### 2類 細石刃生産母岩（図Ⅲ-14）

2類資料はBD18-23区（蘭越・美利河型細石刃核石器群）、BD24-26区・CH35-39区（広郷型細石刃核石器群）、BH30-34区（峠下型細石刃核石器群）で認められ、広郷型細石刃核石器群のSb-17・18・50でまとめて出土している。

### 3類 舟底形石器製作母岩（図Ⅲ-14・15）

3類資料は小型舟底形石器石器群のもの（3A類）と、II b類舟底形石器を製作したもの（3B類）に分けられる。前者はBD18-23区Sb-5・7、BD24-26区Sb-15・17、EH26区Sb-30、CH35-39区Sb-49、CH44・45区Sb-57に、後者はBC27-29区Sb-19やDH27-29区Sb-40に分布している。

### 4類 石刃技法母岩（図Ⅲ-15～18）

4類資料は各区域に分布するが、とりわけ、① BD24-26区のSb-17・18、② BC27-29区のSb-22～27、③ CH35-39区のSb-50・51に多量且つ高密度の分布が認められる。①・③は4D ii・iii類（調整打面・頭部調整と擦痕・母型背部平坦）が主に分布し、広郷型細石刃核石器群の主要な生産技術と考えられる。②は4A iv類（平坦打面・頭部調整・母型形成なし）、4A・C ii類（平坦打面と調整打面折衷・頭部調整・母型背部平坦）、4C ii類（調整打面・背部平坦）が主体的で、服部台型石刃石器群と「服部台型もしくは広郷型」の石器群の技術が重複して分布している状態とみられる。

また4A iv類（平坦打面・頭部調整・母型形成なし）は、小型舟底形石器石器群の分布するBD18-23区Sb-5、EH22-25区Sb-8、BD24-26区Sb-15・17、CH35-39区Sb-49、CH44・45区Sb-57にも多数認められ、服部台型石刃石器群と小型舟底形石器石器群の両者に伴う特徴的な技術と考えられる。4C i類はBD24-26区とBC27-29区にみられ、有舌尖頭器石器群が分布するSb-17南部からSb-15にかけて特にまとまった分布を示している。

### 5類 石核関連母岩（図Ⅲ-18・19）

5類資料は、① EH22-25区Sb-9、② BD24-26区Sb-17・18、③ DH27-29区Sb34-35、④ DF77・78区Sb-60・62でまとまった分布がみられる。①・③・④は有舌尖頭器石器群で、作業内容は尖頭器の素材剥片生産を目的とした転礫原石の粗割りである。

### 原石形状別の分布（図Ⅲ-19、表Ⅲ-29）

白滝 I 群以外の母岩別資料で原石形状が判別できたものは276個体あり、この内角礫が133個体(48.2%)、亜角礫が40個体(14.5%)、転礫が103個体(37.3%)を占める。各原石形状の個体数に大きな隔差はみられない。以下、原石形状別に分布特徴と内容を概観する。

#### 角礫母岩 (図Ⅲ-19)

角礫母岩は、① BD24-26区(44個体)、② BC27-29区(21個体)、③ DH27-29区(19個体)、④ DF77・78区(20個体)に多く認められ、⑤ EH22-25区(5個体)や⑥ CH35-39区(8個体)にもまとまった分布がみられる。①・⑥は広郷型細石刃核石器群の石刃技法母岩が主に該当し、特に①のSb-17・18に分布する母岩は30~40cmの大型母型の状態で多量に搬入されている。②は服部台型石刃石器群と「服部台型もしくは広郷型」石器群の石刃技法母岩が該当し、20~30cm程度の原石もしくは母型で搬入されている。②の区域では8割近い母岩が角礫を選択している。③~⑤は有舌尖頭器石器群の母岩が該当し、大型尖頭器を製作する1Ai類の剥離技術が主に認められる。

#### 亜角礫母岩 (図Ⅲ-19)

亜角礫母岩はBD24-26区(12個体)とDF77・78区(16個体)に多く認められ、両区域とも全体の母岩個体数が多い点で共通する。このほかBD18-23区Sb-6・7の蘭越・美利河型細石刃核石器群にもまとまってみられる。

#### 転礫母岩 (図Ⅲ-19)

転礫母岩は、① BD24-26区(30個体)と、② DF77・78区(37個体)に突出して多く分布し、いずれも有舌尖頭器石器群の尖頭器製作と石刃技法の母岩が該当する。また、③ EH22-25区(11個体)、④ BD18-23区(9個体)、⑤ BC27-29区(7個体)にもまとまった分布がみられ、この内③は上記①・②と同様の内容で認められる。このほかの④は小型舟底形石器群の舟底形石器製作母岩や蘭越・美利河型細石刃核石器群の石刃技法母岩が、⑤は「服部台型もしくは広郷型」石器群の石刃技法が該当している。

## 2) 白滝 I 群の分布

### 自然面を有す石器の分布 (図Ⅲ-20、表Ⅲ-23)

自然面付石器は166点が出土し、点取り遺物総数320点の51.9%に及ぶ。区域別でみると、BD18-23区2点(11.1%)、BD24-26区51点(61.4%)、BC27-29区0点、EH26区46点(43.4%)、DH27-29区64点(63.4%)、BH30-34区3点(50.0%)、CH35-39区0点となっている。括弧内の数値は各区域における自然面付石器の出現率を表している。BD24-26区・EH26区・DH27-29区では5割前後の高比率で認められるが、これら区域は出土点数が多く母岩別資料が復元されている。母岩別資料は主に原石や自然面付きの石核で搬入されており、これらが自然面付き遺物を生産したものと観察できる。

### 被熱石器の分布 (図Ⅲ-20、表Ⅲ-24)

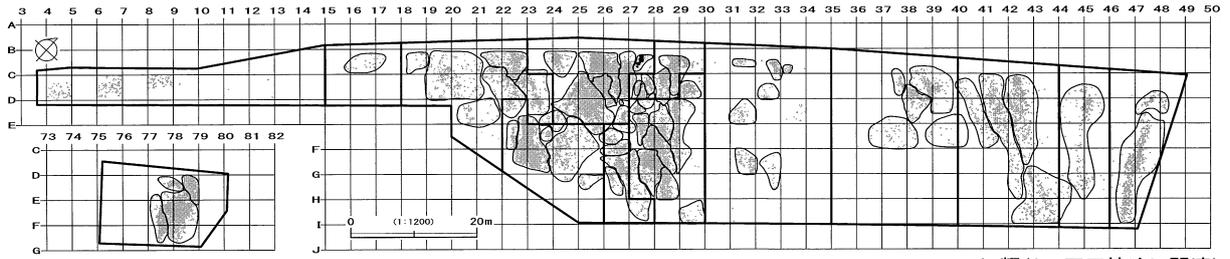
被熱石器は70点が出土し、点取り遺物総数320点の21.8%を占める。地区別にみると、BD18-23区0点、BD24-26区7点(8.4%)、BC27-29区0点、EH26区56点(52.8%)、DH27-29区7点(6.9%)、BH30-34区0点、CH35-39区0点となっている。EH26区に突出した分布が認められるがこれらは母岩201の遺物が該当している。この被熱遺物の分布範囲から3mほど北西側にCb-12(24,910±110~24,990±130yrBP)が位置しているが、共伴関係については不明である。

### 石質別の分布 (図Ⅲ-20・21、表Ⅲ-19)

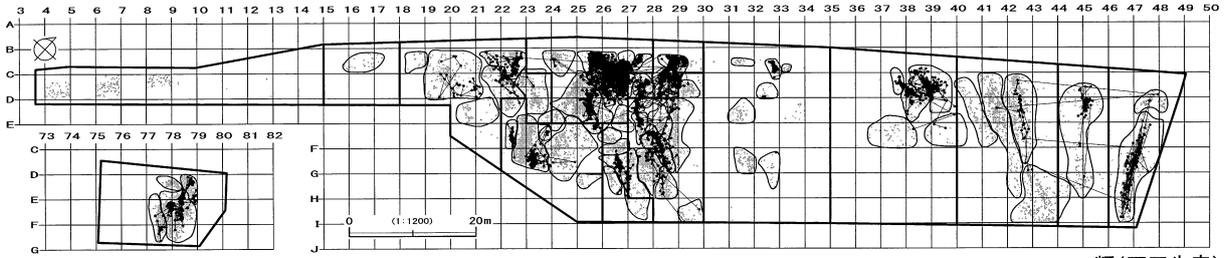
#### A. 黒曜石製の石器

黒曜石製のものは316点あり、黒曜石1が215点(68.0%)、黒曜石3が44点(13.9%)、黒曜石2・4

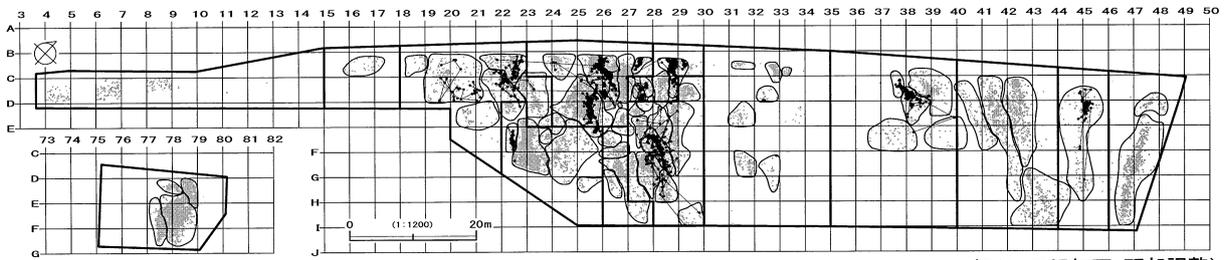
2 遺物



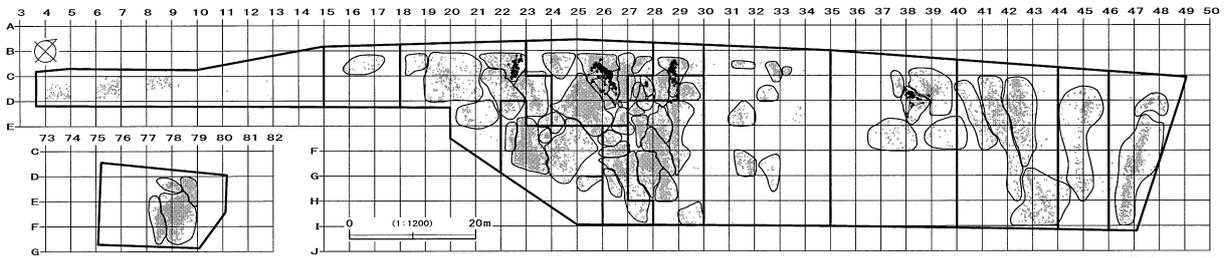
3Biv類 (iv : 石刃技法に關連)



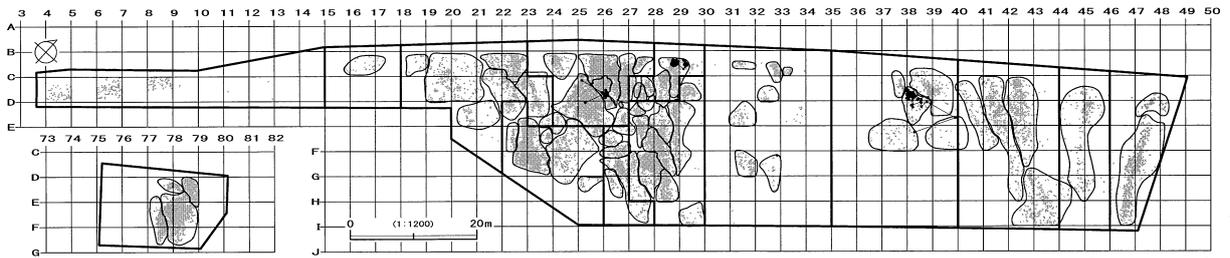
4類 (石刃生産)



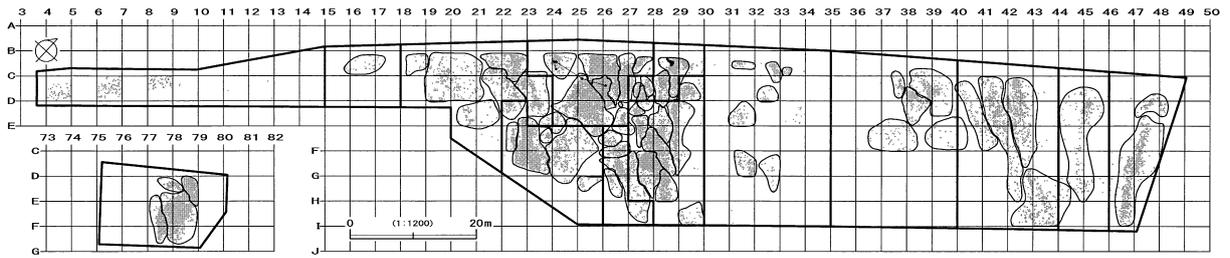
4A類 (A : 平坦打面・頭部調整)



4A i類 (i : 母型背稜形成)

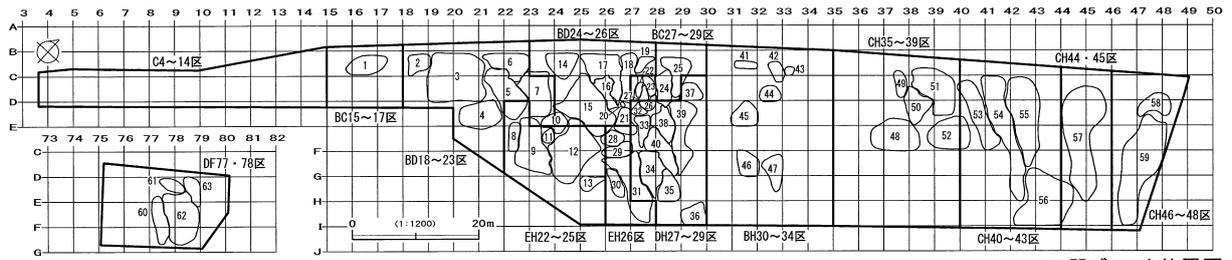


4A ii類 (ii : 母型背部平坦面形成)

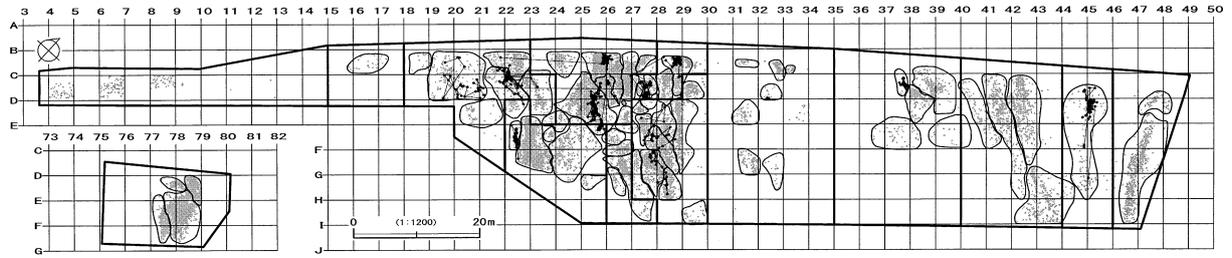


4A iii類 (iii : 母型背部平坦自然面)

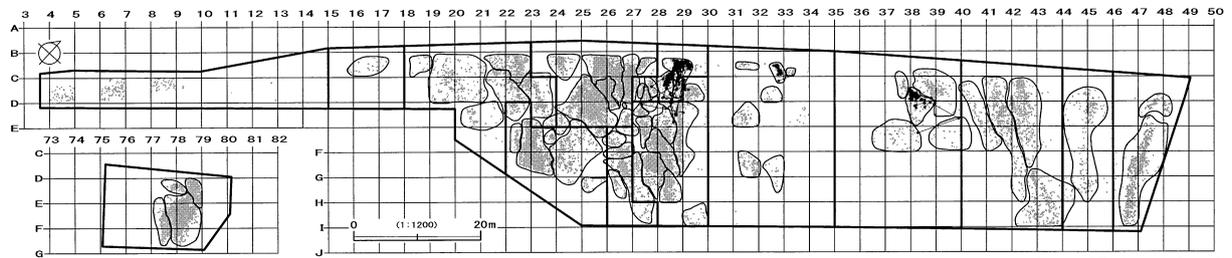
図Ⅲ-15 白滝 I 群以外 母岩別接合資料分布図 剥離技術 (4)



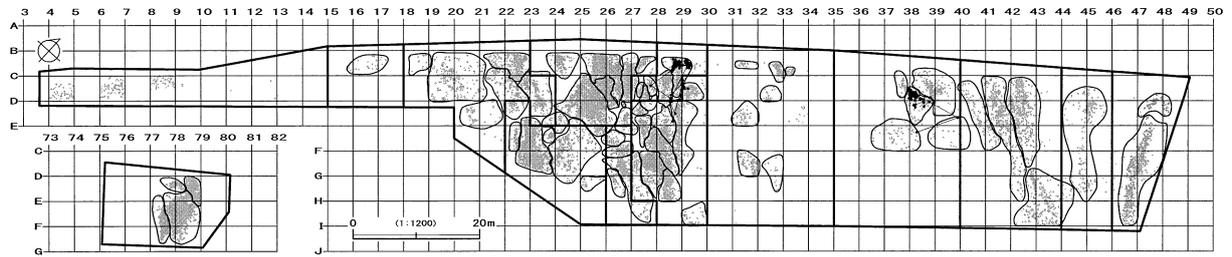
石器ブロック位置図



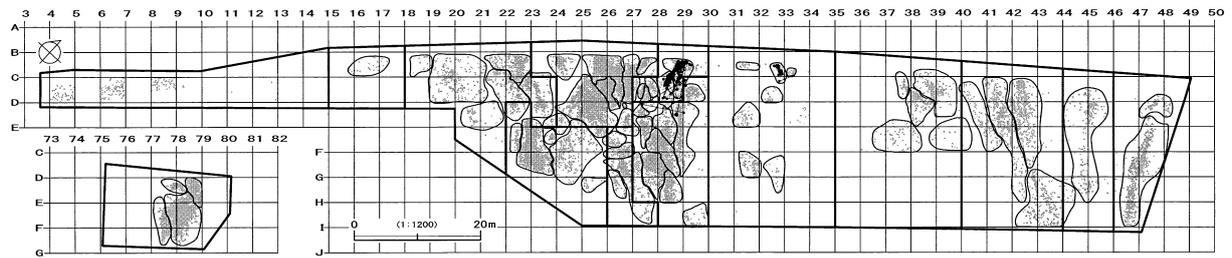
4Aiv類(iv:母型形成なし)



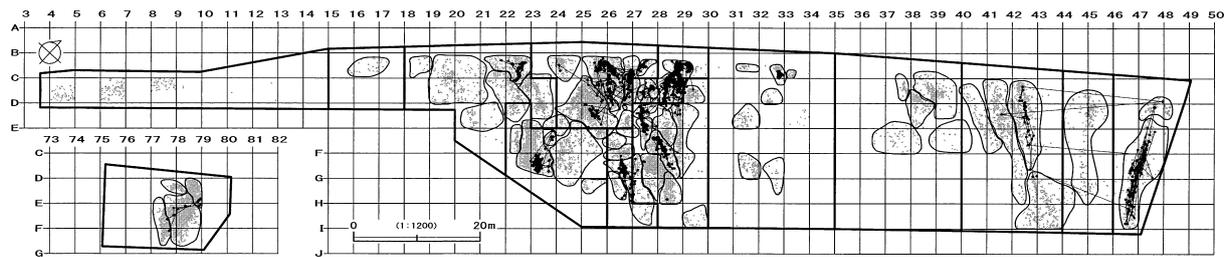
4A・C類(A・C:平坦打面・調整打面並存)



4A・Ci類(i:母型背稜形成)



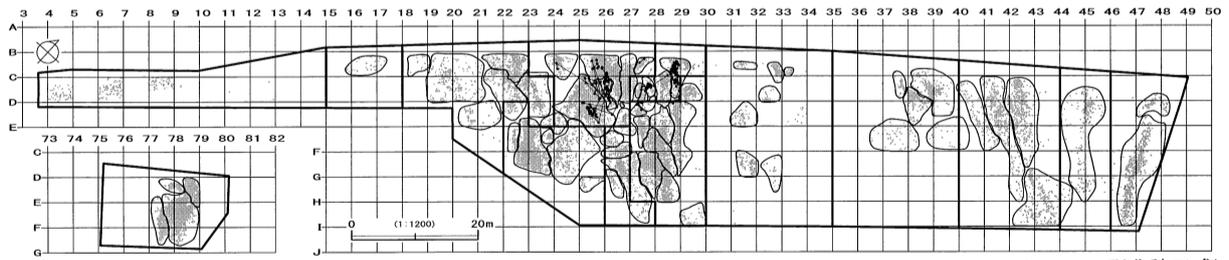
4A・Cii類(ii:母型背部平坦面形成)



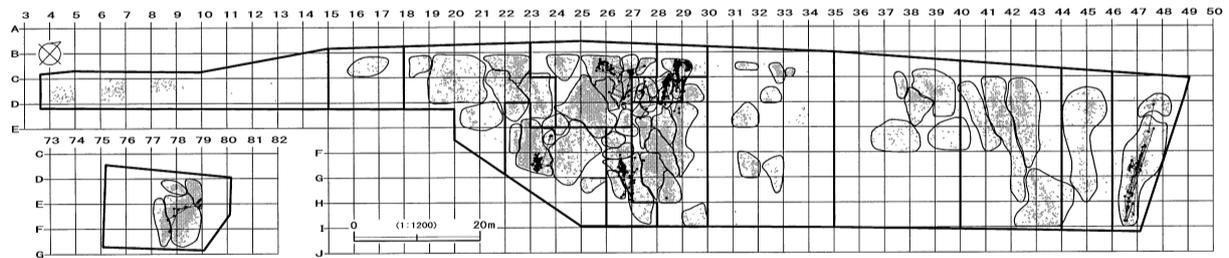
4C類(C:調整打面・頭部調整)

図Ⅲ-16 白滝I群以外 母岩別接合資料分布図 剥離技術(5)

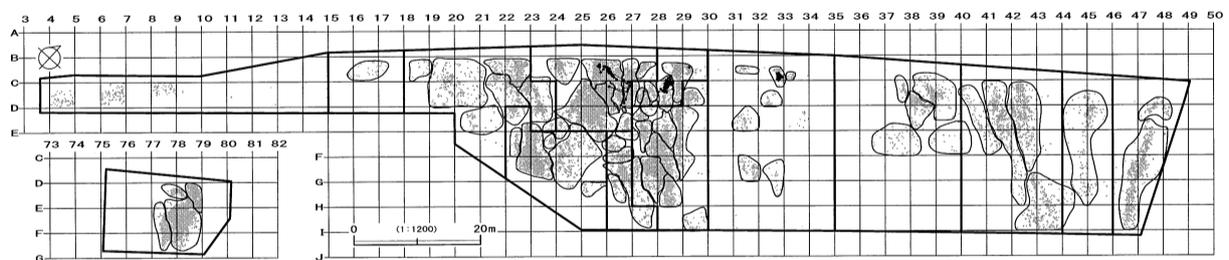
2 遺物



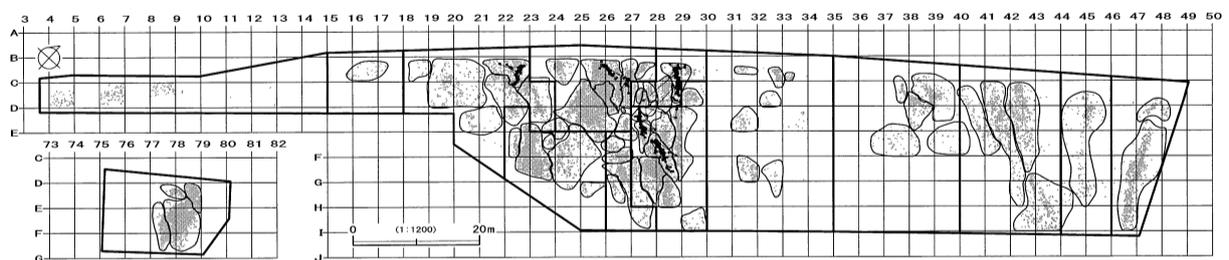
4C i類(i:母型背稜形成)



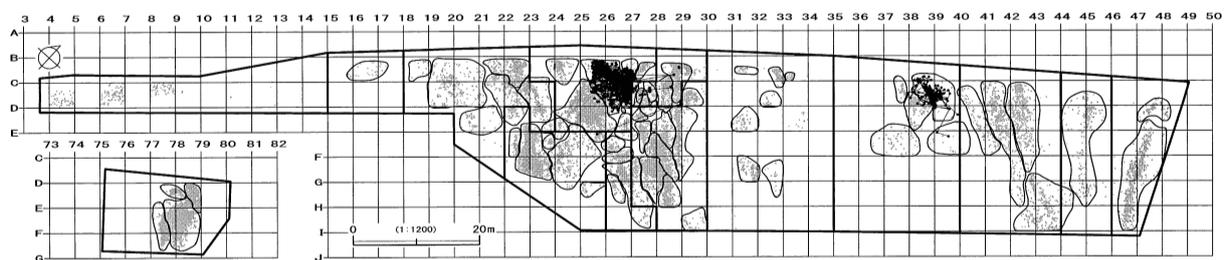
4C ii類(ii:母型背部平坦面形成)



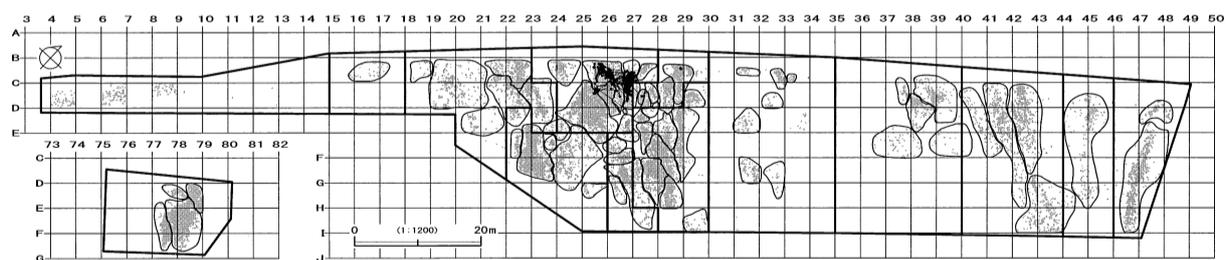
4C iii類(iii:母型背部平坦自然面)



4C iv類(iv:母型形成なし)

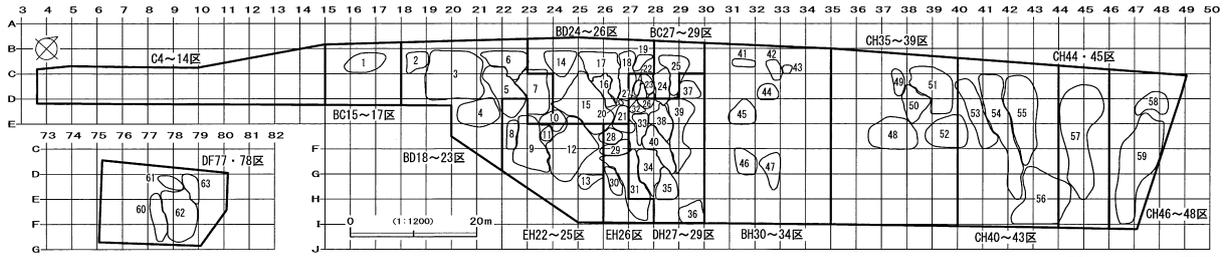


4D類(D:調整打面・頭部調整・頭部擦痕)

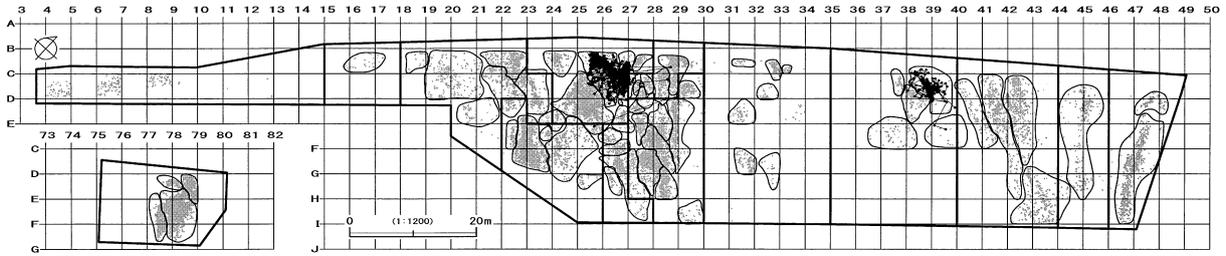


4D i類(i:母型背稜形成)

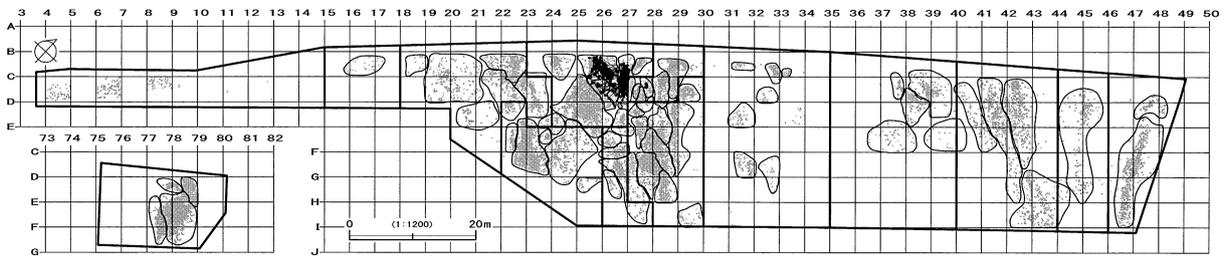
図Ⅲ-17 白滝I群以外 母岩別接合資料分布図 剥離技術(6)



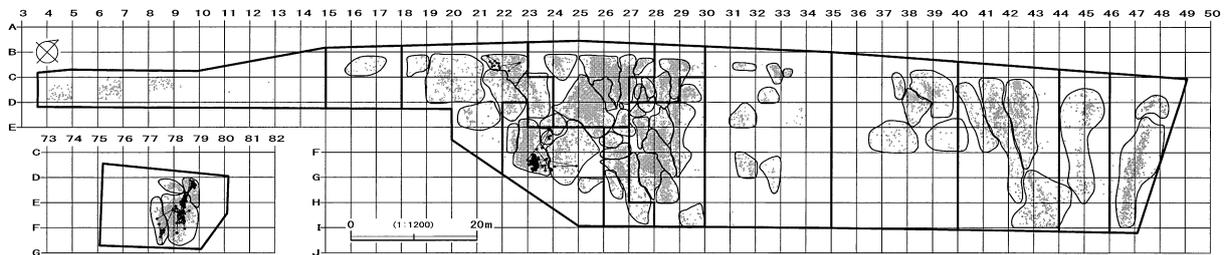
石器ブロック位置図



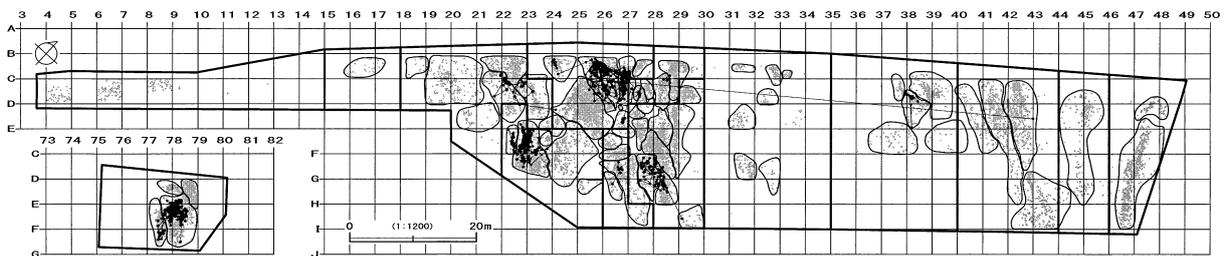
4D ii 類 (ii: 母型背部平坦面形成)



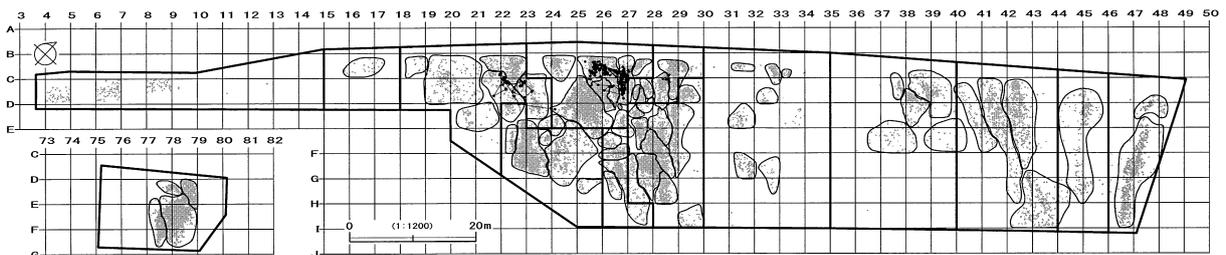
4D iii 類 (iii: 母型背部平坦自然面)



4E 類 (E: 母型を製作)



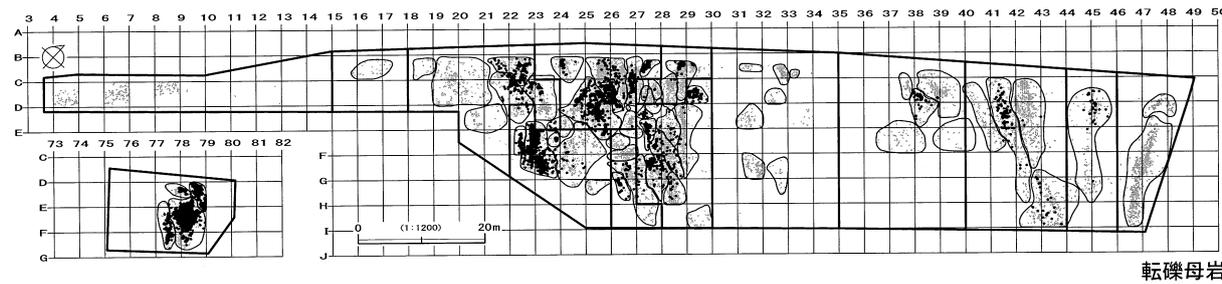
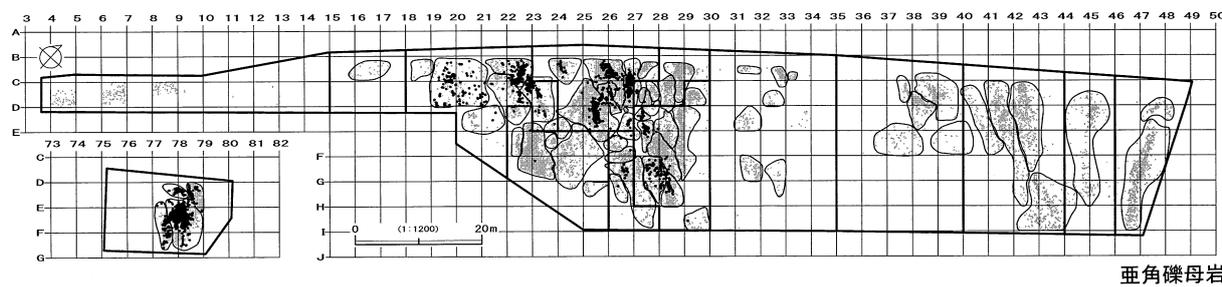
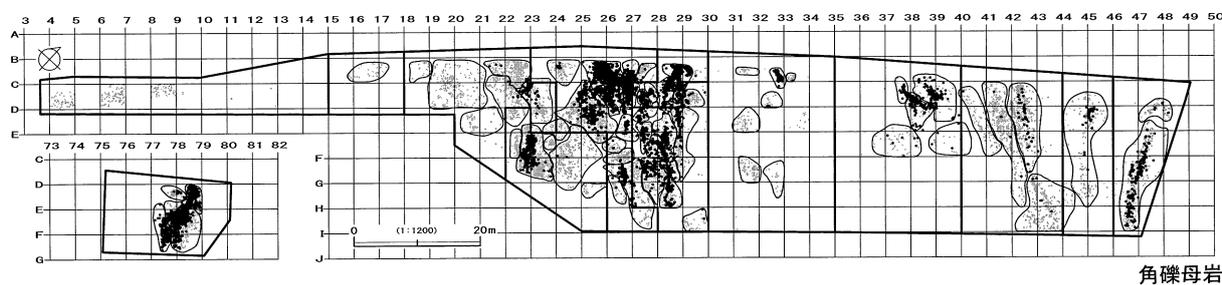
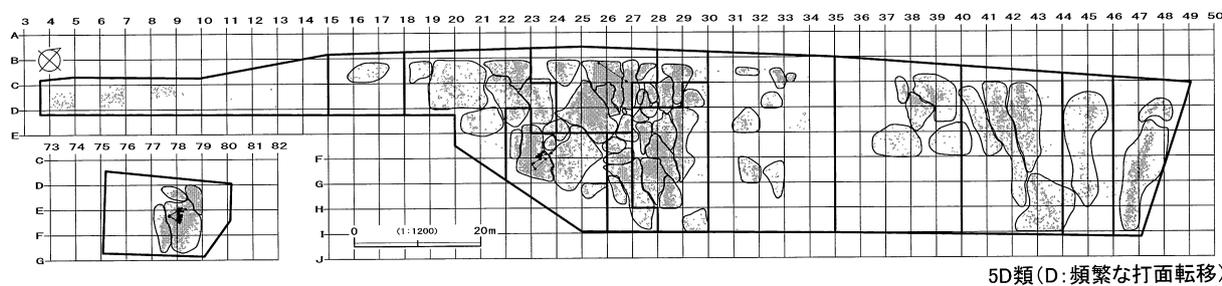
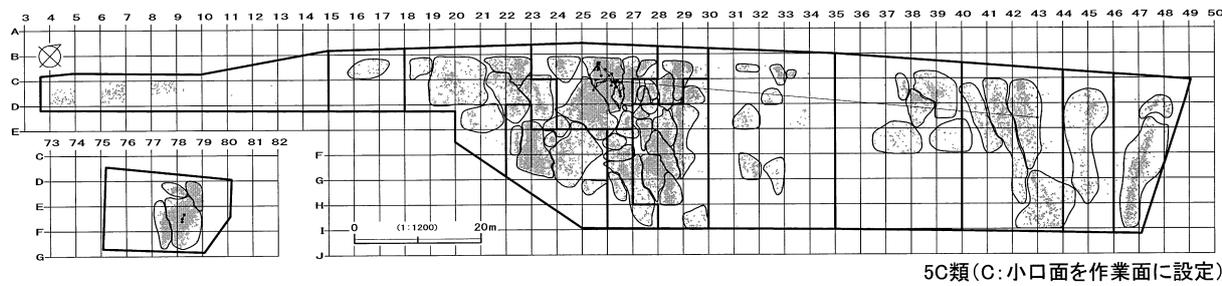
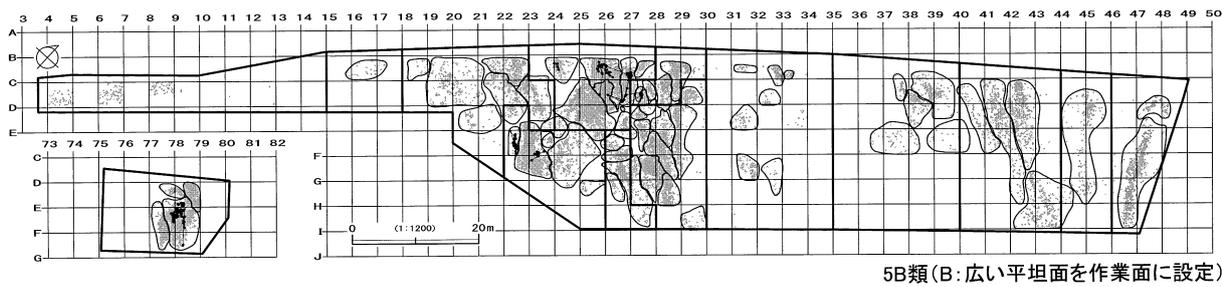
5 類 (剥片生産)



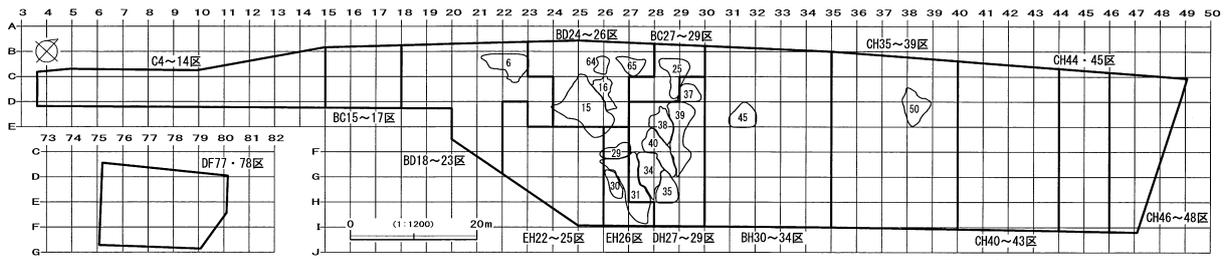
5A 類 (A: 作業面と打面を固定し、一定方向に剥離)

図Ⅲ-18 白滝 I 群以外 母岩別接合資料分布図 剥離技術 (7)

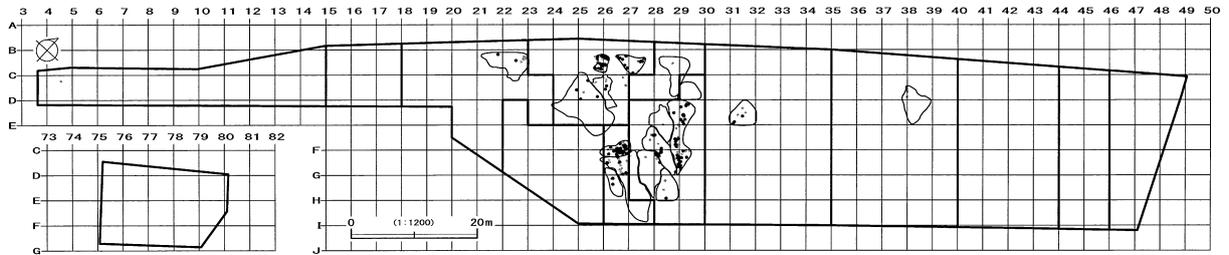
2 遺物



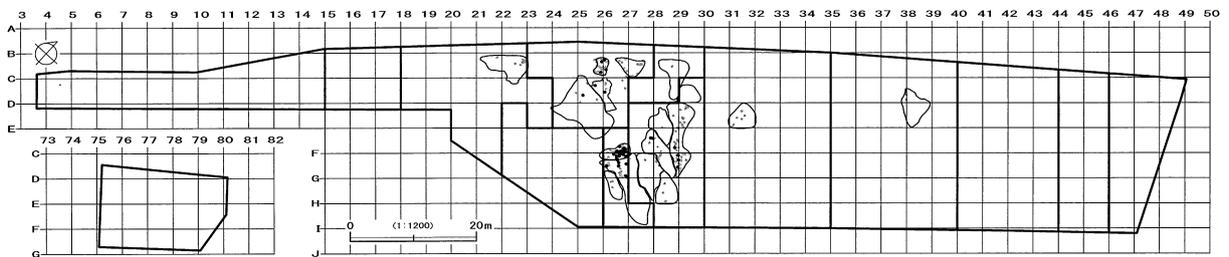
図Ⅲ-19 白滝I群以外 母岩別接合資料分布図 剥離技術(8)・原石形状



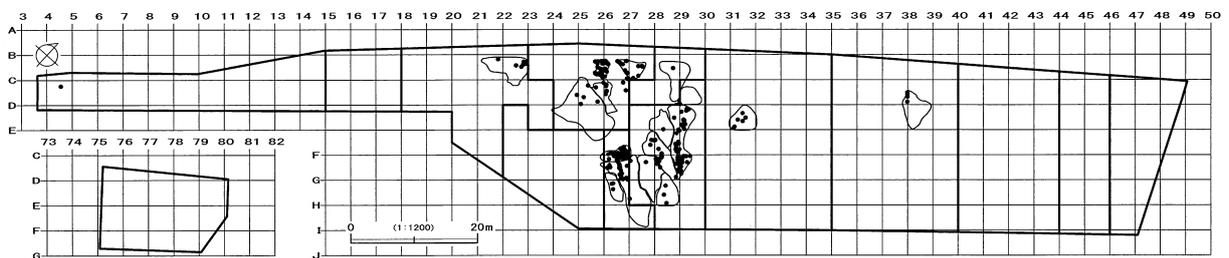
石器ブロック位置図(白滝 I 群)



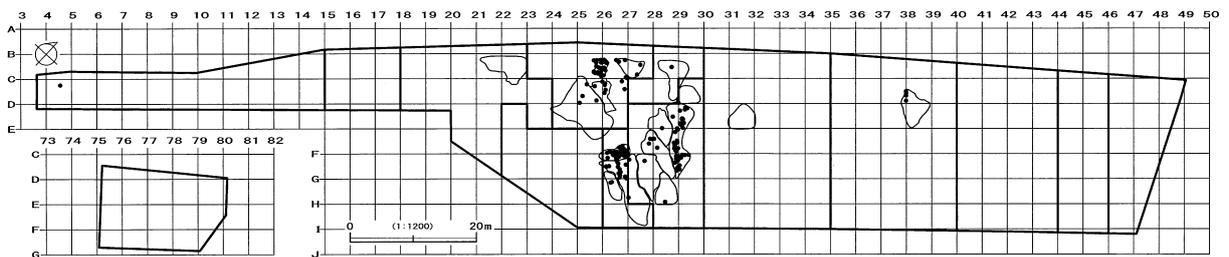
自然面付き石器



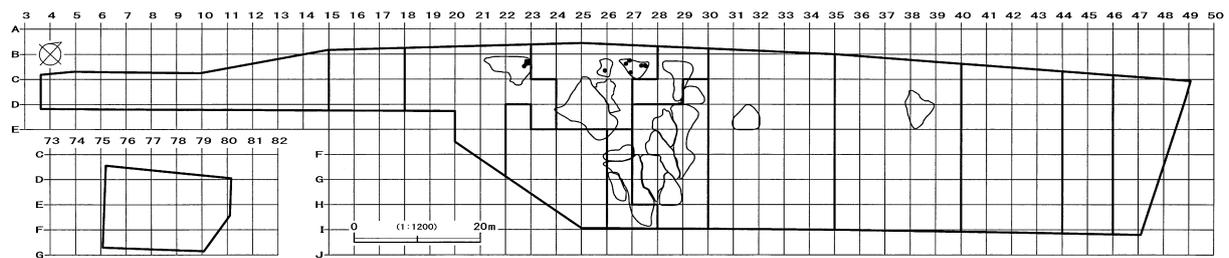
被熱石器



黒曜石1~5



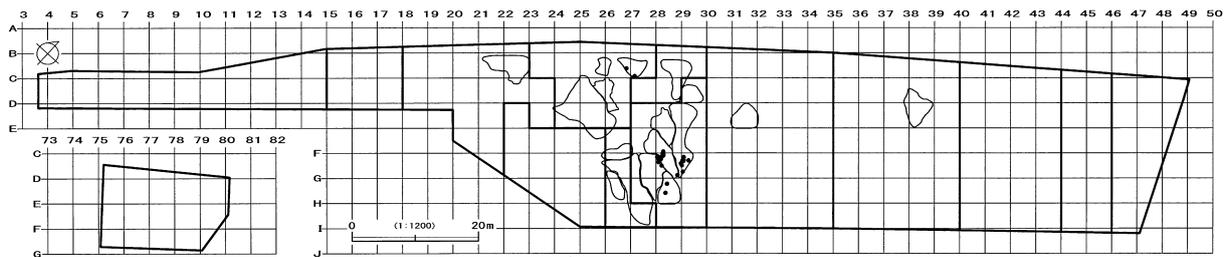
黒曜石1



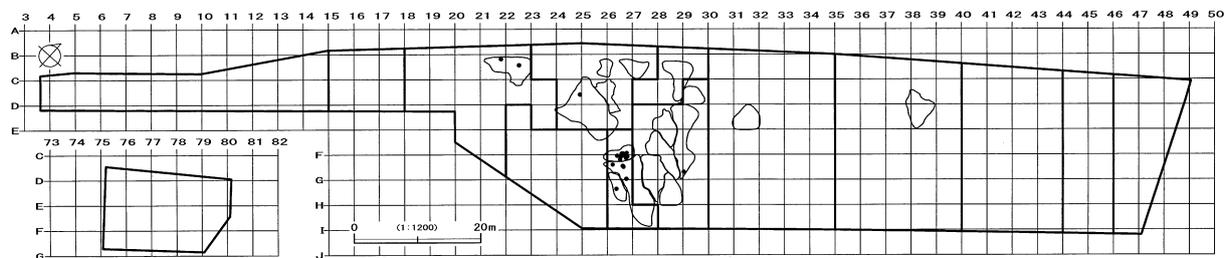
黒曜石2

図Ⅲ-20 白滝 I 群 属性別遺物分布図 自然面・被熱・石材(1)

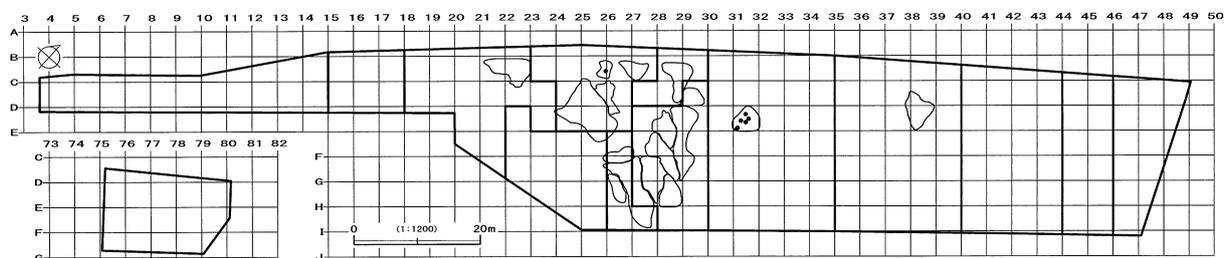
2 遺物



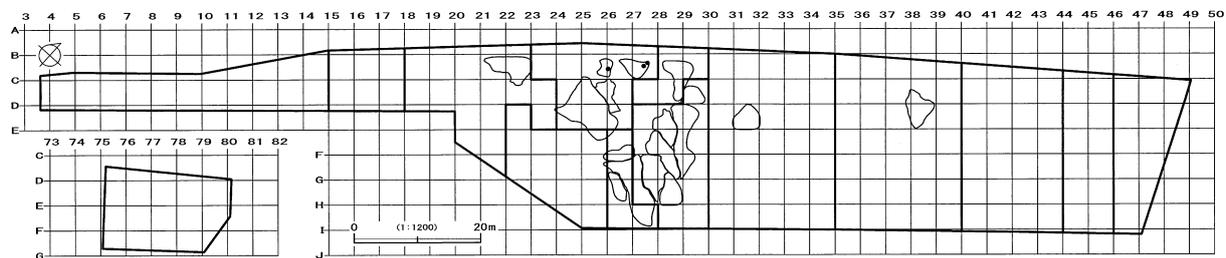
黒曜石3



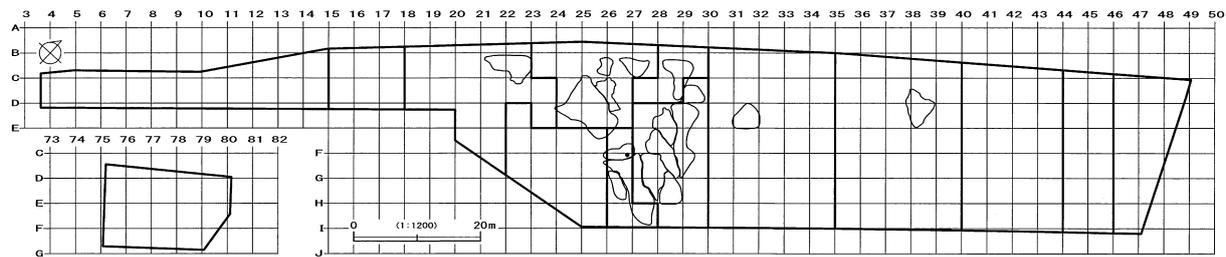
黒曜石4



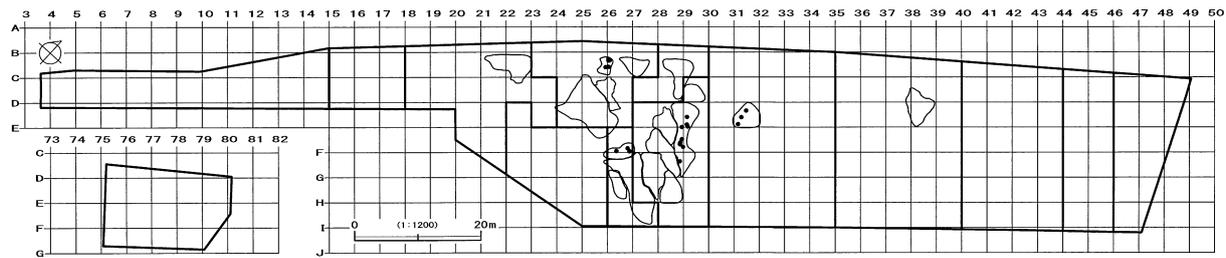
黒曜石5



黒曜石以外

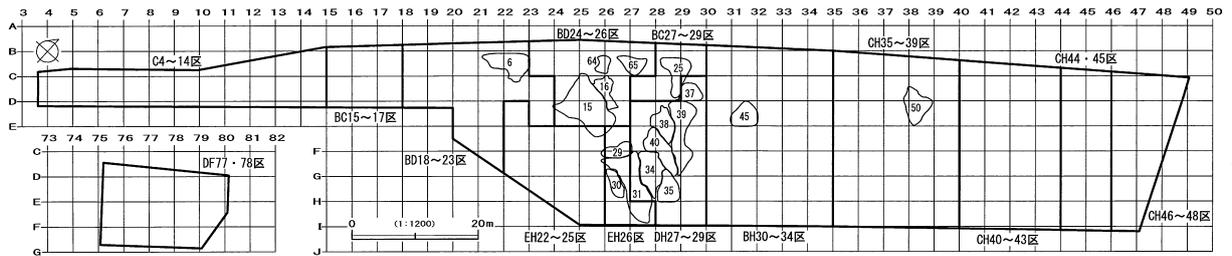


錐形石器

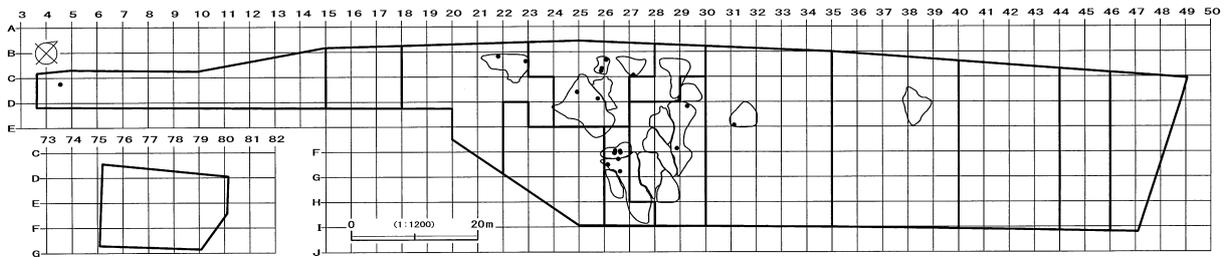


二次加工ある剥片

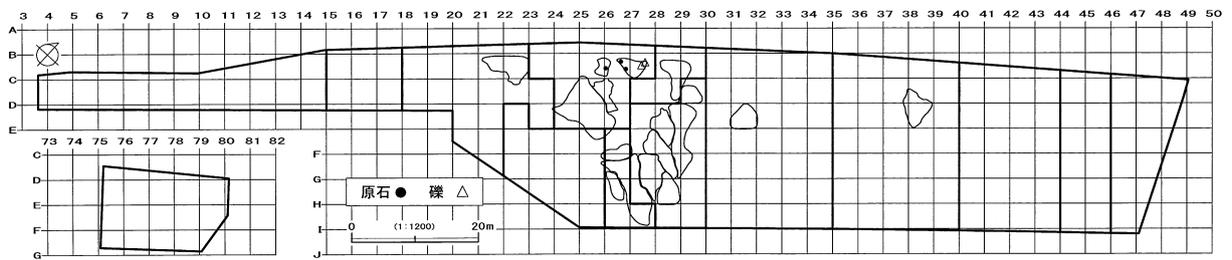
図Ⅲ-21 白滝I群 属性別遺物分布図 石材(2)・器種(1)



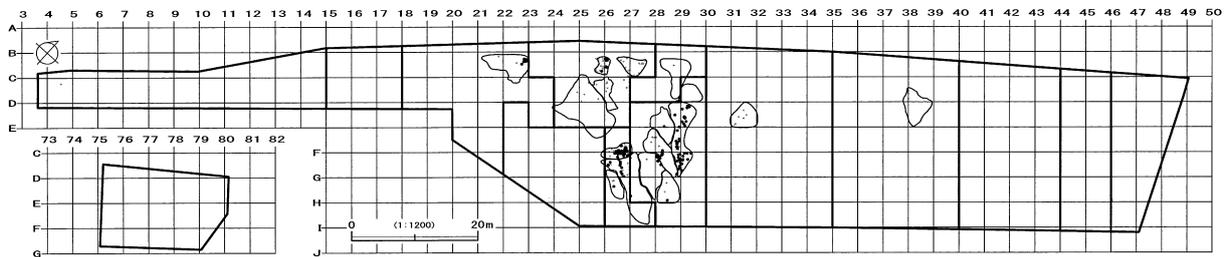
石器ブロック位置図(白滝 I 群)



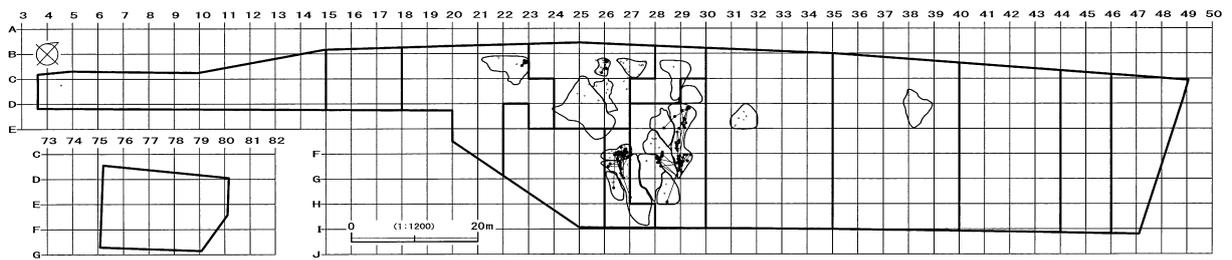
石核



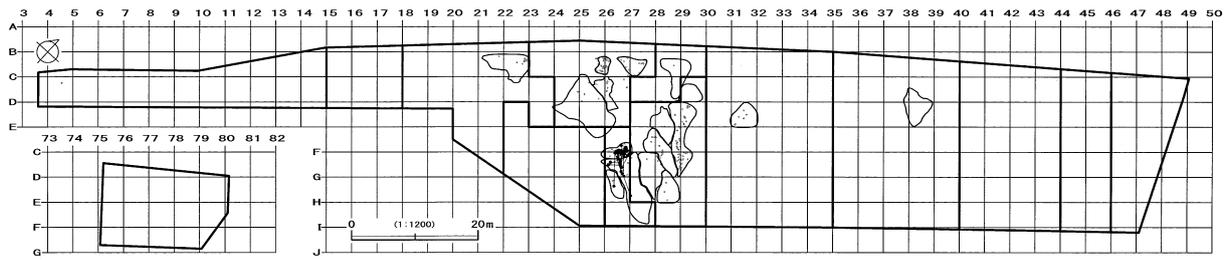
原石・礫



母岩別資料中の剥離面接合資料



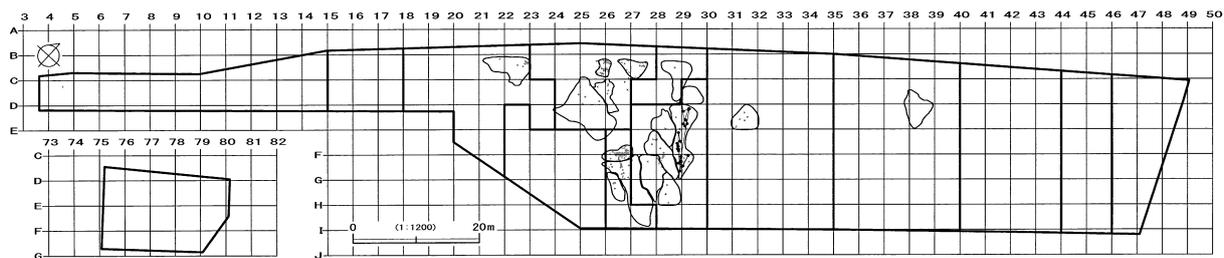
5類(剥片生産)



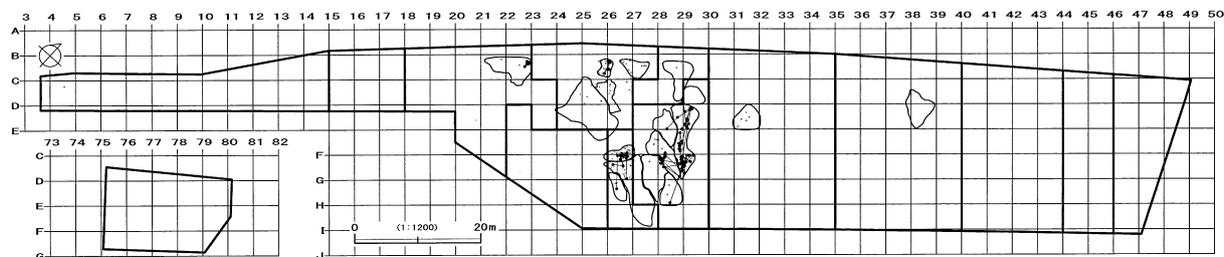
5B類(B: 広い平坦面を作業面に設定)

図Ⅲ-22 白滝 I 群 属性別遺物分布図 器種(2)、母岩別接合資料分布図 剥離技術(1)

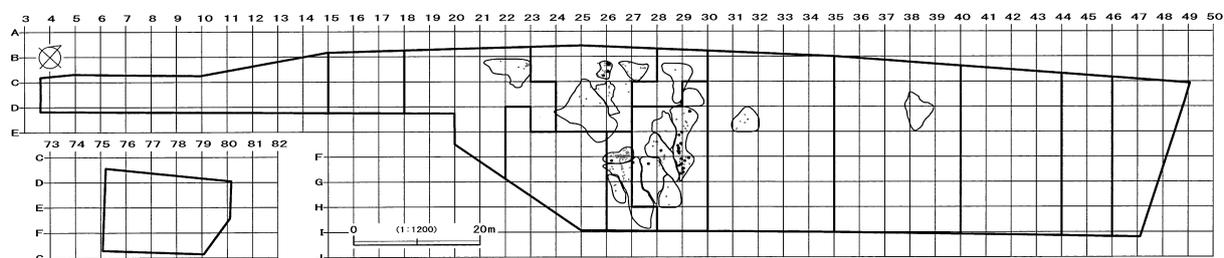
2 遺物



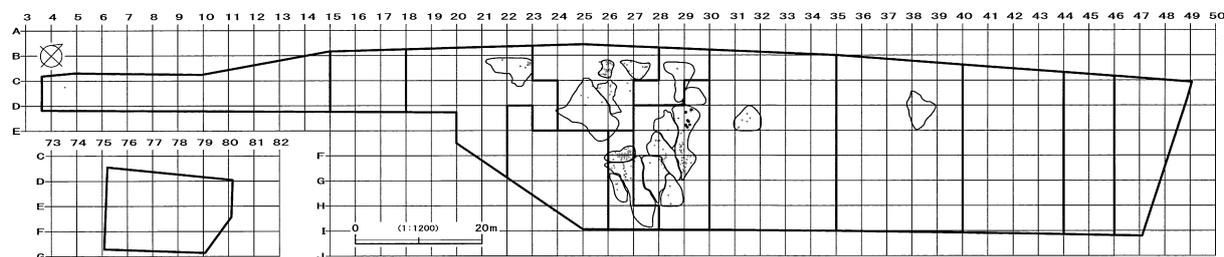
5C類(C:小口面を作業面に設定)



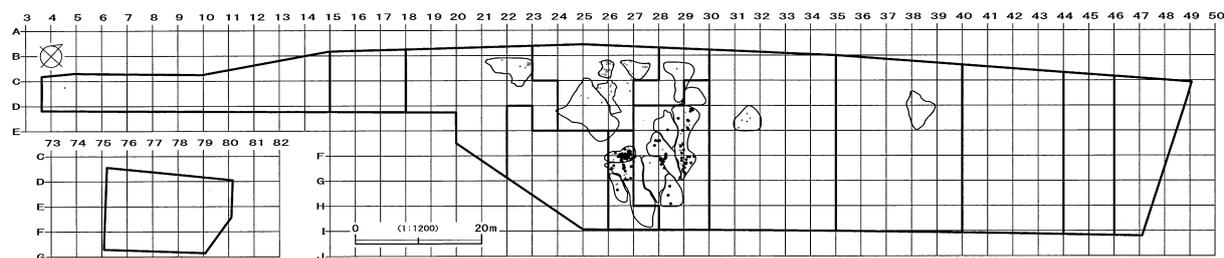
5D類(D:頻繁な打面転移)



角礫

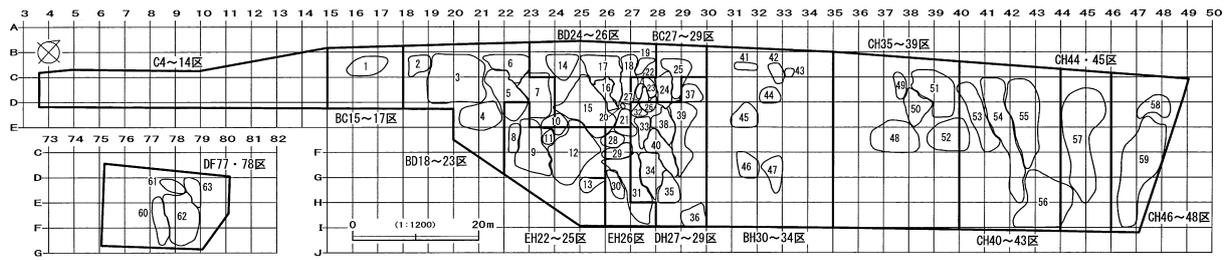


歪角礫

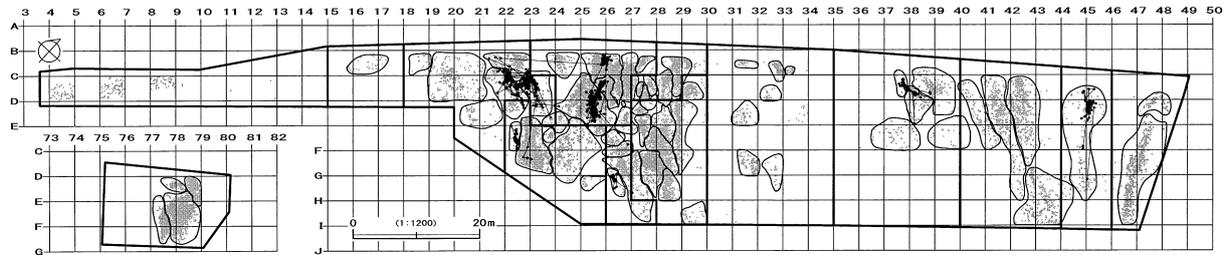


転礫

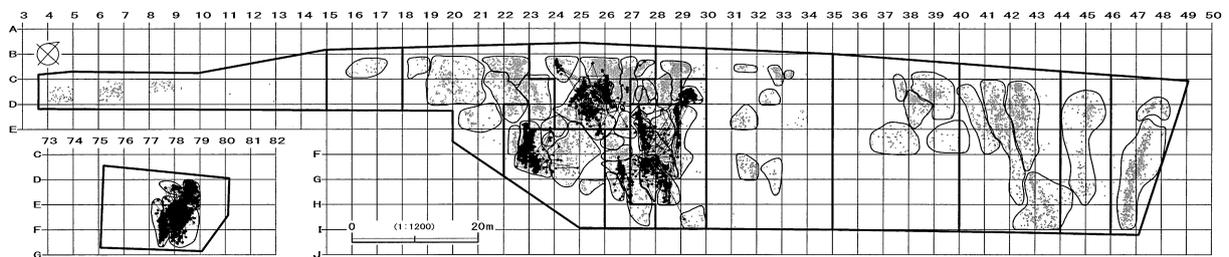
図Ⅲ-23 白滝Ⅰ群 母岩別接合資料分布図 剥離技術(2)・原石形状



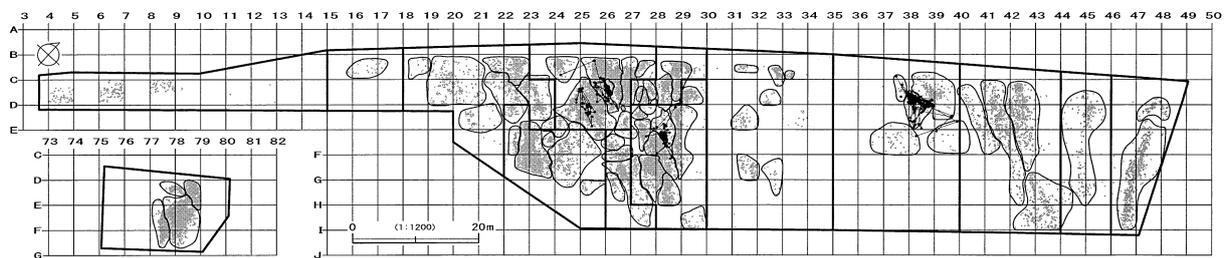
石器ブロック位置図



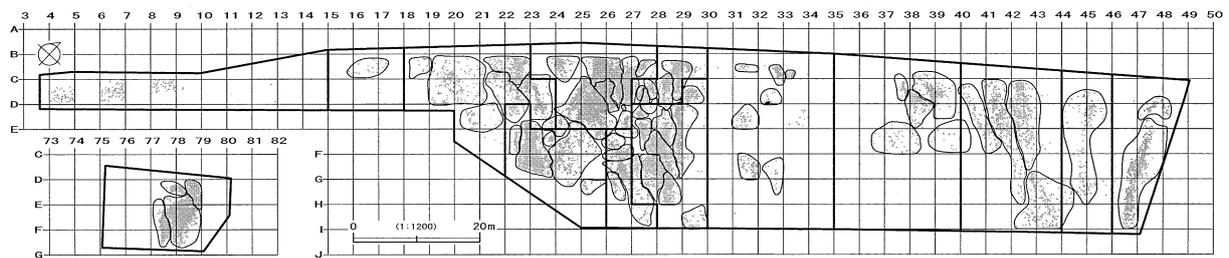
小型舟底形石器石器群



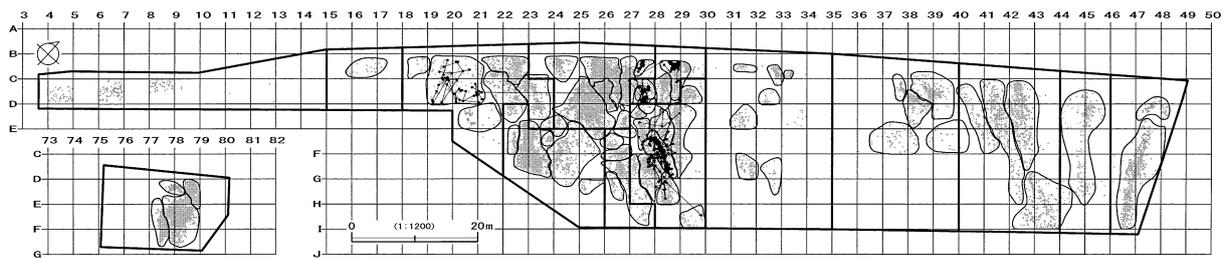
有舌尖頭器石器群



有舌尖頭器石器群の可能性のあるもの



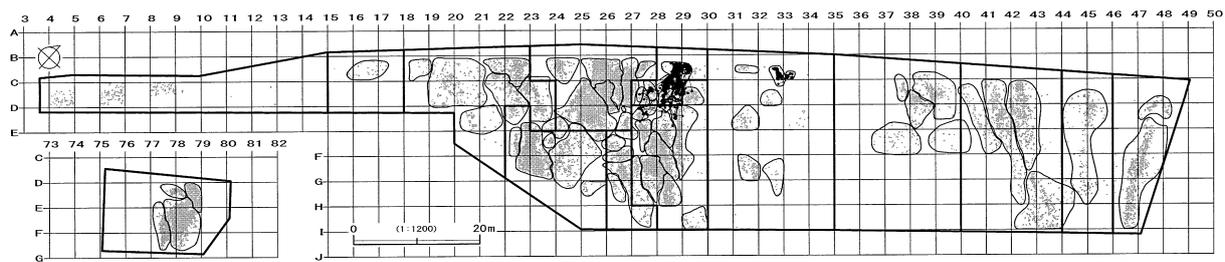
峠下型細石刃核石器群



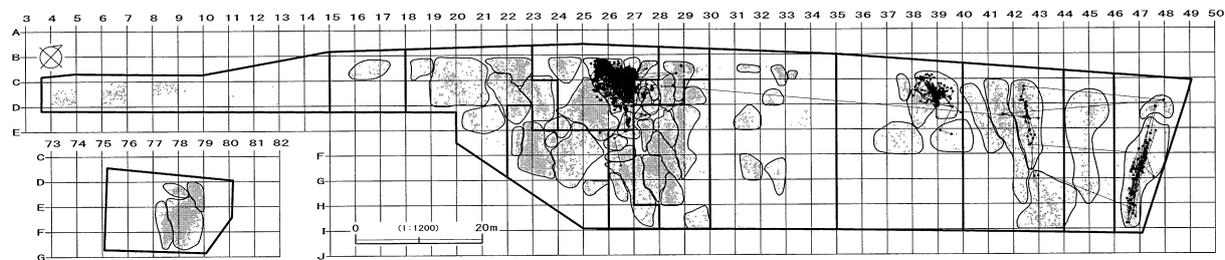
服部台型石刃石器群

図Ⅲ-24 母岩別接合資料分布図 石器群(1)

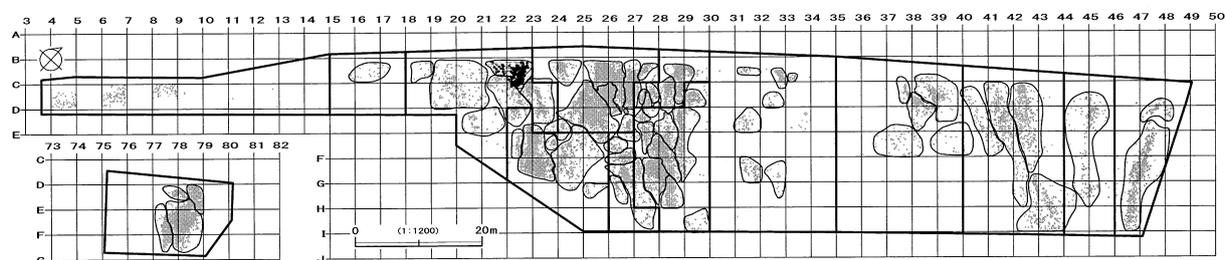
2 遺物



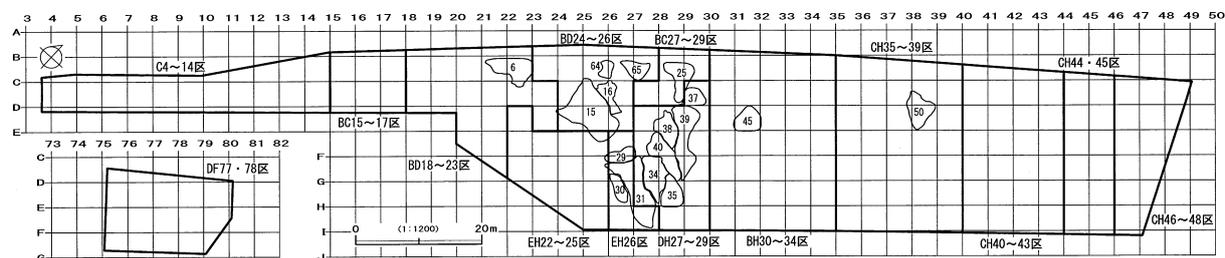
服部台もしくは広郷型の石器群



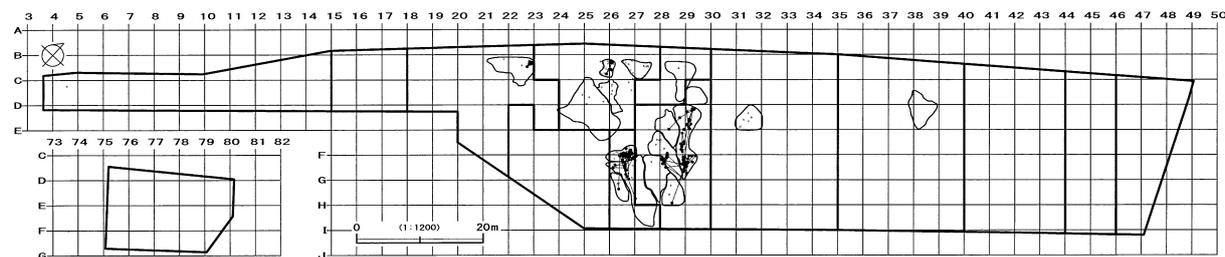
広郷型細石刃核石器群



蘭越・美利河型細石刃核石器群



石器ブロック位置図(白滝I群)



白滝I群

図Ⅲ-25 母岩別接合資料分布図 石器群(2)

が25点(7.9%)の順で認められる。黒曜石1が突出して多く、Sb-29・31・39・64の広範囲で出土している。また、黒曜石2～5は石質ごとに小規模なまとまりを形成し、それぞれ異なる範囲に分布している。

## B. 黒曜石以外の石器

黒曜石以外の石材は4点みられ、安山岩・泥岩・めのうがある。石質別の器種はめのうが二次加工ある剥片、安山岩が剥片、泥岩が礫となっている。分布は全てBD24-26区のSb-64・65に認められる。

### 器種別の分布 (図Ⅲ-21・22、表Ⅲ-22)

#### 錐形石器 (図Ⅲ-21)

錐形石器は1点のみで、EH26区Sb-29に分布している。周囲には母岩別資料163・201などがまとまって出土している。

#### 二次加工ある剥片 (図Ⅲ-21)

二次加工ある剥片は23点が出土し、EH26区Sb-29、DH27-29区Sb-39、BH30-34区Sb-45、BD24-26区Sb-64にそれぞれ小規模なまとまりをもって認められる。母岩別資料が分布する範囲であり、二次加工ある剥片自体も半数以上が母岩別資料に接合している。

#### 石核 (図Ⅲ-22)

石核は23点が出土している。母岩別接合資料の主要な各分布範囲に散発的に出土し、EH26区Sb-29・31では小規模なまとまりが認められる。剥片生産作業後の残核を遺棄したものと考えられる。

#### 原石・礫 (図Ⅲ-22)

原石・礫はBD24-26区Sb-64・65のCb-10およびCb-17(26,870±140yrBP)の周辺にまとまって出土している。

### 剥離技術別の分布 (図Ⅲ-22・23、表Ⅲ-26・27)

#### 母岩別剥離面接合資料 (図Ⅲ-22)

白滝I群の母岩別資料は全て5類(剥片生産)に該当し、13個体・294点を確認した。この内剥離面接合資料が21個体・244点含まれている。分布はBD18-23区のSb-6、BD24-26区のSb-64、EH26区のSb-29・31、DH27-29区のSb-34・39・40に主に認められる。

#### 原石形状別の分布 (図Ⅲ-23、表Ⅲ-29)

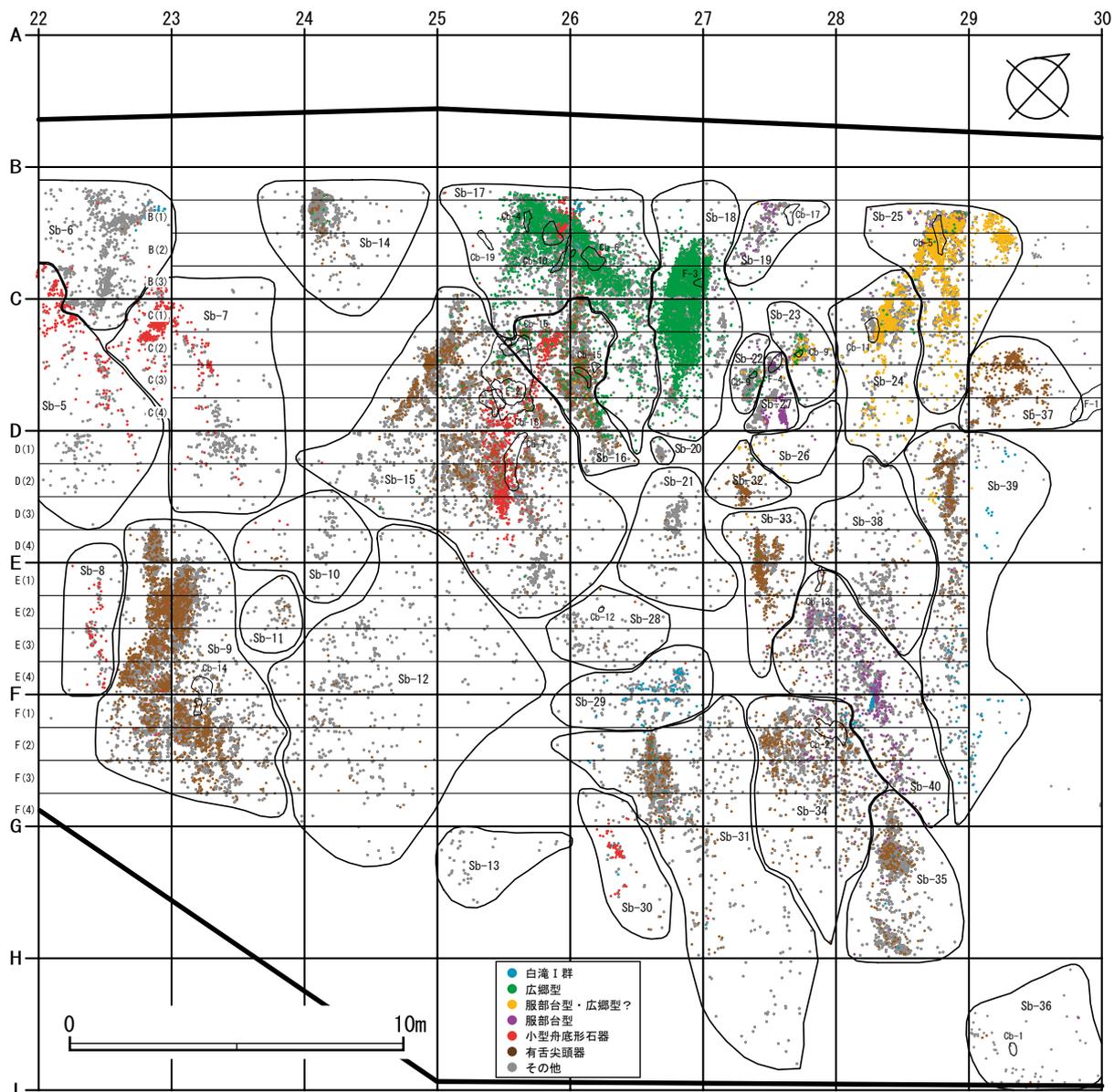
白滝I群の母岩別資料で原石形状が判別できたものは11個体あり、角礫が3個体(27.3%)、亜角礫が1個体(9.0%)、転礫が7個体(63.6%)を占める。角礫は広範囲に分布し、BD24-26区Sb-64、EH26区Sb-29・31、DH27-29区Sb-39・40に認められる。対して亜角礫はDH27-29区Sb-39のみに、転礫は南東部のEH26区とDH27-29区にまとまって認められる。

## ③ 平面垂直分布からみる遺構と遺物

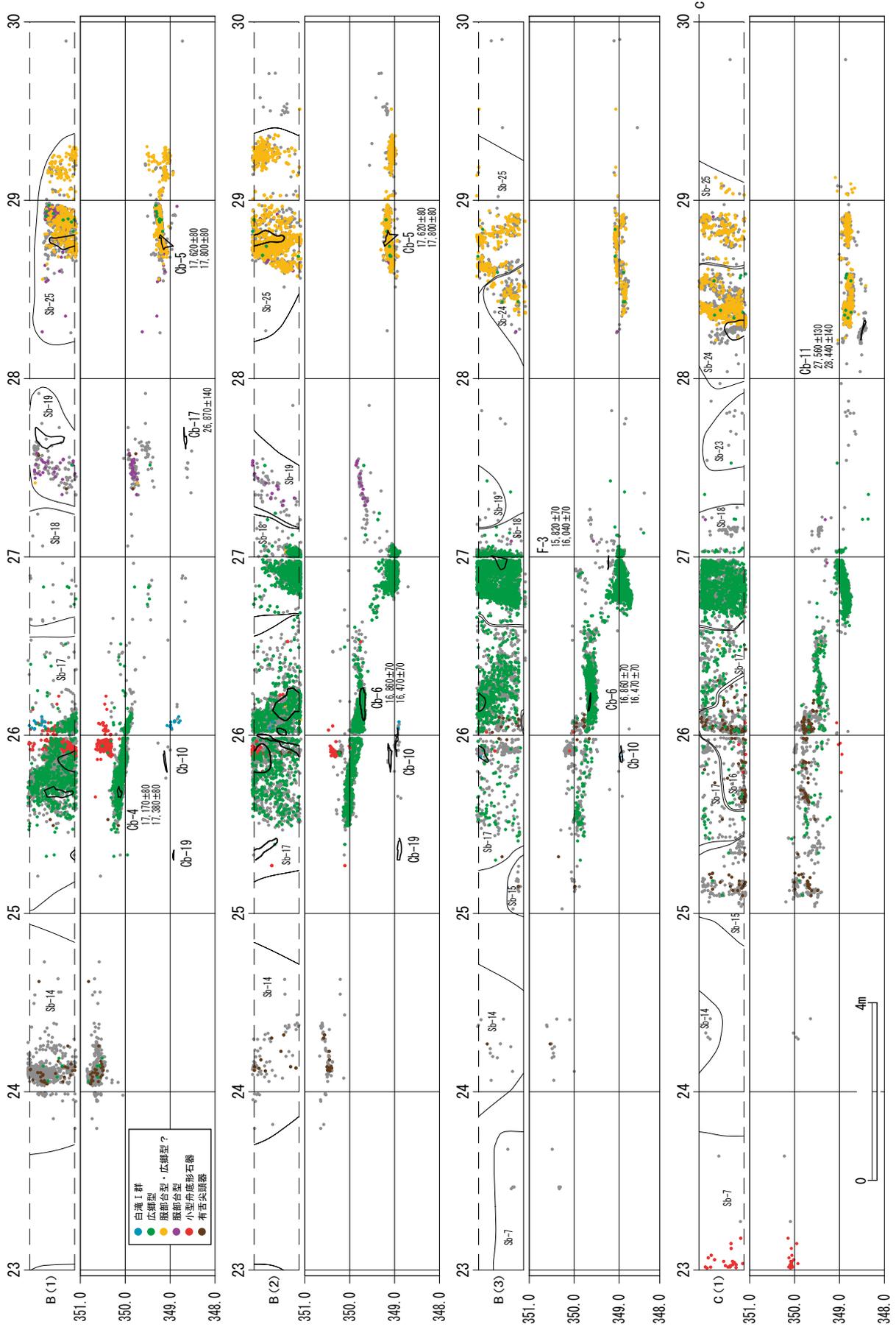
### 1m単位で連続的に区切った垂直分布 (図Ⅲ-26～43)

旧白滝3遺跡ではBC25-27区にかけて包含層が厚く2m程堆積しており、一部の遺物分布で重層的な出土状況が確認されている。整理作業の結果、それらの重層的なまとまりが石器群ごとに分離できる部分を確認した。それらの出土状況を客観的に示すため、B～Fラインと23～28ラインの範囲でそれぞれグリッドラインを1mずつ連続的に平行移動させた断面図を提示した(図Ⅲ-27～31・33～43)。断面図には母岩別資料から判明した石器群の内容と遺構の位置・年代測定値を示している。各断面図を作成した位置と範囲は図Ⅲ-26・32の平面図を参照願いたい。

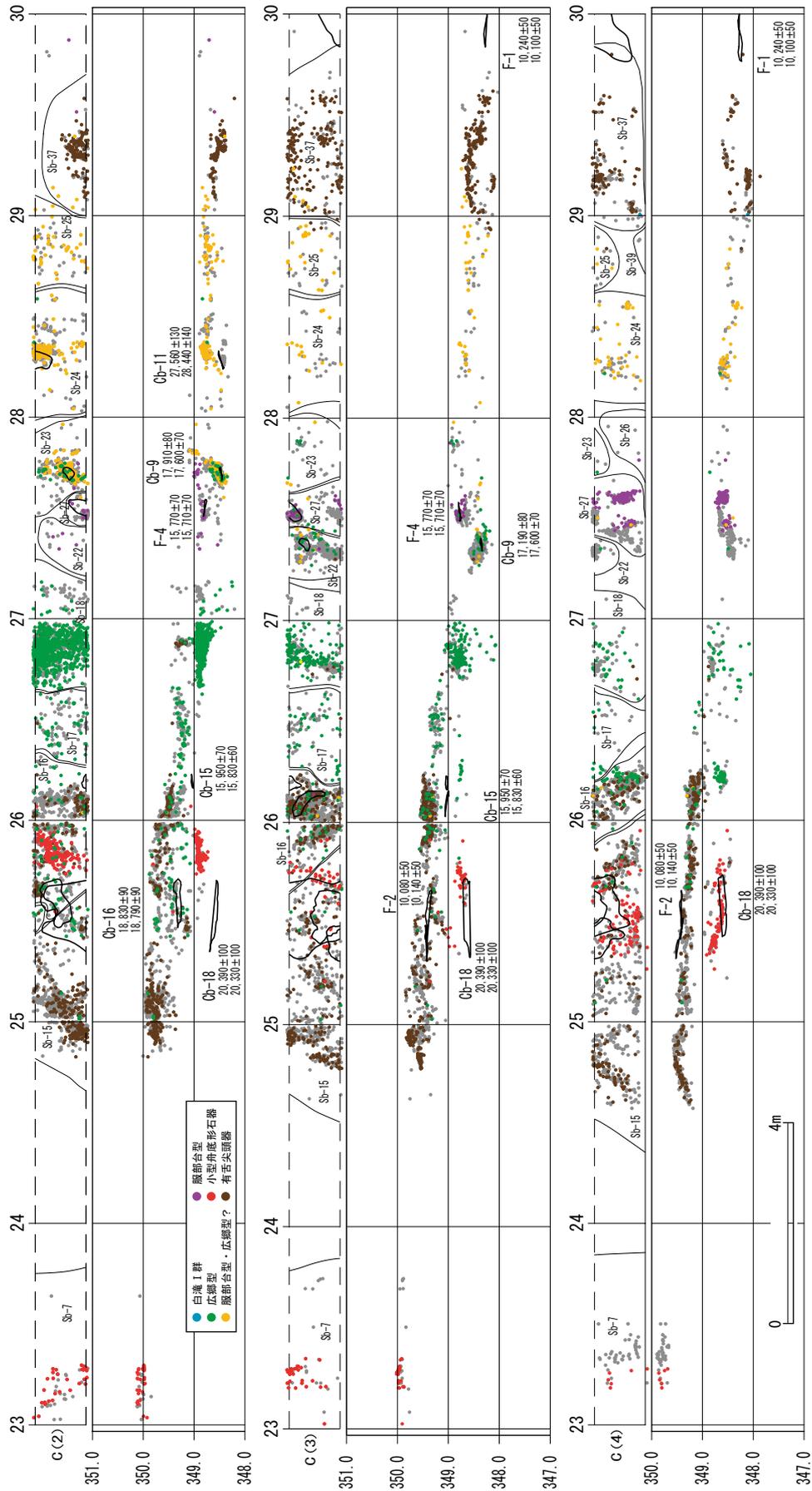
以下基本的にアルファベットラインの垂直分布(図Ⅲ-27～31)をもとに記述し、必要に応じて



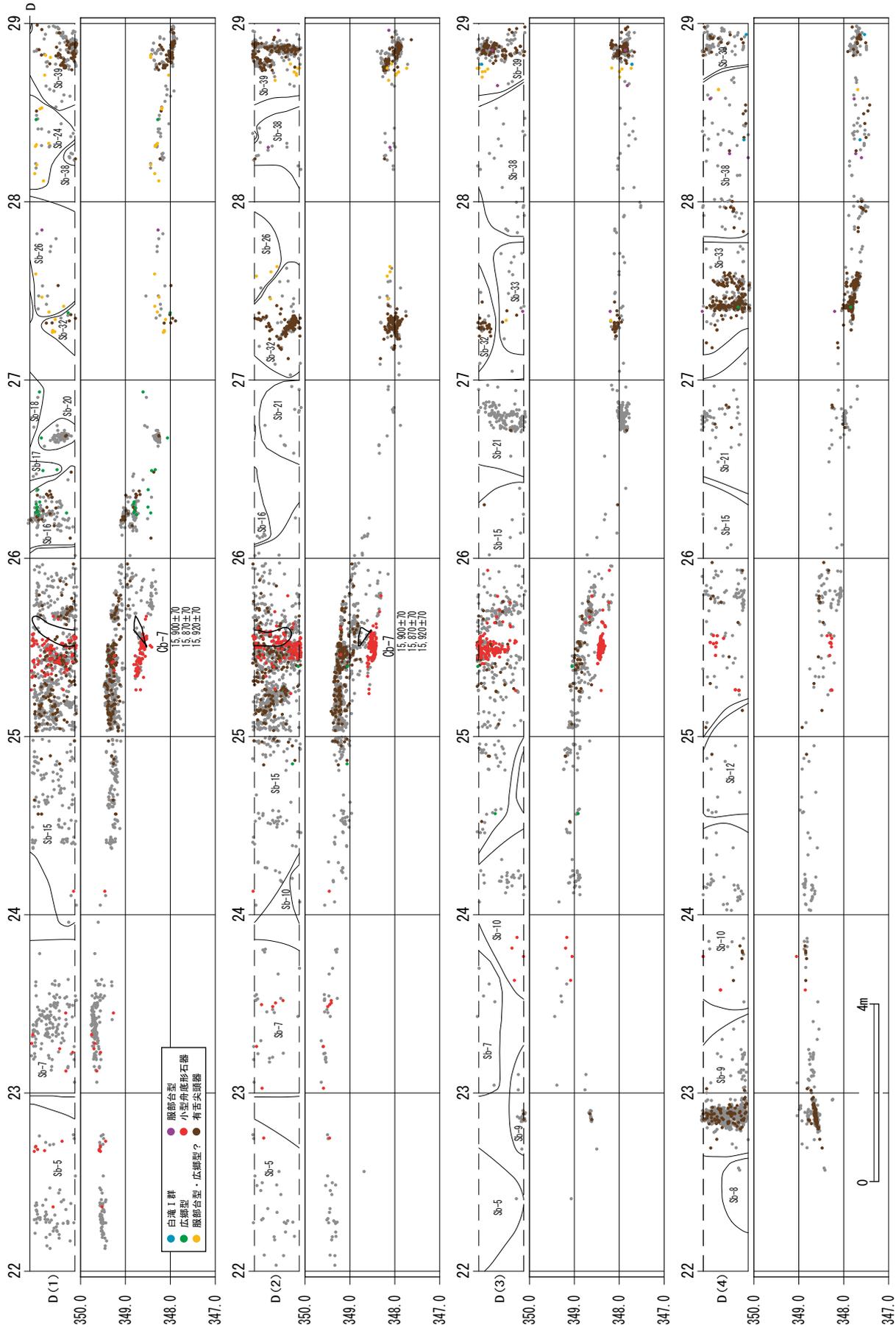
図Ⅲ-26 アルファベットライン立面図の位置対応図(南西-北東方向)



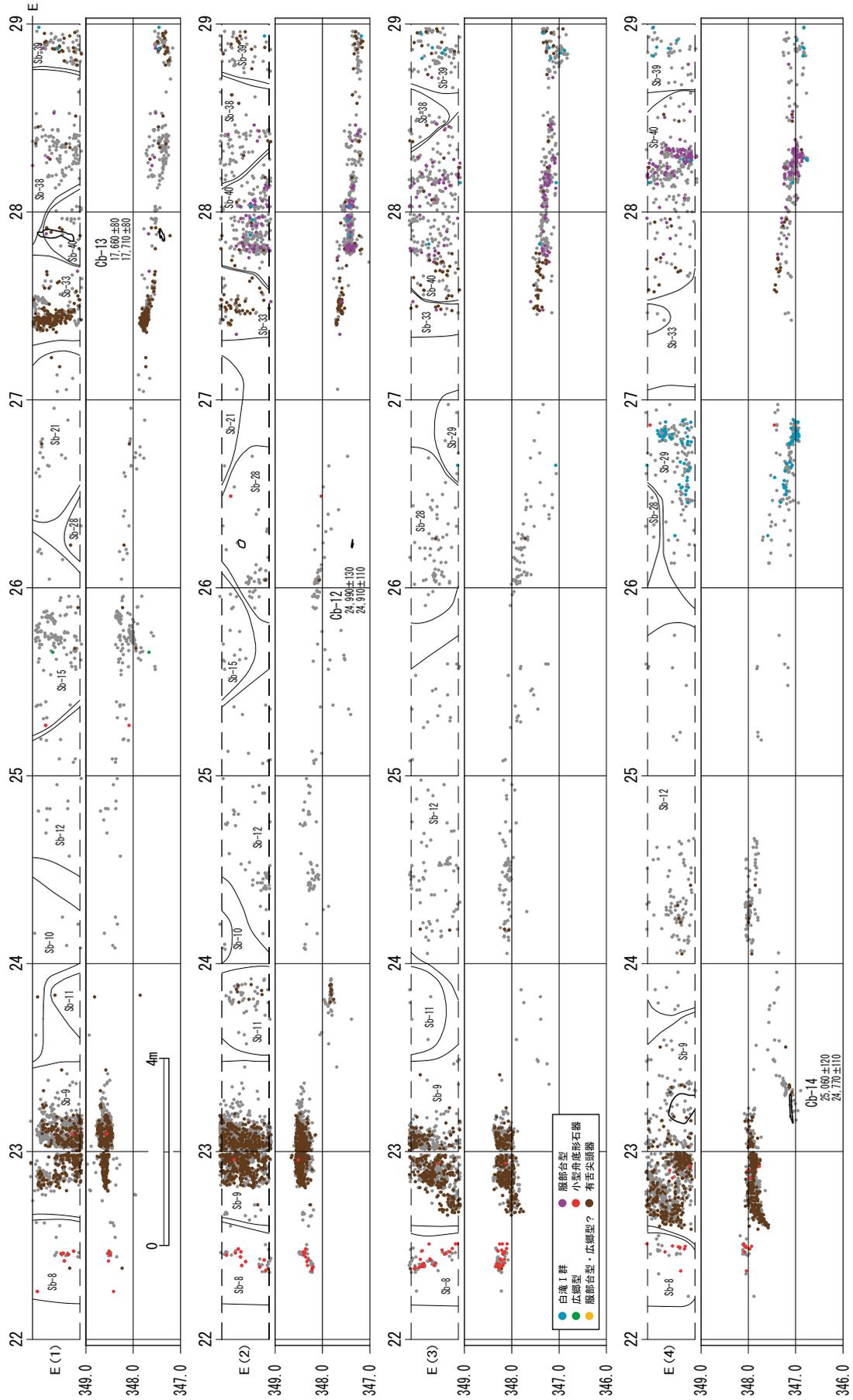
図III-27 アルファバットラインの立面図(1)



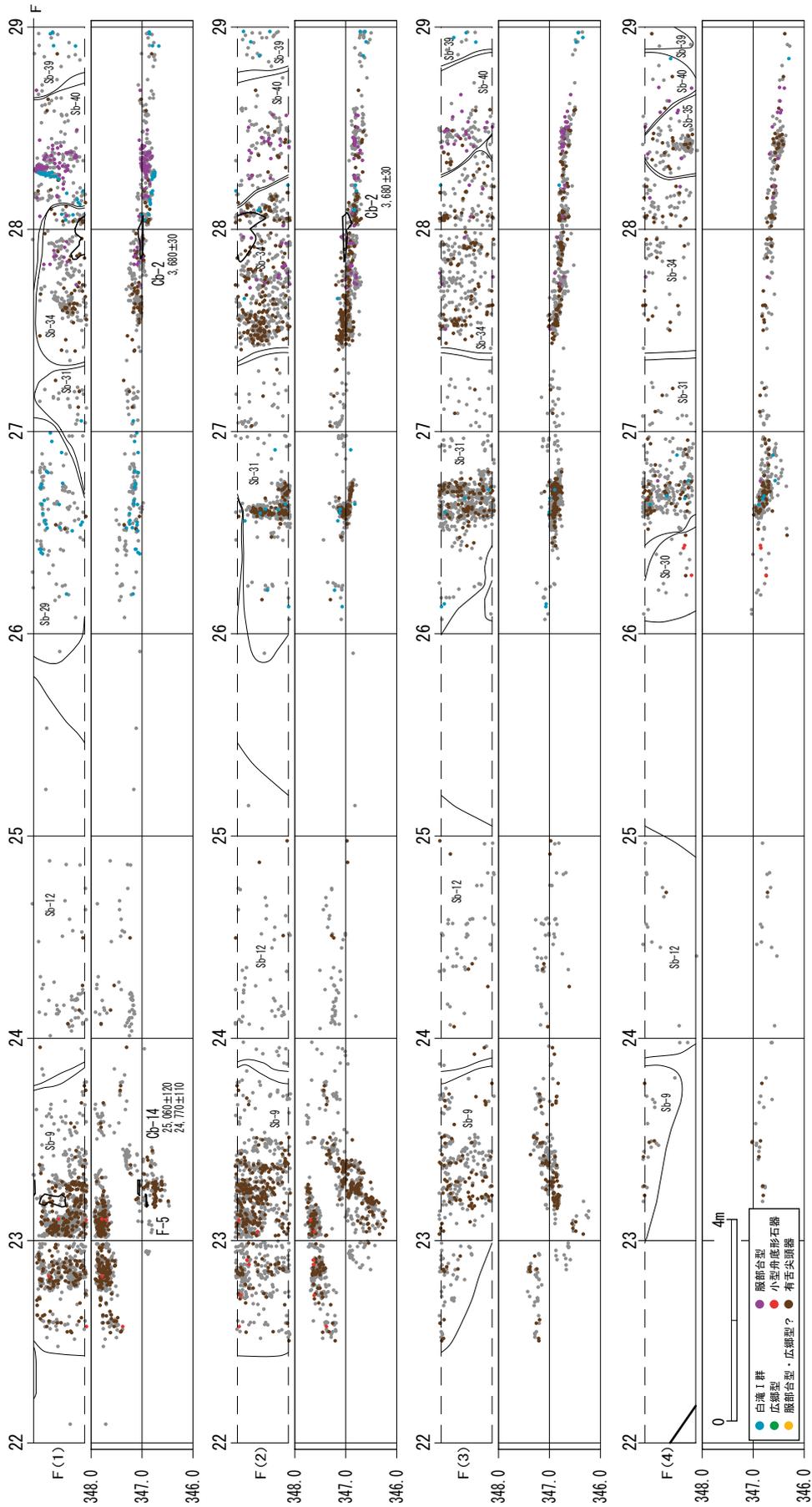
図Ⅲ-28 アルファベットラインの立面図(2)



図III-29 アルファベットラインの立面図(3)



図III-30 アルファベットラインの立面図(4)



図III-31 アルファベットラインの立面図(5)

補完的に数字ラインの垂直分布(図Ⅲ-33~43)と任意に設定した垂直分布(図Ⅲ-44)に言及する。

アルファベットラインの垂直分布は、台地の傾斜に対しておおよそ直交方向の設定となっている。アルファベットライン内でも傾斜が認められ、その方向は、27ラインに向かって両側から落ち込んでいくものである。落ち込みのような窪地状地形の存在が予想される。特にB(2)~C(3)ライン(図Ⅲ-27・28)の26区に1m近い階段状の落ち込みがあり、上下段ともに広郷型細石刃核石器群が分布している。この対岸はC(2)ライン(図Ⅲ-28)の27区にある広郷型細石刃核石器群と「服部台型石刃石器群もしくは広郷型細石刃核石器群」が大きく傾斜して分布する部分に対応するものと思われる。

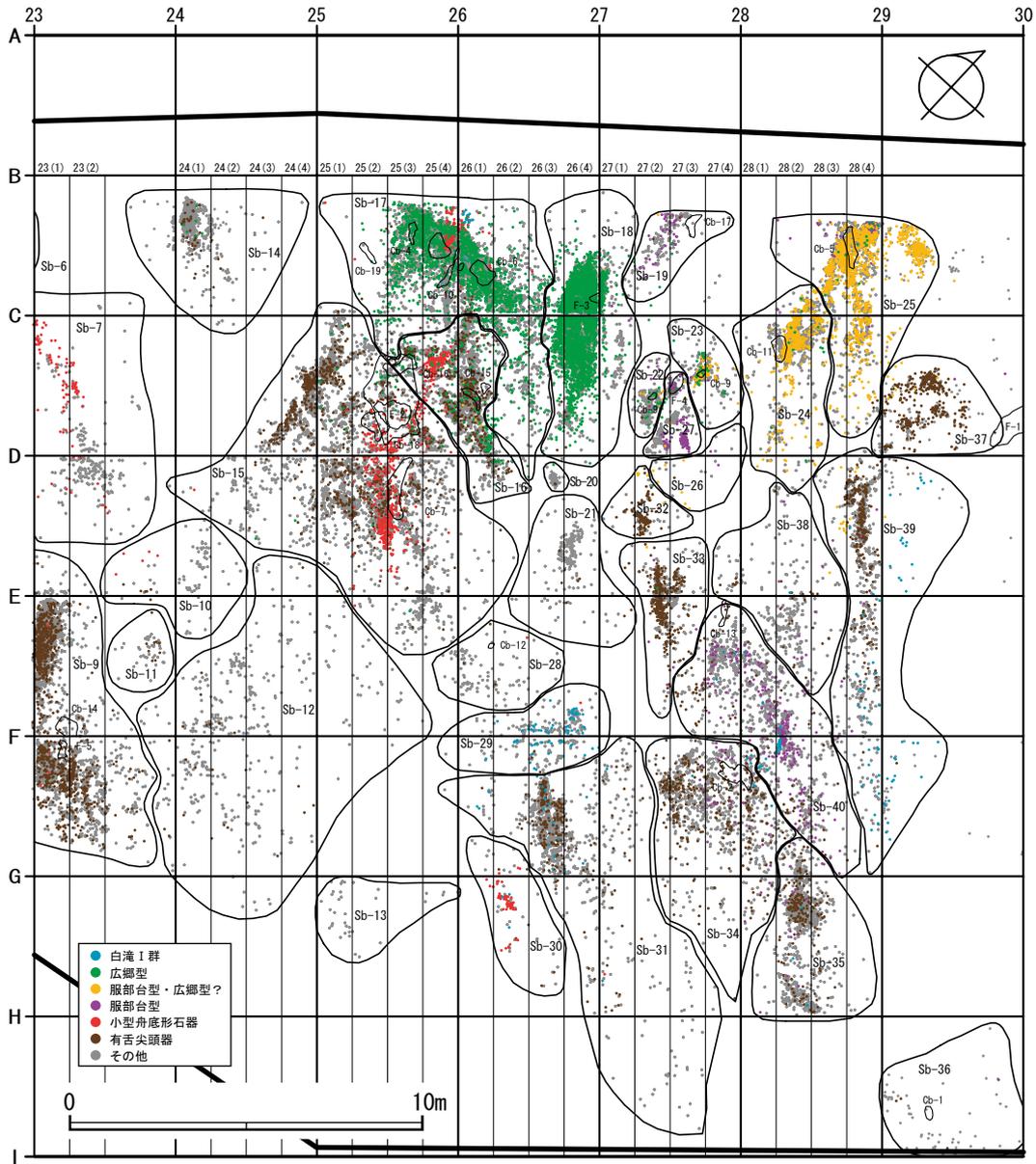
Bラインが最も深い堆積状況で、アルファベットが進むにつれ高低差が減少していく。同様に数字ラインでも26区をピークとして高低差が認められる。25ラインより小さな数字側は急激に高低差が減少し、大きな数字側は漸移的に減少している。アルファベットラインで確認できる遺物の高低差は、①最も北西側のB(1)ラインの26区付近(図Ⅲ-27)で約2m、②C~D(2)ライン(図Ⅲ-28・29)で約1m、③D(3)~E(2)ライン(図Ⅲ-29・30)で60cm前後、④E(3)ライン以降(図Ⅲ-30・31)は40cm前後となり、④の近辺は他の白滝遺跡群の出土と類似した石器群の混在する出土状況となる。しかし、④の中でも23区付近では再び1m近い遺物分布の高低差が確認される。これらの内①・②では一部に間層を挟んで石器群が分離できる状況で確認されたため、以下に詳述する。また④の1m近い高低差のある遺物分布域では接合関係のある有舌尖頭器石器群が上下差を持って出土している。

B(1)ラインの26区付近(図Ⅲ-27)では、上位に小型舟底形石器石器群、中位に広郷型細石刃核石器群、下位に白滝I群が分布している。数字ラインでは26(1)ライン(図Ⅲ-38)、任意断面の図Ⅲ-44ではC-Dで明瞭である。しかし任意断面図でも明らかのように、上・中位の石器群はC(2)ライン(図Ⅲ-28)で上下関係が逆転しており、地点を違えて広郷型細石刃核石器群の上下から小型舟底形石器石器群が位置することが判明した。しかも上下の小型舟底形石器石器群には接合関係が認められ、ほぼ同時期のまとまりとみなすことが可能である。石器群が残された後の複雑な堆積状況が予想される。遺構との関係は、中位石器群に約16,500~17,400yrBPのCb-4・6、下位石器群にCb-10が伴っている。なお約16,000yrBPのF-3は広郷型細石刃核石器群より上位で検出されており、Cb-4・6との年代的な矛盾はない状態である。

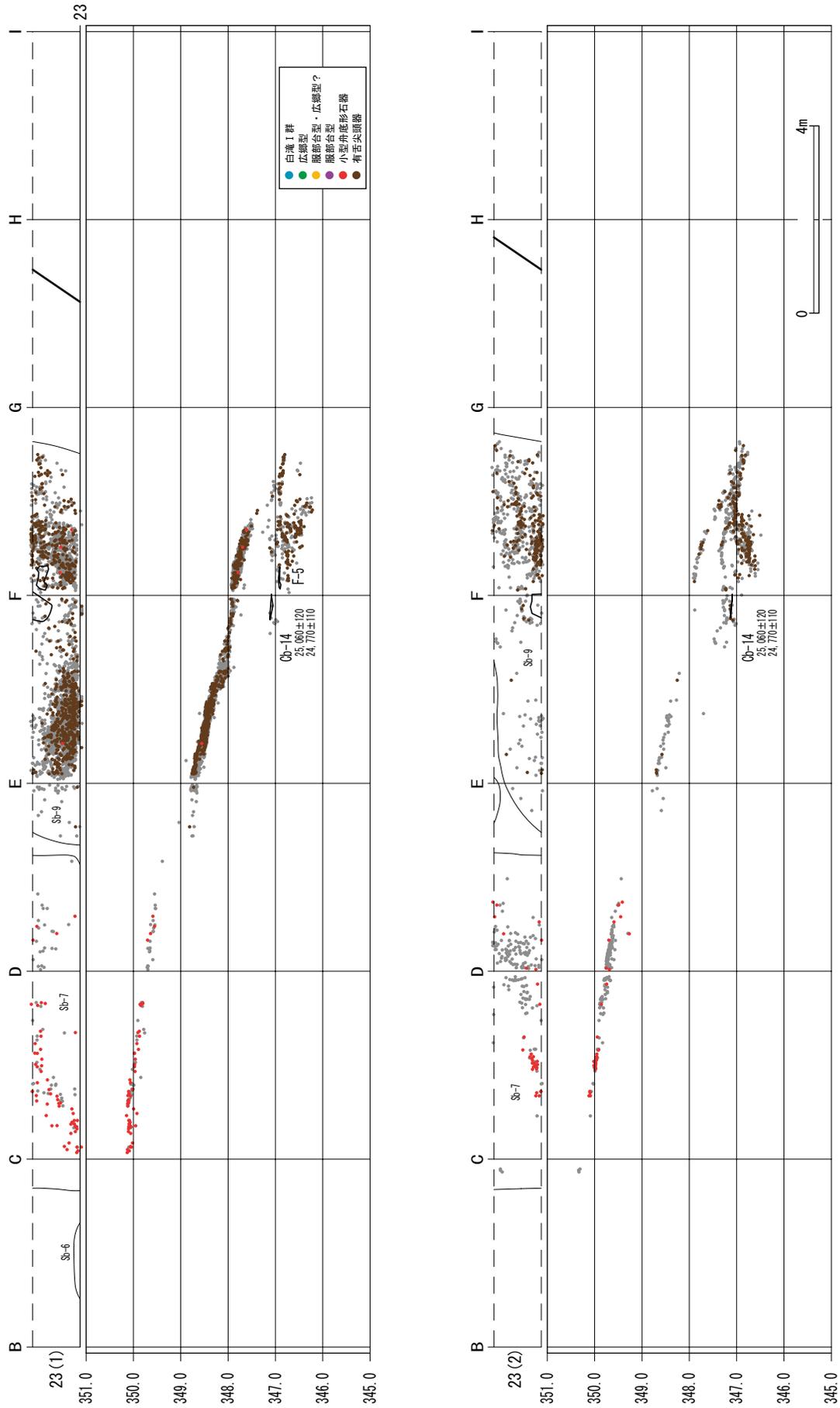
B(1)ラインの27区付近(図Ⅲ-27)では、上位に服部台型石刃石器群、下位に白滝I群の単体石器が分布している。数字ラインでは27(3)ラインで明瞭である(図Ⅲ-41)。遺構との関係は、下位石器群に約27,000yrBPのCb-17が伴っている。

B(1)ラインの29区付近(図Ⅲ-27)では、「服部台型石刃石器群もしくは広郷型細石刃核石器群」を主体として服部台型石刃石器群の混在するまとまりがみられた。約17,500yrBPのCb-5が伴っている。なお、これらの石器群の下位に約28,000yrBPのCb-11が検出されている。上記の様子は数字ラインの28(2)~(4)ライン(図Ⅲ-42・43)、任意断面の図Ⅲ-44ではE-Fで明瞭である。

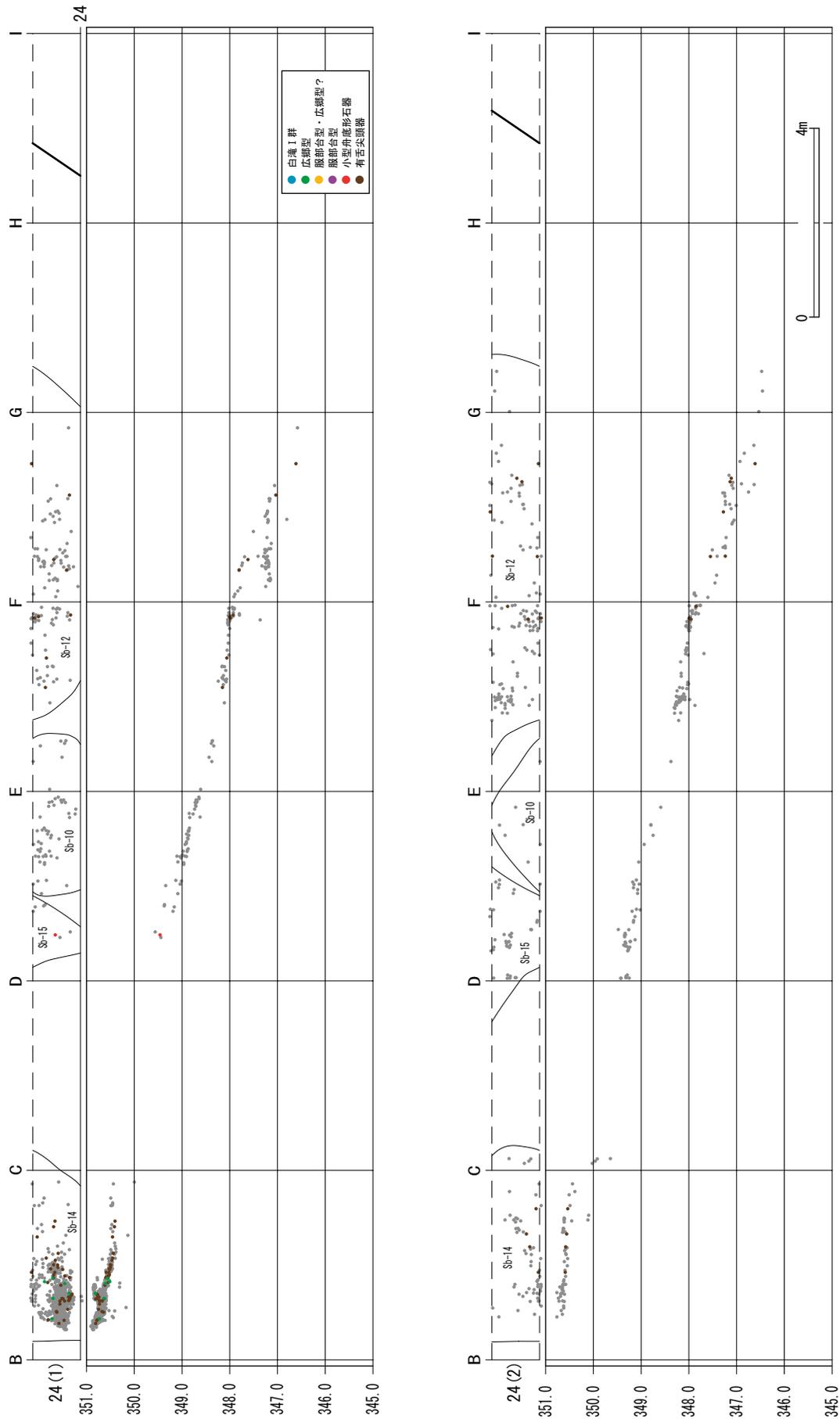
C(1)ラインの26区付近(図Ⅲ-27)では、上位に有舌尖頭器石器群、中位に広郷型細石刃核石器群、下位に小型舟底形石器石器群が分布している。上位石器群と中位石器群はやや混在した状況であるが、各石器群の関係は数字ラインの25(2)~26(1)ライン(図Ⅲ-36~38)、任意断面の図Ⅲ-44のA-Bでより明瞭に分離できる状況となっている。しかし任意断面図でも明らかのように、中・下位の石器群は地点を違えて上下関係が逆転している。さらに上位の有舌尖頭器石器群とBライン付近の小型舟底形石器石器群はほぼ同一レベルで傾斜して分布している。遺構との関係は、上位の有



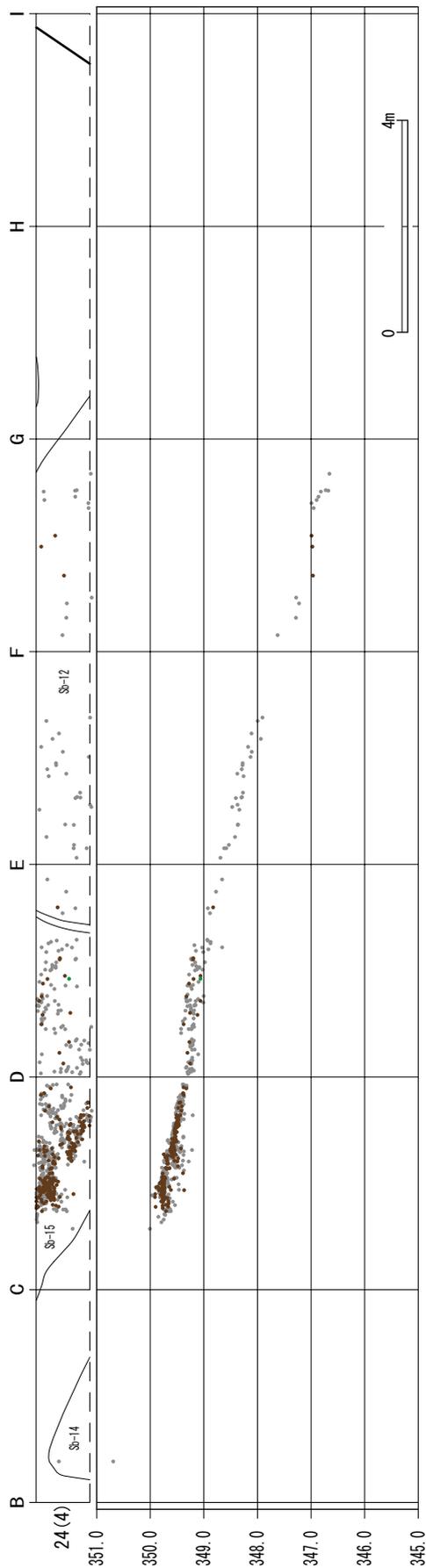
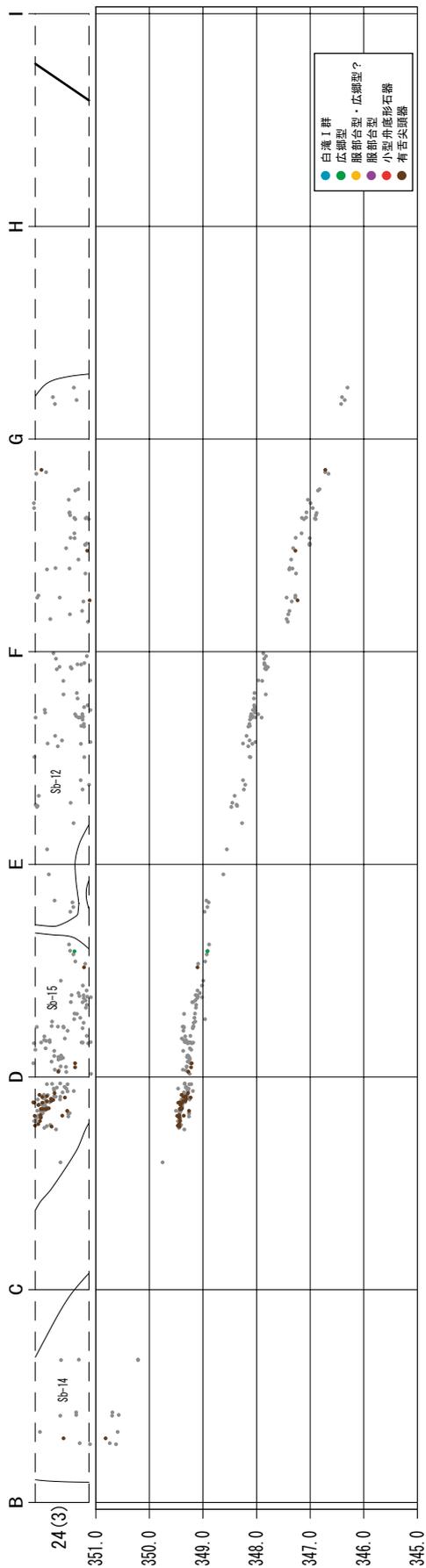
図Ⅲ-32 数字ライン立面図の位置対応図(北西-南東方向)



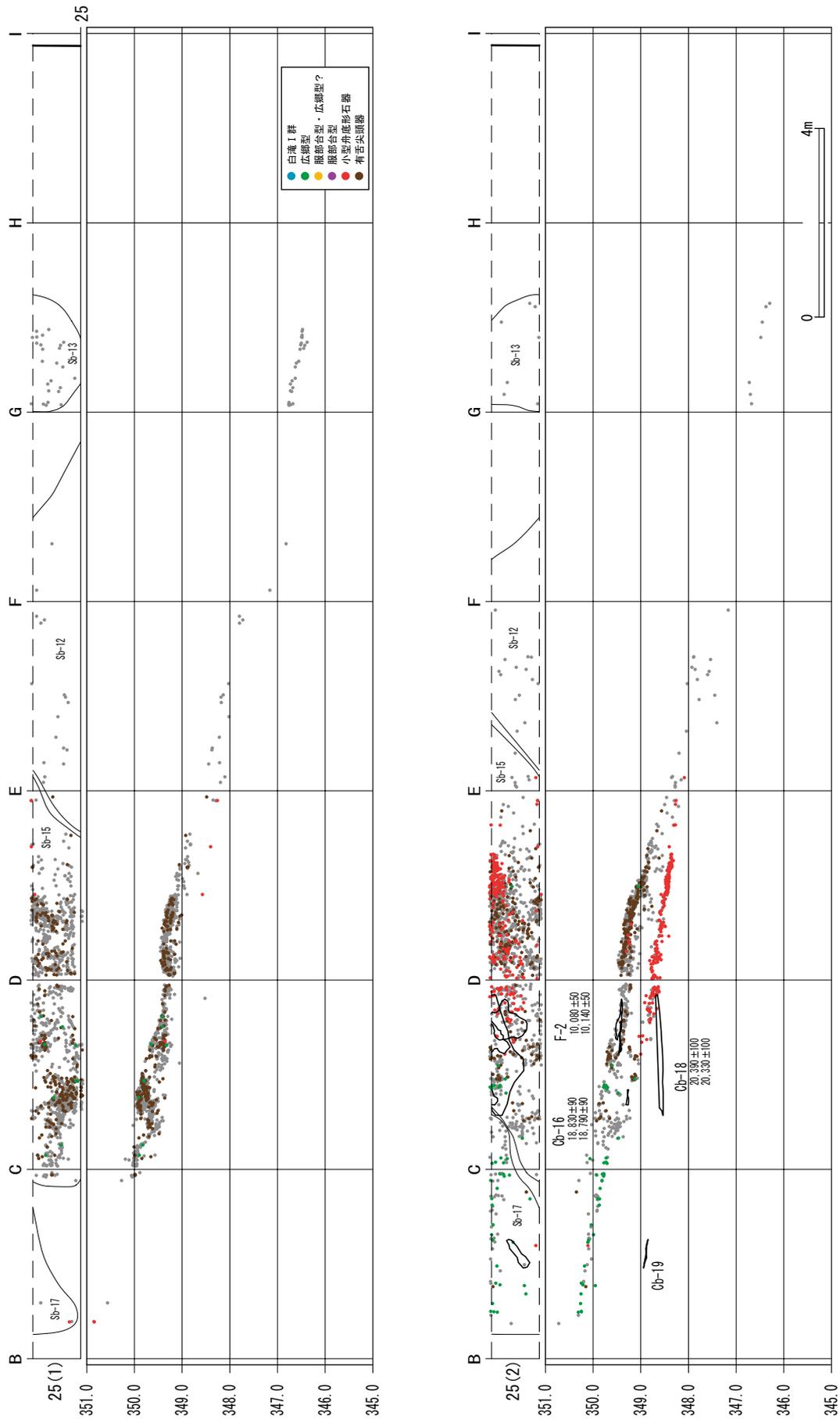
図Ⅲ-33 数字ラインの立面図(1)



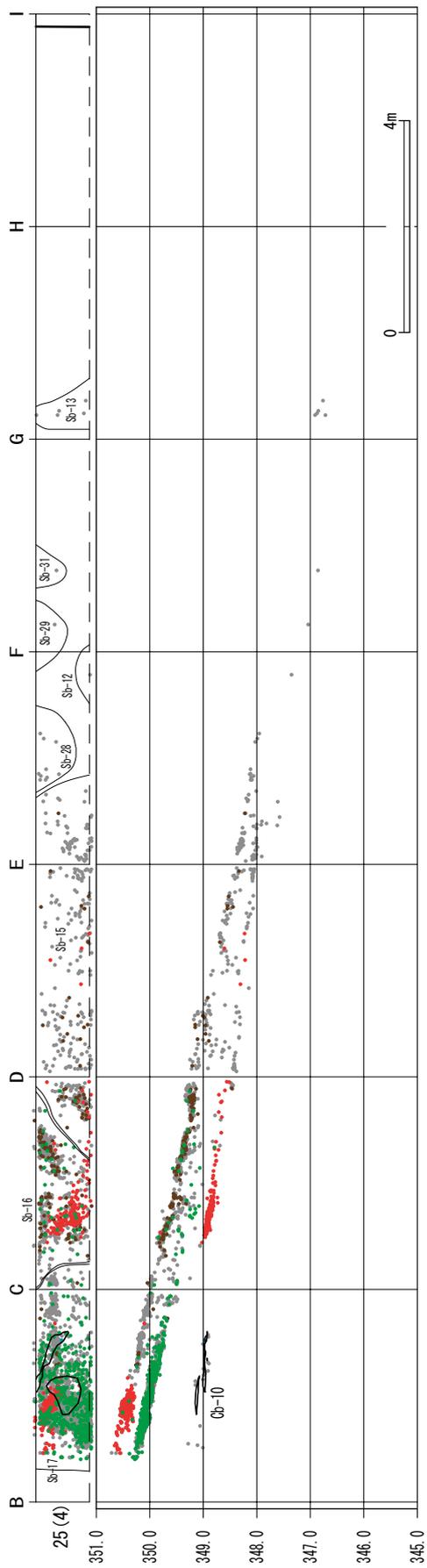
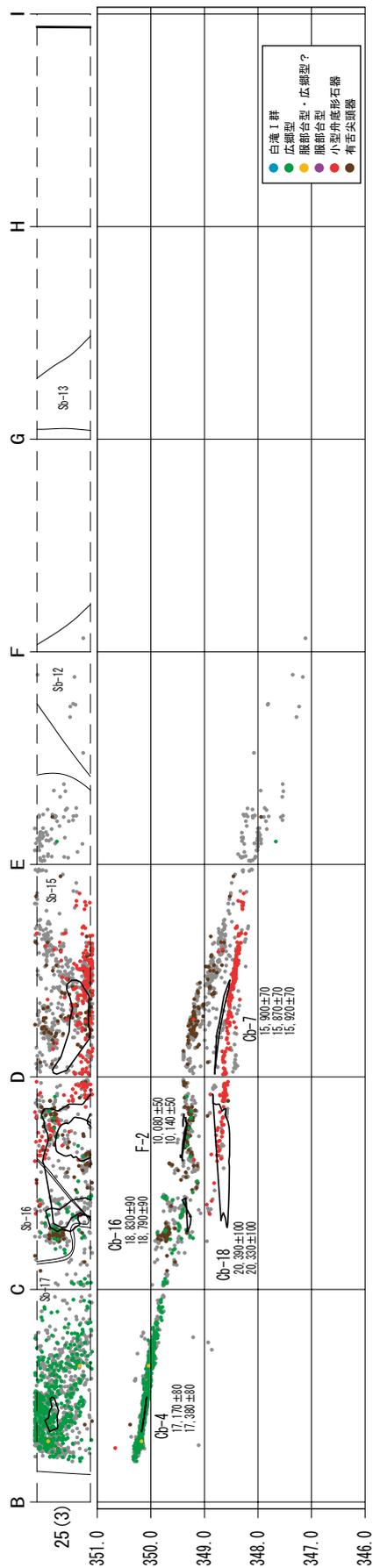
図Ⅲ-34 数字ラインの立面図(2)



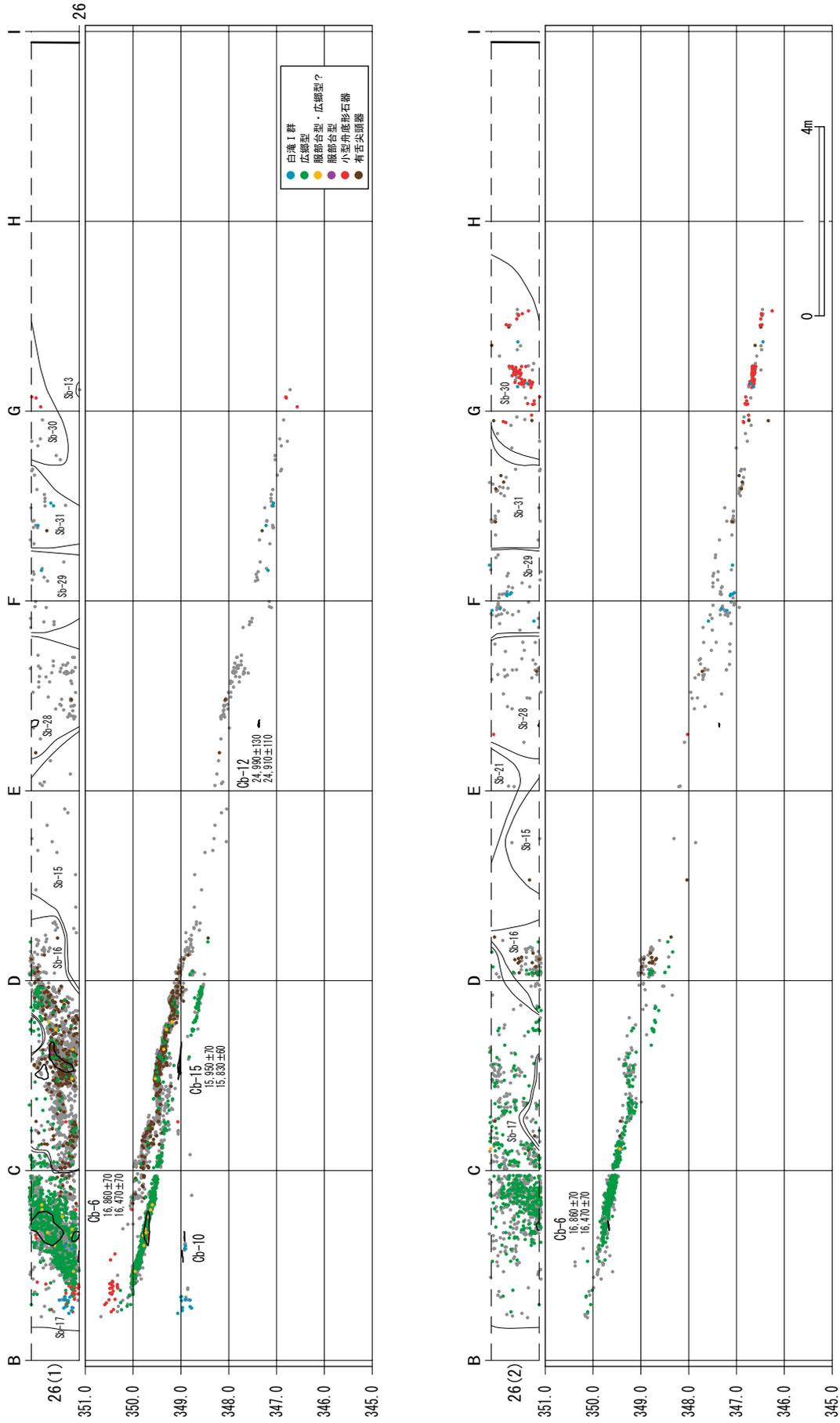
図Ⅲ-35 数字ラインの立面図(3)



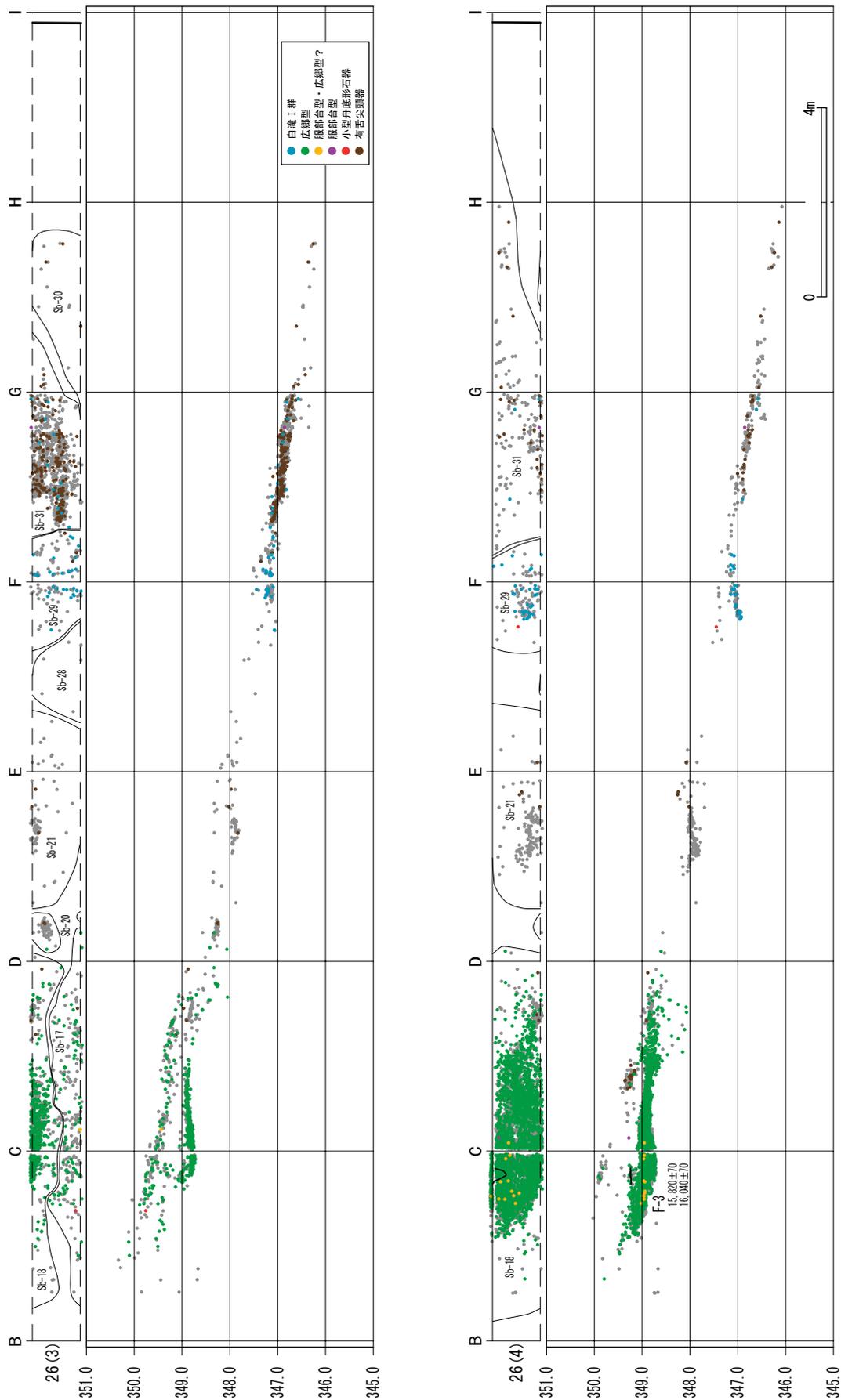
図Ⅲ-36 数字ラインの立面図(4)



図III-37 数字ラインの立面図(5)



図III-38 数字ラインの立面図(6)



図Ⅲ-39 数字ラインの立面図(7)

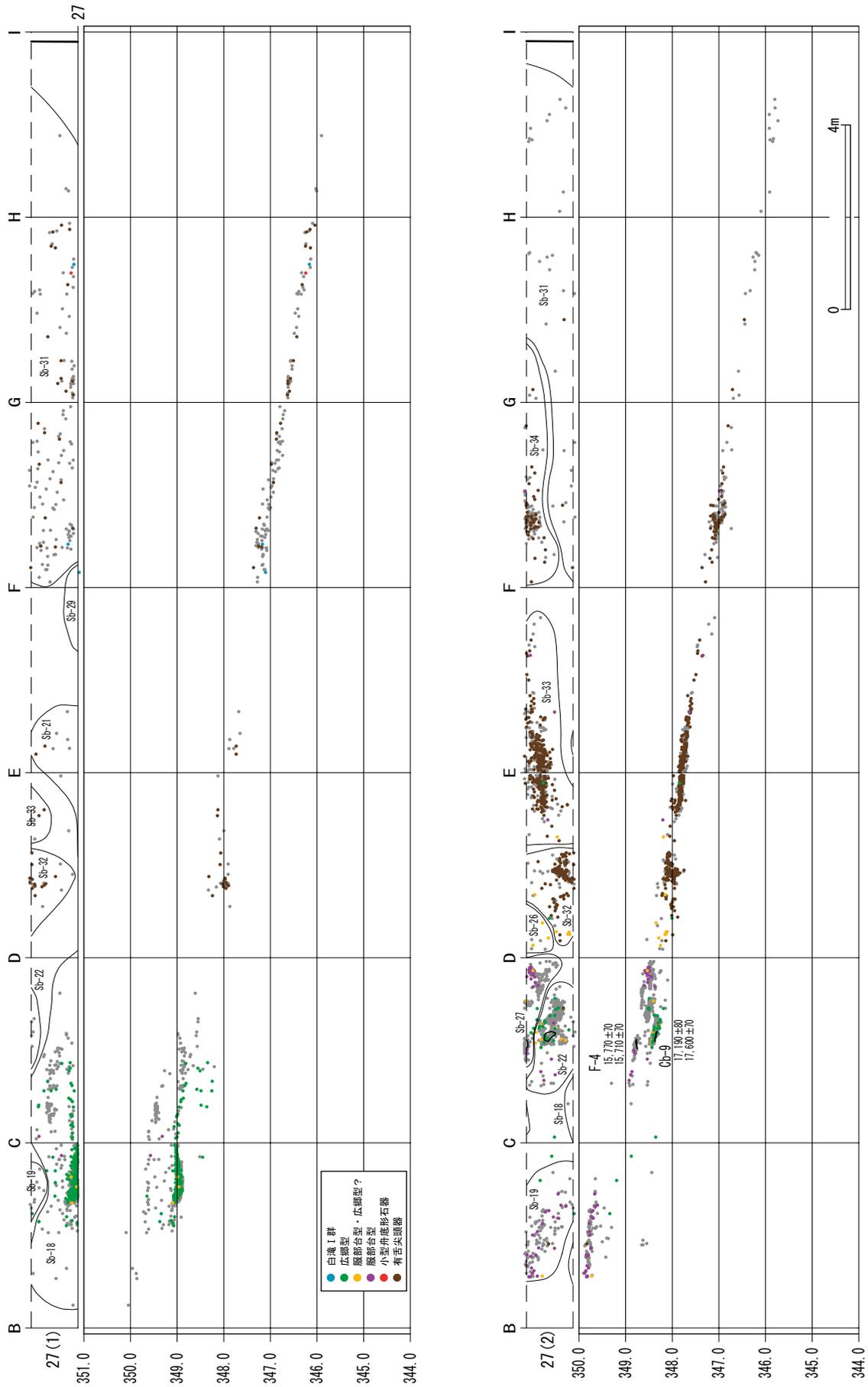
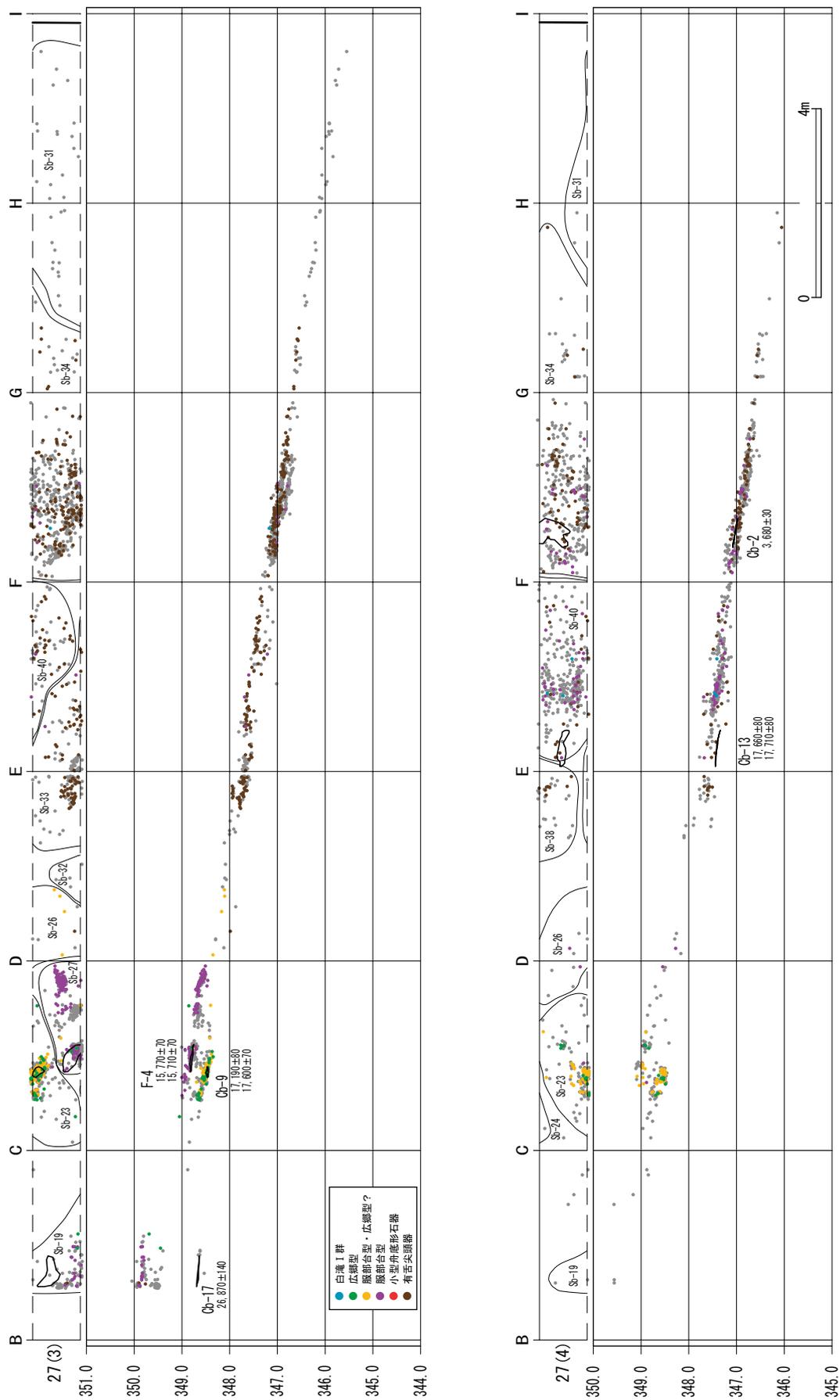


図 III-40 数字ラインの立面図 (8)



図Ⅲ-41 数字ラインの立面図(9)

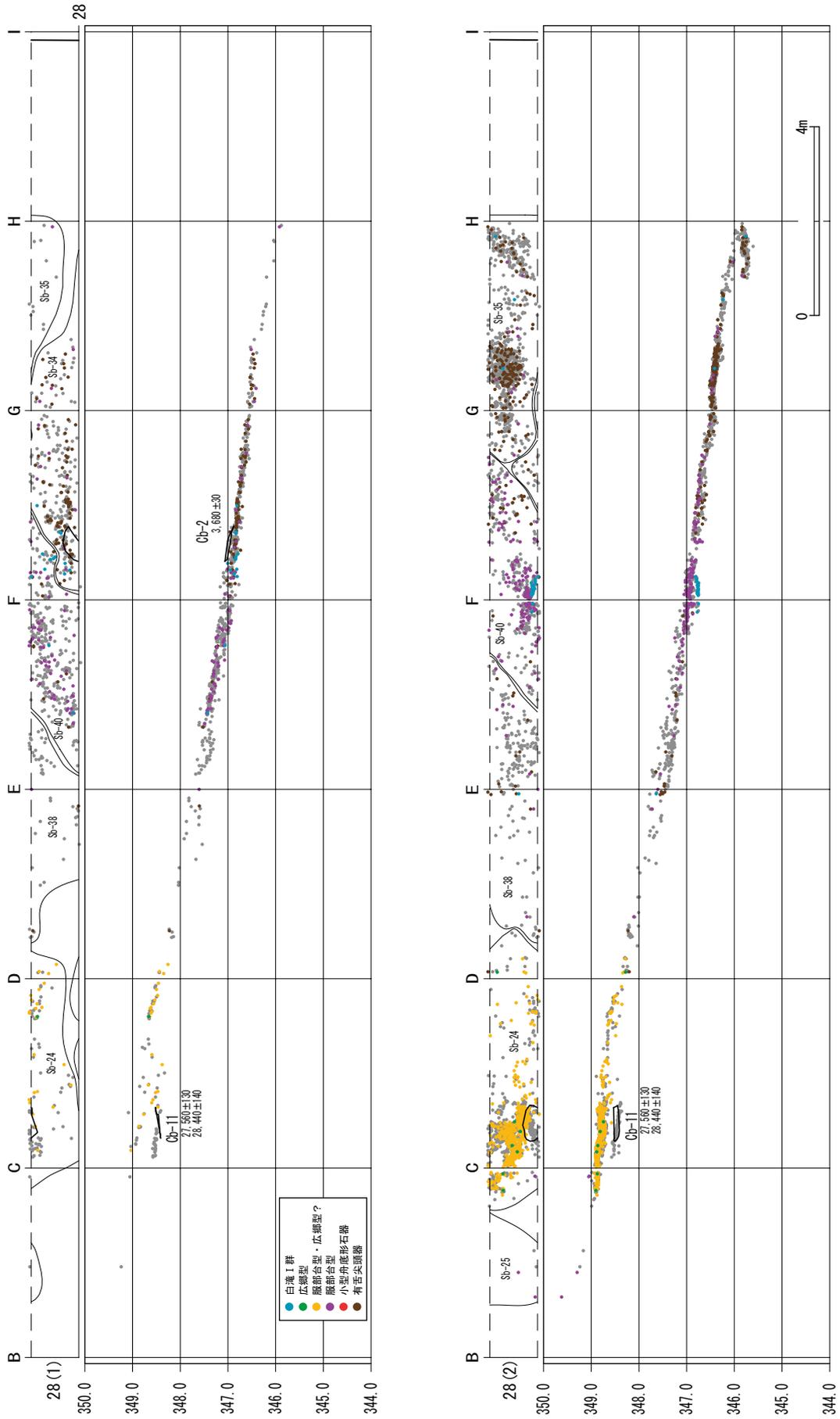
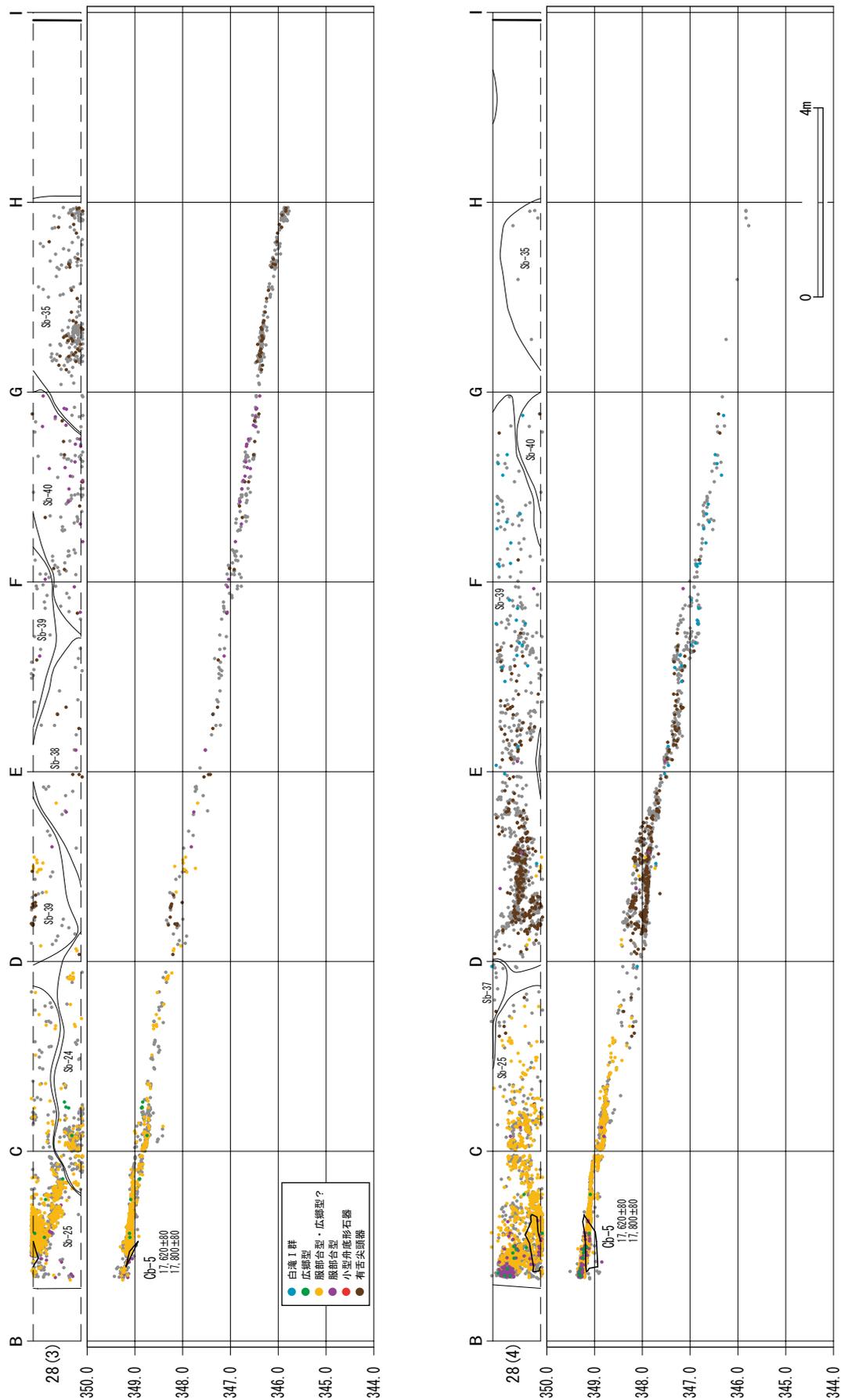


図 III-42 数字ラインの立面図 (10)



図Ⅲ-43 数字ラインの立面図(11)

舌尖頭器石器群と同一レベルに10,000yrBP代前半のF-2があり関連性が高いと思われる。なお、約18,800yrBPのCb-16の概ね上位、および約16,000yrBPのCb-15の上下に広郷型細石刃核石器群が分布している。Cb-15周辺の広郷型細石刃核関連遺物は散在している状況であるため遺構との関連性は保留とした。また、小型舟底形石器石器群の下位に約20,000yrBPのCb-18、上位に約16,000yrBPのCb-7が存在する。

C(2)・(3)ラインの27区付近(図Ⅲ-28)では、上位に服部台型石刃石器群、下位に広郷型細石刃核石器群と「服部台型石刃石器群もしくは広郷型細石刃核石器群」が分布している。上記の様子は数字ラインの27(2)・(3)(図Ⅲ-40・41)、任意断面の図Ⅲ-44のC-D、E-Fで明瞭である。遺構との関係は、上位石器群に約15,700yrBPのF-4、下位の混在する石器群に約17,000yrBP代後半のCb-9が伴っている。なお、ここで分離できた上下の石器群は、前述のB(1)ラインの29区付近(図Ⅲ-27)では約17,000yrBP代後半のCb-5を伴って混在する出土状況であった。年代値のみの類似性からすれば、Cb-5は服部台型石刃石器群もしくは広郷型細石刃核石器群に伴うと判断可能である。

#### 石器群の上下関係と関連する遺構(図Ⅲ-44)

以上のことを総合すると、一部に石器群の逆転現象が観察されているものの、広郷型細石刃核石器群を中心としていくつかの石器群との上下関係と年代が導き出せる(図Ⅲ-44)。

広郷型細石刃核石器群より上位の石器群は①小型舟底形石器石器群、②有舌尖頭器石器群、③服部台型石刃石器群である。石器群①・②はほぼ同一レベルで分布し、石器群②に10,000yrBP前半のF-2が伴っている。石器群③は①・②との直接的な上下関係は確認されていないが、約15,700yrBPのF-4が伴っている。

広郷型細石刃核石器群は約16,500～17,400yrBPのCb-4・6が伴って出土している。同一レベルで混在する石器群として④服部台型石刃石器群もしくは広郷型細石刃核石器群があり、17,000yrBP代後半のCb-9が伴っている。また、石器群③・④が混在する地点があるが、そこに伴うCb-5はCb-9と同様に17,000yrBP代後半の値が得られている。

広郷型細石刃核石器群より下位の石器群は⑤小型舟底形石器石器群、⑥白滝I群である。石器群⑤と①は地点を違えて分布しているが接合関係があり、広郷型細石刃核石器群の上下で矛盾する出土状況が生じている。石器群が残された後の周氷河現象による複雑な堆積状況が予想され、小型舟底形石器石器群の正確な位置付けが不明となっている。石器群⑥に約27,000yrBPのCb-17が伴っている。

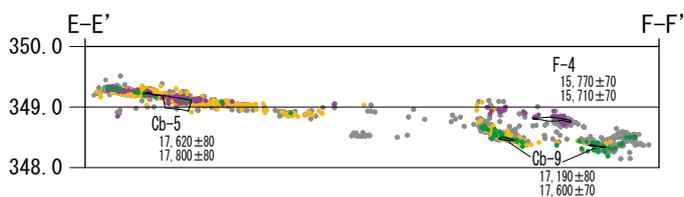
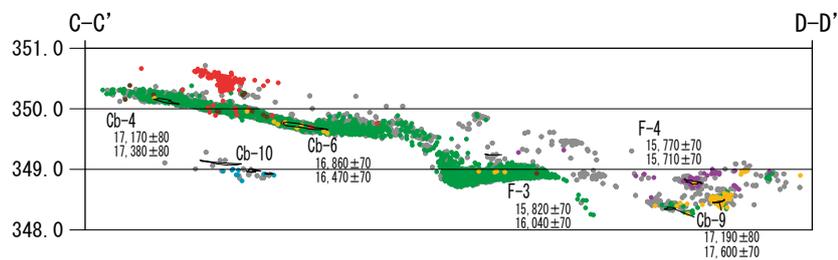
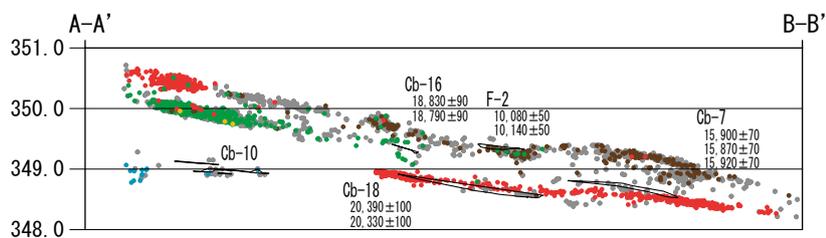
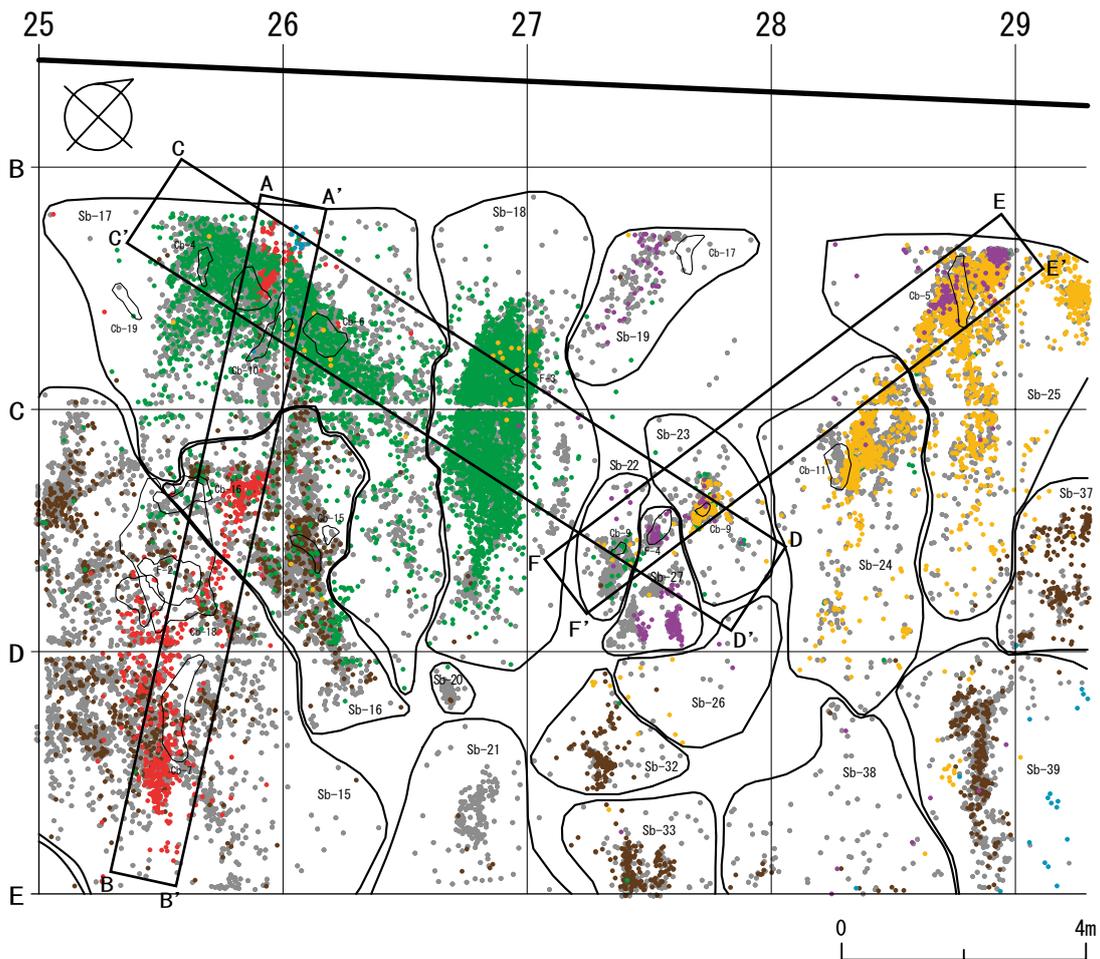
#### 遺構と被熱石器(図Ⅲ-45)

図Ⅲ-45に上記の関連する遺構と被熱石器との関係を示した。被熱石器がまとまって分布する地点の内、遺構と重複しているのは広郷型細石刃核石器群に伴うCb-4・6の周辺とCb-5の周辺である。いずれも垂直分布でも同一レベルで検出されており、遺構との関連性を補強する材料と考えられる。逆に石器群に伴うと判断した遺構の内、F-2・4、Cb-9・10では周辺も含め被熱石器がほとんど分布していない。

## (2) C4-14区(Sbなし)の石器

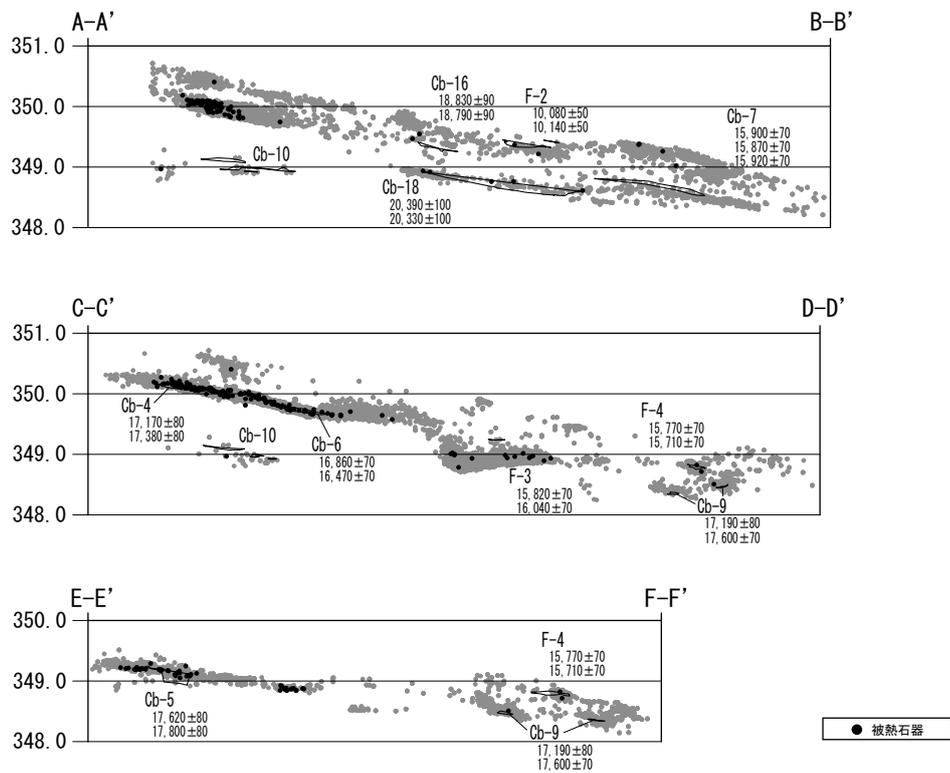
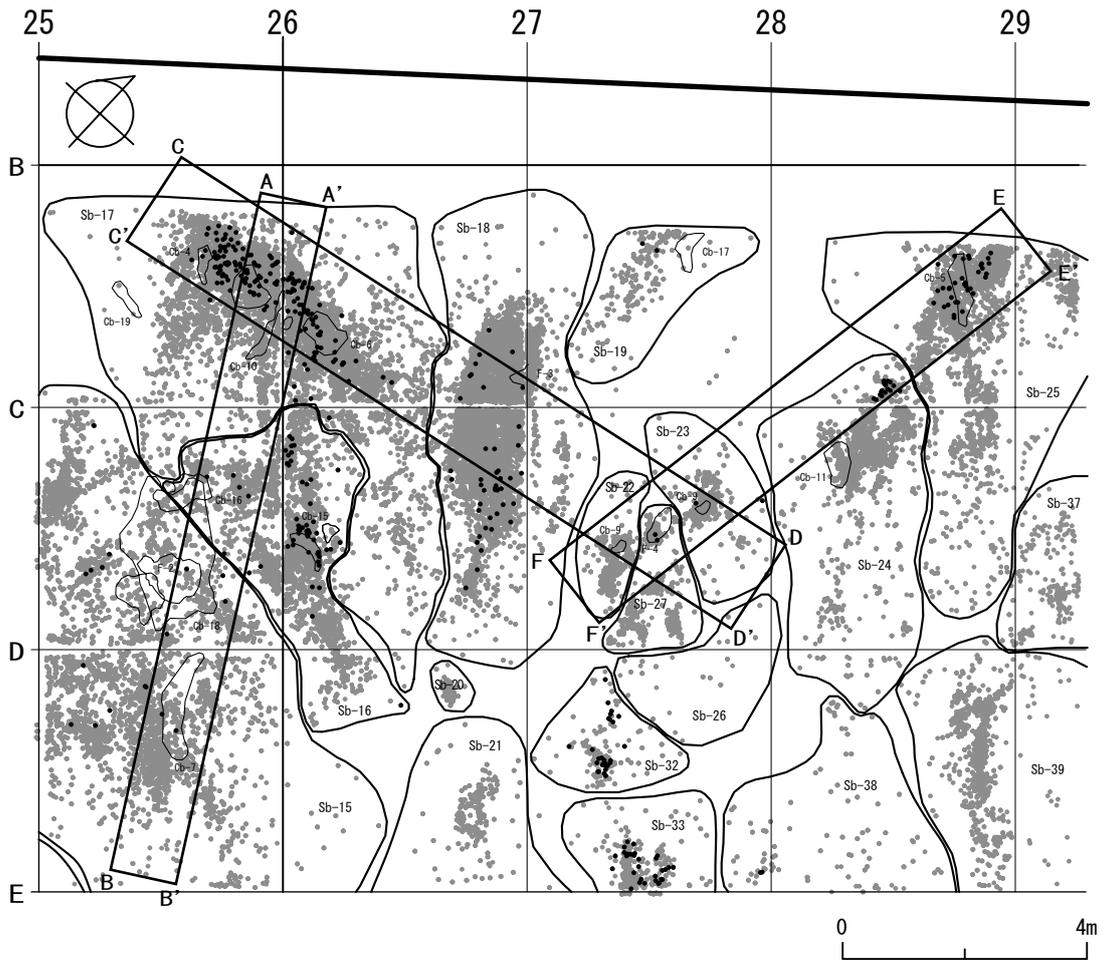
### ① 区域内の分布

C4-14区は調査区西部末端に位置する細長い区域である。25%調査の結果、急傾斜地形であること、土層はしまりが弱く小礫を多く含有する二次堆積の様相を示すこと、遺物の出土は散発的であること等が確認された。このため25%調査以降の発掘は重機による立会調査を選択し、結果として遺物



- 白滝 I 群
- 広楯型
- 胴部台型・広楯型?
- 胴部台型
- 小型舟底形石器
- 有舌尖頭器

図Ⅲ-44 石器群の重層的出土状況に関わる平面・立面図(石器群別)



図Ⅲ-45 石器群の重層的出土状況に関わる平面・立面図(被熱石器別)

分布の情報が断片的なものとなったため、石器ブロックの設定は行わなかった。

分布が比較的まとまってみられたのはC4～8区で、C9区以降は疎らとなり、BC15～17区との連続性は認められない。出土遺物をみると、C4・5区ではサイコロ状石核や剥片素材石核など白滝I群と考えられるもの、C7区では幅1cm程度で末端に槌状剥離が並ぶIb類小型舟底形石器、C8区では大型の舟底形石器と両面調整石器が認められた。C7区とC8区の関係は不明だが、少なくともC4・5区に白滝I群、C7・8区には舟底形石器を伴う石器群が分布する状況が把握できた。後者はIb類の存在からホロカ型彫器石器群に属する可能性がある。

## ② 出土石器 (表Ⅲ-2～16)

出土遺物には白滝I群と白滝I群以外がある。白滝I群は表土・II層を合わせ石核2点・76.2gが出土している。白滝I群以外は表土・II層を合わせ、尖頭器(1点)、両面調整石器(2点)、舟底形石器(4点)、搔器(1点)、削器(4点)、二次加工ある剥片(1点)、石刃(5点)、縦長剥片(5点)、石刃核(3点)、石核(3点)、剥片(1,332点)があり、合計点数は1,361点、重量は13,797.7gである。両者を合わせた総点数は1,363点、総重量は13,873.9gに及ぶ。

層位・取り上げ方法別の内訳はII層点取り遺物181点・3,505.1g、表土一括遺物383点・3,847.4g、II層一括遺物799点・6,521.4gである。石器の大多数は剥片(99.1%)が占め、ツール類では舟底形石器や石核類が多い。

石器石材には黒曜石(1,362点)と頁岩(1点)がみられ、前者が99.9%以上を占める。石質細分できた黒曜石(195点)をみると、黒曜石1(52点・26.6%)、黒曜石2(1点・0.5%)、黒曜石3(33点・16.9%)、黒曜石4(65点・33.3%)、黒曜石5(44点・22.6%)があり、黒曜石1・4・5が多く利用されている。

C4～14区は白滝I群と舟底形石器石器群が分布する区域で、両石器群はC5区を境として分離が可能と考えられる。舟底形石器には大型と小型があり近接して両面調整石器も出土しているが、これらの共伴関係は不明である。

### 両面調整石器 (図Ⅲ-47-1、図版66)

両面調整石器は表土・II層を含め2点・2個体が出土し1個体を図示した。石材は全て黒曜石1である。接合関係は確認していない。

1は剥片素材で裏面末端に素材面が観察できる。正面下端からの大型剥離が原因で上半部を欠損している。全体にやや粗い剥離を加えた後、正裏面へ錯向状に薄手平坦剥離を施している。

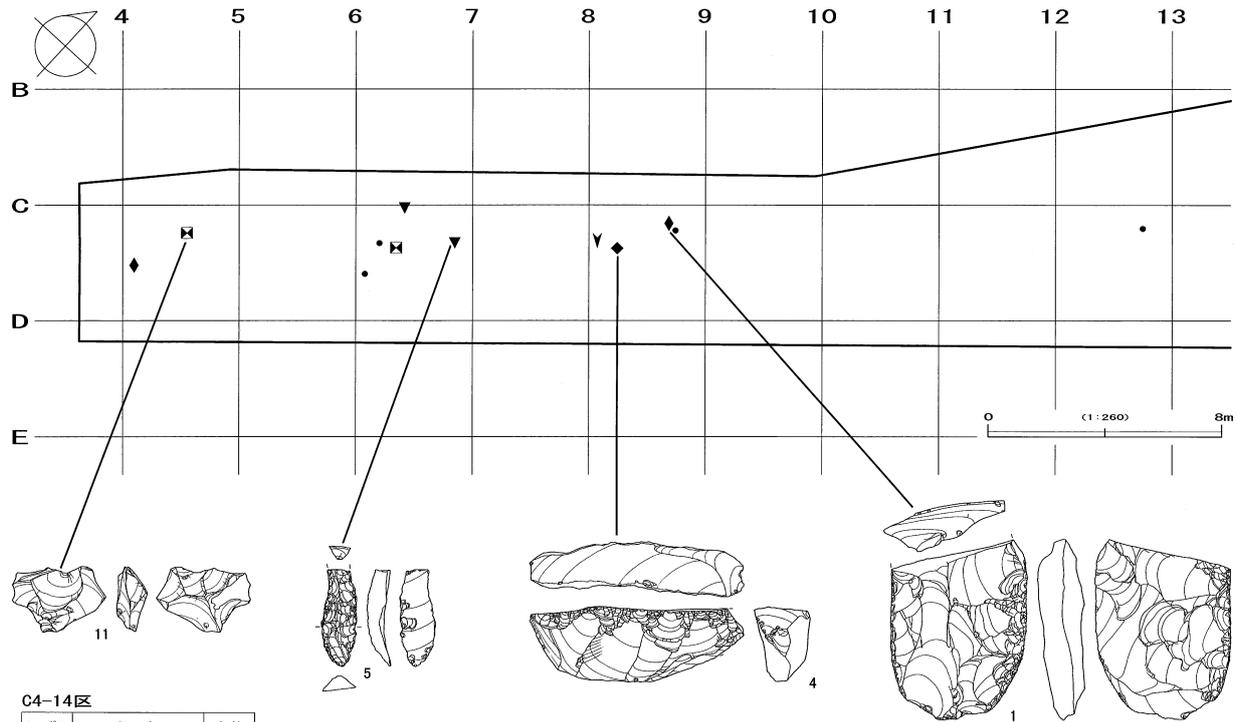
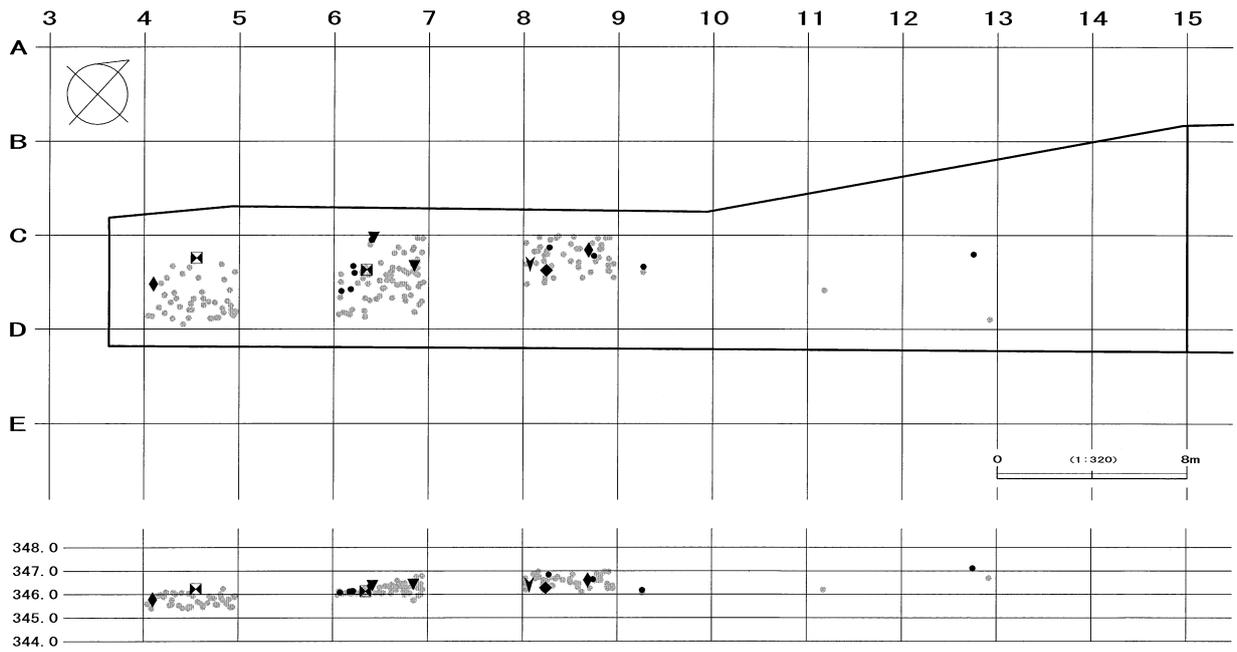
### 舟底形石器 (図Ⅲ-47-2～4、図版66)

舟底形石器は表土・II層を含め4点・4個体が出土し、3個体を図示した。器種類型はIb類(高さ0.8～1.2cm、幅0.8～1.2cm)が2個体、IIb類(大きさ10cm以上、主に15cm以上)が1個体である。石材は全て黒曜石1である。接合関係は確認していない。Ib類の2点について産地分析を行い、いずれも「幌加沢・あじさい滝」の判定結果を得た。

2・3はIb類で、槌状剥離はいずれも素材末端側に形成されている。また槌状剥離は左側面側に傾いて展開している。甲板面は平坦で側面観は上下縁とも直線的である。2の側面調整は甲板面からの剥離で占められ、同程度の剥離面が整然と並ぶ。また2・3とも甲板面は細かな傷が多方向に走り側面の剥離面に比べ風化が進んでいる。

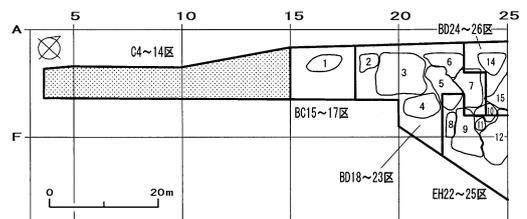
4はIIb類で転礫を分割したものを素材としている。甲板面は比較的平坦で密なリングが観察できる。側面には甲板面からの粗い剥離が加えられ、縁辺は細かい剥離により直線的に整形されている。

C4-14区

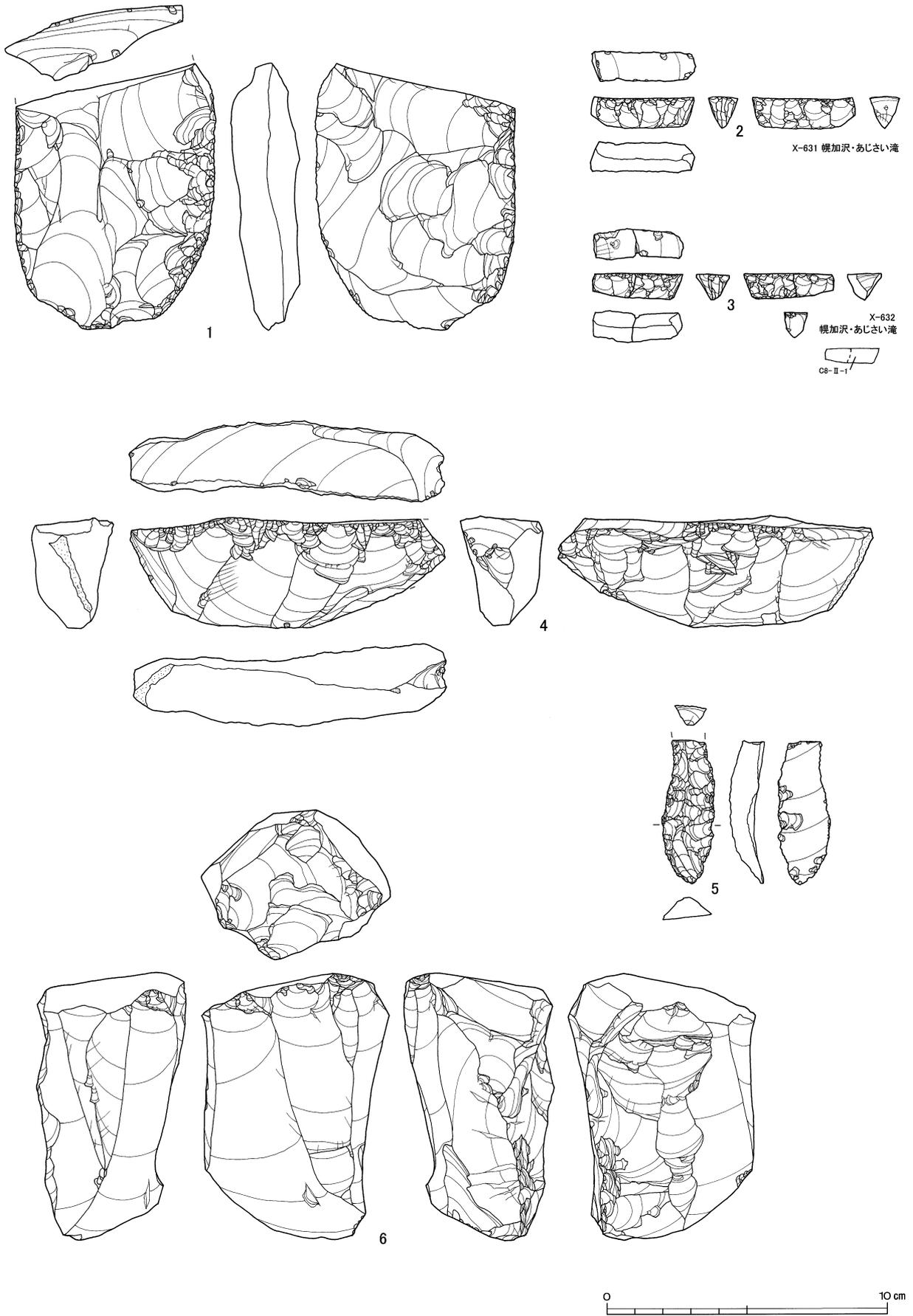


C4-14区

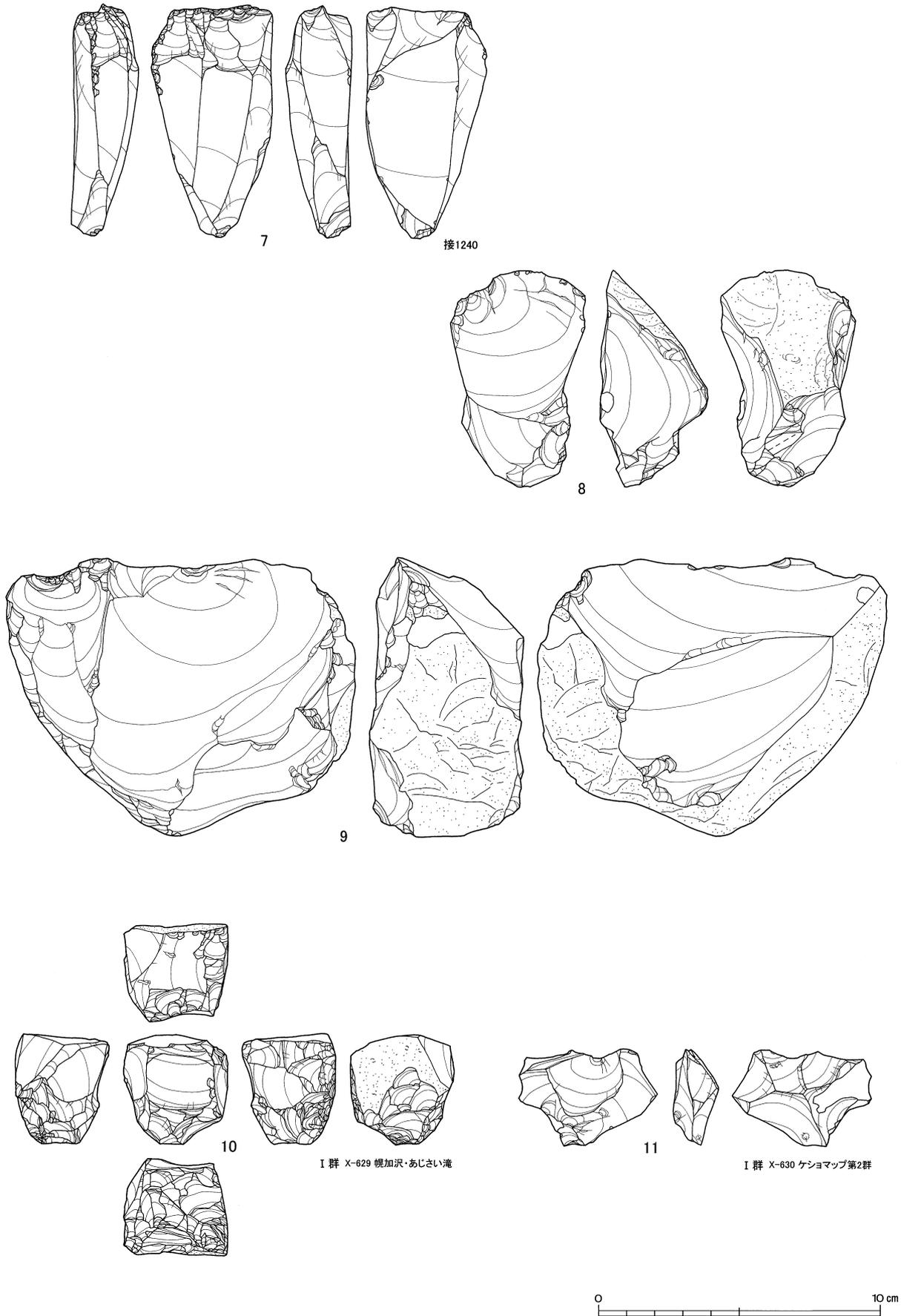
シンボル	内容	点数
◆	両面調整石器	2
◆	舟底形石器	1
▼	削器	2
Y	二次加工ある剥片	1
●	石刃・縦長剥片	9
●	剥片	164
⊠	石核	2
	計	181



図III-46 C4-14区分布状況(平面・断面図)



図Ⅲ-47 C4-14区の石器(1) 尖頭器・舟底形石器・削器・石刃核



図Ⅲ-48 C4-14区の石器(2) 石刃核・石核、白滝I群(石核)

正面側から右側面にかけて発生した折れが甲板面と側面の角度を鈍角化させており、これが原因で遺棄されたとみられる。

#### 削器 (図Ⅲ-47-5、図版66)

削器は表土・Ⅱ層を含め4点・4個体が出土し、1個体を図示した。石材は全て黒曜石で、素材が判別できるものはみられない。また剥離面接合関係は確認していない。

5はねじれが強い剥片もしくは石刃を素材としており、背面側を覆い尽くす剥離によって加工されている。素材形状に影響され側縁は湾曲が激しい。裏面縁辺には平坦な剥離が散発的に生じている。

#### 石刃核 (図Ⅲ-47・48-6・7、図版66)

石刃核は表土・Ⅱ層を含め3点・3個体が出土し、2個体を図示した。石材は黒曜石3・4がみられる。接合関係は確認していない。素材は7が剥片の可能性はある他は不明である。母型形成は6に認められ、右側面の大型剥離面を打面とし裏面に横方向の連続的な剥離が加えられている。しかし石刃剥離が進行しているため母型形状は判別できなかった。

6は打面調整が施されているが頭部調整は判然としない。左側面にはネガのバルブが除去された古い作業面が並んでいる。7は正面の古い作業面が、正面上部からの連続的な小型剥離と側面上下端からの樋状の剥離により切られている。裏面の大型剥離面は素材腹面の可能性もあるため、あるいは彫器と分類すべきかもしれない。左右側面の剥離面縁辺には微細な剥離が不連続的に認められる。

#### 石核 (図Ⅲ-48-8～11、図版66)

石核は表土・Ⅱ層を含め5点・5個体が出土し、4個体を図示した。石材は全て黒曜石である。剥離面接合関係を有するものはない。素材は亜角・転礫が使用されている。剥離技術では、①作業面を固定して一定方向に剥離を行うもの、②多方向の剥離を加えるもの、③剥片の腹面で剥片剥離を行うものがある。①には9、②には8・10、③には11が該当する。10・11に対し産地分析を行い、10が「幌加沢・あじさい滝」、11が「ケショマップ第2群」の結果が得られている。

8は左右側面に古い作業面があり、正面の横・上からの剥離がこれを切っている。9は平坦打面から一定方向に剥片を剥離しており、頭部調整も僅かに認められる。10・11は技術的に白滝Ⅰ群と判断できる。10はサイコロ状の石核で灰白色の特徴的な石材が使用されている。11はバルブとリングの発達が著しい厚手剥片を素材としており、背面には明瞭なパンチ痕も観察される。

### (3) BC15-17区 (Sb-1) の石器

#### ① 石器ブロックの分布

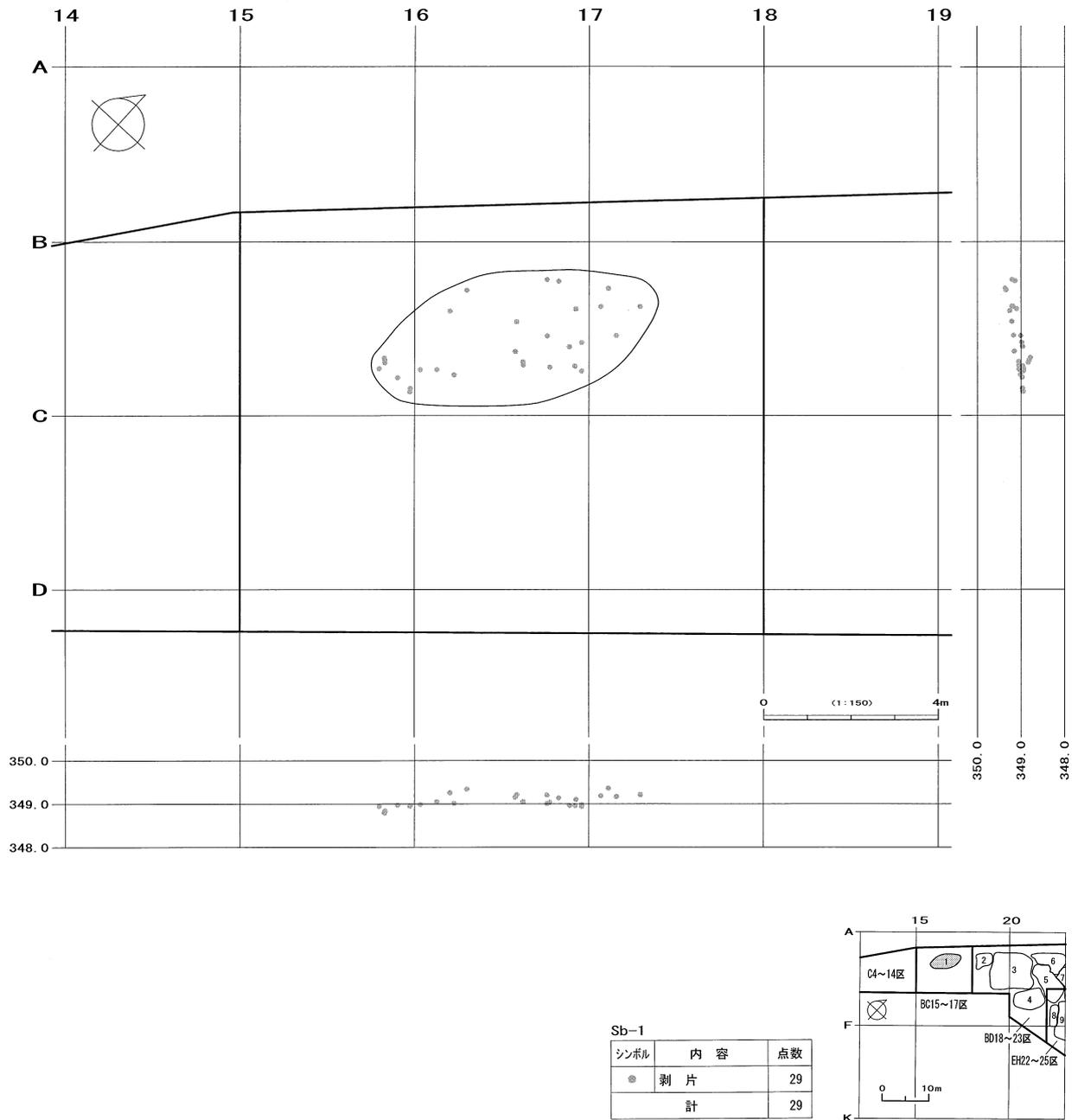
##### ブロック間接合状況

BC15-17区は調査区南西部に位置し、C4-14区とBD18-23区に挟まれている。区域内には調査区北西側から続く段丘面上の緩斜面地形が認められ、調査区境界の段丘崖へと連続する。確認された石器ブロックはSb-1で散発的な遺物分布が認められる。また当該区は遺物分布が調査区北側へ広がることが予測され、本来遺された石器群の一部を取り上げたに過ぎない状況と判断された。そのため二次整理において接合作業を行っていない。

#### Sb-1 (図Ⅲ-49)

Sb-1は区域中央から北西部に位置し、規模は6.7×3.1m、面積は15.4㎡を測る。遺物分布はブロック内に散発的に認められる。出土総数は29点・263.1gで、全て剥片である。一括遺物に尖頭器・舟底形石器・石刃核・石核がみられるが点取り遺物との関係は不明で、Sb-1資料の石器群の判別に

Sb-1



図Ⅲ-49 Sb-1分布状況(平面・断面図)

は至っていない。なお、石刃核は背部を平坦に加工し打面調整・頭部調整を加えるものであった。

#### (4) BD18-23区 (Sb-2～7) の石器

##### ① 石器ブロックの分布

###### ブロック間接合状況 (図Ⅲ-50)

BD18-23区はA地区の南西部に位置し、北西側は調査区外で緩斜面地形が続いている。隣接する区域は北東側がBD24-26区、南東側がEH22-25区で、傾斜方向にあるEH22-25区とは僅かに接合関係が認められる。

ブロック範囲の設定はⅢ章2節1項で説明したように、密度分布、組成器種の分布、接合資料の分布を根拠としている。図Ⅲ-50に示した折れ接合・剥離面接合資料の接合線を表示した分布図では、隣接区域に分布する遺物であっても当該区域遺物と接合関係を有する資料については遺物点・接合線を表示している。

各ブロックともブロック内接合を主体とし、特に遺物集中域を中心とした接合関係が認められる。ブロック間接合は主に隣接ブロックとの間で確認できるが、Sb-3と7、Sb-7と12、Sb-6と17など間に他ブロックを挟んで接合する例もみられる。こうした状況の中には、素材やツールなど特定の石器が人為的に移動されたことを示す例も存在する。

###### Sb-2 (図Ⅲ-51)

Sb-2はBD18-23区西部に位置し、規模は4.4×3.2m、面積は9.2㎡を測る。遺物分布はB18区の北部に小さな集中域が認められる。出土総数は27点・233.7gで、内容は剥片が22点・81.5%、石刃・縦長剥片が5点・18.5%の二器種のみとなっている。剥離面接合関係を持つ資料は確認されていない。

###### Sb-3 (図Ⅲ-51・52)

Sb-3はBD18-23区中央部に位置し、規模は10.6×9.9m、面積は64.9㎡を測る。遺物分布はB19、C19・20区にまたがる径4.5mほどの集中域が認められる。遺物内容から服部台型石刃石器群の可能性はある。出土総数は307点・6,840.2gで、その内剥片が273点・88.9%、石刃・縦長剥片が29点・9.4%を占める。主な石器には彫器(1点)、削器(2点)、石核(1点)がある。

剥離面接合関係を持つ資料は全体で49点(16.0%)に及び、剥片では37点(13.6%)、石刃・縦長剥片では12点(41.4%)にみられる。

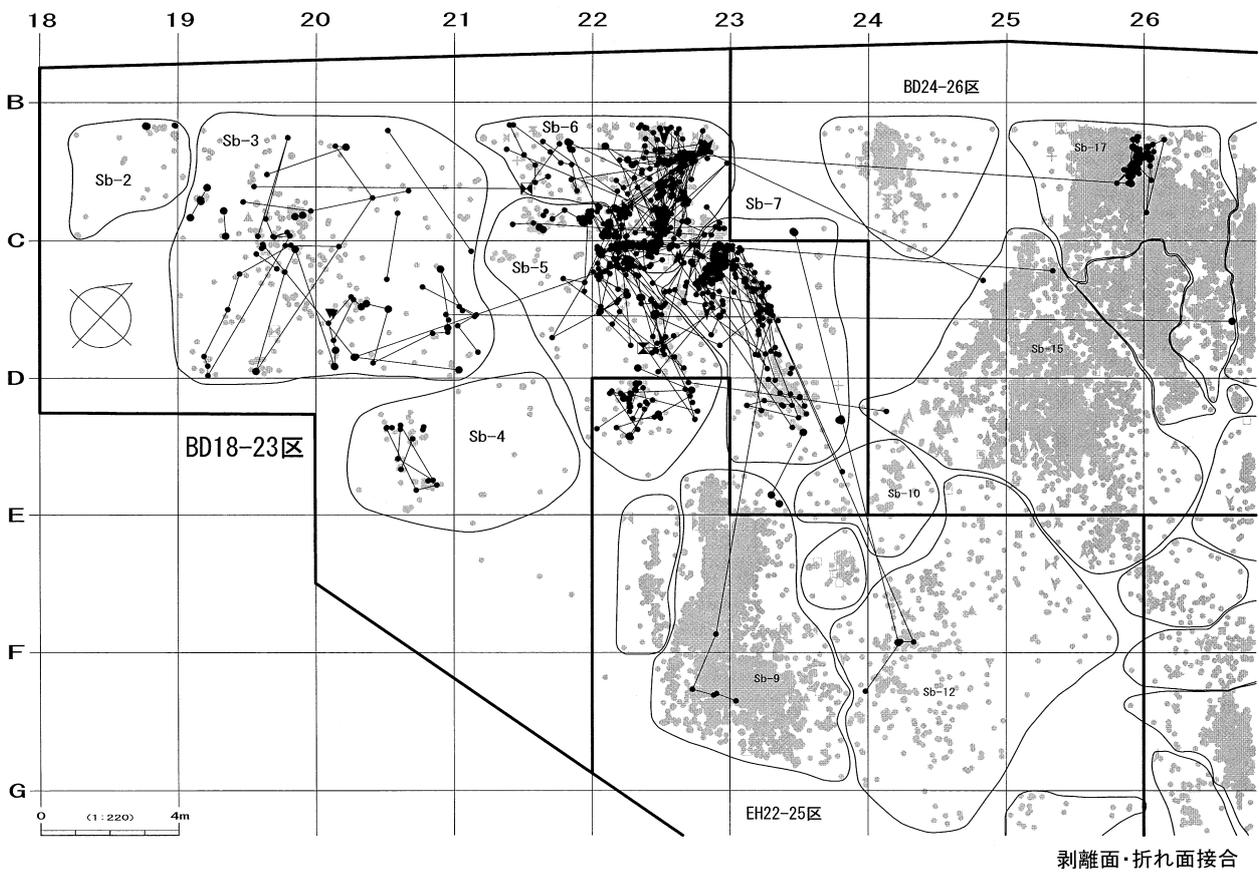
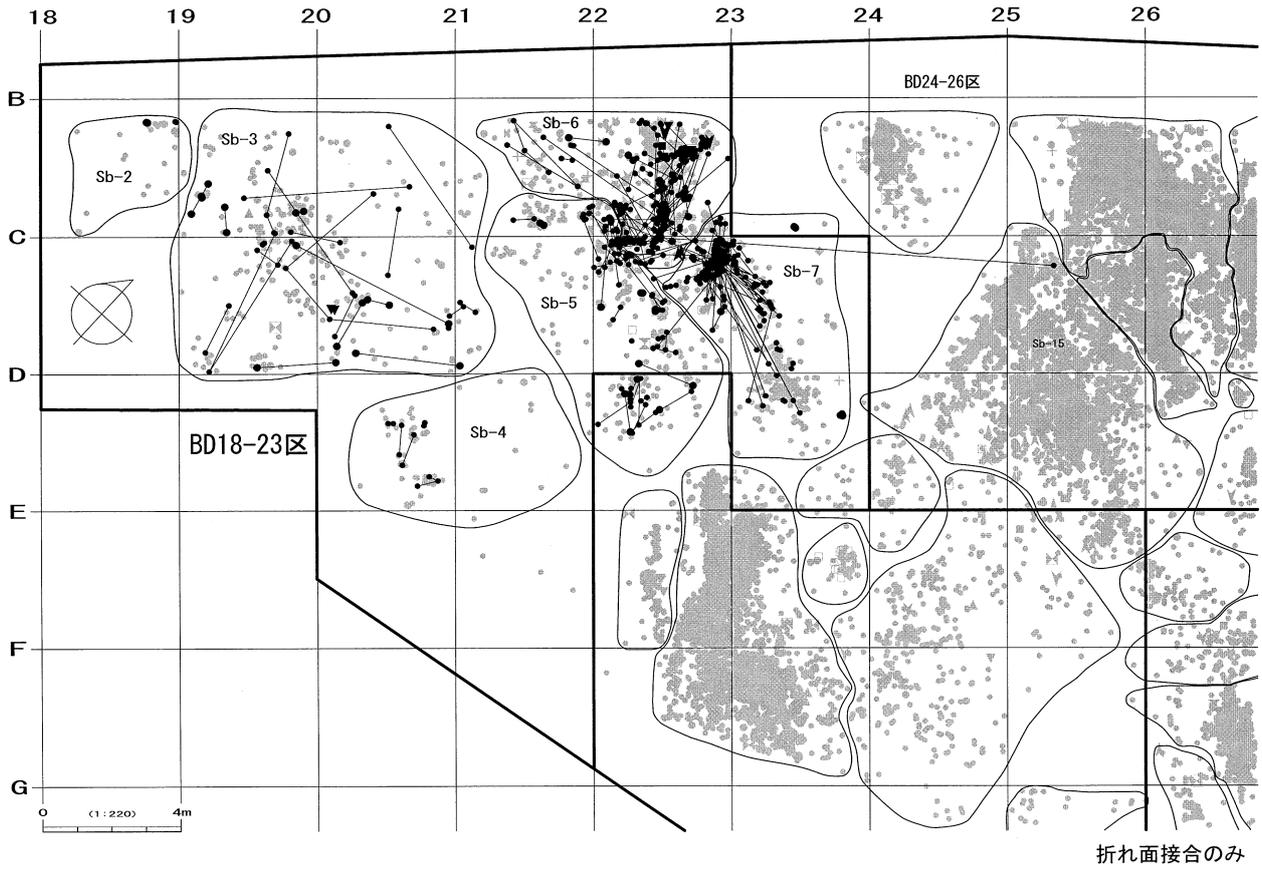
###### Sb-4 (図Ⅲ-52)

Sb-4はBD18-23区南東部に位置し、規模は6.5×4.3m、面積は23.7㎡を測る。遺物分布はD20区に集中域が認められる。出土総数は69点・816.2gで、その内剥片が67点・97.1%、縦長剥片が2点・2.9%のみとなっている。

剥離面接合関係を持つ資料は全体で8点(11.6%)あり、全て剥片であった。

###### Sb-5 (図Ⅲ-53)

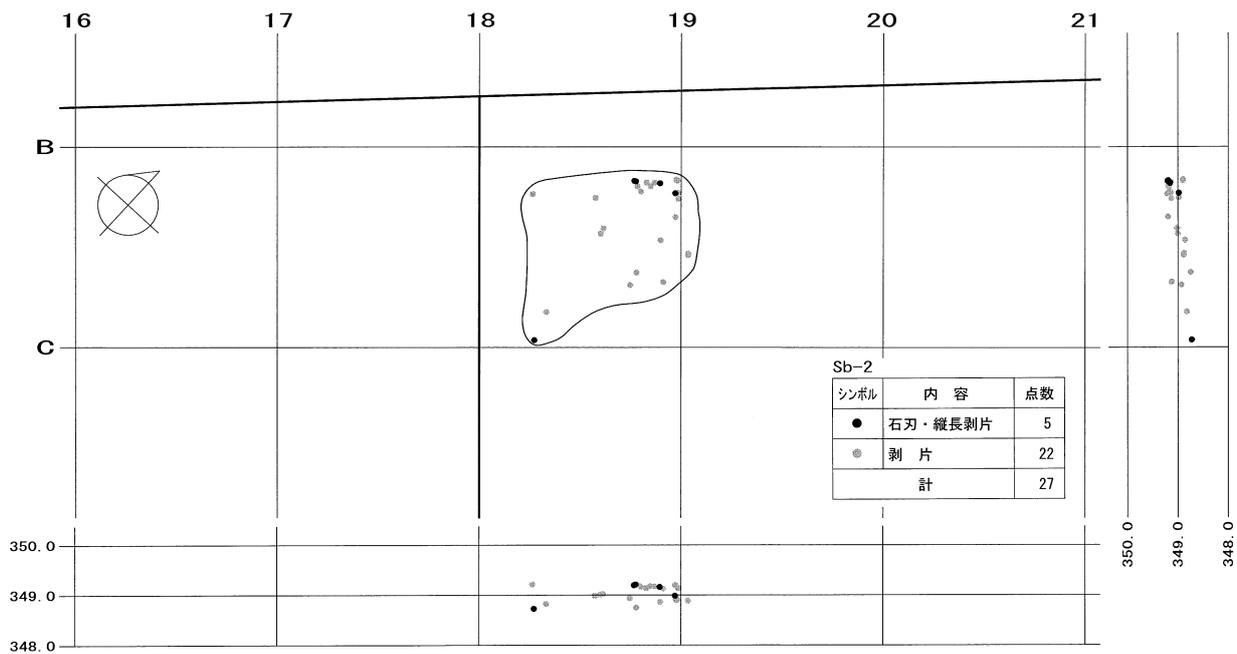
Sb-5はBD18-23区東部に位置し、規模は9.0×4.5m、面積は31.1㎡を測る。遺物分布はブロック北側の縁辺部に弧状の集中域が認められる。遺物内容は小型舟底形石器石器群のものが主体的に認められる。出土総数は487点・6,077.6gで、その内剥片が454点・93.2%、石刃・縦長剥片が26点・5.3%を占める。主な石器には尖頭器(1点)、舟底形石器(1点)、彫器(1点)、石刃核(2点)がある。



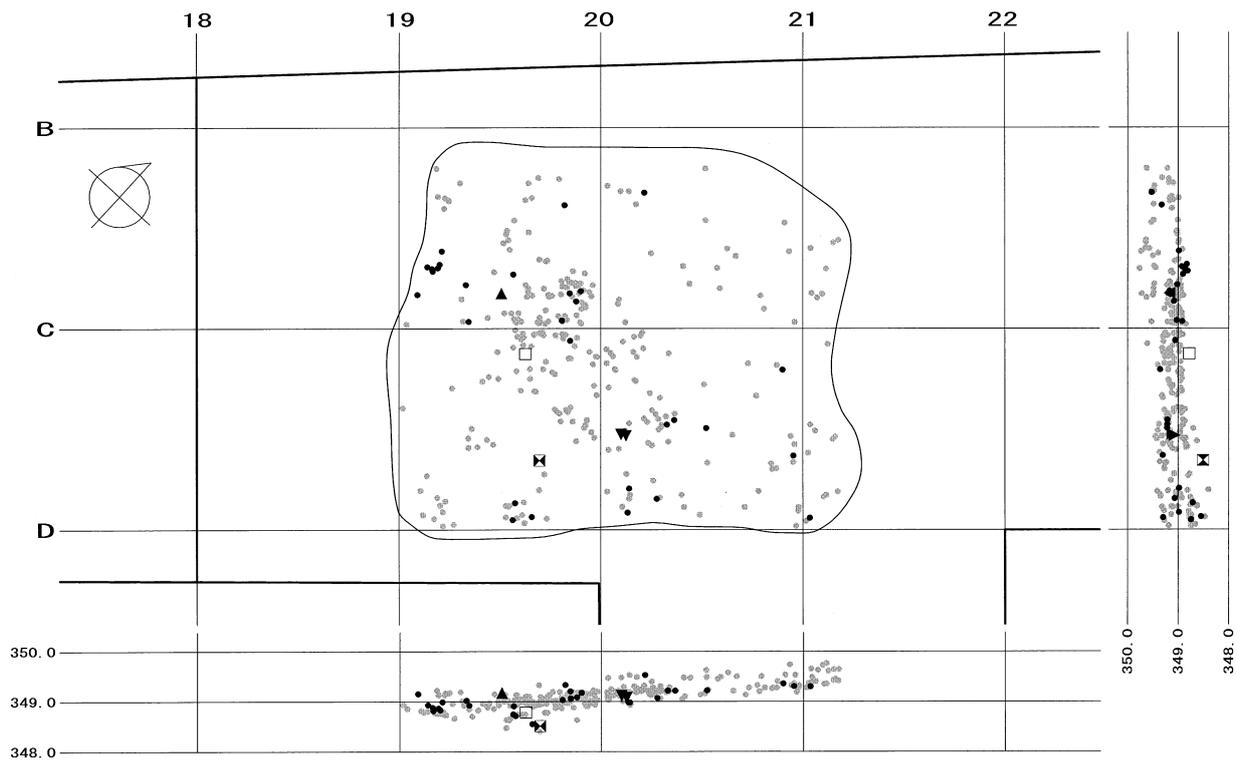
図III-50 BD18-23区 接合資料分布図

2 遺物

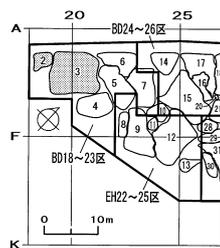
Sb-2



Sb-3

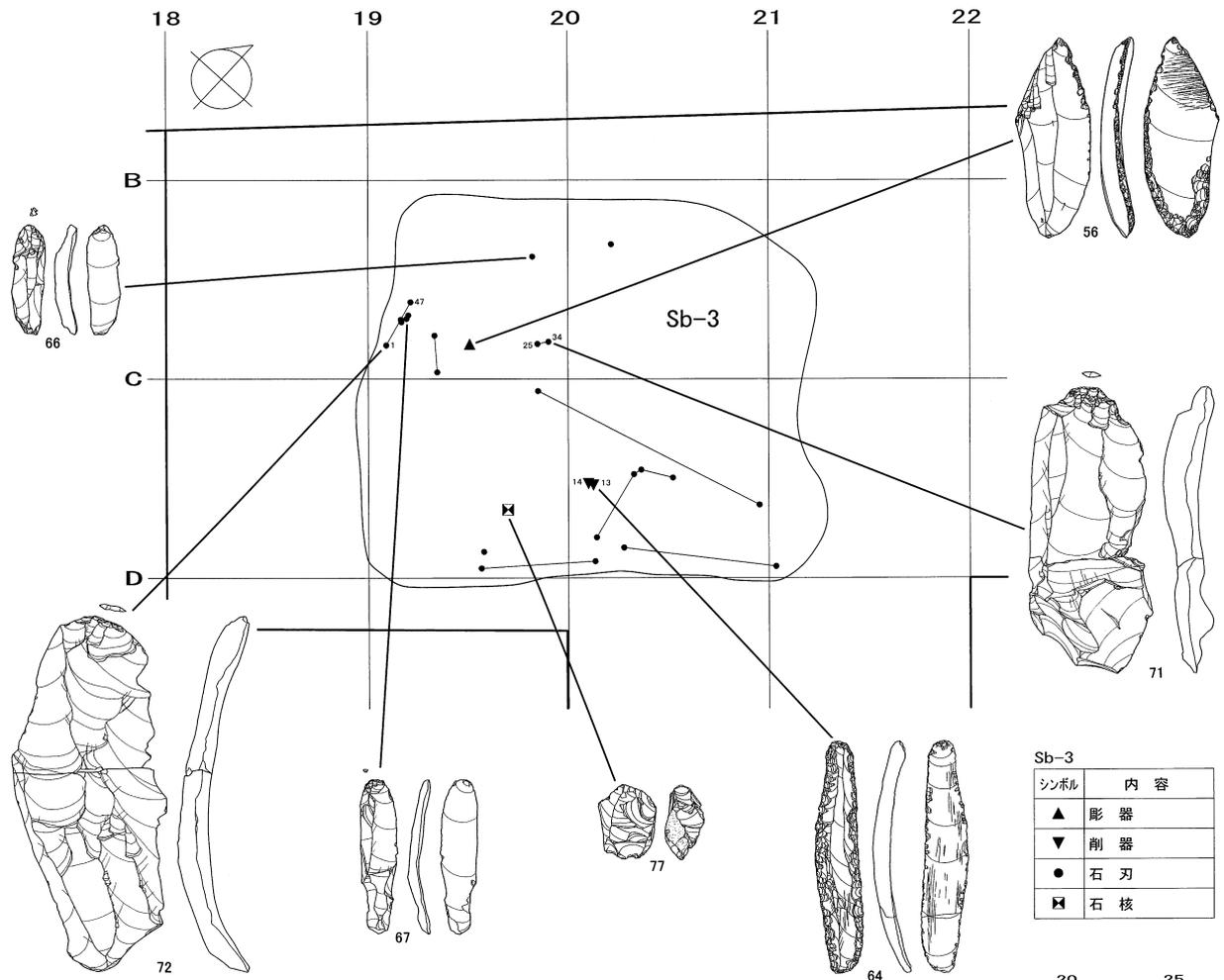


0 (1:150) 4m



Sb-3		
シンボル	内容	点数
▲	彫器	1
▼	削器	2
●	石刃・縦長剥片	29
●	剥片	273
⊠	石核	1
□	礫	1
	計	307

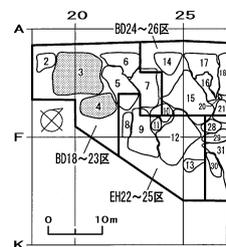
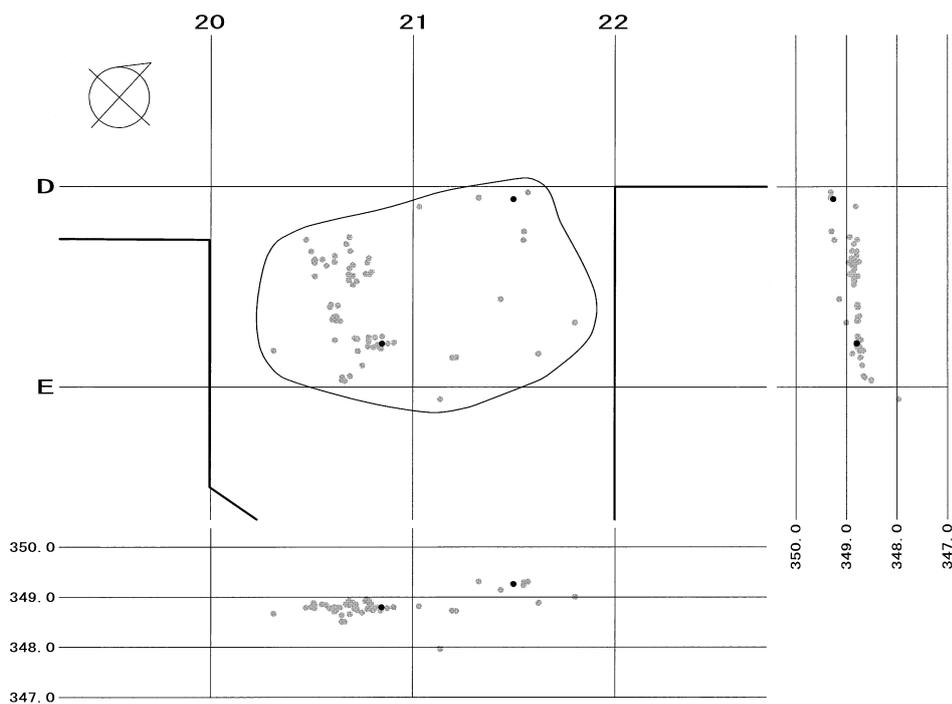
図Ⅲ-51 Sb-2・3分布状況(平面・断面図)



Sb-3

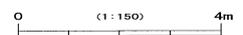
シンボル	内容
▲	彫器
▼	削器
●	石刃
■	石核

Sb-4



Sb-4

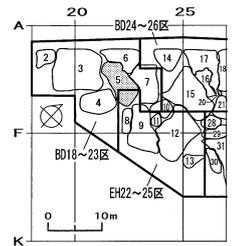
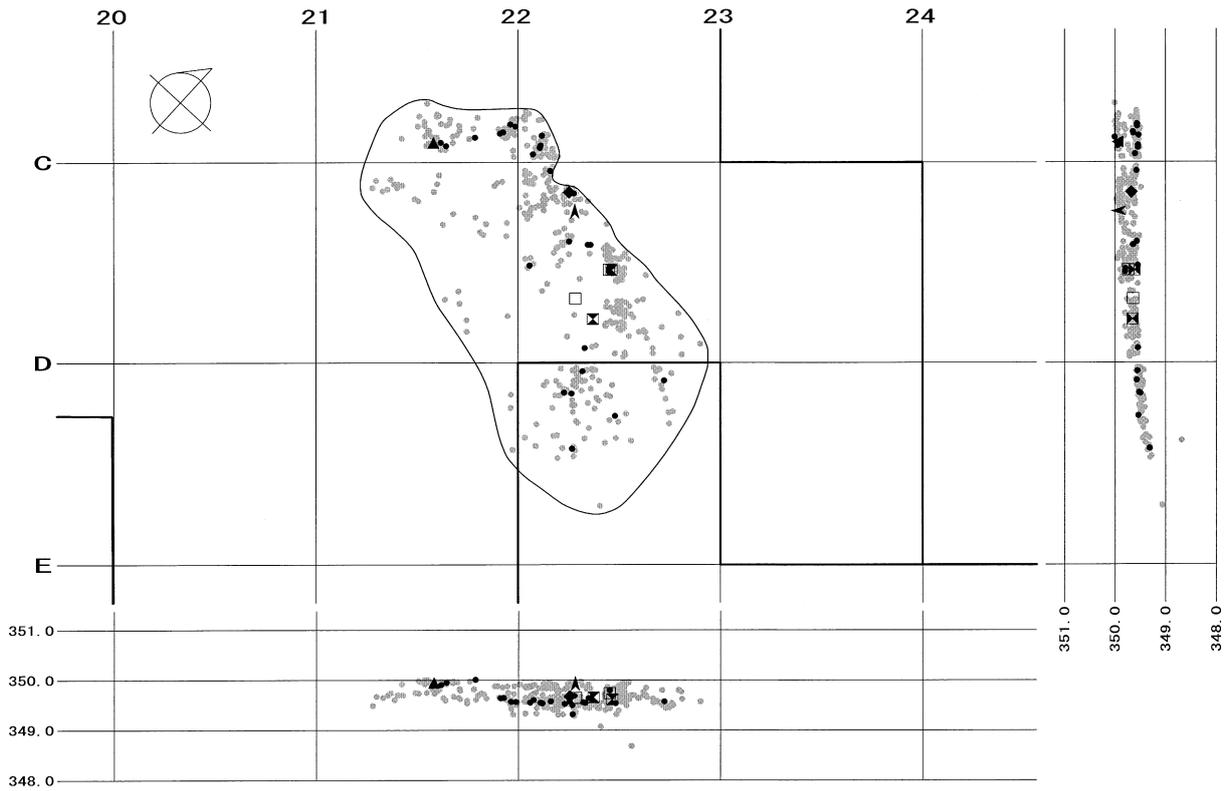
シンボル	内容	点数
●	縦長剥片	2
●	剥片	67
計		69



図III-52 Sb-3・4分布状況(平面・断面図)

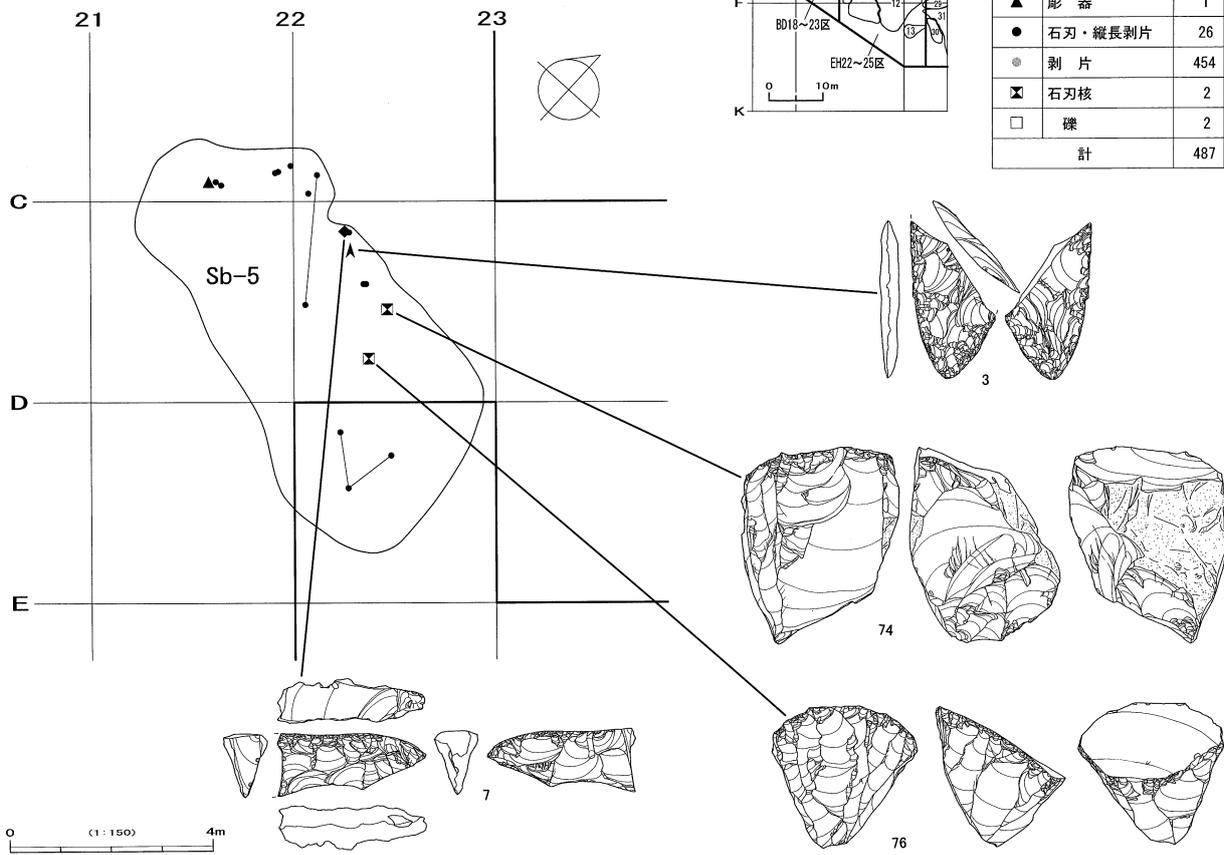
2 遺物

Sb-5



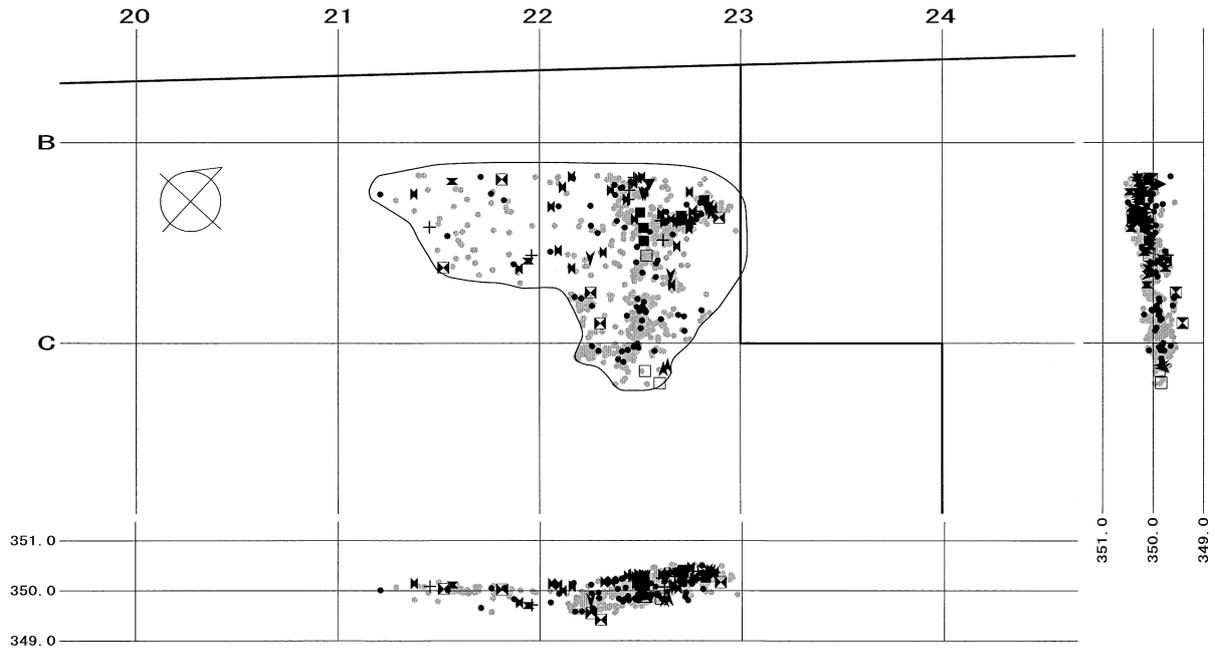
Sb-5

シンボル	内容	点数
▲	尖頭器	1
◆	舟底形石器	1
▲	彫器	1
●	石刃・縦長剥片	26
●	剥片	454
⊠	石刃核	2
□	礫	2
計		487

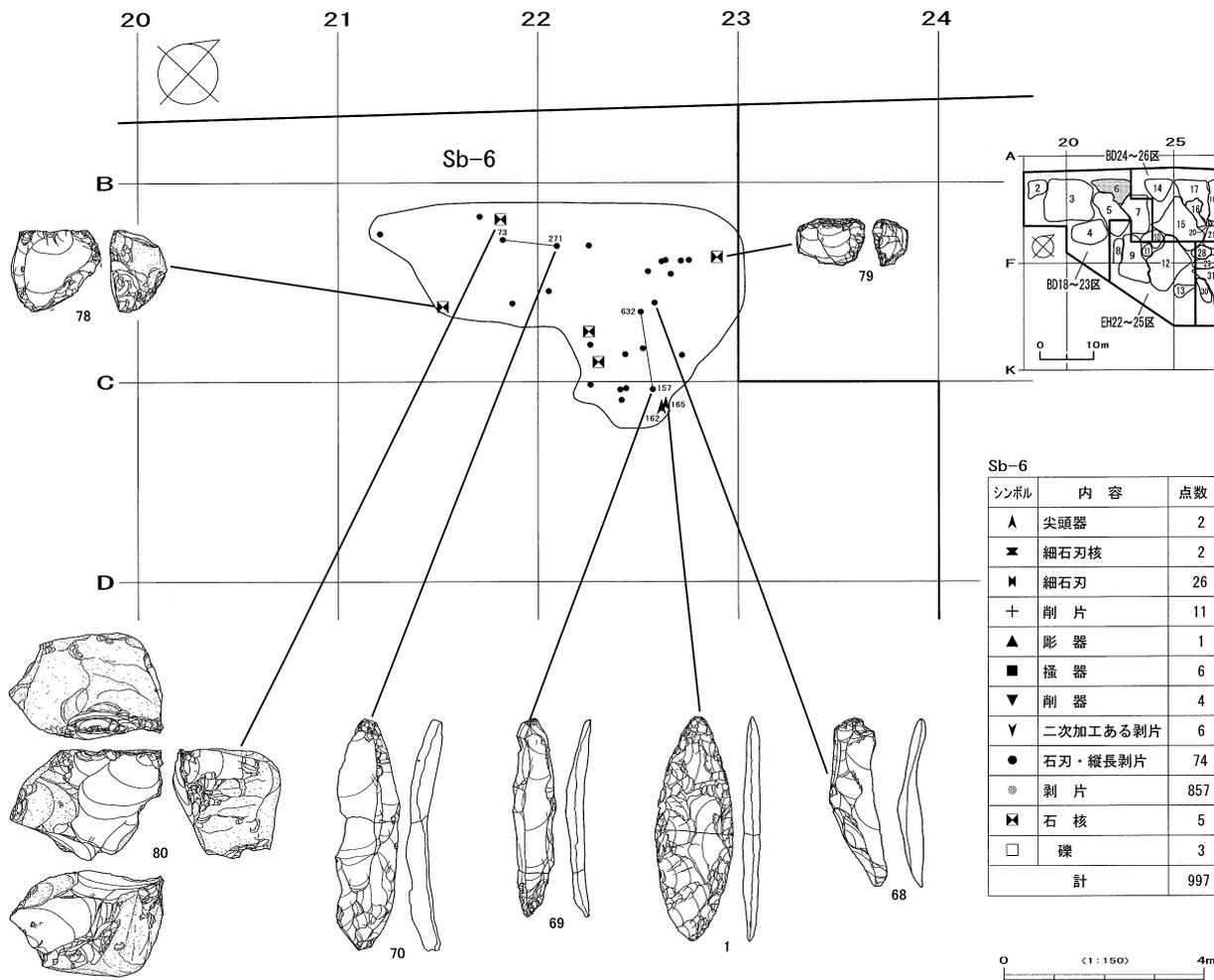


図Ⅲ-53 Sb-5分布状況(平面・断面図)

Sb-6



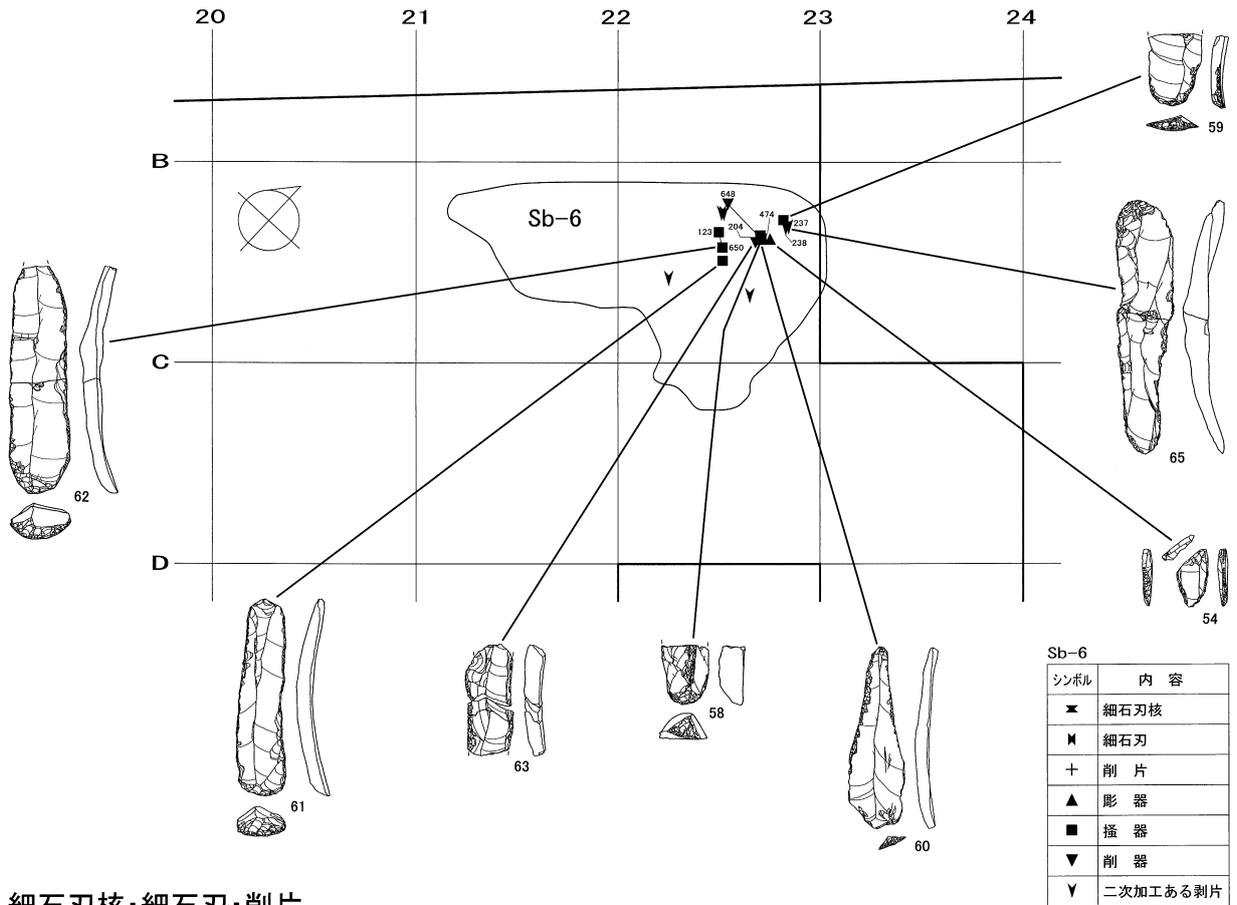
尖頭器・石刃・石核



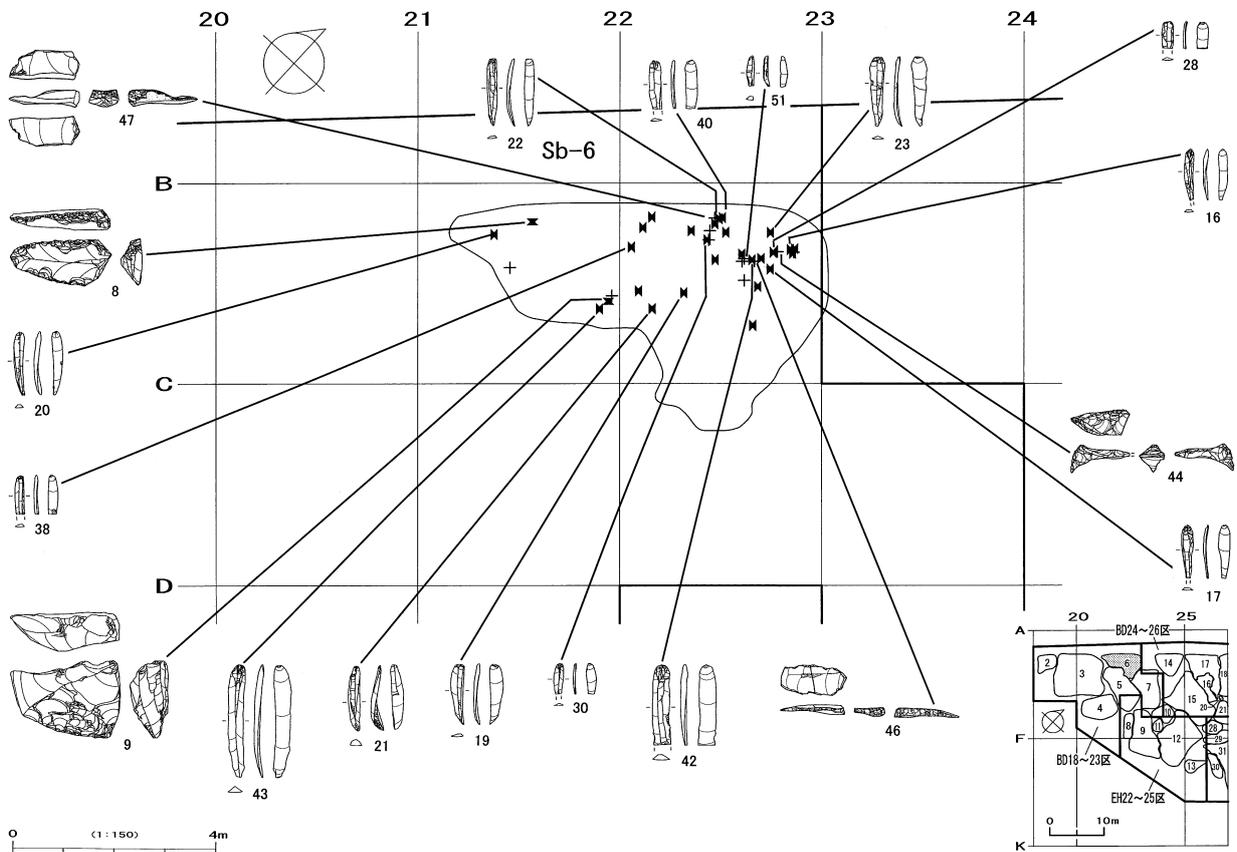
図III-54 Sb-6分布状況(平面・断面図)

2 遺物

彫器・搔器・削器・二次加工ある剥片

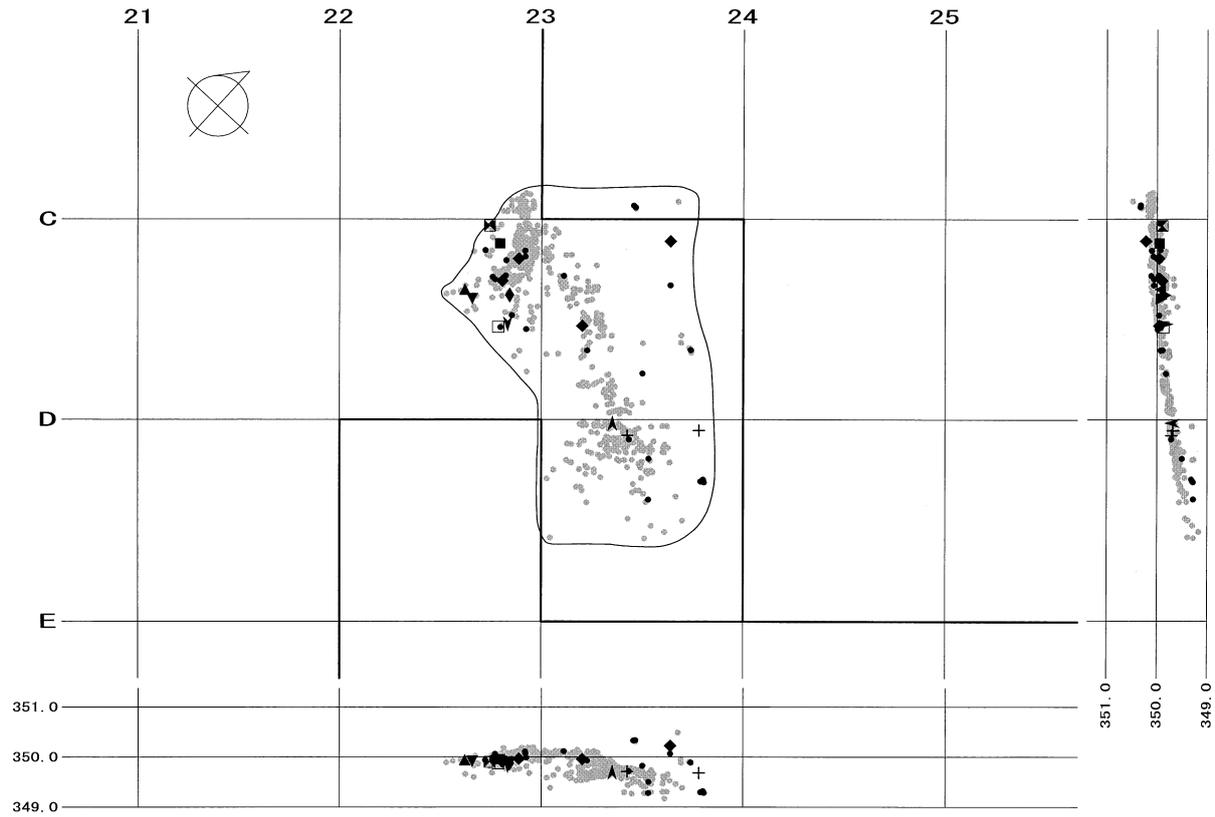


細石刃核・細石刃・削片



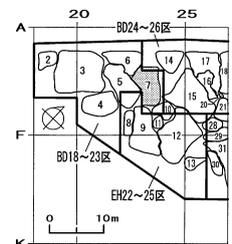
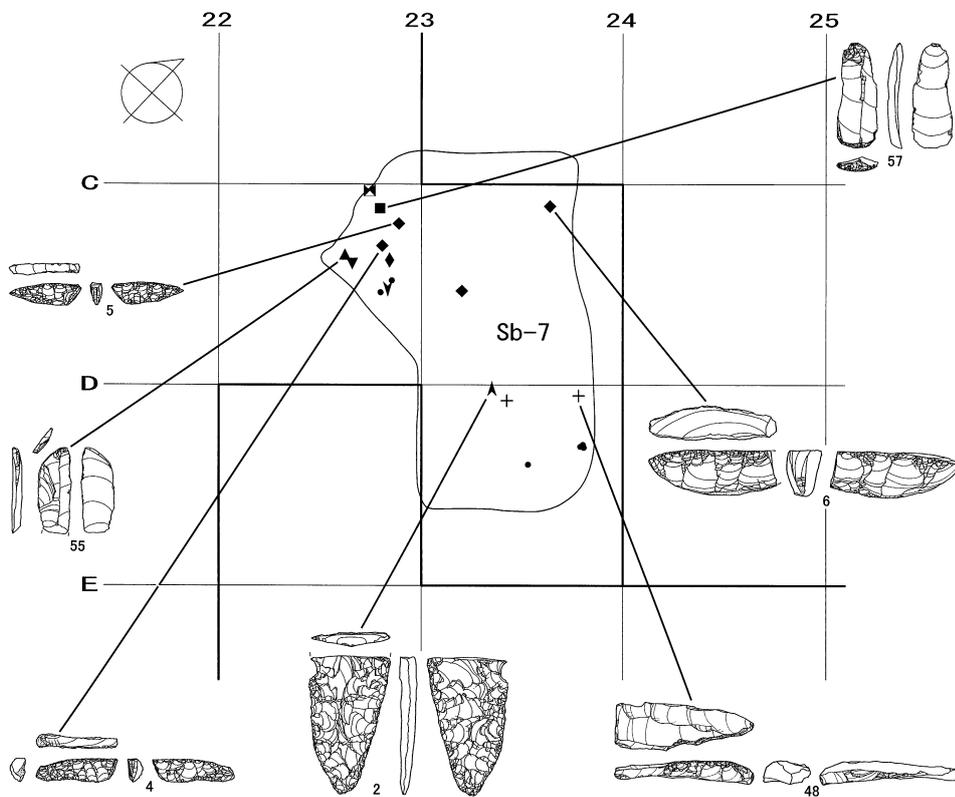
図Ⅲ-55 Sb-6出土遺物の分布

Sb-7



Sb-7

シンボル	内容	点数
▲	尖頭器	1
◆	両面調整石器	1
◇	舟底形石器	4
+	削片	2
▲	彫器	1
■	搔器	1
▼	削器	1
▽	二次加工ある剥片	1
●	石刃・縦長剥片	24
◎	剥片	785
⊠	石核	1
□	礫	1
計		823



図III-56 Sb-7分布状況(平面・断面図)

## 2 遺物

剥離面接合関係を持つ資料は全体で214点（43.9%）に及び、剥片では193点（42.5%）、石刃・縦長剥片では19点（73.1%）にみられる。

### Sb-6（図Ⅲ-54・55）

Sb-6はBD18-23区北部に位置し、規模は7.5×4.5m、面積は20.5㎡を測る。遺物分布はB22区にまとまりが認められる。また、B22区では調査時にFc-6を設定し、細石刃などの小型遺物の回収を行っている。遺物内容は蘭越型ないし美利河型細石刃核石器群を主体として小型舟底形石器石器群、白滝I群が認められる。出土総数は997点・17,520.2gで、その内剥片が857点・86.0%、石刃・縦長剥片が74点・7.4%を占める。主な石器には尖頭器（2点）、細石刃核（2点）、細石刃（26点）、削片（11点）、彫器（1点）、搔器（6点）、削器（4点）、二次加工ある剥片（6点）、石核（5点）がある。

剥離面接合関係を持つ資料は全体で400点（40.1%）に及び、剥片では364点（42.5%）、石刃・縦長剥片では27点（36.5%）にみられる。

### Sb-7（図Ⅲ-56）

Sb-7はBD18-23区北東部に位置し、規模は7.7×5.4m、面積は27.8㎡を測る。遺物分布はC22区とD23区に大きく二つのまとまりが認められる。出土石器群は小型舟底形石器石器群が主体である。出土総数は823点・7,756.7gで、その内剥片が785点・95.4%、石刃・縦長剥片が24点・2.9%を占める。主な石器には尖頭器（1点）、両面調整石器（1点）、舟底形石器（4点：I a類2点、II a類2点）、削片（2点）、彫器（1点）、搔器（1点）、削器（1点）、二次加工ある剥片（1点）、石核（1点）がある。ブロック間接合は近接するSb-5との間に多くみられる。

剥離面接合関係を持つ資料は全体で361点（43.9%）に及び、剥片では347点（44.2%）、石刃・縦長剥片では11点（45.8%）にみられる。

## ② 出土石器（表Ⅲ-2～16）

出土した遺物は白滝I群と白滝I群以外があり、白滝I群は表土・II層を合わせ、剥片（16点）、石核（2点）の計18点・373.5gである。白滝I群以外は表土・II層を合わせ、尖頭器（5点）、両面調整石器（2点）、舟底形石器（8点：I a類2点、II a類6点）、彫器（4点）、搔器（8点）、削器（8点）、二次加工ある剥片（10点）、細石刃（159点）、細石刃核（3点）、石刃（85点）、縦長剥片（91点）、石刃核（4点）、石核（6点）、削片（42点）、剥片（29,048点）、礫（7点）の計29,490点・49,851.9gである。両者を合わせた総点数は29,508点、総重量は50,225.4gである。層位・取り上げ方法別の内訳はII層点取り遺物2,713点・39,439.7g、表土一括遺物900点・4,269.8g、II層一括遺物25,893点・4,733.3g、ボサ遺物2点・1,782gである。

石器石材には黒曜石（28,814点）、安山岩（7点）、頁岩（683点）、めのう（2点）、泥岩（1点）、砂岩（1点）がみられる。黒曜石が圧倒的に多く、97.6%を占める。また、頁岩が700点近く出土するのは区域内で頁岩を石材とする剥片剥離がなされているためと考えられる。石質細分できた黒曜石（2,787点）をみると、黒曜石1（558点・20.0%）、黒曜石2（20点・0.7%）、黒曜石3（126点・4.5%）、黒曜石4（1,490点・53.5%）、黒曜石5（593点・21.3%）の割合となる。

BD18-23区では①服部台型石刃石器群に特徴的な石器（平坦打面で頭部調整の施されるやや大型の石刃、石刃素材で左斜刃の彫器）、②蘭越型ないし美利河型細石刃核石器群に特徴的な石器（細石刃核）、③小型舟底形石器石器群に特徴的な石器（小形舟底形石器I a類、薄手でやや柳葉形の尖頭器）、④白滝I群が認められる。分布状況では①がSb-3、②がSb-6を中心に隣接するSb-5・7

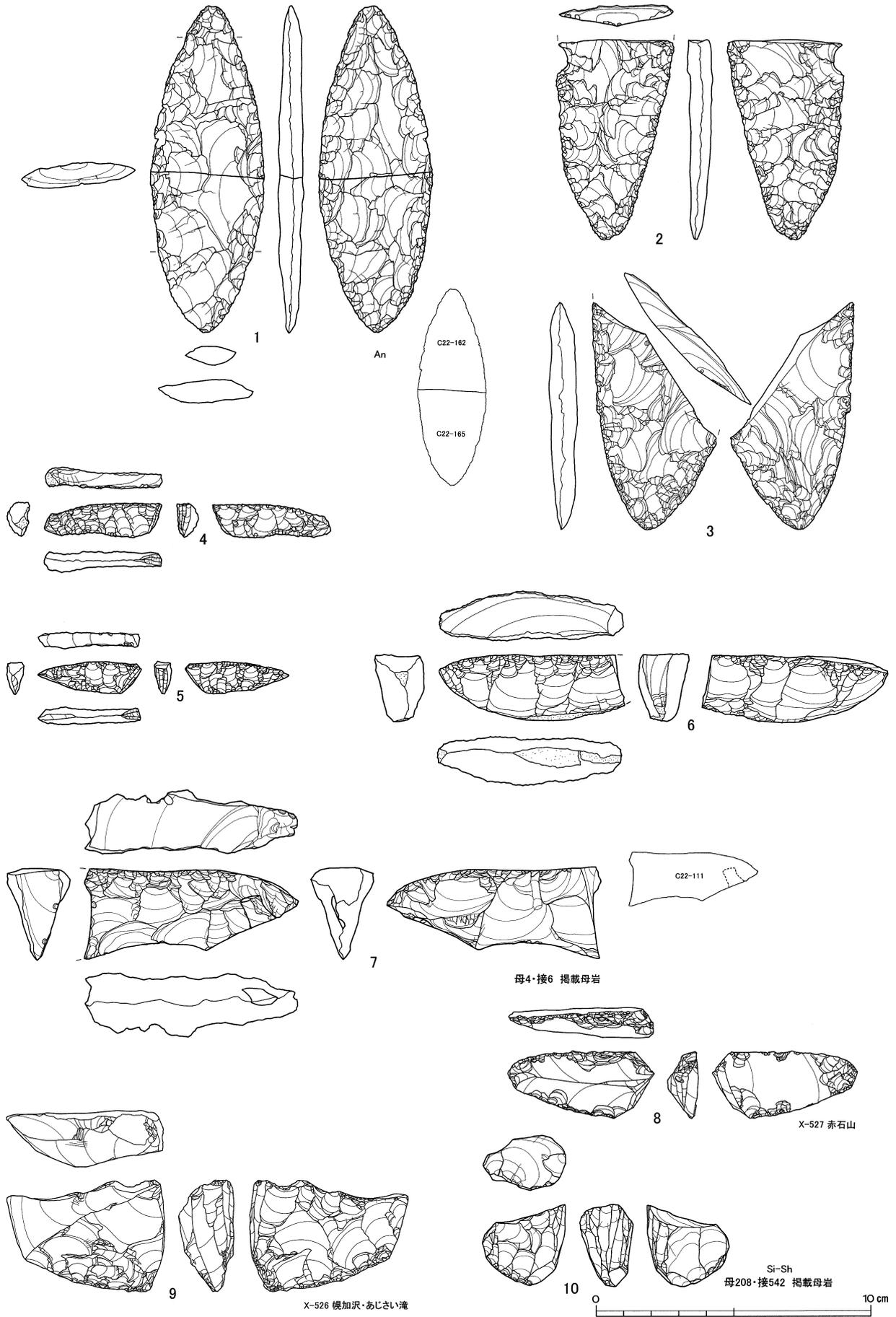


図 III-57 BD18-23区の石器(1) 尖頭器・舟底形石器・細石刃核

に僅かに広がり、③がSb-5・7を中心にSb-6に少量あり、④がSb-6にみられる。このため、②・③・④の明確な分離は困難であった。これらのことから当該区は上記①服部台型石刃石器群、②蘭越型ないし美利河型細石刃核石器群、③小型舟底形石器群、④白滝I群の出土区域として認識した。

#### 尖頭器 (図Ⅲ-57-1～3、図版67)

尖頭器は表土・II層を含め5点・4個体が出土し3個体を図示している。全てI類(舌部・削片剥離のないもの)である。図示したものでは1がSb-6の縁辺、2がSb-7、3がSb-5から出土しており、いずれも小型舟底形石器I a類石器群と関連する可能性がある。器体はいずれも加工が進み薄手で、素材面は残存していない。石材は1が安山岩、それ以外は黒曜石である。

1は折損した完形品で、器体中央部に最大幅を持つ。裏面を全周するように細かな加工が施されている。2は上部折損品で、柳葉形を呈していたものと思われる。左側縁上部に深いノッチ状の加工が施されているが、この加工は折損後に行われた可能性がある。3は上部折損品である。正面の下端部を中心に細かな加工が施されている。正面左側からの加撃により器体が折損したものと思われる。

#### 舟底形石器 (図Ⅲ-57-4～7、図版67)

舟底形石器は表土・II層を含め8点・7個体が出土し4個体を図示している。器種類型は4・5がI a類(高さ8～12mm、幅7mm以下)、6・7がII a類(加工が粗く15cm以下、主に10cm以下)である。石材は全て黒曜石で、黒曜石3・4が使用されている。

4はやや外湾する甲板面で、裏面端部に平滑な原石面が残存している。左右側面とも上下からの細かい加工が施されている。正面端部に幅2mm前後の4枚の縞状剥離がみられ、中央の最終剥離はヒンジフラクチャーを起こしている。5はやや外湾する甲板面で、裏面側のキール部分に素材面が残存し、裏面端部に向かって収斂する形状となっている。両側面には上下からの細かな加工が施され、正面には4枚の縞状剥離がみられる。6はキール部と裏面端部に転礫面が残存するものである。甲板面からの加工のみ施され、左側面の加工は比較的平坦な加工となっている。甲板面はうねりがあり分割面の打面部に近い部位が取り込まれている。7は左右の側面とも粗い加工の状態、左側面下端からの加工の一部がヒンジとなっている。

#### 細石刃核 (図Ⅲ-57-8～10、図版67)

細石刃核は表土・II層を含め3点・3個体が出土し全て図示した。石材は8・9が黒曜石で、10が頁岩である。

8は石刃を素材とするもので、素材の打面側に細石刃核作業面が設定されている。最終的に彫器に転用されており、細石刃剥離打面は作業面からの細かな加工により失われている。峠下型の範疇に含まれ、長さ/高さが2.1、基部長/高さが1.6でいずれも峠下型1類の基準(山田2006)に合致するが、高さ/幅は2.2で2類に含まれる。素材背面側への周縁加工は微弱で、細石刃打面付近が比較的急角度となっている。素材腹面側には部分的に平坦加工が施され、特に基端部は両側からの加工により薄く整形されている。細石刃剥離面と素材腹面との稜線が摩耗し、付近には横方向の線状痕が観察できる。また、左側面下縁部にも部分的に稜線の摩耗と縦方向の線状痕がみられる。

9は両面に加工が及ぶ楔形の細石刃核である。器面調整は下縁からの加工が中心で全体的に粗い。細石刃剥離打面部は最終的に打面再生されているが、左側面側に大きく傾き末端がウートラパッセとなっている。また、上面の裏面側にはやや内湾する素材面があり、細石刃核母型の断面が凸レンズ状ではなかったことが分かる。細石刃核作業面は現状で4cm程であるが、やや粗く均一ではない。細石刃核作業面から側面への調整痕がみられる。これらのことを総合して判断すると美利河型細石刃核の範疇に入るとと思われる。

10は細石刃核作業面側および左側面からの打面再生が最終剥離となっている。細石刃剥離痕は薄手で若干ねじれているものが多い。器面調整は下縁からの加工が中心で、背稜の形成は明瞭ではない。右側面が平坦なことから剥片素材であったものと思われる。細石刃剥離作業面の下に原石面が残存していることから細石刃剥離に伴い器体の長さが大きく変化していないことが分かる。形式的には蘭越型、美利河型のいずれかと思われるが、典型的なものではない。

#### 細石刃 (図Ⅲ-58-11～43、図版67)

細石刃は表土・Ⅱ層を含め159点・157個体が出土し33個体を図示している。頁岩を石材とするものは12～15・22～37・39・40である。打面が確認できるのは12～17・19～43で、いずれも頭部調整が施され大半が平坦打面であるが、19・26・32・33・35は複剥離打面、20・28は調整打面となっている。打面は長軸に対して直角となるものが大半であるが、12・19・23・32・34は打面の傾きが右上がり、20・29・38は左上がりの形態となっている。また、29の打面は窪みが大きく打面作出後の打点に近い位置と思われる。器体がねじれているものは14～23・27・34・35・38・40～43でいずれも器体の下部が左にねじれている。細石刃核の側面調整が取り込まれているのは、11・16～21・38で、11・21は左右に、16・19は左側、17・18・20・38は右側に調整痕がみられる。また、20には細石刃核の素材剥片の腹面とみられる大きなリングを持つ一面も存在する。

11～18は幅5mm未満のものである。11の幅は1.5mmと特に小さく、小型舟底形石器Ⅰa類の縞状剥離に対応するものと思われる。出土位置の周辺には舟底形石器関連の石器も多く出土している。12は両側縁全体に細かな急角度加工が施され、末端部はノッチ状の加工により突出部が作出されている。15の正裏面には焼け弾けがみられる。

16～41は幅5mm以上9mm未満のものである。21の末端は細石刃核の下縁部の一部を取り込んでおり肥大している。22の打面幅は4mmと広く、側縁の最大幅とほぼ同じである。

42・43は幅9mm以上の大型のものである。いずれも黒曜石4が利用されている。

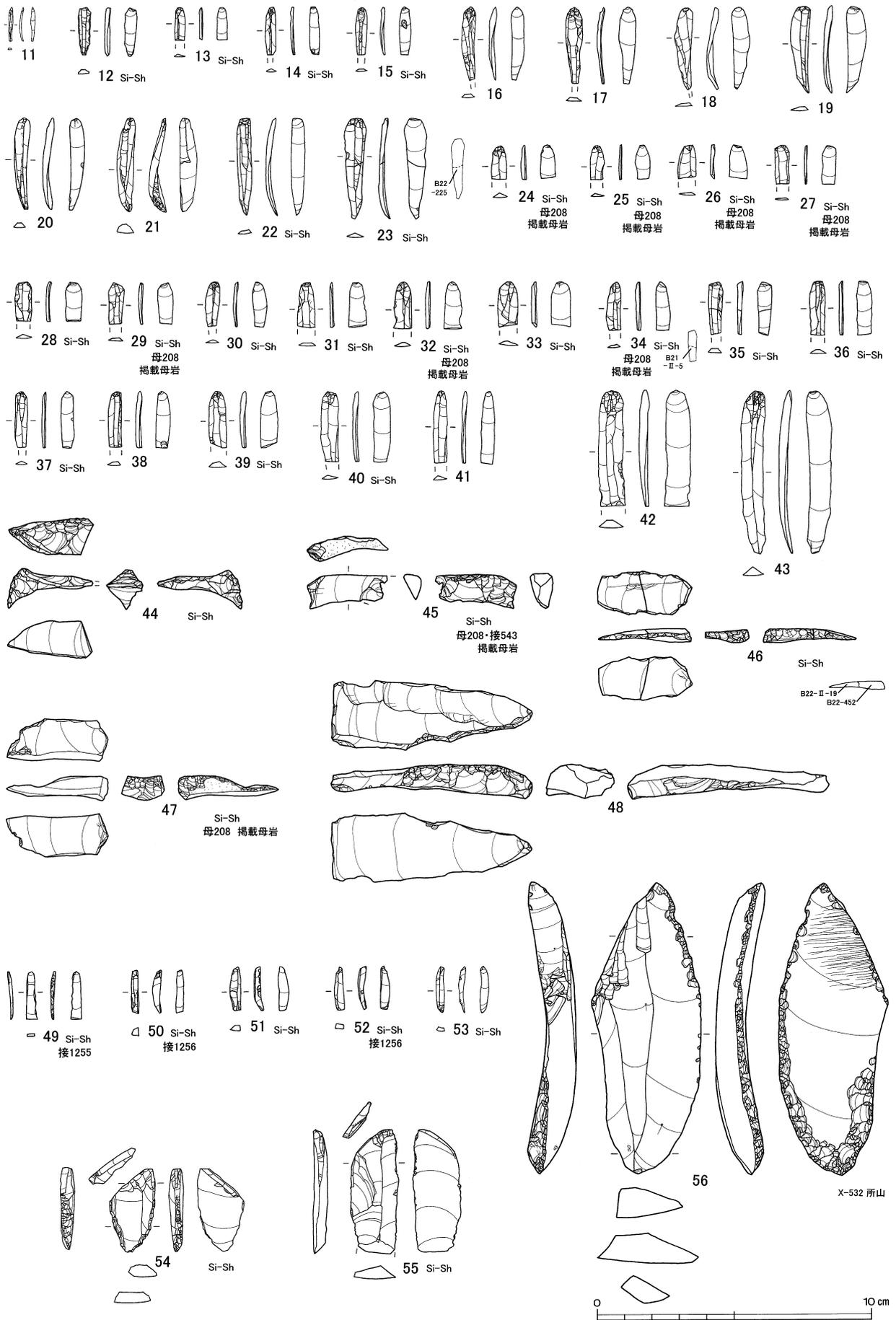
#### 削片 (図Ⅲ-58-44～53、図版67・68)

削片は表土・Ⅱ層を含め42点・41個体が出土し10個体を図示している。石材は48のみ黒曜石で、その他は頁岩が用いられている。

44～48は細石刃核削片で、44・45が一次削片、46～48が二次削片である。44はやや珪質分が強い石質で、上面は右側面からの加工、背稜は両面加工によって入念に母型形成されている。45は削片剥離が大きく右側面側に傾いて作出されたものである。上面は平滑な原石面に覆われており、上面からの側面調整とやや粗い背稜の形成がなされている。46は剥離前に両側面への側面調整が施されている。正面の細石刃剥離痕の内、右側のものは打点部付近でステップを起こしている。47は母型形成がほとんどなされておらず、正面の一部と右側面に原石面が残存している。削片の左側縁下部には急角度の二次加工が施されている。48は両面加工の母型形成がなされ、特に正面の稜(将来の細石刃剥離作業面)に入念な加工が施されている。削片剥離前に左側面を中心に側面加工が行われている。削片の末端はヒンジとなっている。

49～53は彫器削片である。いずれも作出された彫刀面傾斜角(図Ⅰ-13)は90度前後となっている。49のみ左肩で、50～53は右肩へ刃部作出されたものである。また、50～53の打面は平坦面であることから交叉型の彫器から作出された可能性がある。49は削片剥離前に背面先端部調整が施されている。51の削片右側縁には二次加工が施されている。53には先行する彫刀面に切られた素材腹面からの加工がみられる。

2 遺物



図Ⅲ-58 BD18-23区の石器(2) 細石刃・削片・彫器

**彫 器** (図Ⅲ-58-54～56、図版68)

彫器は表土・Ⅱ層を含め4点・4個体が出土し3個体を図示している。いずれも石刃素材で、石材は54・55が頁岩製、56が黒曜石製である。54は交叉型の彫器だが、彫刀面の交点が右側に偏っており、左側が斜刃、右側が側刃となっている。左斜刃の最終的な彫刀面傾斜角は126度で腹面側に大きく傾いている。彫刀面に切られた背面先端部調整がみられる。両側縁は急角度加工が施され、基端部が収束するような形状となっている。55は左斜刃彫器で、最終的な彫刀面傾斜角は120度である。彫刀面打面は腹面からの加工によるもので、ややノッチ状の加工となっている。背面先端部調整がみられる。両側縁は加工がほとんどないものの並行し、素材面には横方向の側面調整痕が含まれる。蘭越型の石刃技法から得られる石刃の特徴に近い。56は交叉型の彫器だが、彫刀面の交点が右側に偏っており、左側が大きく、右側の彫刀面は僅かである。左斜刃の最終的な彫刀面傾斜角は75度である。腹面には彫刀面と接する面を中心に彫刀面縁辺とほぼ直交する線状痕が確認できる。側縁調整は腹面側への加工が主体である。

**搔 器** (図Ⅲ-59-57～62、図版68)

搔器は表土・Ⅱ層を含め8点・7個体が出土し6個体を図示している。いずれも石刃素材の黒曜石製で、59～61は灰色を呈し縞状の模様のある石質で、産地分析の結果59・61がケショマップ第1群、60がケショマップ第2群と判定されている。57～59は側縁調整がほとんど施されないか軽微なものである。57は平坦打面で、刃部付近に最大幅部がある。58は被熱によるクラックが多数みられる。素材背面の中央の稜線には側面調整が施され、縁辺が潰れている。刃部の角度は65度で他の搔器に比べ鋭角である。60は平坦加工による側縁調整が施されるものである。平坦打面で素材末端部折損後に右側縁と接する角部を利用して部分的な刃部が作出されている。61・62は急角度加工による側縁調整が施されるものである。61の素材は打面調整が施され、剥離開始部はリップが発達している。

**削 器** (図Ⅲ-59-63・64、図版68)

削器は表土・Ⅱ層を含め8点・5個体が出土し2個体を図示している。いずれも石刃素材の黒曜石製である。63は灰色がかかった縞状の模様のある石質で、産地分析の結果ケショマップ第2群と判定されている。軽微な加工が両側縁全体に施されている。64の素材の下部は時計回りにねじれている。透明感のある黒曜石で、産地分析の結果十勝と判定されている。長さ5mm前後の平坦加工が両側縁全体に施されている。二次加工部と素材腹面は二重パティナとなっており、素材腹面は光沢が鈍く全体的に長軸方向を中心とする傷が確認できる。

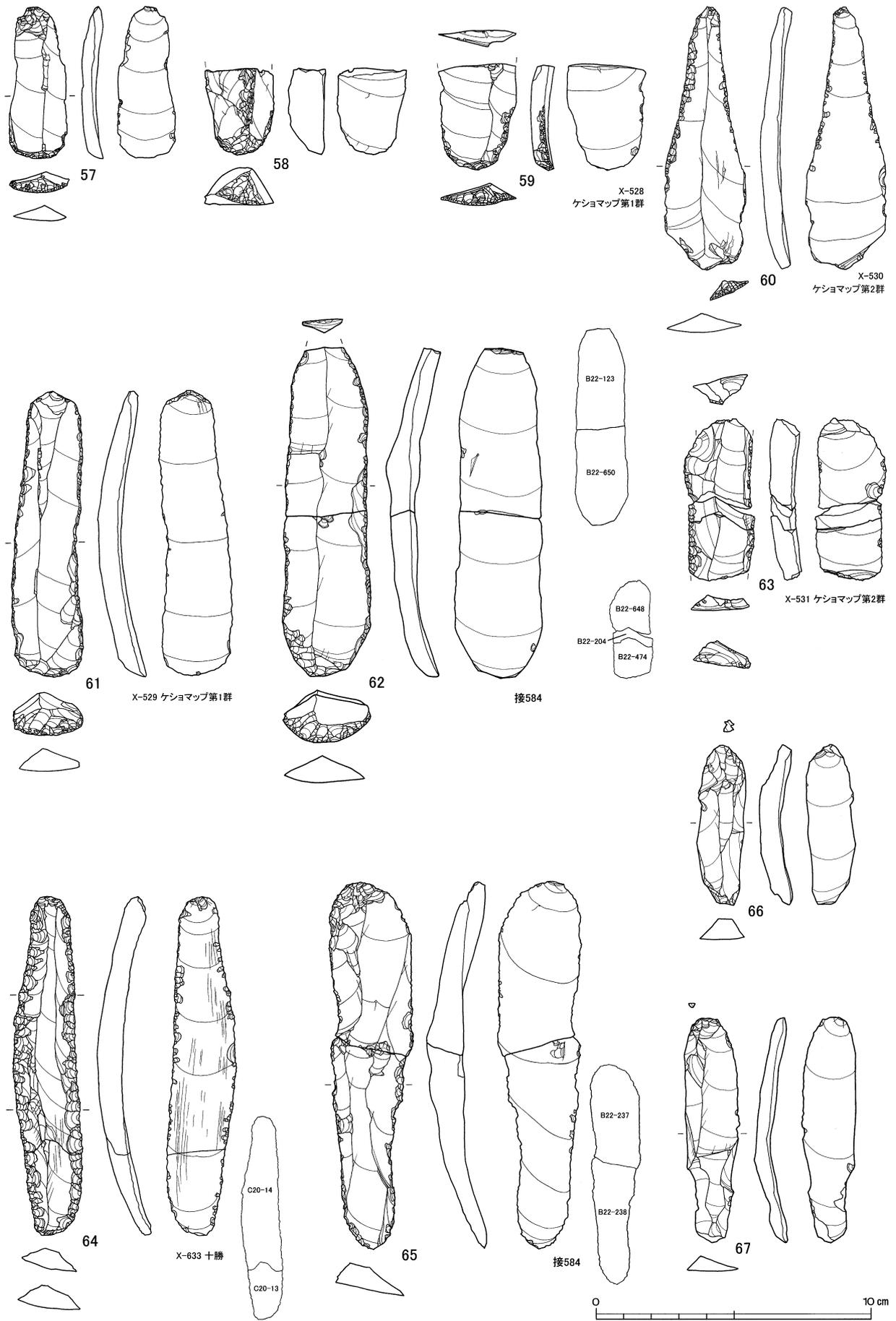
**二次加工ある剥片** (図Ⅲ-59-65、図版68)

二次加工ある剥片は表土・Ⅱ層を含め10点・8個体が出土し1個体を図示している。65は平坦打面で頭部調整の施された石刃を素材とし、器体の下半部の両側縁を主体に軽微な二次加工が連続してみられる。

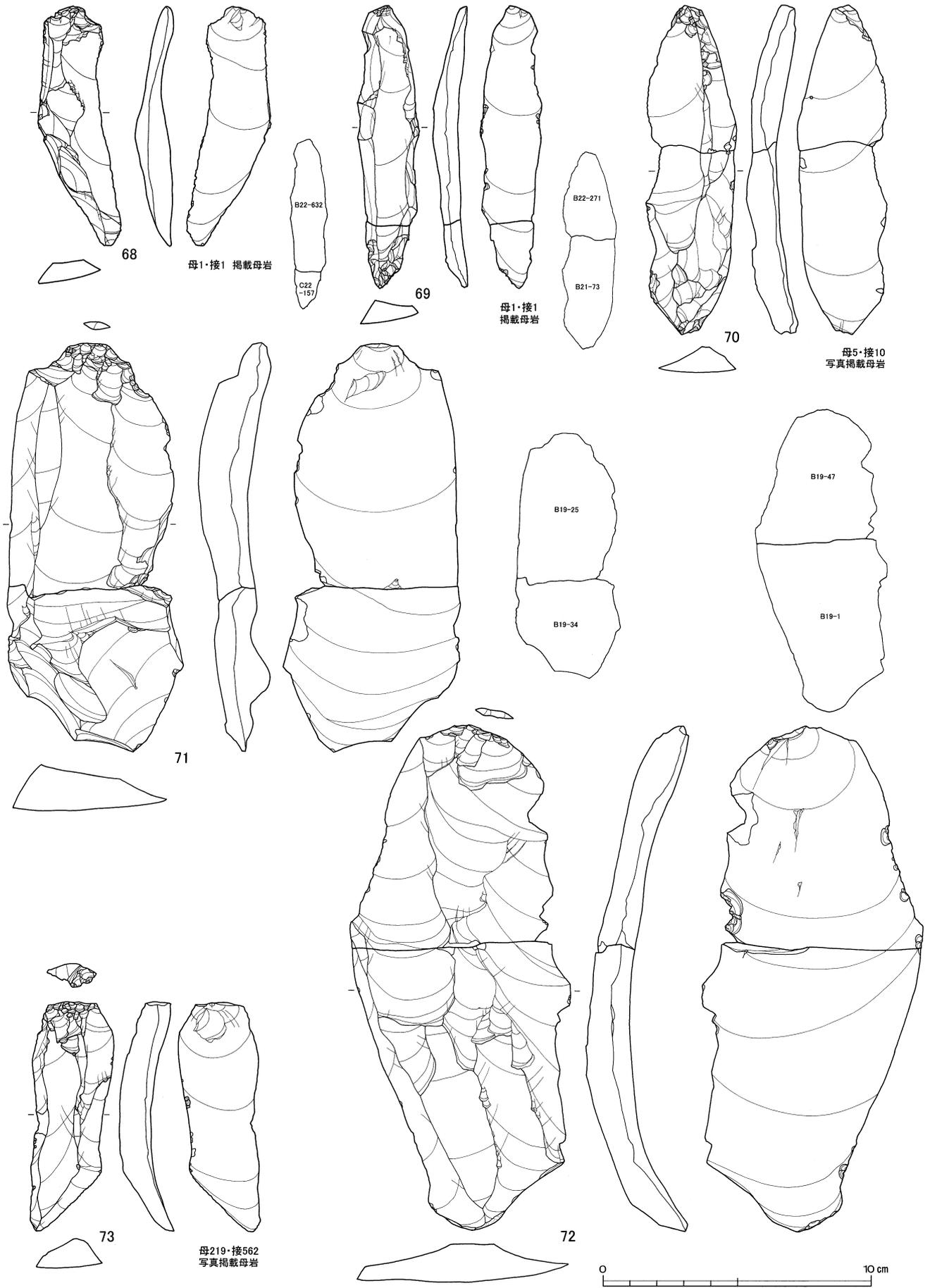
**石 刃** (図Ⅲ-59-66～図Ⅲ-60-73、図版69)

石刃は表土・Ⅱ層を含め85点・61個体が出土し8個体を図示している。66～72は平坦打面で頭部調整の施されるものである。66は小型で厚みがあり、下端部の両側縁には石核下縁を作成する下方向からの調整痕が認められる。細身の石核が想定され、楔形細石刃核における初期の細石刃剥離の可能性がある。打面の作出方向が左側面後方からで、さらに打面が平らであるため、典型的な湧別技法の細石刃核ではなく幌加技法が想定されうる。67は下半部の両側縁が急角度で、細身の石核が想定される。68の下部は左にねじれている。背面左側は横方向の石核調整痕に覆われている。69は正面から左右に加工した稜調整痕がみられる。70の下半部は横方向の石核調整痕が残存している。剥離

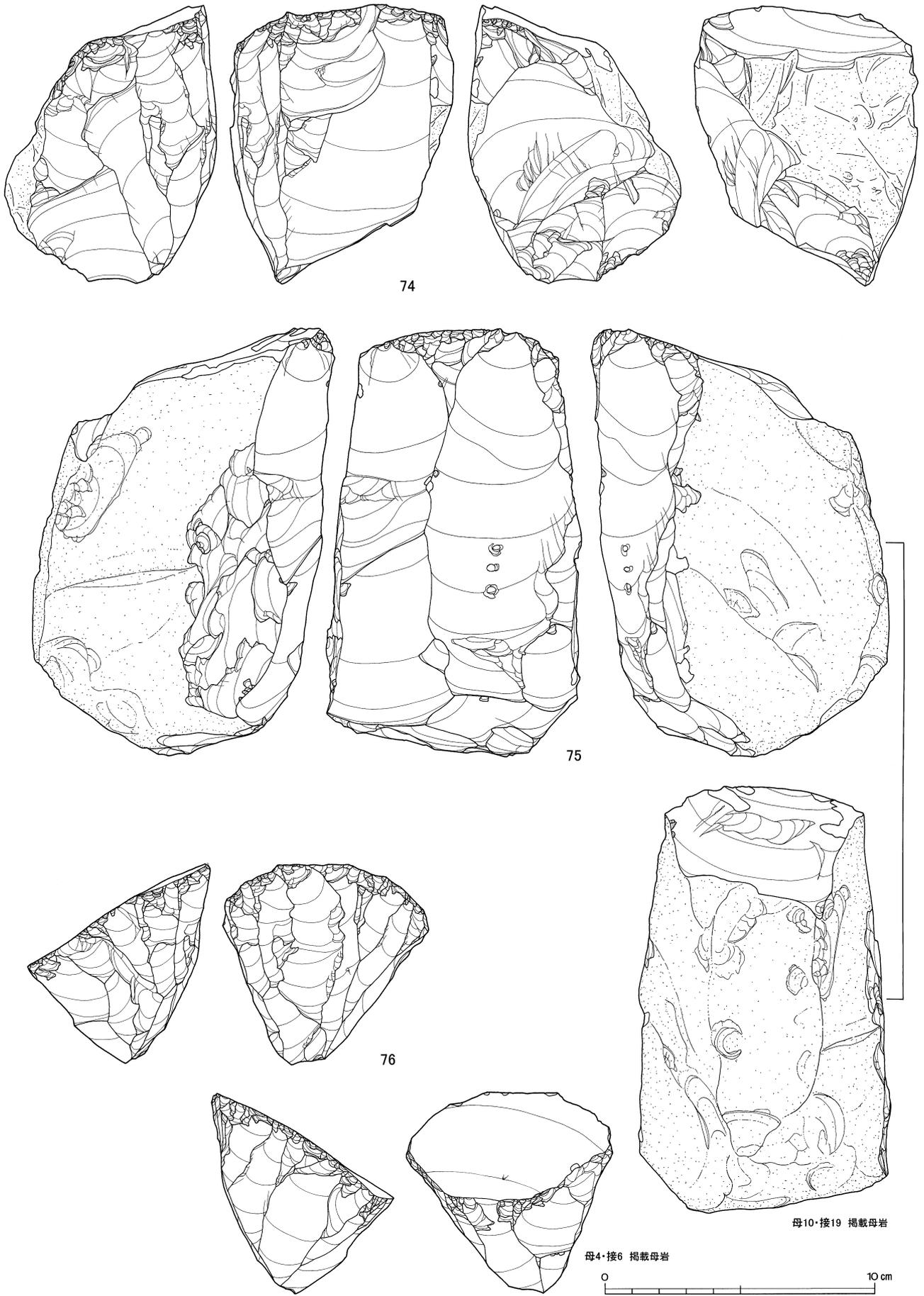
2 遺物



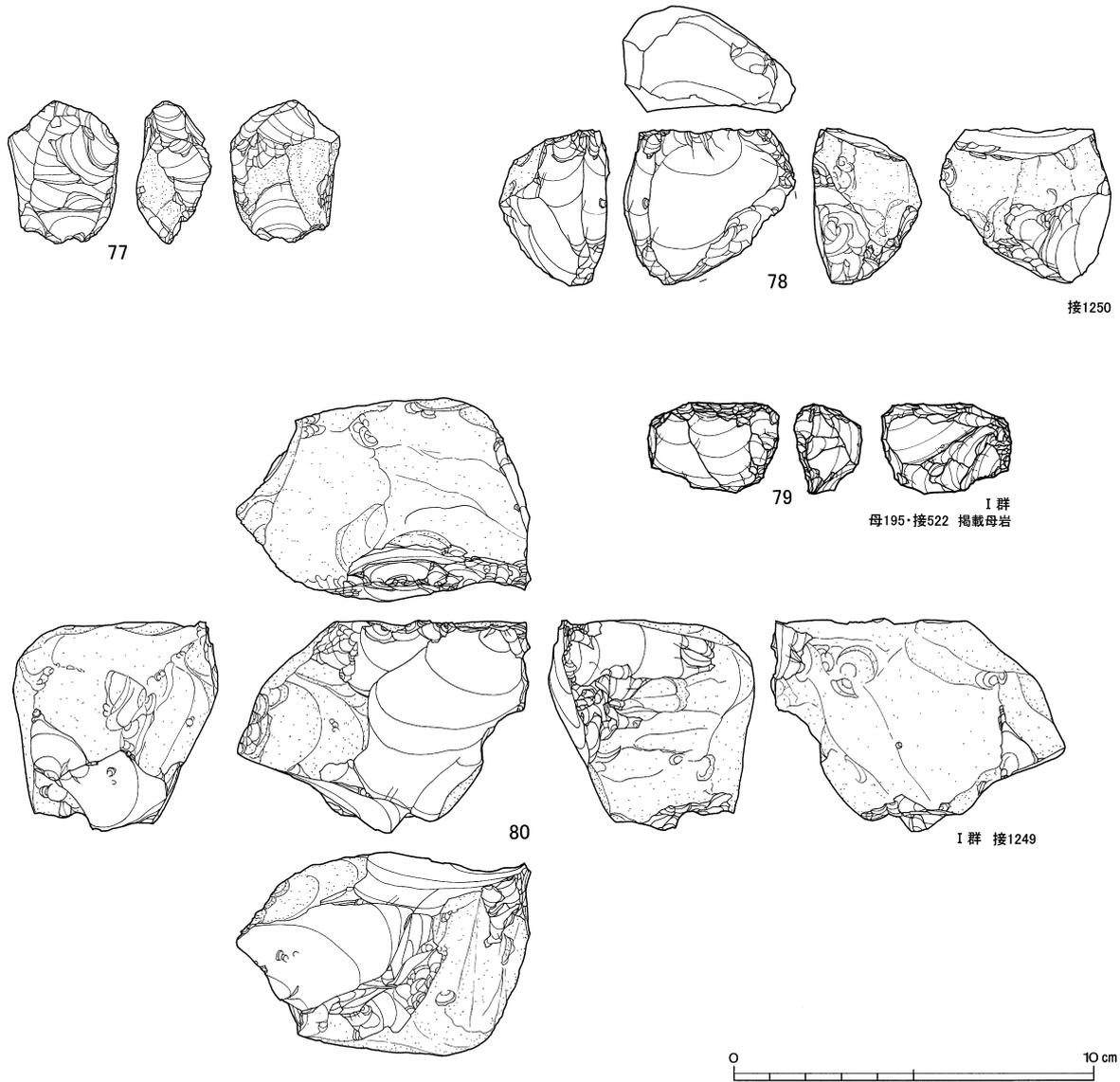
図Ⅲ-59 BD18-23区の石器(3) 搔器・削器・二次加工ある剥片・石刃



図III-60 BD18-23区の石器(4) 石刃



図Ⅲ-61 BD18-23区の石器(5) 石刃核



図Ⅲ-62 BD18-23区の石器(6) 石核、白滝I群(石核)

開始部はリップが発達している。71は両設打面で、剥離末端部のうねりが激しい。剥離開始部は発達したリップとなっている。打面縁辺部は入念な頭部調整によりなだらかな丸みを帯びた形状である。72は下端部に平滑な原石面が残存している。73は頭部調整と部分的な打面調整の施されるものである。打面も含め厚手である。

**石刃核** (図Ⅲ-61-74～76、図版69・70)

石刃核は表土・II層を含め4点・4個体が出土し3個体を図示している。いずれも平坦打面で頭部調整が施されている。74は亜角礫を素材とし、頭部調整はやや粗い。石刃作業面は平面的で、正面と左側面との境が明瞭である。左側面には下からの調整打面による石刃剥離痕が残存している。75は平滑な原石面を持つ亜角礫を素材としている。石核調整はほとんどなく両側面に正面からの調整痕が残存している。原石の小口面を中心に作業が進行しており、各石刃は厚手であったとみられる。76は上からの石刃剥離がほぼ全周するものである。石核下端の頂点が裏面側に偏っているため、正面の剥離角は55度前後と鋭角で作業面が長い。反対に左側面から裏面にかけては80度前後となり作業面も短く有効な石刃が剥離されていない。

### 石核 (図Ⅲ-62-77~80、図版70)

石核は表土・Ⅱ層を含め8点・8個体が出土し4個体を図示している。77は小型の石核で亜角礫を素材とし、裏面に原石面が残存する。裏面側への打面作出後、正面の平坦な面で上下からの剥離が行われている。78は亜角礫を素材とし裏面に大きく原石面が残存する。平坦打面から正面と左側面へ剥離が行われている。79・80は白滝Ⅰ群とした。79は小型の石核で、黒曜石2が利用されている。素材を横位に用い、上から正面平坦面への剥離が主体的に行われている。80は亜角礫を素材としている。正面と上・右側面、下面と左側面で打面と作業面を入れ替える交互剥離が行われている。下面にはパンチ痕が残存している。

### ③ 母岩別接合資料

BD18-23区では29,508点が出土し接合作業の結果、68個体、1,105点の剥離面接合資料を得ることができた。接合率は3.7%である。さらに母岩分類作業によって、母岩別資料20個体(遺物点数1,387点、内剥離面接合資料36個体・997点)と非母岩別剥離面接合資料32個体(遺物点数108点)に整理され、この内13個体を挿図と写真図版、4個体を写真図版のみの掲載とした。

母岩別接合資料を作業内容別にみると、尖頭器・両面調整石器製作7個体(540点)、舟底形石器製作7個体(237点)、石刃技法関連6個体(290点)、剥片生産4個体(62点)が認められる。さらに石刃技法母岩の内1個体、剥片生産関連の内3個体が、剥離作業で生じた剥片を素材として舟底形石器製作を行う資料であった。個体比率では尖頭器製作が28%、舟底形石器製作が28%、石刃技法が24%、剥片生産が16%である。但し石刃技法と剥片生産にも舟底形石器製作の個体が含まれ、全体の44%の母岩が舟底形石器に関連している。なお、上記した母岩別資料の個体数と点数は、2種類以上の剥離技術類型に属する場合はそれぞれの類型で集計されており、その合計は実数よりも多く算出される。BD18-23区では可能性のあるものも含め5つの石器群が認められ、白滝Ⅰ群(1個体)、川西型石刃石器群(1個体)、蘭越・美利河型細石刃核石器群(7個体)、服部台型石刃石器群(2個体)、小型舟底形石器群(尖頭器製作:3個体、石刃技法:9個体、舟底形石器製作:2個体)がある。

母岩別資料の掲載は尖頭器・両面調整石器製作(図Ⅲ-63~72)、細石刃製作(図Ⅲ-73)、石刃技法(図Ⅲ-73~76)、舟底形石器製作(石刃技法含む)(図Ⅲ-76~82)、剥片生産(図Ⅲ-82)の順序とした。また一部の資料は写真図版のみの掲載とした。各作業の中では剥離技術の内容で大別したが、挿図割付の関係上若干の前後がある。母岩・接合番号により図版を検索する場合は本章末に掲載の表Ⅲ-39「母岩番号順挿図・図版一覧表」(第4分冊)を参照願いたい。

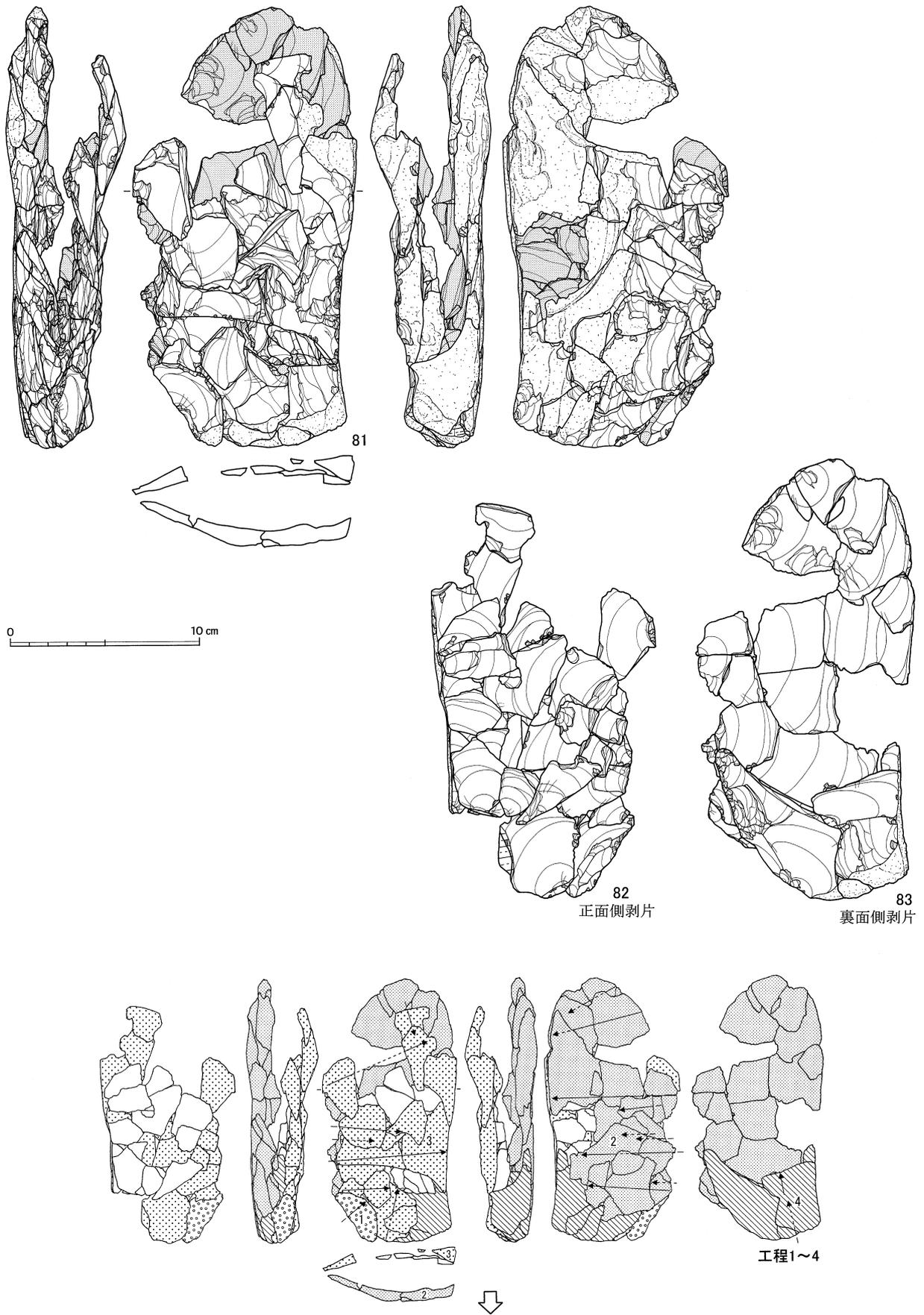
### 尖頭器・両面調整石器製作の母岩別資料 (図Ⅲ-63~72、図版71~75)

6個体(母岩3・6・8・9・12・14)を図示した。尖頭器・両面調整石器製作母岩は①角・亜角礫素材で単体を製作するもので、大きさ20~30cmの板状礫を素材とし、原石・両面調整石器の状態を遺跡内に搬入し、25cm前後の大型尖頭器を製作するもの(母岩3・8・9)、②転礫を原石で搬入し、やや粗い両面調整石器を製作するもの(母岩6・12・14)がある。分布から①は小型舟底形石器群、②は蘭越型ないし美利河型細石刃核石器群に伴うものと判断している。

### 母岩別資料8、接合資料16 (図Ⅲ-63・64、図版71)

母岩別資料8は接合資料16、非接合剥片8点で構成され、総点数は71点、総重量は676.7gである。素材 81は接合資料16で63点(27個体)が接合し、重量は654.3gである。石質は黒曜石4で、角礫を素材とし、粗割した両面調整石器の状態を遺跡内に搬入している。

母岩8 接合16



図Ⅲ-63 BD18-23区の石器(7) 母岩8 接合16(1)

**剥離工程** 石核素材の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1A i類に分類される。工程1～3で左側縁から集中的な加工が両面に行われ、中軸を越える剥離が多数なされ器体の厚みを大きく減じている。工程4では下端右側が内在割れにより大きく破損し、その段差に合わせるように急角度の厚手の剥離が左側で行われている。工程5は工程4の折れ面を除去する下端からの平坦加工である。工程6・7は正面左右からの加工である。製作尖頭器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された尖頭器の大きさは長18.8×幅11.0×厚2.3cm程度である。

**分布** 主にSb-7の西側の遺物集中範囲からまとまって出土し、少数がブロックの東部に散在している。

#### 母岩別資料9、接合資料17 (図Ⅲ-64・65、図版71)

母岩別資料9は接合資料17・18、折れ接合資料50008および非接合剥片50点で構成され、総点数は119点、総重量は832.7gである。

**素材** 84は接合資料17で64点(34個体)が接合し、重量は731.2gである。石質は黒曜石4で、角礫を素材とし、粗割した両面調整石器の状態に搬入している。

**剥離工程** 石核素材の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1A i類に分類される。工程1・2では長軸方向の剥離が裏面の上下から行われ、裏面左側縁からの連続する加工である工程3と合わせて器体の厚さを大きく減じ、原石面を除去している。下端部付近の両面調整(工程4・5)、や急角度の右側縁を平坦化する厚手の剥離(工程7・9)、中軸を越える平坦加工(工程6・8・10)が行われる。製作尖頭器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された尖頭器の大きさは長20.9×幅9.0×厚2.0cm程度である。

**分布** 主にSb-7の西側の遺物集中範囲からまとまって出土し、少数がブロックの東部やSb-5・6に散在している。Sb-5・6に散在する遺物はいずれもSb-7の集中域の遺物と折れ面接合している。

#### 母岩別資料3、接合資料3 (図Ⅲ-66～68、図版72)

母岩別資料3は接合資料3～5、折れ接合資料50002～50004および非接合剥片72点で構成され、総点数は263点、総重量は3,218.3gである。

**素材** 85は接合資料3で179点(70個体)が接合し、重量は2,919.2gである。石質は黒曜石4で、亜角礫を素材とし、背面が原石面に覆われた剥片の状態に搬入した可能性が高い。

**剥離工程** 剥片素材の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1A ii類に分類される。片面のみが接合した資料である。原石面を除去するような粗い加工が左右から施される(工程1～3)。工程2・3では打面に段差が認められるため、その間に反対面にも加工が及んでいたものと思われる。工程4は器体中央の厚みを除去する長軸方向の加工である。その後左右から全面的に平坦加工が繰り返され(工程5～8)、右側縁が直線的となる半月形の両面調整石器が製作されている。製作石器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された両面調整石器の大きさは長26.6×幅16.5cm程度である。

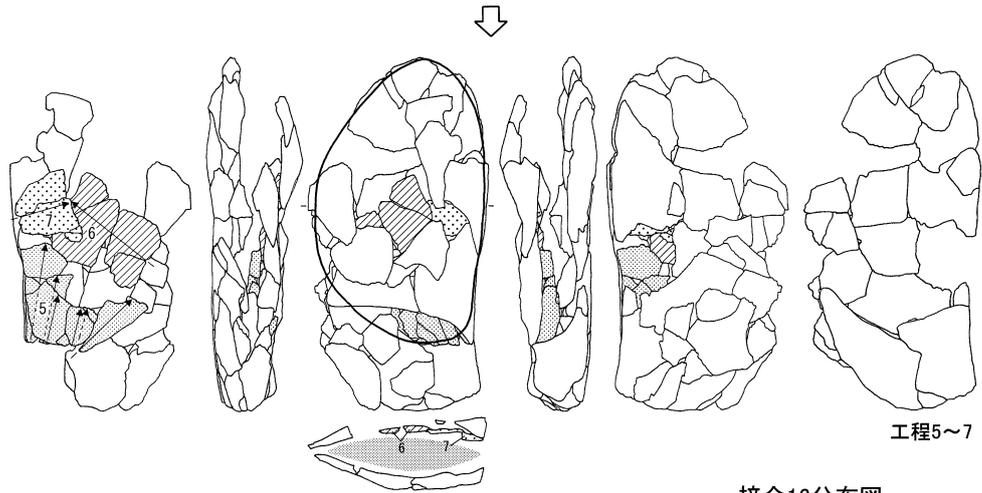
**分布** 主にSb-7の西側の遺物集中範囲からまとまって出土し、少数がブロックの東部やSb-5・6に散在している。Sb-5・6に散在する遺物はいずれもSb-7の集中域の遺物と折れ面接合している。

#### 母岩別資料12、接合資料24 (図Ⅲ-68、図版73-1)

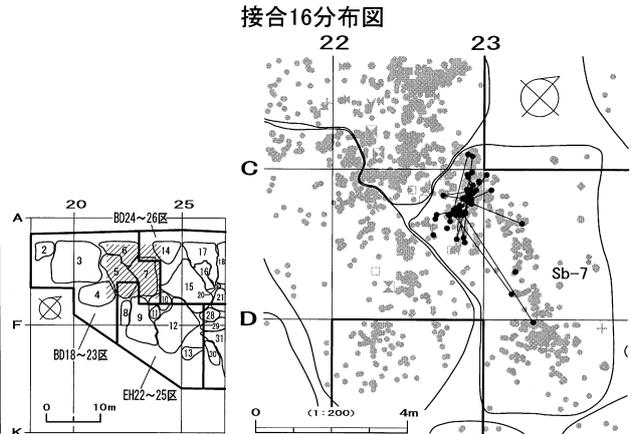
母岩別資料12は接合資料24・25、非接合剥片5点で構成され、総点数は19点、総重量は211.9gである。

**素材** 86は接合資料24で12点(8個体)が接合し、重量は190.9gである。石質は黒曜石4で、転礫を素材とし、原石の状態に搬入している。

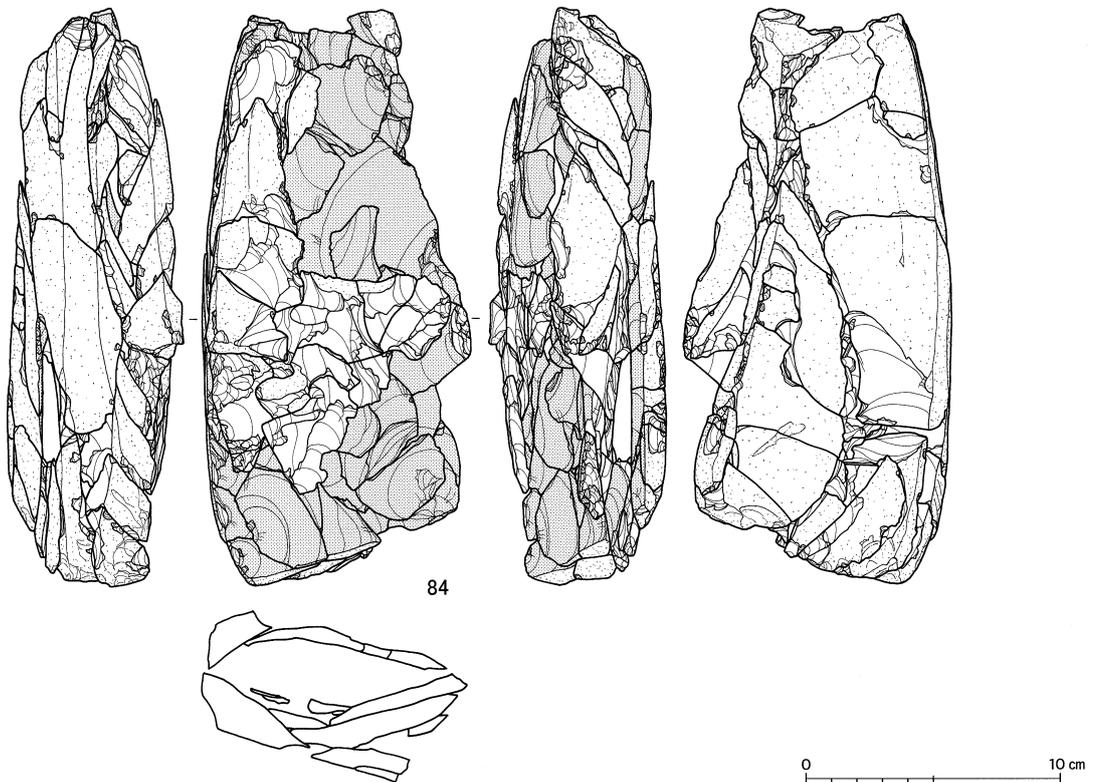
**剥離工程** 石核素材の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1E類に分類される。



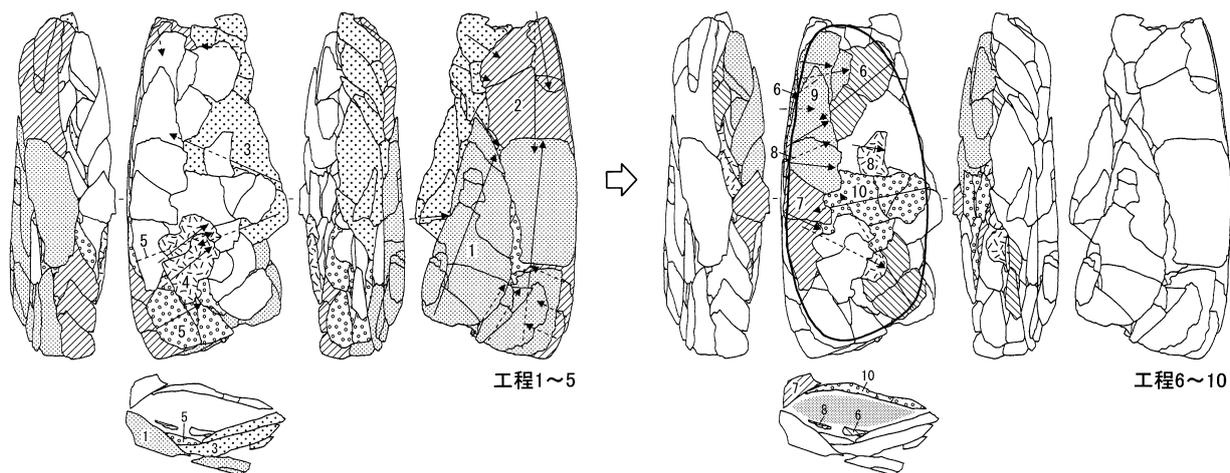
地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)	石質	接合点数	重量
BD18-23区	8	16	向面調整石器 尖頭調整作	I A i	4	63点 654.3g
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)		
Sb-7	角礫	23.3 × (11~) × (6~) cm	粗削両面調整石器	23.3 × 11.2 × 6.6 cm		
搬出石器総体数			遺跡内遺棄石器総体数			
BF・PT:1						



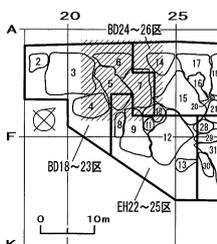
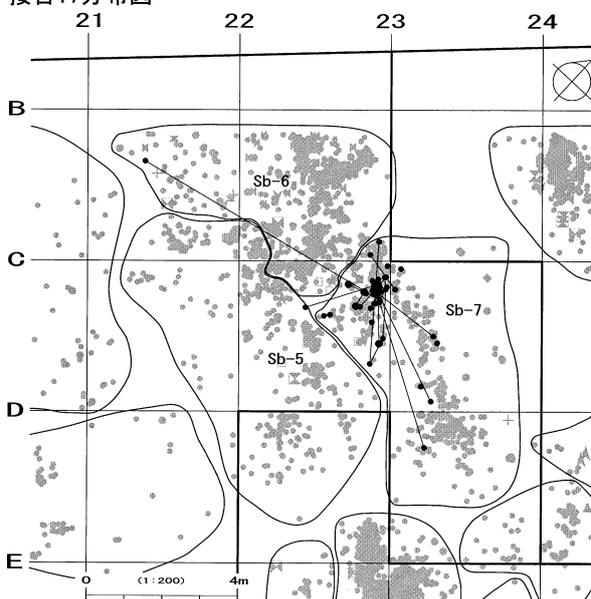
母岩9 接合17



図Ⅲ-64 BD18-23区の石器(8) 母岩8 接合16(2)、母岩9 接合17(1)



接合17分布図



地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)	石質	接合点数	重量
BD18-23区	9	17	両面調整石器 尖頭器製作	I A i	4	64点 731.2g
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)		
Sb-5・6・7	角礫	22.3 × (11~) × (7~) cm	相割両面調整石器	22.3 × 10.5 × 6.7 cm		
搬出石器個体数			遺跡内通算石器個体数			
BF・PT:1						

図Ⅲ-65 BD18-23区の石器(9) 母岩9 接合17(2)

小型の原石を素材としている。工程1～3は正裏面への長軸方向の厚手の剥離で、原石面が除去され、器体の厚みを大きく減じている。工程4・5は裏面側左右からの平坦加工である。工程4の剥離角は90度前後であることから、この時点の左側縁は急角度で全体形状として楔形を想定できる。製作両面調整石器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された両面調整石器の大きさは長9.6×幅5.3×厚2.3cm程度である。

**分布** 主にSb-6の北側の遺物集中範囲からまとも出土し、1点がブロックの東部に散在している。

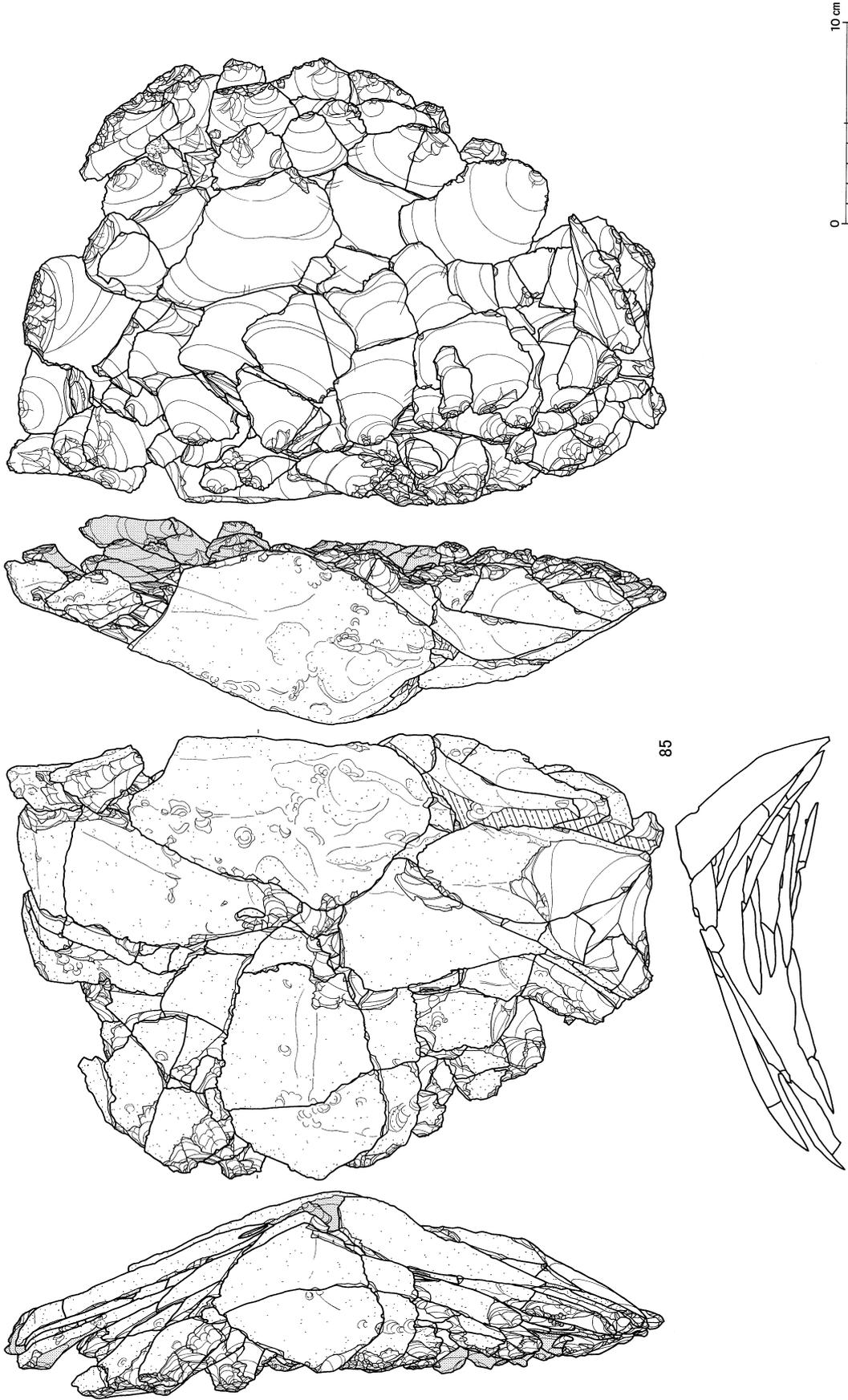
**母岩別資料6、接合資料11** (図Ⅲ-68～70、図版73-2・図版74-1)

母岩別資料6は接合資料11、非接合剥片15点で構成され、総点数は114点、総重量は1,663.2gである。

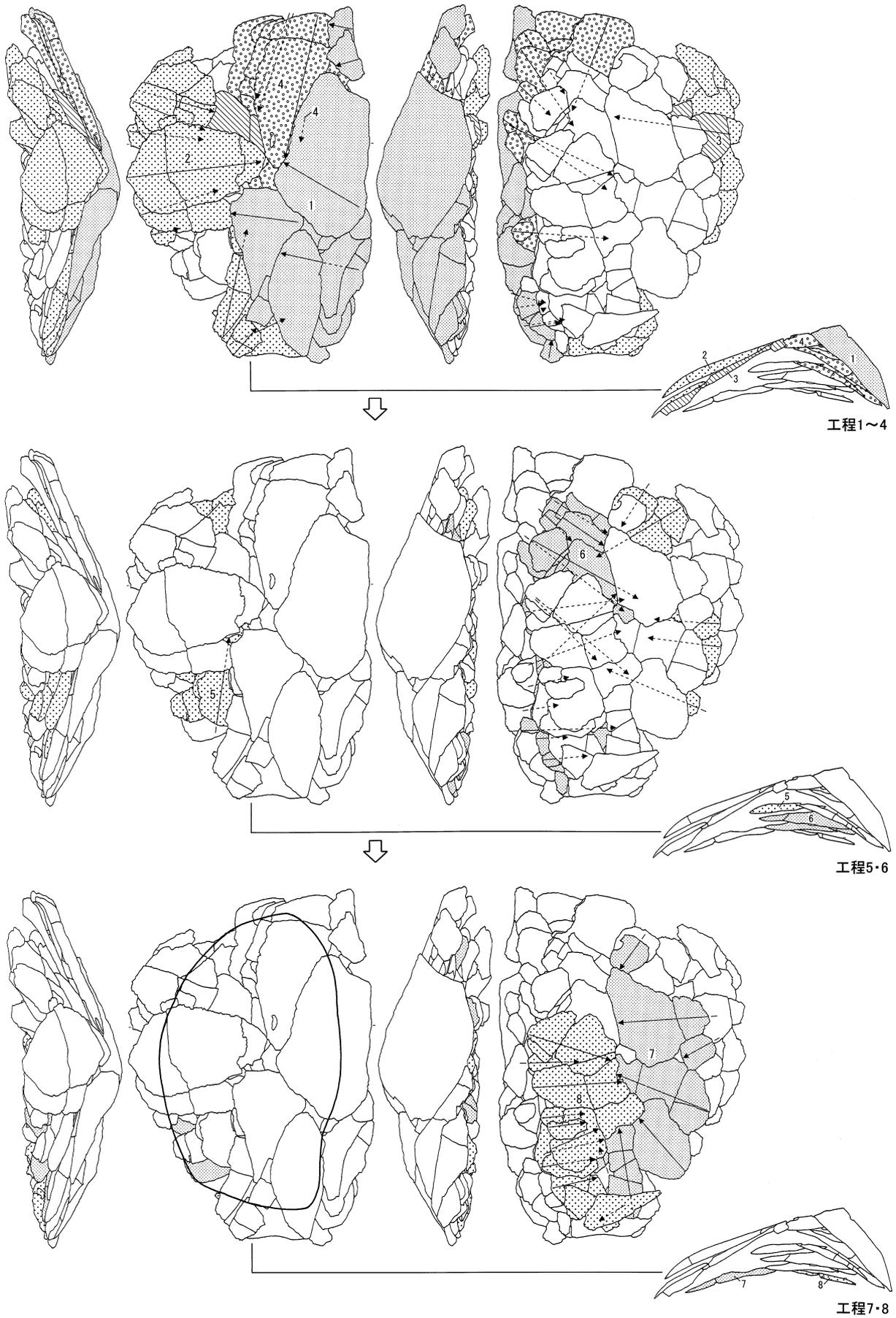
**素材** 87は接合資料11で99点(57個体)が接合し、重量は1,623.1gである。石質は黒曜石4で、亜角礫を素材とし、原石の状態に遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 石核素材の両面調整石器ないし石刃核母型を製作した資料で、剥離技術類型は1E類に分類した。

母岩3 接合3

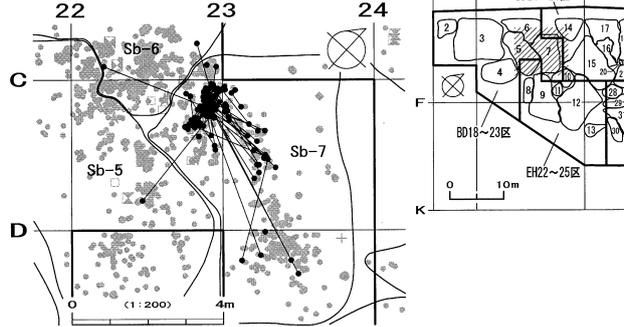


図III-66 BD18-23区の石器(10) 母岩3 接合3(1)

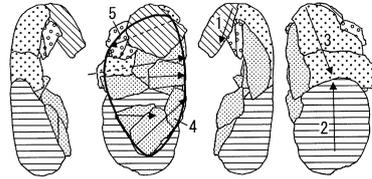


図Ⅲ-67 BD18-23区の石器(11) 母岩3 接合3(2)

接合3分布図

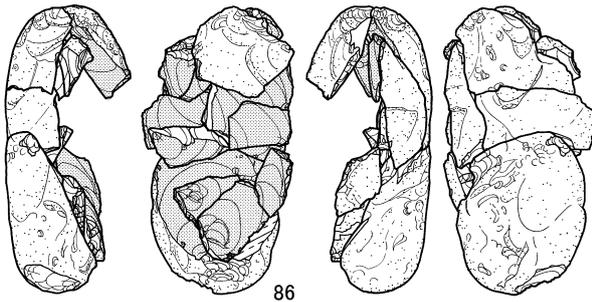


地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)			石質	接合点数	重量
			両面剥離石器 突刃器製作	1	A			
BD18-23区	3	3				4	179点	2919.2g
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)				
Sb-5-6-7	亜角礫	(32~)×(22~)×(10~)cm	剥片	32.3×22.0×9.8 cm				
搬出石器個体数				遺跡内遺棄石器個体数				
BF・PT:1								



工程1~5

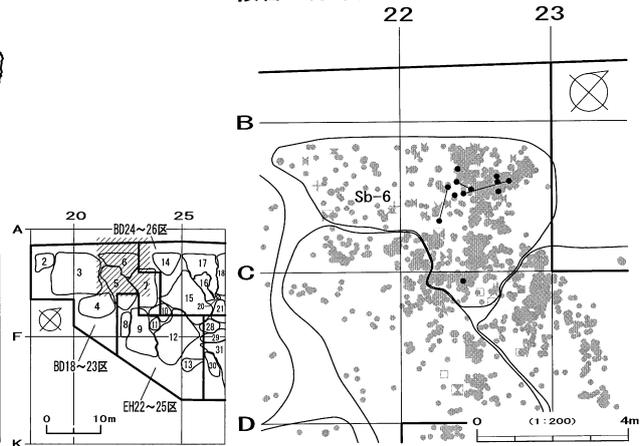
母岩12 接合24



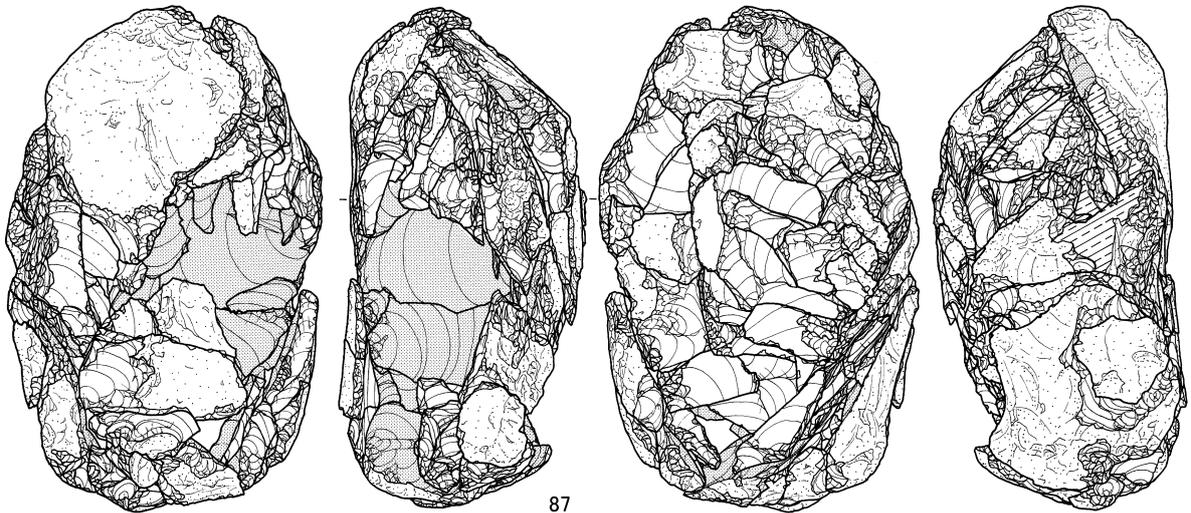
86

地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)			石質	接合点数	重量
			両面剥離石器 突刃器製作	1	E			
BD18-23区	12	24				4	12点	190.9g
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)				
Sb-6	転礫	11.2×5.8×5.0 cm	原石	11.2×5.8×5.0 cm				
搬出石器個体数				遺跡内遺棄石器個体数				
BF・PT:1								

接合24分布図



母岩6 接合11



87



図III-68 BD18-23区の石器(12) 母岩3 接合3(3)、母岩12 接合24、母岩6 接合11(1)

【工程1～5】初期段階では原石の下半部に加工が集中し、下端の側面観が収斂する形状に整形している。工程1・3・5の裏面横方向の剥離により、裏面が平坦化する。特に工程3・5は下面から裏面までの範囲で行われている。その間の工程2は裏面からの側面調整、工程4は正面への下からの剥離であり、いずれも原石面に覆われた剥片が剥離されている。

【工程6～18】主に右側面の整形と縦長剥片剥離を行っている。工程6・8・11が裏面からの側面調整である。その間の工程7・12は工程5と同様裏面横方向の剥離で、側面調整とは交互剥離となっている。工程8の最終剥離は激しいヒンジを起こしている。それを除去する目的で上からの加工（工程10）がなされた可能性がある。工程9は工程10の打面作出剥離で、これらにより上端の正面観が収斂する形状となる。工程13・16・18は右側面上からの剥離で、縦長剥片が多く含まれている。なお、工程13の縦長剥片には頭部調整が施され、工程16は内在割れにより作業面に段差が発生している。これらの右側面上からの工程間では、打面再生（工程14）、裏面を平坦化する横方向の調整（工程15）、作業面の段差の解消を狙った正面からの調整（工程17）が行われている。また工程14には工程13の打面部が取り込まれており、そこには擦痕が確認できる（図版73-117）。

【工程19～25】これらの工程では母型の整形に重きが置かれている。右側面を正面から（工程19）、上から（工程20）、下から（工程21・23）と全面的に加工し、表面の平坦化を進めている。左側面に関しても工程24で主に正面からの加工が連続して行われる。工程19・24は両面調整の関係となり正面に稜線が作出される。工程22・25は正面で作出した稜線に沿う加工で上下から行われている。

接合状態から復元された両面調整石器は正面に鋭い稜線を持ち、裏面が平坦な甲板面となる楔形のもので製作される。美利河型細石刃核の母型と認識することができ、復元される大きさは長13.5×幅4.5×高6.6cm程度である。しかし、この形態は正面を背稜として見ると裏面の平坦面を中心として石刃剥離が行われる蘭越型細石刃核の石刃核母型ともみなしうる。

**分布** 主にSb-6の南側の遺物集中範囲からまとまって出土し、少数がブロックの北部に散在している。

#### 母岩別資料14、接合資料27（図Ⅲ-70～72、図版74-2・図版75-1）

母岩別資料14は接合資料27、非接合剥片1点で構成され、総点数は95点、総重量は1,936.1gである。

**素材** 91は接合資料27で94点（64個体）が接合し、重量は1,933.1gである。石質は黒曜石5で、垂角礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

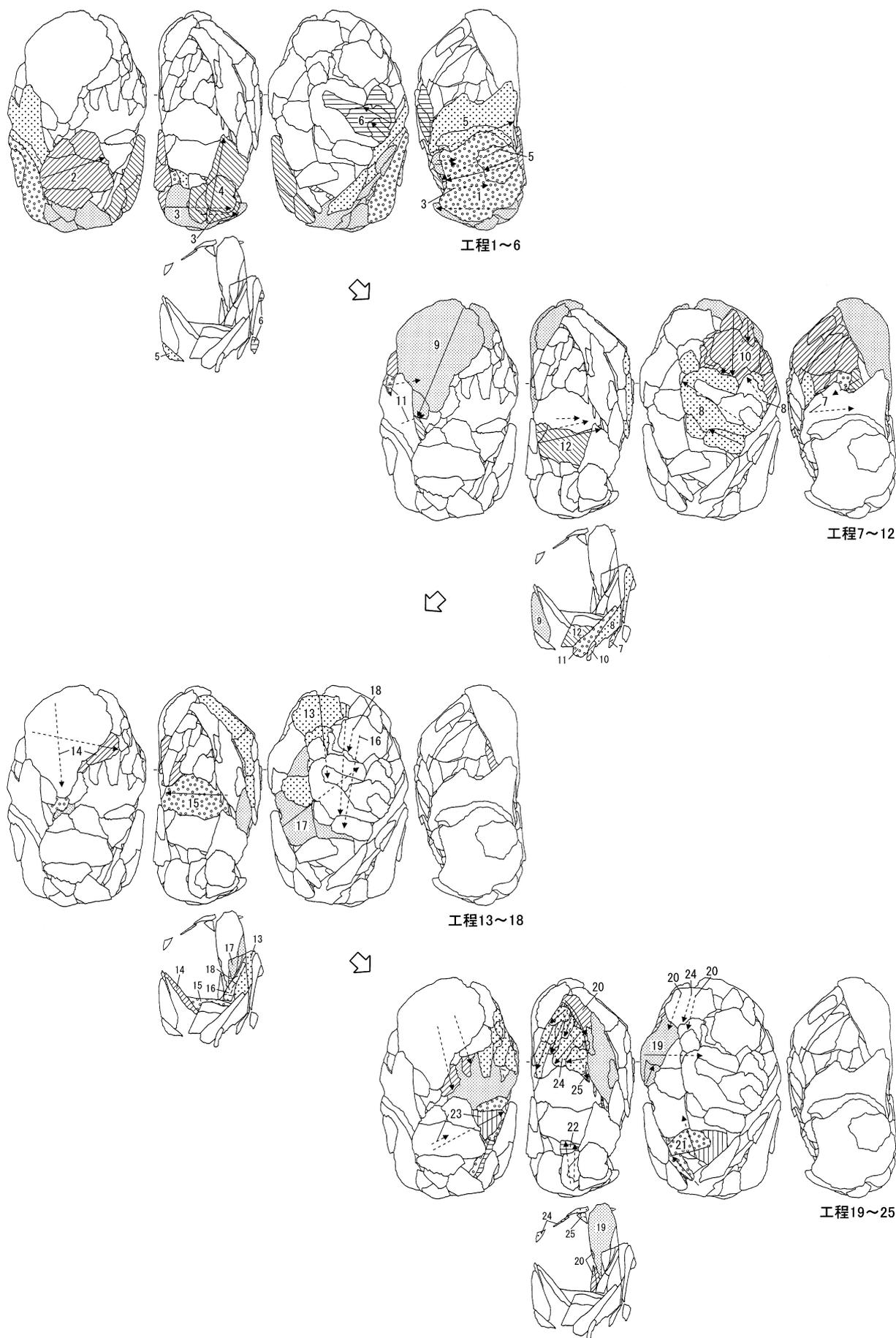
**剥離工程** 石核素材の両面調整石器ないし石刃核母型を製作した資料で、剥離技術類型は1E類に分類した。

【工程1～6】初期段階では断面が台形を呈する原石の右側面と裏面に平坦加工が集中し、各面の原石面を広く除去している。工程1では内在割れを原因とする激しいヒンジが起こっている。工程4～6は右側面と裏面との交互剥離で、角部が縁辺化している。

【工程7～11】主に正面と左側面への加工が施される。工程7は下面への加工で工程8の打面作出剥離となっている。工程8は正面への下からの加工で、末端部付近に内在割れが顕在化する。工程9・10は左側面への対向する横方向の加工で、工程10の一部で得られた面が工程11の打面となっている。工程11は正面への下からの加工で、工程8で表面化した内在割れ部分で剥離が止まっている。

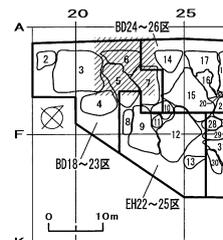
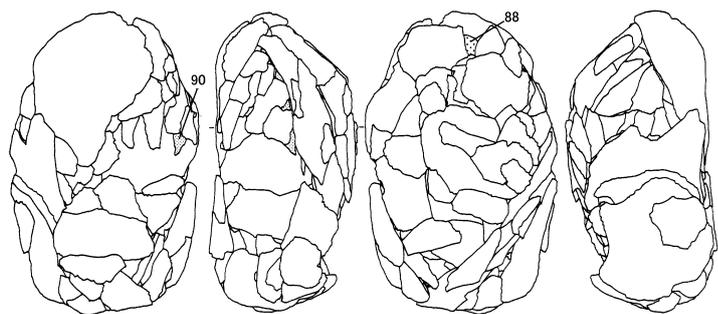
【工程12・13】右側面への対向する横方向の集中的な平坦加工である。これにより、前述の内在割れ部分の除去を試みている。

【工程14～18】裏面への集中的な平坦加工（工程14～16・18）で、主に横方向からの加工により原石面がほぼ除去され器面が平坦化している。途中の工程17は左側面への裏からの加工で、裏面との角度

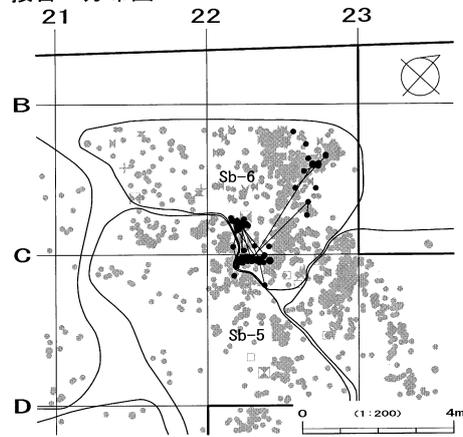


図Ⅲ-69 BD18-23区の石器(13) 母岩6 接合11(2)

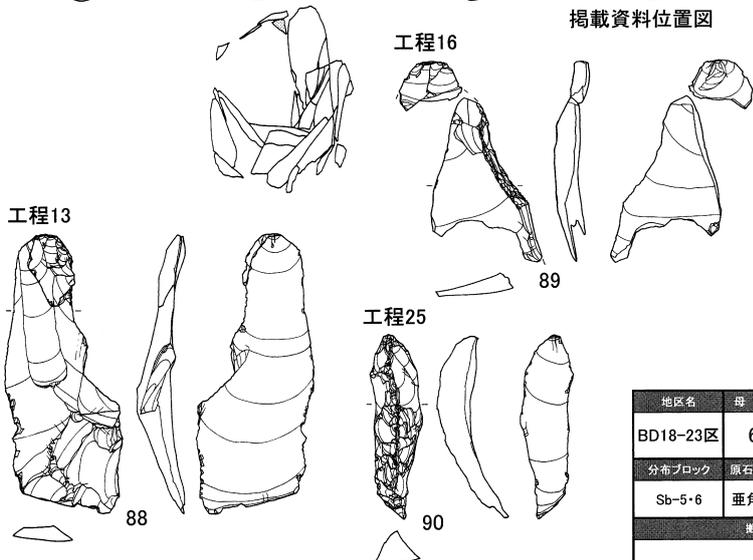
2 遺物



接合11分布図

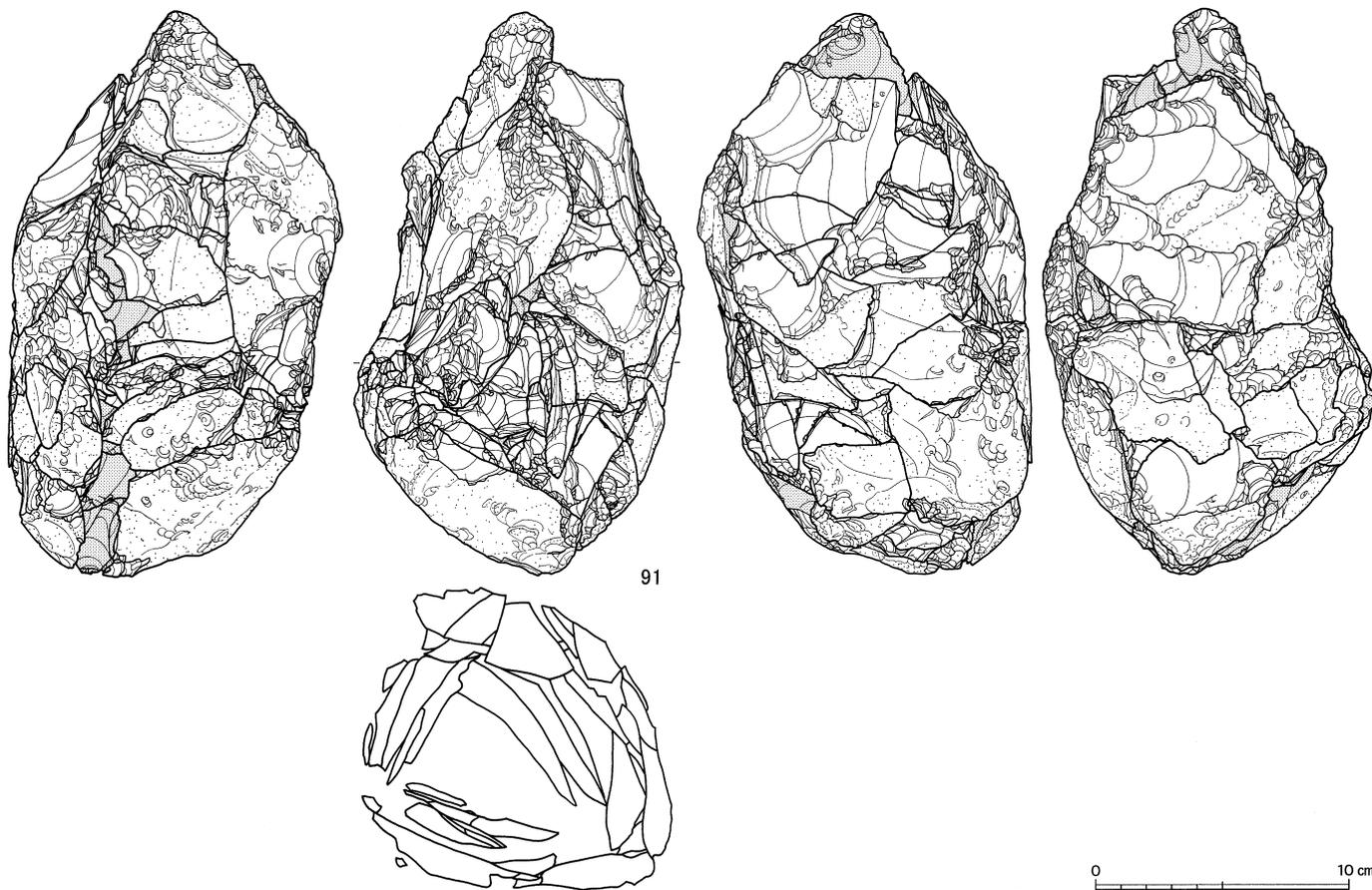


掲載資料位置図

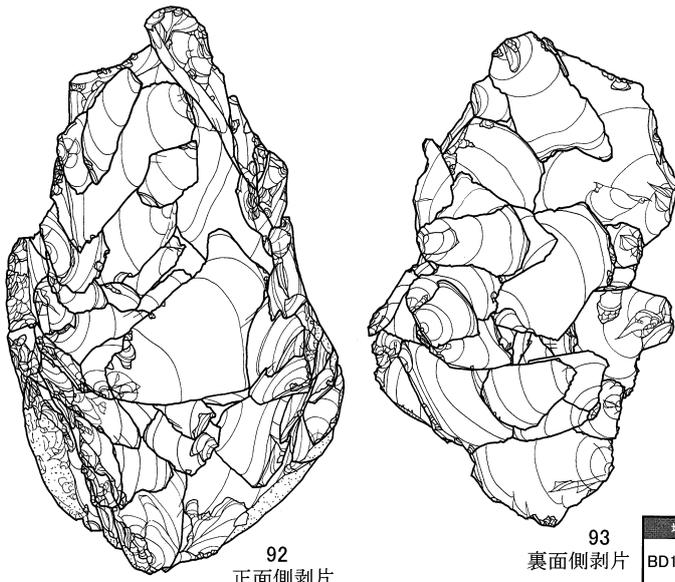


地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)	石質	接合点数	重量
BD18-23区	6	11	両面剥離石核 尖頭器製作	I E -	4	99点 1623.1g
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)		
Sb-5・6	亜角礫	20.0 × 9.7 × 12.5 cm	原石	20.0 × 9.7 × 12.5 cm		
搬出石器個体数			遺跡内遺棄石器個体数			

母岩14 接合27



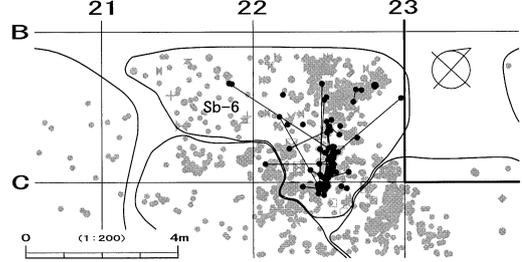
図Ⅲ-70 BD18-23区の石器(14) 母岩6 接合11(3)、母岩14 接合27(1)



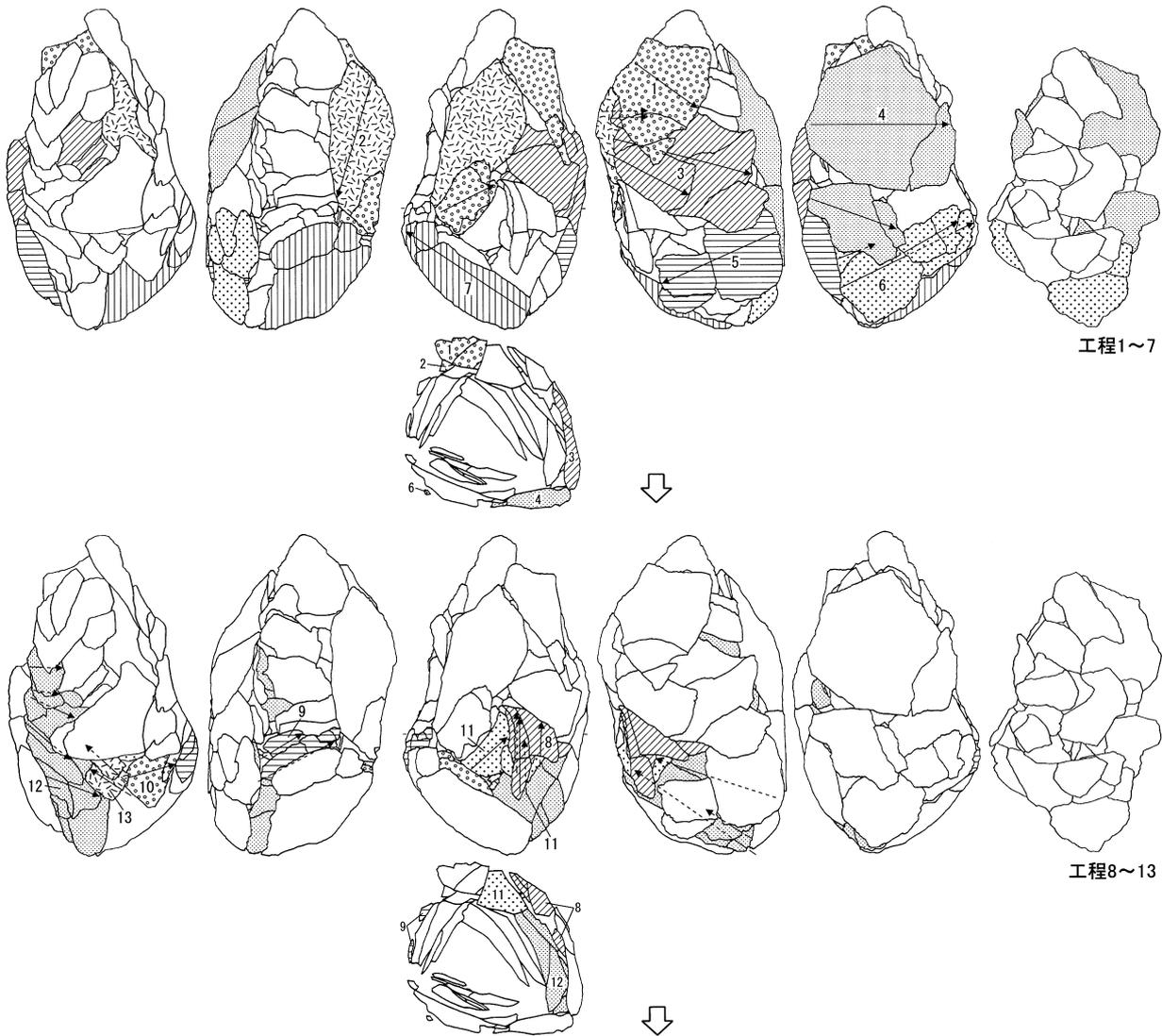
92  
正面側剥片

93  
裏面側剥片

接合27分布図



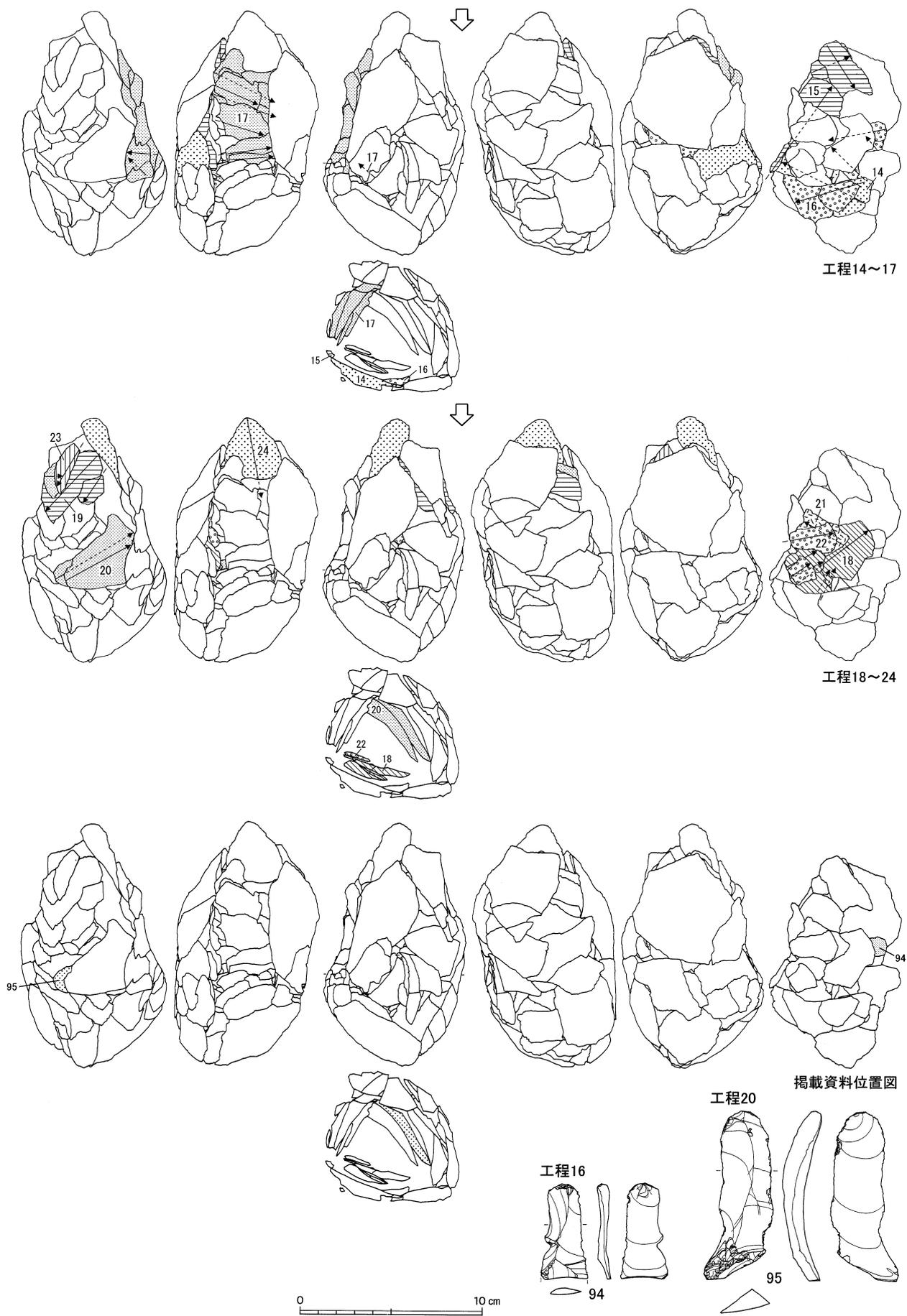
地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)			石質	接合点数	重量
			高面調整石器 尖頭器製作	1	E			
BD18-23区	14	27				5	94点	1933.1g
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)				
Sb-5・6	垂角礫	22.4 × 12.8 × 13.2 cm	原石	22.4 × 12.8 × 13.2 cm				
搬出石器個体数				遺跡内遺棄石器個体数				
BF・PT: 1								



工程1~7

工程8~13

図Ⅲ-71 BD18-23区の石器(15) 母岩14 接合27(2)



図Ⅲ-72 BD18-23区の石器(16) 母岩14 接合27(3)

は急角度を呈している。

【工程19・20】正面と右側面に跨る対向する横方向の平坦加工である。これにより、正面と右側面との境が不明瞭となり、湾曲する一面となる。

【工程21～23】正面・裏面へのやや薄手の加工が施される。裏面への加工(工程21・22)が主体的である。前述の工程20と工程21は両面加工の関係となっており、裏面と正面が鋭角化する。最終的に工程24で左側面への上からの剥離が行われる。

接合状態から復元された石器の形態は、左側面を甲板面とする楔形の両面調整石器となる。美利河型細石刃核の母型と認識することができ、最終的な工程24は甲板面への一次削片剥離とみなせる。復元される大きさは、長15×幅3.9×高6.3cm程度である。

**分布** 主にSb-6の南側の遺物集中範囲からまとまって出土し、少数が隣接するSb-5も含めてブロック全体に散在している。

### 細石刃製作の母岩別資料 (図Ⅲ-73、図版75)

1個体(母岩208)のみ図示した。蘭越型ないし美利河型細石刃核石器群に伴うものと判断している。

#### 母岩別資料208、接合資料542 (図Ⅲ-73、図版75-2)

母岩別資料208は接合資料462・542・543、折れ接合資料51777および非接合剥片29点で構成され、総点数は40点、総重量は35.0gである。

**素材** 96は接合資料542で5点(5個体)が接合し、重量は18.4gである。石質は頁岩で、原石形状・搬入形態共に不明である。

**剥離工程** 細石刃を製作した資料で、剥離技術類型は2E類に分類される。右側面が左側面に比べ平坦であることから剥片素材であった可能性がある。接合は全て左側面で、上下からの加工が行われている(工程1・2)。工程1の剥片下部に原石面が残存している。平坦打面で、打角が90度前後であることから先行する削片剥離が存在した可能性がある。その後、正面での細石刃剥離と打面部の再生が行われているが、いずれも接合していない。同一母岩資料として示した細石刃の一部が前述の工程に含まれるものと思われる。10は残核である。

**分布** Sb-6の中央で設定したFc-6からまとまって出土し、1点のみブロックの散在部から出土している。

### 石刃技法の母岩別資料 (図Ⅲ-73～76・81・82、図版76～80)

2個体(母岩1・10)を図示し、2個体(母岩5・219)を写真のみ掲載した。石刃技法母岩は、①背稜ないし下縁形成を中心とした粗い母型形成があり、平坦打面ないし調整打面で頭部調整があるもの(図Ⅲ-73・74、図版80、母岩1・5で4Ai類主体)、②母型形成がなく主に平坦打面で頭部調整のあるもの(図Ⅲ-75・76、母岩10で4Aiv類主体)、③母型形成がほとんどなく、部分的な打面調整と頭部調整のあるもの(図版79-2、母岩219で4Bv類)に区分できる。①は蘭越型ないし美利河型細石刃核石器群、②は服部台型石刃石器群に伴うものと判断している。また、③は川西型石刃石器群の特徴と類似しており、その可能性が高い。

#### 母岩別資料1、接合資料1 (図Ⅲ-73・74、図版76)

母岩別資料1は接合資料1・1656、折れ接合資料50001および非接合剥片35点で構成され、総点数は105点、総重量は2,272.3gである。

**素材** 97は接合資料1で66点(42個体)が接合し、重量は2,183.5gである。石質は黒曜石4で、転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 石刃を製作した資料で、剥離技術類型は4Ai類に分類される。

【工程1～7】主に石刃核の背稜を形成する加工と裏面からの側面調整にあたる。左右の側面に交互剥離を行っている(工程1～3・5・7)。石核の上部は幅広なため背稜は石核の下半部だけに形成され、上半部の裏面は工程4により平坦化する。工程5の一部と工程6は裏面からの側面調整である。また、工程5・7の両面加工は下縁にも及んでいる。

【工程8～10】工程8は正面への横方向の剥離で正面の原石面を除去して平坦化している。工程9は正面からの側面調整で、石核の上部のみに施されている。工程10は正面からの打面作出剥離である。

【工程11】石刃剥離が開始される。主に正面と両側面との角部の稜を利用して石刃剥離が行われている。石刃打面部の特徴は平坦打面で頭部調整が施されている。これらの工程は蘭越型細石刃核の石刃技法と同様の特徴を持っている。最終的な石核は調査区内からは出土していない。

**分布** Sb-6の南側の遺物集中範囲からまとまって出土し、ブロックの北部にも散在している。

#### 母岩別資料10、接合資料19(図Ⅲ-75・76、図版77)

母岩別資料10は接合資料19～22、折れ接合資料50009～50012および非接合剥片12点で構成され、総点数は59点、総重量は2,776.5gである。

**素材** 100は接合資料19で29点(14個体)が接合し、重量は2,348.1gである。石質は黒曜石1で、亜角礫を素材とし、粗割した石核の状態を遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 石刃を製作した資料で、剥離技術類型は4Aiv類に分類される。原石の小口面を作業面に設定し、正面から上面への打面作出後(欠落)、母型形成はほとんどなされず、工程1で左側面上部の盛り上がった部分を除去する程度である。工程2・5は石刃剥離で、工程2には原石面を大きく取り込むものが多く、末端は石核の下端まで達するものが少ない。そのため、工程3・4の石核下端部の横方向の剥離により石核形状を補正し、左側面への入念な石核調整(欠落)を行っている。工程6は再び正面への上からの石刃剥離である。平坦打面で入念な頭部調整が施されている。75は残核である。

**分布** 大部分の遺物はSb-3に散在する。工程6の石刃図Ⅲ-180-353が25mほど離れたBD24-26区のSb-17から出土している。出土位置の標高は349.1m程で、周辺には広郷型細石刃核石器群が広がっており、それらのまとまりの最上位の出土レベルとほぼ同様の高さで出土している。

#### 石刃技法関連母岩・写真図版掲載資料(図Ⅲ-81・82、図版79・80)

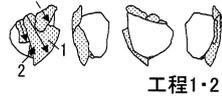
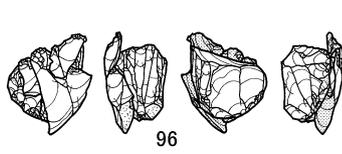
##### 母岩別資料5、接合資料10(図Ⅲ-81、図版80)

母岩別資料5は接合資料10、非接合剥片33点で構成され、総点数は100点、総重量は2,083.8gである。

**素材** 139は接合資料10で67点(44個体)が接合し、重量は2,013.8gである。石質は黒曜石4で、亜角礫を素材とし、原石の状態を遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 石刃を製作した資料で、剥離技術類型は4Civ類に分類される。初期段階では原石の左側面への加工が中心となり、横方向の交互剥離により石核整形し、正面側への剥離を打面として、左側面で入念な頭部調整を施す石刃・縦長剥片の剥離がなされている(140～144)。この剥離はやや求心状である。右側面でも上からの加工がなされ、原石面に覆われた剥片が剥離されている(個体A)。個体Aは素材腹面側に加工が施され、二次加工ある剥片となっている(145)。その後石核の下縁を形成する両面調整がなされ、打面作出後(欠落)、小口面となる正面で上からの石刃・縦長剥離が行わ

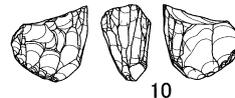
母岩208 接合542



工程1・2

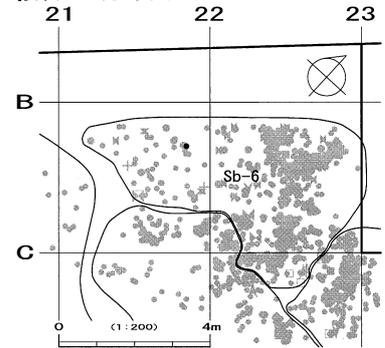


掲載資料位置図

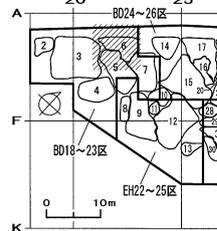


10

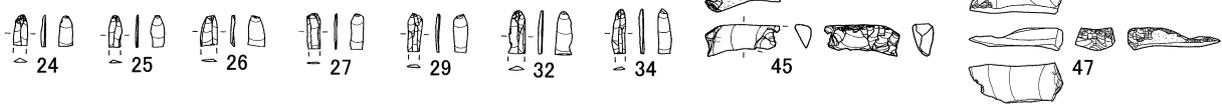
接合542分布図



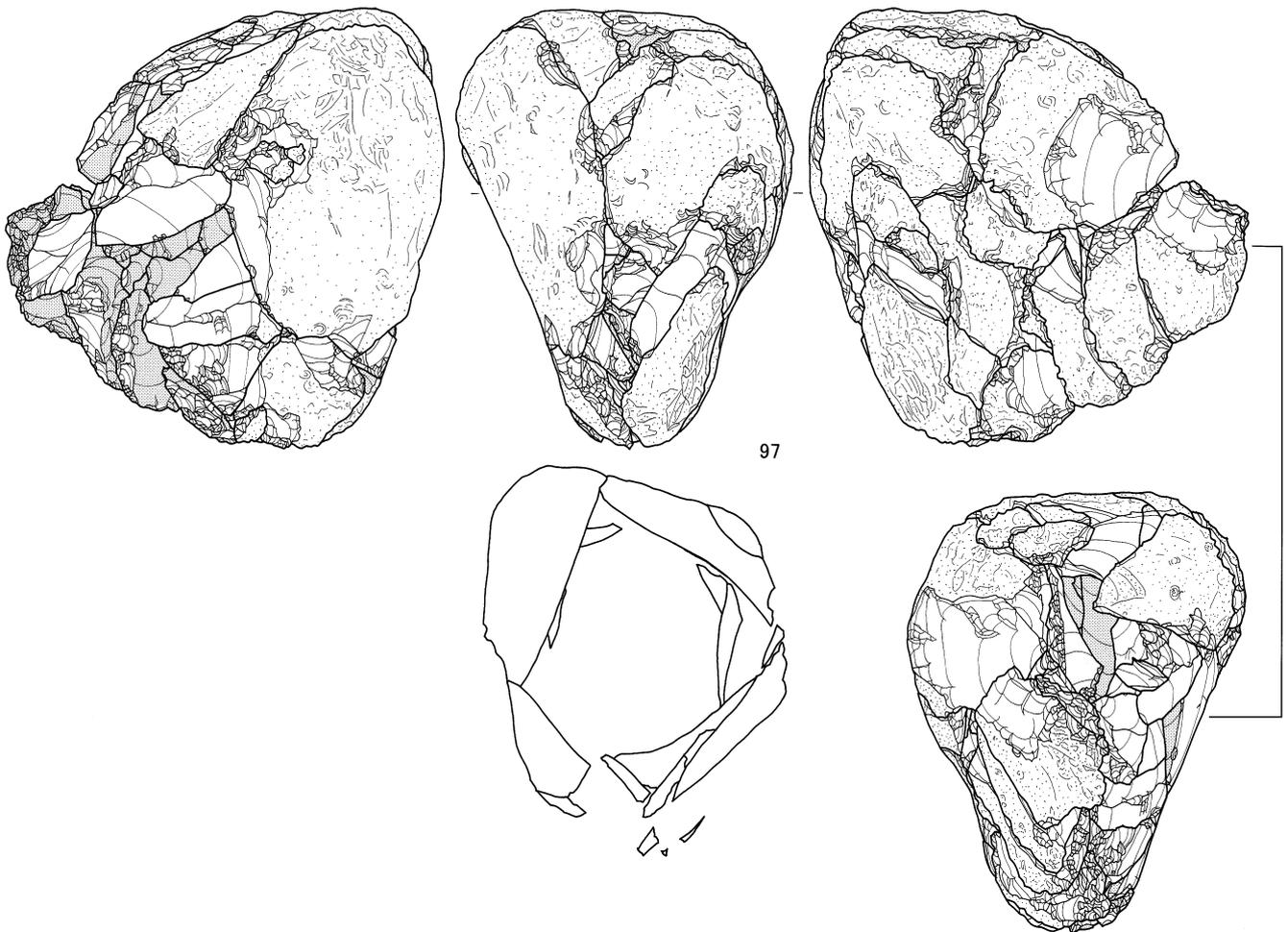
地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)			石質	接合点数	重量	
BD18-23区	208	542	細石刃技法	2	E	-	頁岩	5点	18.4g
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)		搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)				
Sb-6	不明	不明	×	不明	×	不明	不明	(6~)×(2~)×(3~)cm	
搬出石器個体数				遺跡内遺棄石器個体数					
BC・CO・MC:1				MC:1, (同一母岩 MB, SP:2)					



同一母岩資料



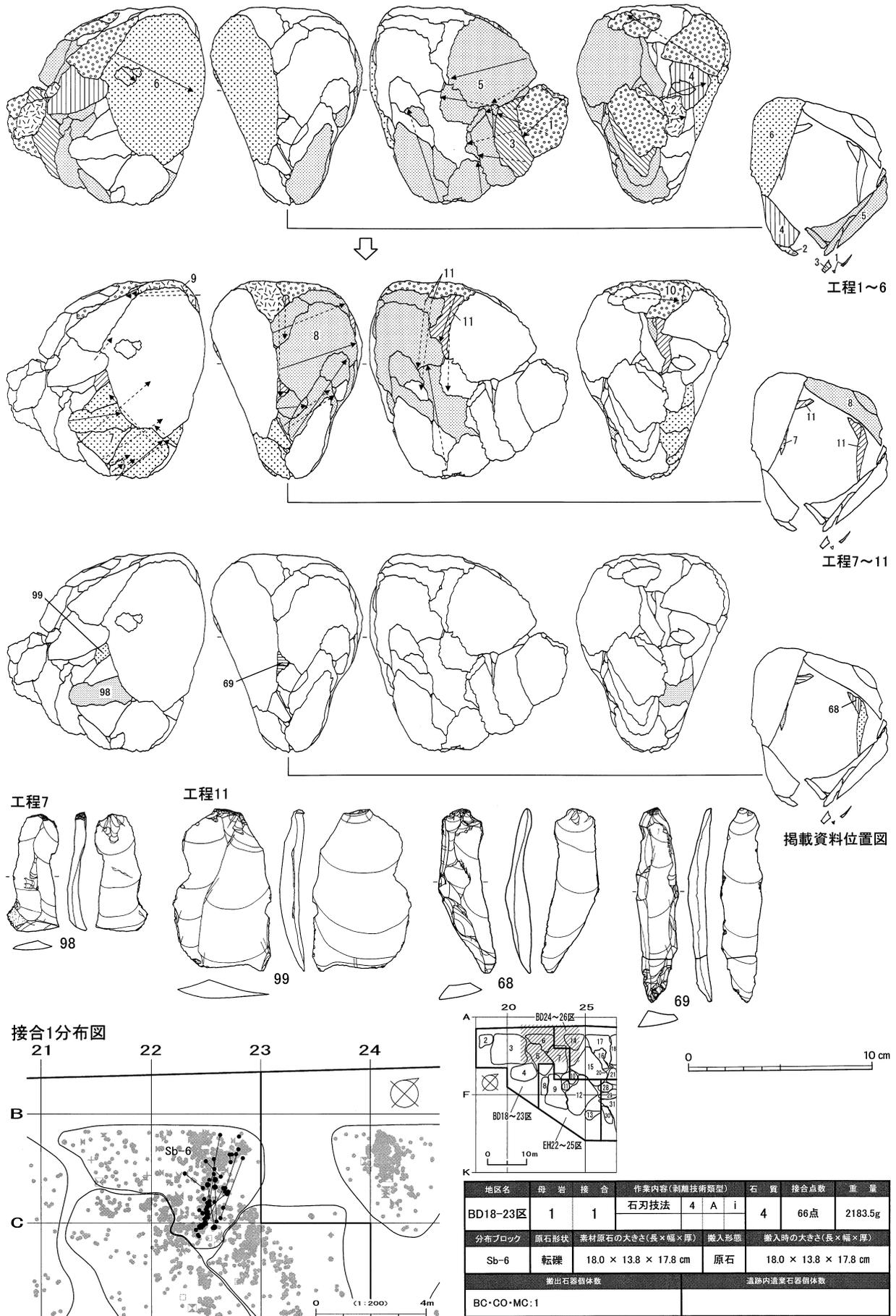
母岩1 接合1



97

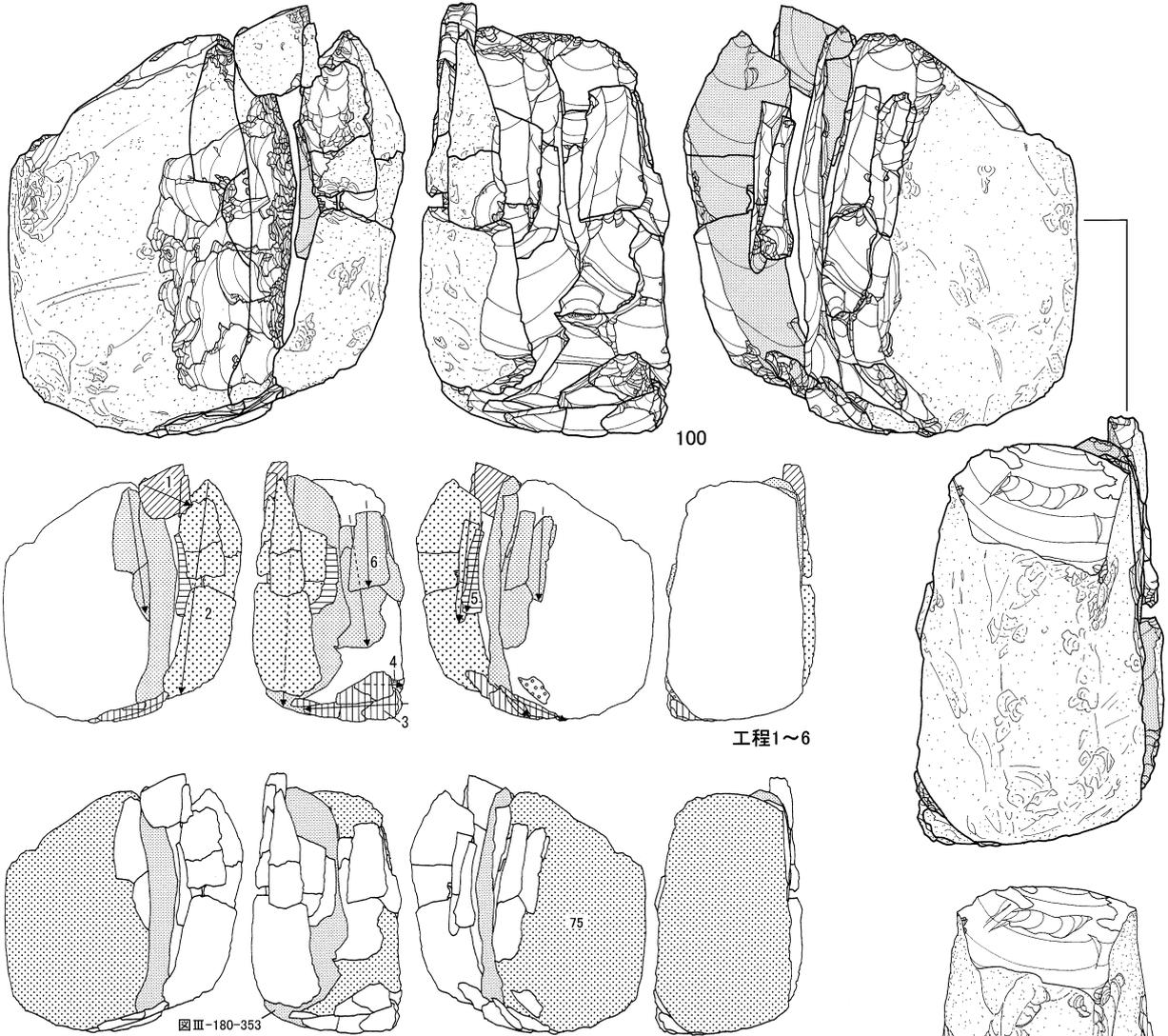
0 10 cm

図Ⅲ-73 BD18-23区の石器(17) 母岩208 接合542、母岩1 接合1(1)



図Ⅲ-74 BD18-23区の石器(18) 母岩1 接合1(2)

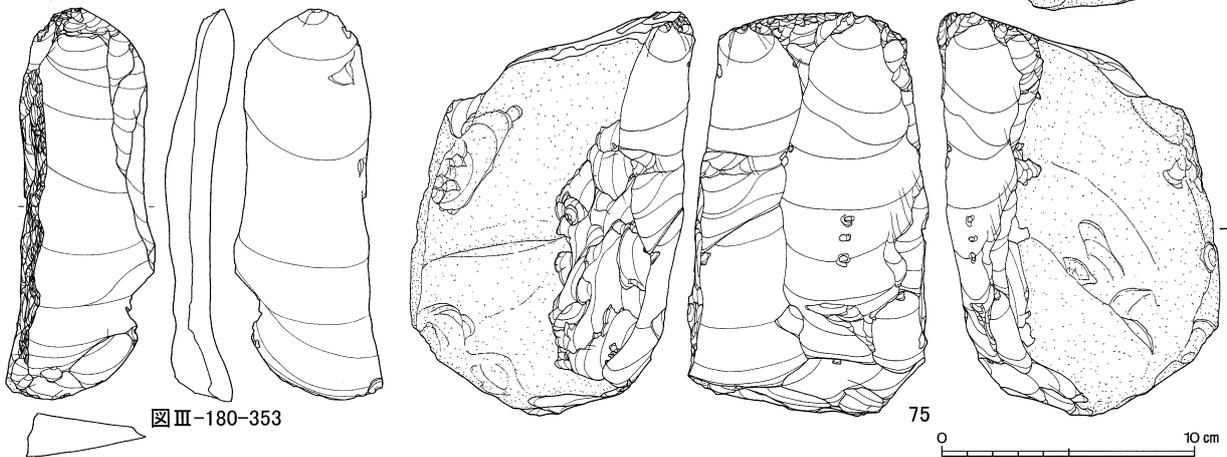
母岩10 接合19



掲載資料位置図

地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)			石質	接合点数	重量	
BD18-23区	10	19	石刃技法	4	A	IV	1	29点	2348.1g
			分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態			
	Sb-3・17	亜角礫	(18~)×(10~)×(16~)cm	粗割石核				17.9×10.3×(16~)cm	
搬出石器個体数				遺跡内遺棄石器個体数					
				BC:1					

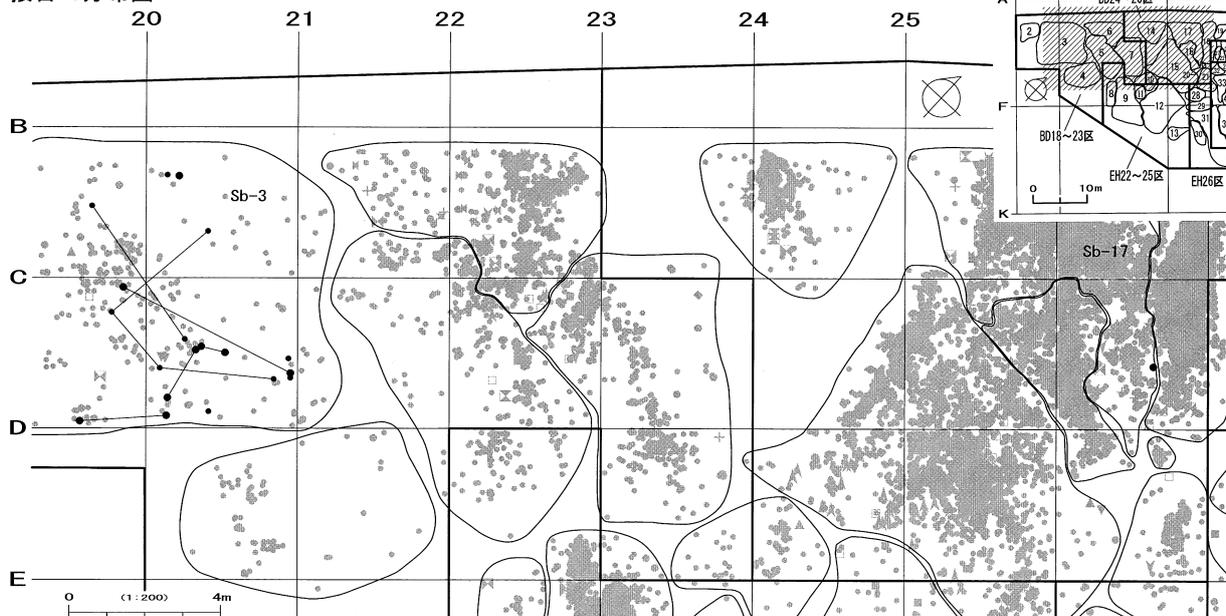
工程6



図Ⅲ-75 BD18-23区の石器(19) 母岩10 接合19(1)

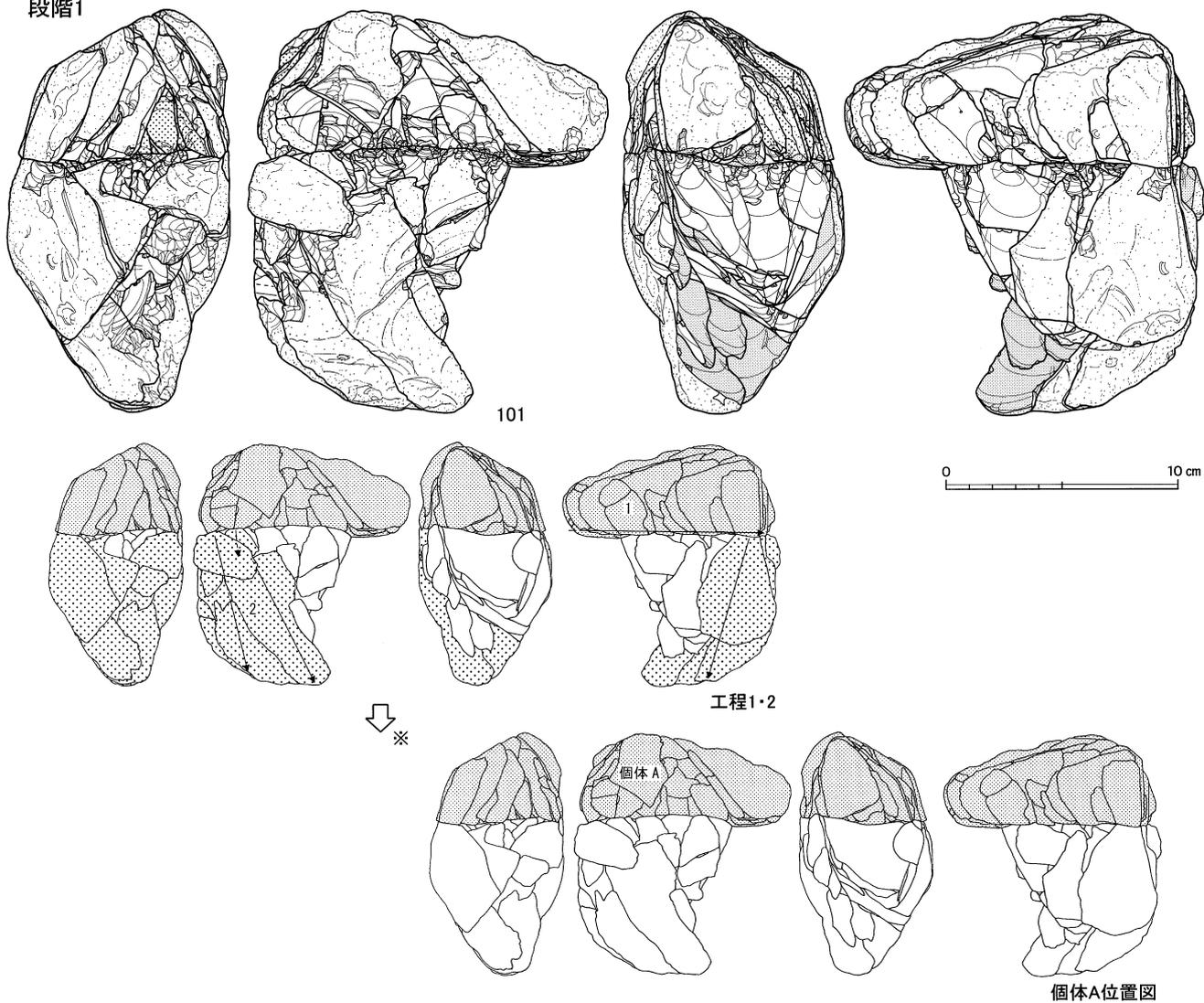
2 遺物

接合19分布図



母岩4 接合6

段階1



図Ⅲ-76 BD18-23区の石器(20) 母岩10 接合19(2)、母岩4 接合6(1)

れている（70・146）。石刃は12cm程で、平坦打面と調整打面があり頭部調整が施されている。石核は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。

**分布** 大部分の遺物はSb-6の遺物集中範囲からまとまって出土し、ブロックの西部にも散在している。

#### 母岩別資料219、接合資料562（図Ⅲ-82、図版79-2）

母岩別資料219は接合資料562、非接合剥片1点で構成され、総点数は11点、総重量は146.4gである。

**素材** 138は接合資料562で10点（8個体）が接合し、重量は119.3gである。石質は黒曜石5で、亜角礫を素材とし、石刃核の状態に遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 石刃を製作した資料で、剥離技術類型は4Bv類に分類される。左側には裏面方向からの並列する剥離痕がみられる。石核調整痕ないし横方向の石刃剥離痕と思われる。遺跡内では正面で上からの石刃剥離が連続的になされている。石刃の打面は部分的な打面調整が施され、打面と背面の角度が鈍角化する部分もある。頭部調整も部分的なものが多いが、73のみ入念に施されている。また、剥離開始部はバルブとリップの両方が発達している。打面部周辺の特徴から川西型石刃技法の可能性がある。石核は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。

**分布** いずれの遺物もSb-4の南東側にあるE21区のⅡ層から出土した一括遺物である。

#### 舟底形石器製作の母岩別資料（図Ⅲ-76～82、図版78・79・81～83）

3個体（母岩2・4・7）を図示し、2個体（母岩11・13）を写真のみ掲載した。石刃技法に関連する素材から舟底形石器を製作するもの（母岩4）、厚手の縦長剥片や剥片を素材とするもの（母岩2・7・11・13）がある。いずれも小型舟底形石器石器群のものと判断している。

#### 母岩別資料4、接合資料6（図Ⅲ-76～78、図版78・79-1）

母岩別資料4は接合資料6～9、折れ接合資料50005および非接合剥片21点で構成され、総点数は116点、総重量は1,682.8gである。

**素材** 101は接合資料6で87点（65個体）が接合し、重量は1,573.3gである。石質は黒曜石4で、転礫を素材とし、原石の状態に遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 転礫原石から打面作出を行い、剥片を素材として舟底形石器Ⅱa類を製作した資料で、剥離技術類型は全体が4Aiv類、舟底形石器製作が3Aiv類に分類される。

##### 段階1（打面の作出、原石面の除去段階）

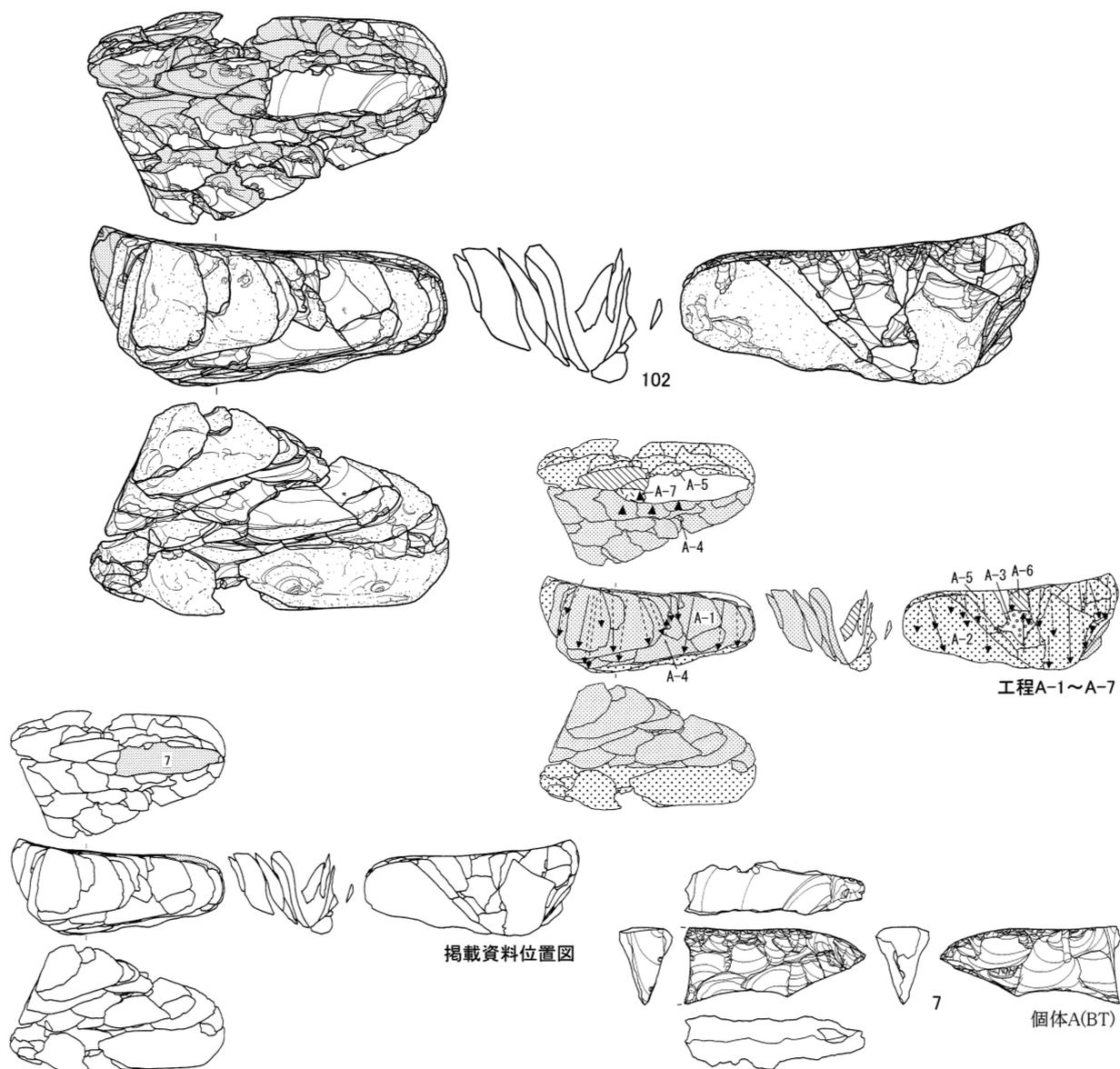
【工程1・2】工程1は上面への打面作出で、舟底形石器の素材となっている（個体A）。工程2は主に左側面への加工で、上から厚手でバルブの発達した剥離が連続してなされている。

【個体A】102は個体A接合状態である。工程1で剥離された厚手の剥片を素材とし、素材の剥離軸方向を舟底形石器の長軸に設定している。工程A-1・2は両側面への甲板面からの連続する加工である。工程A-3・4は下縁からの加工で、結果的に器体の破損が起きる。折損後もそれぞれの個体で加工が行われ、右半分は甲板面から工程A-5が行われ、舟底形石器7が遺棄される。左半分は甲板面から工程A-6・7が行われる。左側の舟底形石器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された舟底形石器の大きさは長7.5×幅2.4×高2.7cm程度である。

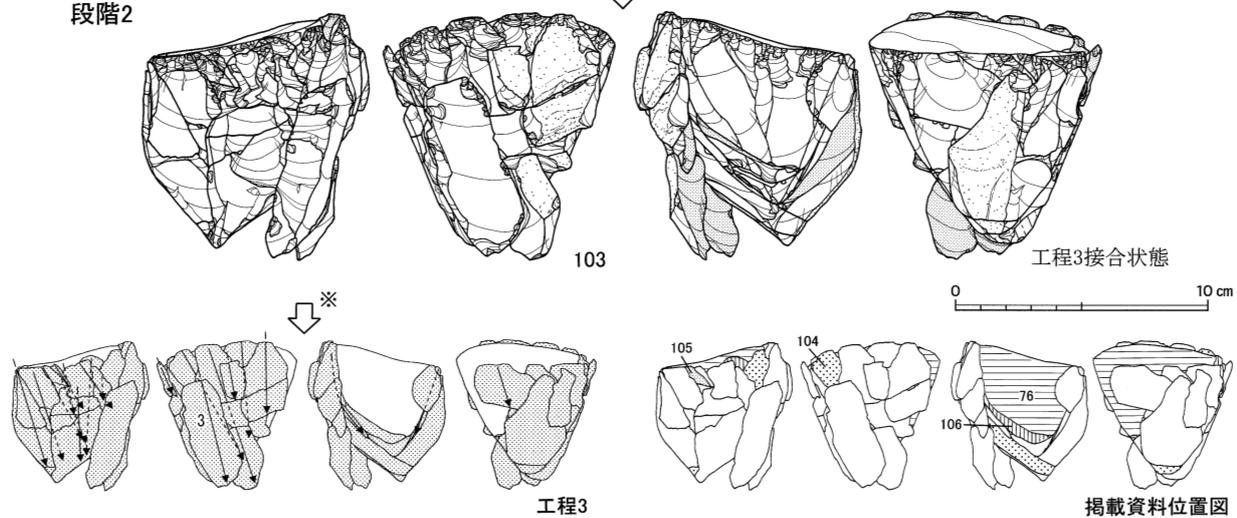
##### 段階2（石刃の剥離段階）

【工程3】接合状態を103に図示した。工程3は石刃・剥片が連続的に剥離される。接合するのは左側面が中心であるが、残核を見ると石刃剥離はほぼ全周している。打面は平坦打面で、頭部調整が施されるものである。76は残核である。

個体A (素材: 工程1 FK)

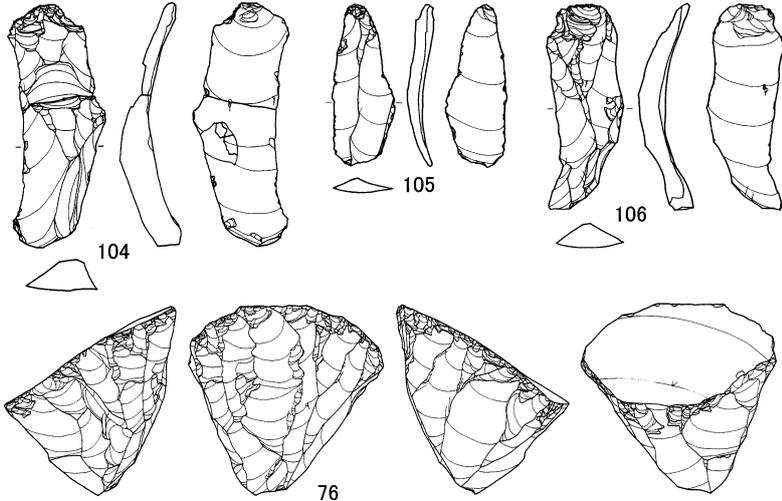


段階2

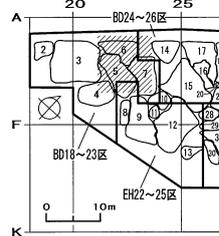


図Ⅲ-77 BD18-23区の石器(21) 母岩4 接合6(2)

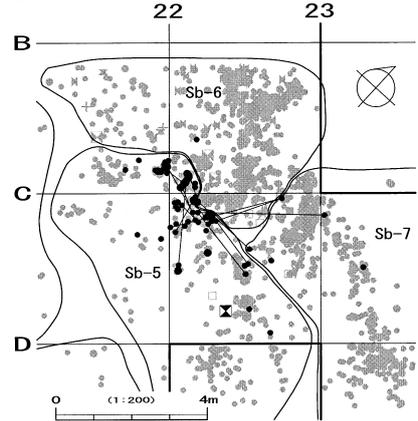
工程3



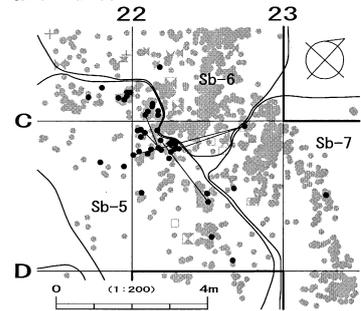
地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)		石質	接合点数	重量
BD18-23区	4	6	石刃技法	4 A iv	4	87点	1573.3g
			舟底形石器製作	3 A iv			
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)			
Sb-5・6・7	転蹀	17.5 × 9.6 × 15.5 cm	原石	17.5 × 9.6 × 15.5 cm			
搬出石器個体数			遺跡内遺棄石器個体数				
			BT:1, BC:1				



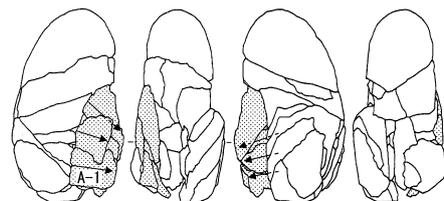
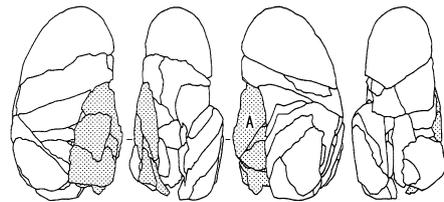
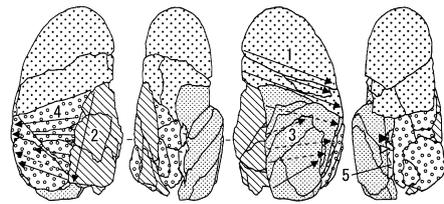
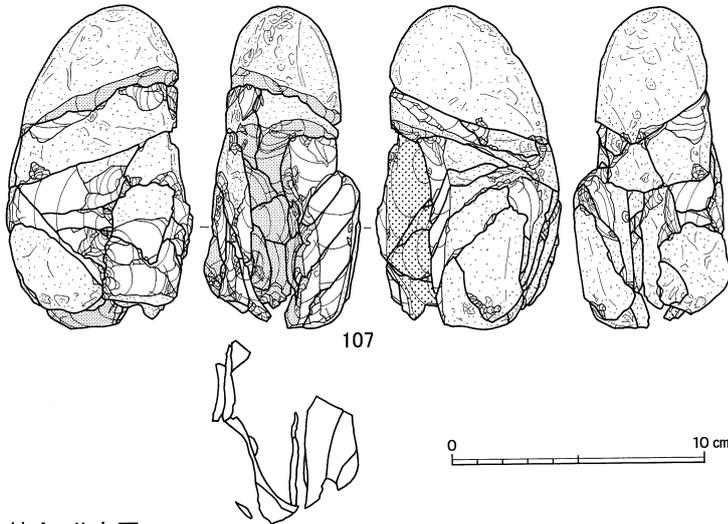
接合6分布図



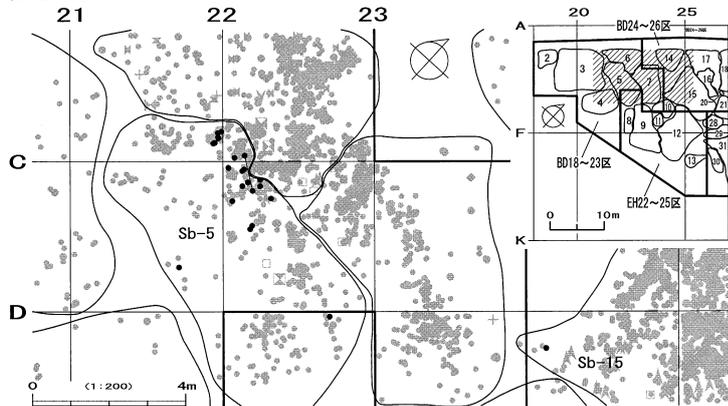
接合6個体A



母岩2 接合2



接合2分布図



図Ⅲ-78 BD18-23区の石器(22) 母岩4 接合6(3)、母岩2 接合2(1)

**分布** Sb-5 北部の遺物集中範囲、Sb-6 と隣接する付近にまとまって出土している。

**母岩別資料2、接合資料2** (図Ⅲ-78・79、図版81-1)

母岩別資料2は接合資料2、非接合剥片2点で構成され、総点数は27点、総重量は386.4gである。

**素材** 107は接合資料2で25点(21個体)が接合し、重量は383.3gである。石質は黒曜石4で、転礫を素材とし、原石の状態です遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 転礫原石から剥片剥離を行い、剥片・石核を素材として舟底形石器Ⅱa類を製作した資料で、剥離技術類型は前半が5A類、後半が3Ai類に分類される。

**段階1(打面の作出、原石面の除去段階)**

【工程1・2】工程1は正面から上部への厚手の連続した加工である。工程2はそれを打面とする上からの厚手の剥離で、舟底形石器の素材となっている(個体A)。

【個体A】工程2で剥離された厚手の剥片を素材とし、素材の剥離軸方向に舟底形石器の長軸を設定している。接合するのは工程A-1の甲板面からの連続する加工のみである。製作舟底形石器を含め欠落部分が多い。舟底形石器は遺跡外への搬出が推測される。

**段階2(石核部分の舟底形石器製作段階)**

【工程3~5】接合状態を147に写真のみ図示した。工程3からは石核部分の舟底形石器製作で、工程2の作業面を甲板面とする。工程3・4は甲板面からの加工で全体に及び、器体の大まかな形を整形している。工程5は下縁からの加工である。製作舟底形石器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合資料から復元された舟底形石器の大きさは、長7.5×幅2.0×高3.5cmである。

**分布** Sb-5 北部の遺物集中範囲、Sb-6 と隣接する付近からまとまって出土し、少数がブロックの南側にも散在している。

**母岩別資料7、接合資料14** (図Ⅲ-79~81、図版81-2・図版82)

母岩別資料7は接合資料14・15、非接合剥片22点で構成され、総点数は96点、総重量は626.2gである。

**素材** 108は接合資料14で71点(62個体)が接合し、重量は556.9gである。石質は黒曜石4で、転礫を素材とし、原石の状態です遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 転礫原石を粗割した部分と石核部分を素材として舟底形石器Ⅱa類を6個体製作した資料で、剥離技術類型は3Ai・3Aii類に分類される。

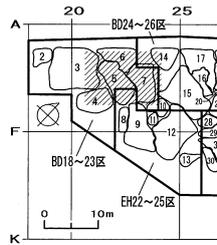
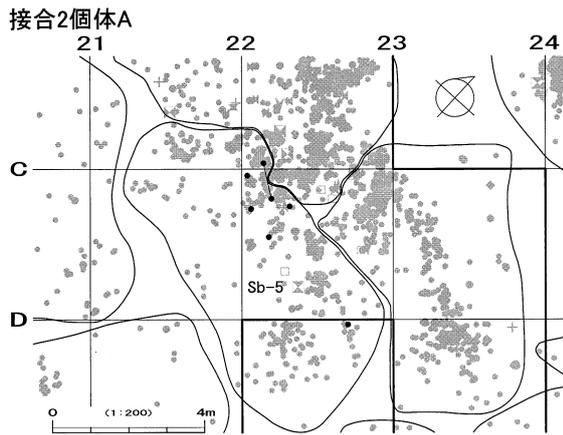
【工程1~5】工程1~5は打面と作業面を大きく移動させながら厚手の剥片を剥離している。工程1・2は原石の下端から両側面への交互剥離である。工程3は裏面下からの剥離、工程4は正面から石核下端の突出部を取り込む剥離で、工程5は裏面へからの剥離である。工程2以外は1回の厚手の剥離で、それぞれ舟底形石器の素材となっている(個体A~D)。

【工程6・7】石核部分を上下に二分割して、それぞれ舟底形石器の素材としている(個体E・F)。

【個体A~F】いずれも同様の大きさの素材から舟底形石器を製作するものである。個体Aは工程A-1・2とも甲板面からの加工が施されている。舟底形石器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された舟底形石器の大きさは長8.0×幅4.0×高3.0cm程度である。

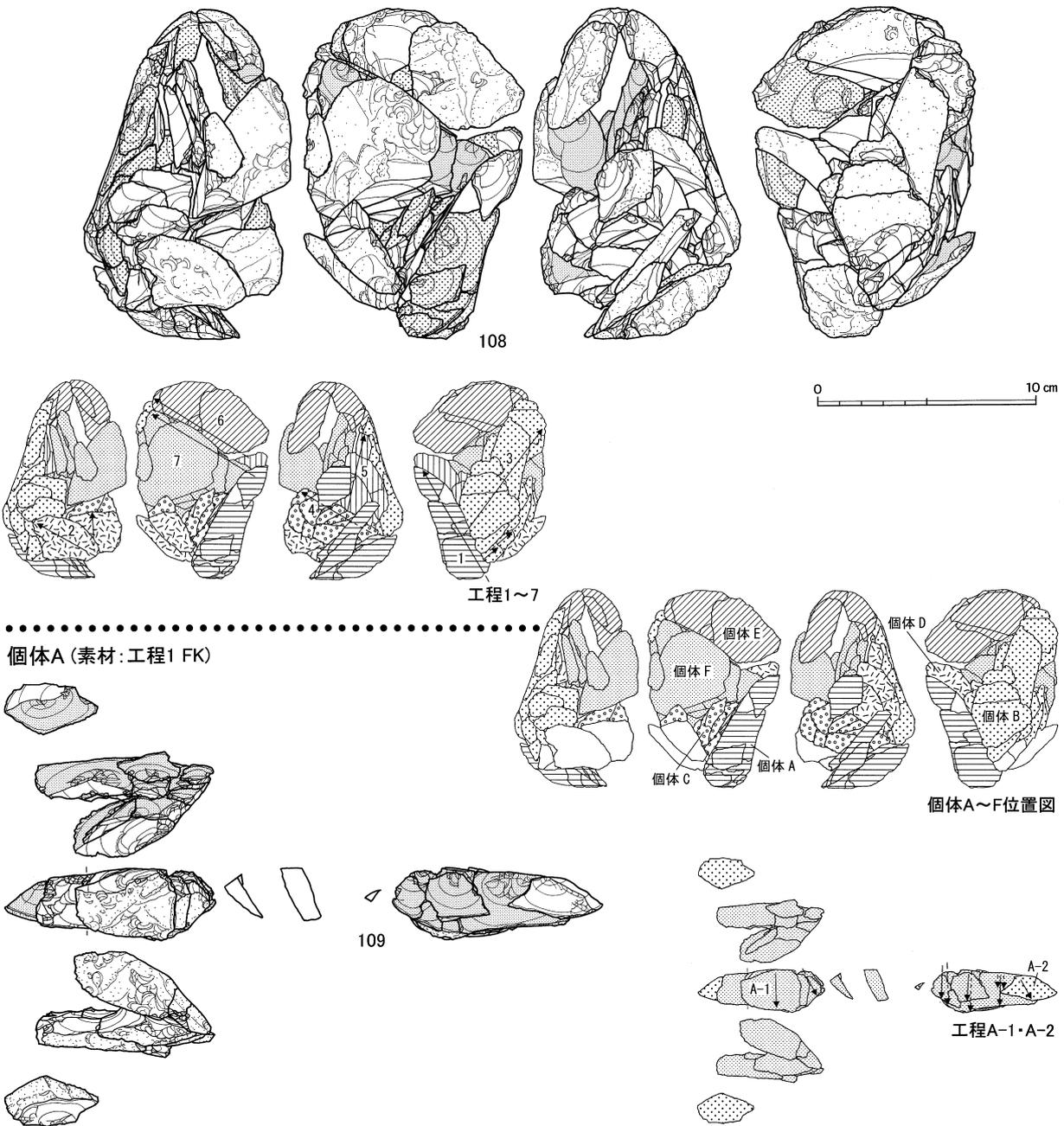
個体Bは工程B-1・2とも甲板面からの連続した加工で、工程B-3が下縁からの加工となっている。舟底形石器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された舟底形石器の大きさは長11.0×幅2.5×高3.0cm程度である。

個体Cは工程C-1により甲板面から加工がなされ、工程C-2の下縁からの部分的な加工の後、工程C-3により全体的に甲板面からの加工が行われている。舟底形石器は欠落し、遺跡外への搬出が



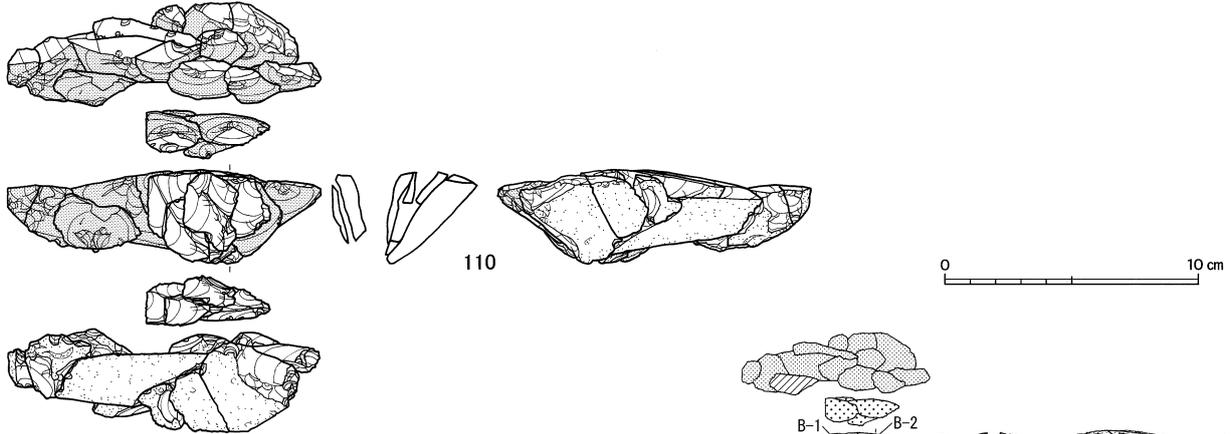
地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)	石質	接合点数	重量
BD18-23区	2	2	剥片生産	5 A -	4	25点
			舟底形石器製作	3 A i		
分布ブロック			原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入時の大きさ(長×幅×厚)	
Sb-5-15			転換	12.5 × 6.0 × 7.2 cm	12.5 × 6.0 × 7.2 cm	
			搬出石器個体数		遺跡内遺棄石器個体数	
BT:2						

母岩7 接合14



図Ⅲ-79 BD18-23区の石器(23) 母岩2 接合2(2)、母岩7 接合14(1)

.....  
**個体B (素材: 工程3 FK)**

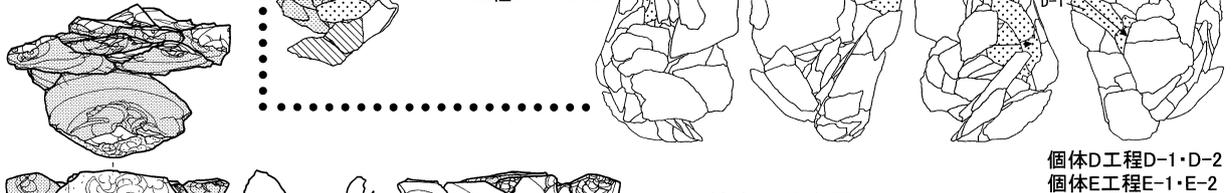


.....  
**個体C (素材: 工程4 FK)**



地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)		石質	接合点数	重量
BD18-23区	7	14	舟底形石器製作	3 A i	4	71点	556.9g
			舟底形石器製作	3 A ii			
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)			
Sb-5・6	転蹠	15.0 × 10.0 × 9.9 cm	原石	15.0 × 10.0 × 9.9 cm			
搬出石器個体数			遺跡内遺棄石器個体数				
BT:6							

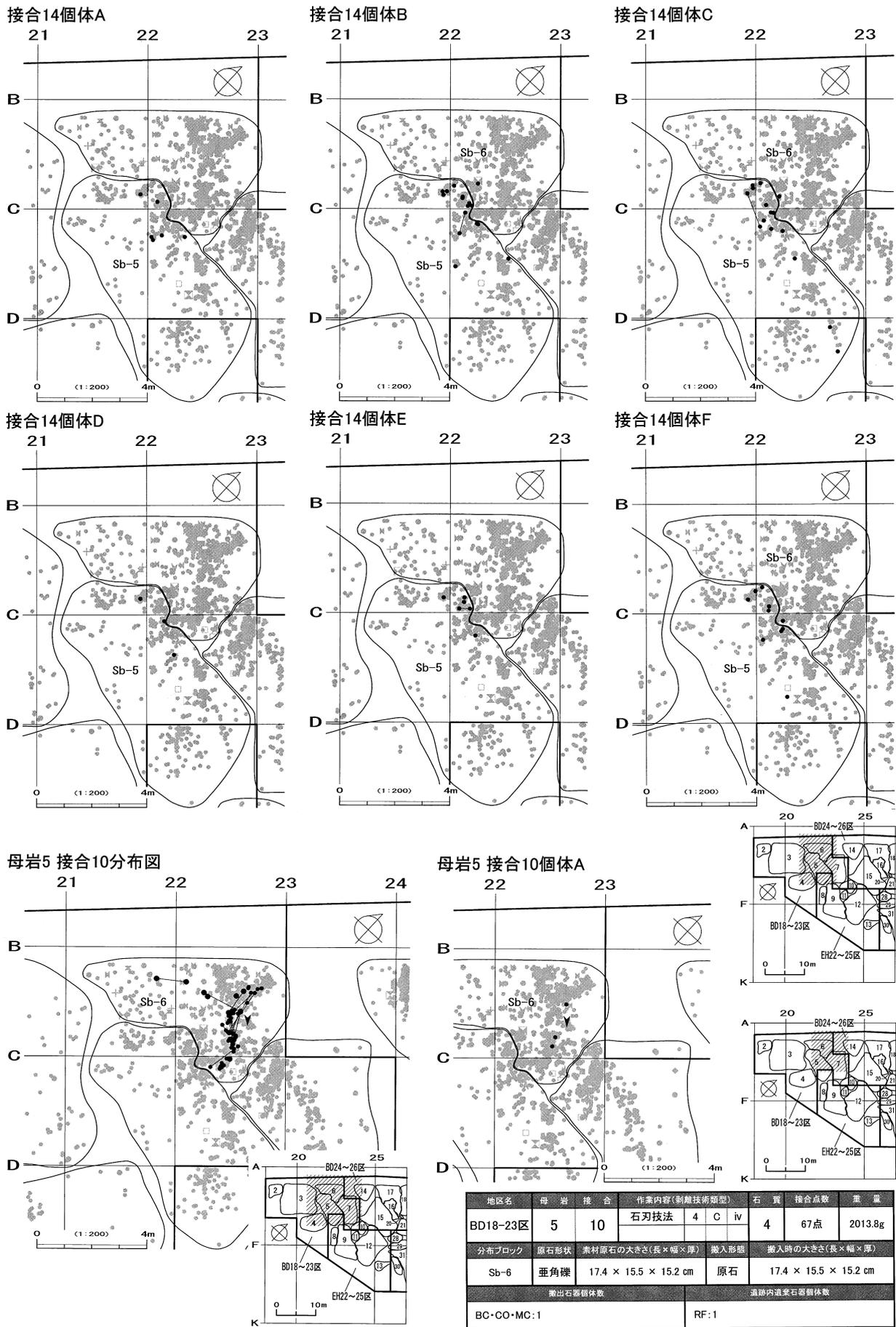
.....  
**個体F (素材: 工程7 CO)**



**接合14分布図**



図Ⅲ-80 BD18-23区の石器(24) 母岩7 接合14(2)



図Ⅲ-81 BD18-23区の石器(25) 母岩7 接合14(3)、石刃技法写真掲載

推測される。接合状態から復元された舟底形石器の大きさは長7.0×幅2.0×高2.5cm程度である。

個体Dは部分的な接合にとどまっており、工程D-1・2とも甲板面からの加工である。舟底形石器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された舟底形石器の大きさは長7.5×幅3.0×高2.0cm程度である。

個体Eは部分的な接合にとどまっており、工程E-1・2とも甲板面からの加工である。舟底形石器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された舟底形石器の大きさは長9.0×幅4.5×高3.5cm程度である。

個体Fは工程F-1で下縁からの部分的な加工を施した後、工程F-2～4の甲板面からの加工により器体の形状を大まかに整え、工程F-5の下縁からの加工を挟んで、再び工程F-6で甲板面からの連続的な加工が施されている。舟底形石器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された舟底形石器の大きさは長9.0×幅3.0×高3.0cm程度である。

**分布** Sb-5北部の遺物集中範囲、Sb-6と隣接する付近からまとめて出土し、少数がブロックの東側にも散在している。個体ごとの分布の違いはほとんどない。

### 舟底形石器製作母岩・写真図版掲載資料（図Ⅲ-82、図版83）

#### 母岩別資料11、接合資料23（図Ⅲ-82、図版83-1）

母岩別資料11は接合資料23、非接合剥片2点で構成され、総点数は18点、総重量は398.8gである。

**素材** 148は接合資料23で16点（10個体）が接合し、重量は394.8gである。石質は黒曜石4で、転礫を素材とし、原石の状態ですぐに遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 舟底形石器を製作した資料で、剥離技術類型は5A類および3Ai類に分類される。全体の工程では、原石の小口面側を作業面として交互剥離を行っている。上面に打面作出し、正面で厚手の剥片剥離を試み、最初の原石面に覆われた舟底形石器の素材（個体A）を得ることに成功している。その後は良好な剥片が得られず、残核149が遺棄されている。

個体Aは両側面に甲板面からの加工が行われている。舟底形石器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された舟底形石器の大きさは長8.0×幅2.5×高3.5cm程度である。

**分布** 個体部分も含めSb-7の遺物集中範囲からまとめて出土している。

#### 母岩別資料13、接合資料26（図Ⅲ-82、図版83-2）

母岩別資料13は接合資料26、非接合剥片2点で構成され、総点数は9点、総重量は580.5gである。

**素材** 150は接合資料26で7点（5個体）が接合し、重量は406.0gである。石質は黒曜石5で、転礫を素材とし、原石の状態ですぐに遺跡内に搬入した可能性がある。

**剥離工程** 舟底形石器を製作した資料で、剥離技術類型は5A類および3Ai類に分類される。全体の工程では、原石の小口面側を作業面として交互剥離を行っている。上面に打面作出し、正面で厚手の剥片剥離を試み、初期段階の原石面に覆われた剥片を舟底形石器に加工している（151）。その後は良好な剥片が得られていない。石核は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。

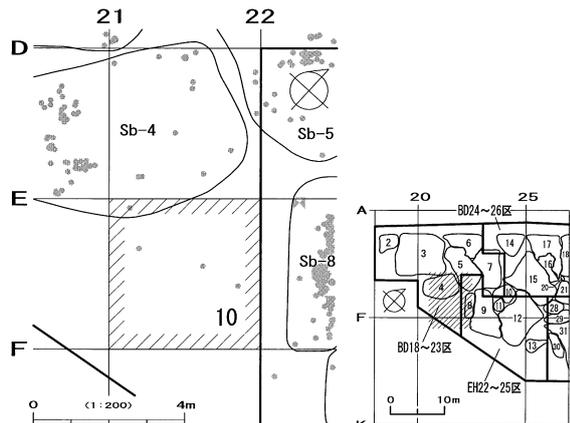
**分布** Sb-5の遺物集中範囲からまとめて出土している。

### 白滝I群の母岩別資料

#### 剥片生産の母岩別資料（図Ⅲ-82、図版83）

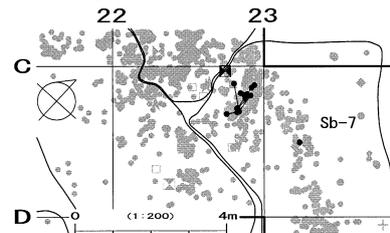
1個体（母岩195）のみ図示している。頻繁な打面転移を行う小型の母岩で白滝I群とした。

母岩219 接合562分布図

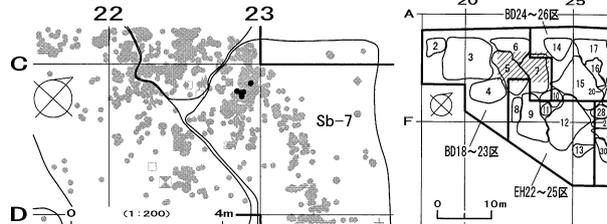


地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)		石質	接合点数	重量
BD18-23区	219	562	石刃技法	4 B v	5	10点	119.3g
分布ブロック		原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)		
		垂角礫	不明 × 不明 × 不明 cm	石刃核	(10~) × (7~) × (4~)cm		
搬出石器種別数				遺跡内遺棄石器種別数			
BC・CO・MC:1							

母岩11 接合23分布図

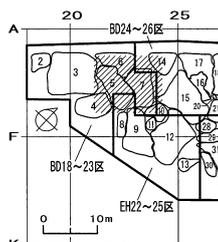


母岩11 接合23個体A



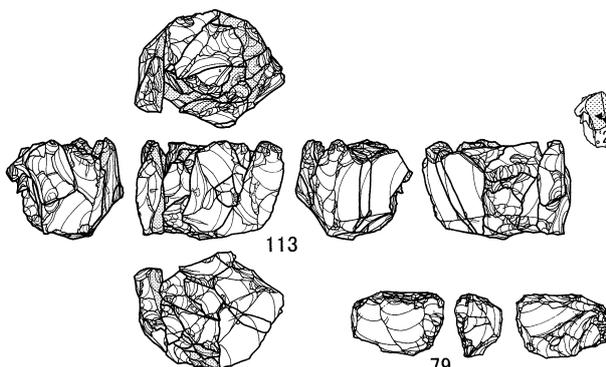
地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)		石質	接合点数	重量
BD18-23区	11	23	剥片生産	5 A -	4	16点	394.8g
分布ブロック			原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)	
			Sb-7	転礫	9.9 × 5.9 × 8.6 cm	原石	9.9 × 5.9 × 8.6 cm
搬出石器種別数				遺跡内遺棄石器種別数			
BT:1				CO:1			

母岩13 接合26分布図

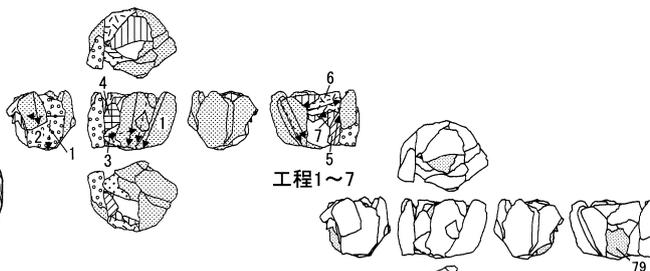


地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)		石質	接合点数	重量
BD18-23区	13	26	剥片生産	5   A -	5	7点	406.0g
分布ブロック			原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)	
			Sb-5・7	転礫	(14~) × 6.3 × (7~) cm	原石?	(14~) × 6.3 × (7~) cm
搬出石器種別数				遺跡内遺棄石器種別数			
BC・CO・MC:1				BT:1			

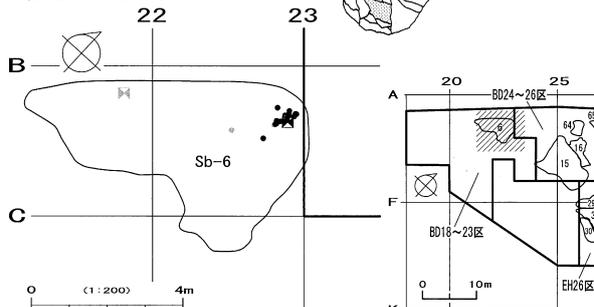
母岩195 接合522



地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)		石質	接合点数	重量	
BD18-23区	195	522	剥片生産	5 D i	2	15点	74.7g	
分布ブロック		原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)			
		Sb-6	不明	不明 × 不明 × 不明 cm	石核	3.8 × 5.7 × 4.5 cm		
搬出石器種別数				遺跡内遺棄石器種別数				
				CO:1				



接合522分布図



掲載資料位置図

図 III-82 BD18-23区の石器(26) 石刃技法・舟底形石器関連写真掲載、母岩195 接合522

**母岩別資料195、接合資料522** (図Ⅲ-82、図版83-3)

母岩別資料195は接合資料522、非接合剥片1点で構成され、総点数は16点、総重量は79.1gである。

**素材** 113は接合資料522で15点(15個体)が接合し、重量は74.7gである。石質は黒曜石2で、素材形状は不明、石核の状態に遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 小型の剥片生産を行う資料で、剥離技術類型は5Di類で白滝I群に分類される。工程1は左側面の一部と正面から右側面にかけて上からの剥離が連続するもので、寸詰まりの縦長剥片が含まれる。工程2・3は左側面と正面で打面と作業面を入れ替える交互剥離状の作業である。その後は工程4・5で左側面上下から、工程6・7で裏面横方向からの対向する剥離がなされる。打面が大きくバルブが発達する剥片も含まれている。79は残核である。

**分布** Sb-6の遺物集中範囲の最も北部からまとまって出土している。

## (5) EH22-25区 (Sb-8~13) の石器

## ① 石器ブロックの分布

**ブロック間接合状況** (図Ⅲ-83)

EH22-25区はA地区の南西部に位置し、南東側は調査区外で緩斜面地形が続いている。隣接する区域は北西側がBD18-23区、北側がBD24-26区、北東側がEH26区で、傾斜方向にあるBD18-23区とは僅かに接合関係も認められる。

ブロック範囲の設定はⅢ章2節1項で説明したように、密度分布、組成器種の分布、接合資料の分布を根拠としている。図Ⅲ-83に示した折れ接合・剥離面接合資料の接合線を表示した分布図では、隣接区域に分布する遺物であっても当該区域遺物と接合関係を有する資料については遺物点・接合線を表示している。

各ブロックともブロック内接合を主体とし、特に遺物集中域を中心とした接合関係が認められる。ブロック間接合は主に隣接ブロックとの間で確認できるが、Sb-12と7など間に他ブロックを挟んで接合する例やSb-9と12など傾斜方向とは異なる接合分布の広がりもみられる。こうした状況の中には、素材やツールなど特定の石器が人為的に移動されたことを示す例も存在する。

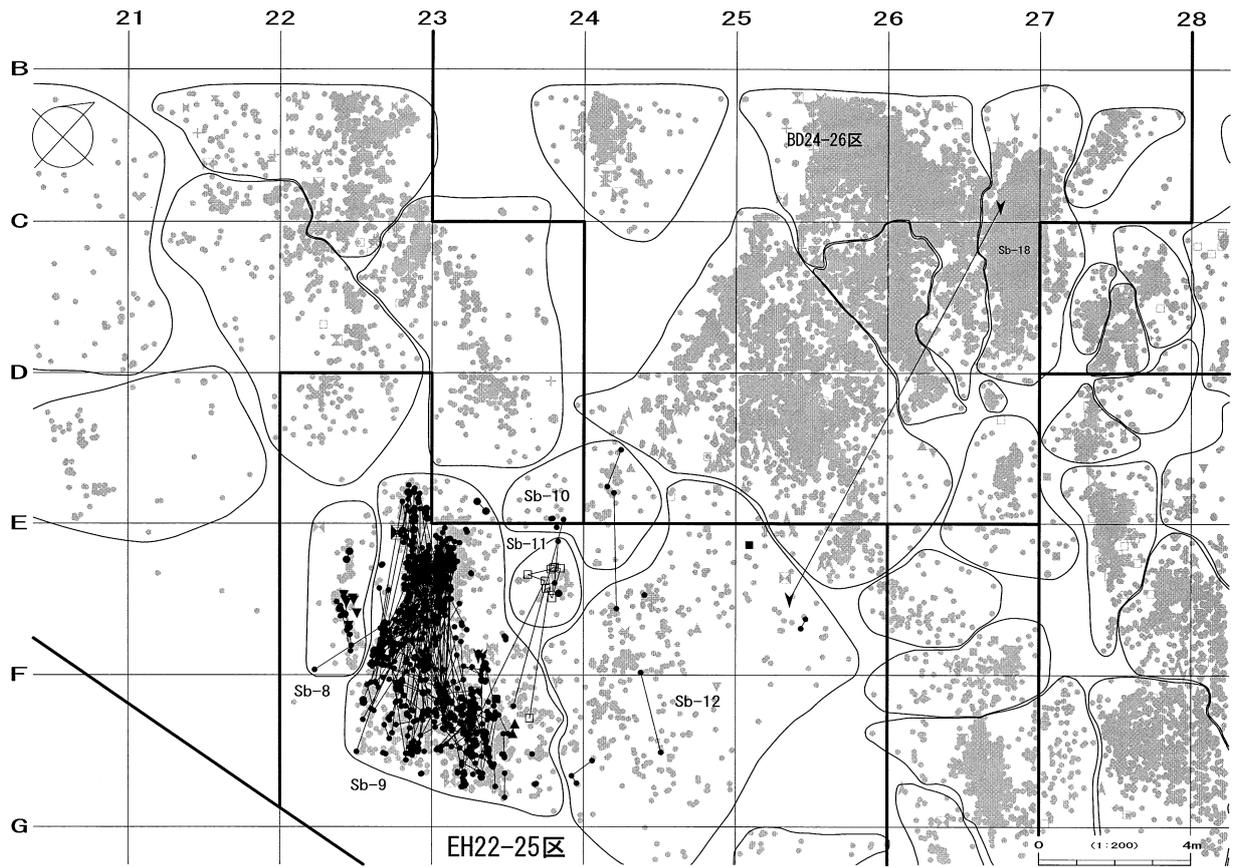
**Sb-8** (図Ⅲ-84)

Sb-8はEH22-25区西部に位置し、規模は4.6×1.8m、面積は7.1㎡を測る。遺物分布はE22区に斜面方向と調和する帯状の集中域が認められる。出土総数は134点・2,420.1gで、その内剥片が107点・79.9%、石刃・縦長剥片が19点・14.2%を占める。ブロック間接合では特にSb-9と関係が強い。遺物は小型舟底形石器石器群のものが主体を占める。主な石器には削器(7点)、石核(1点)がある。

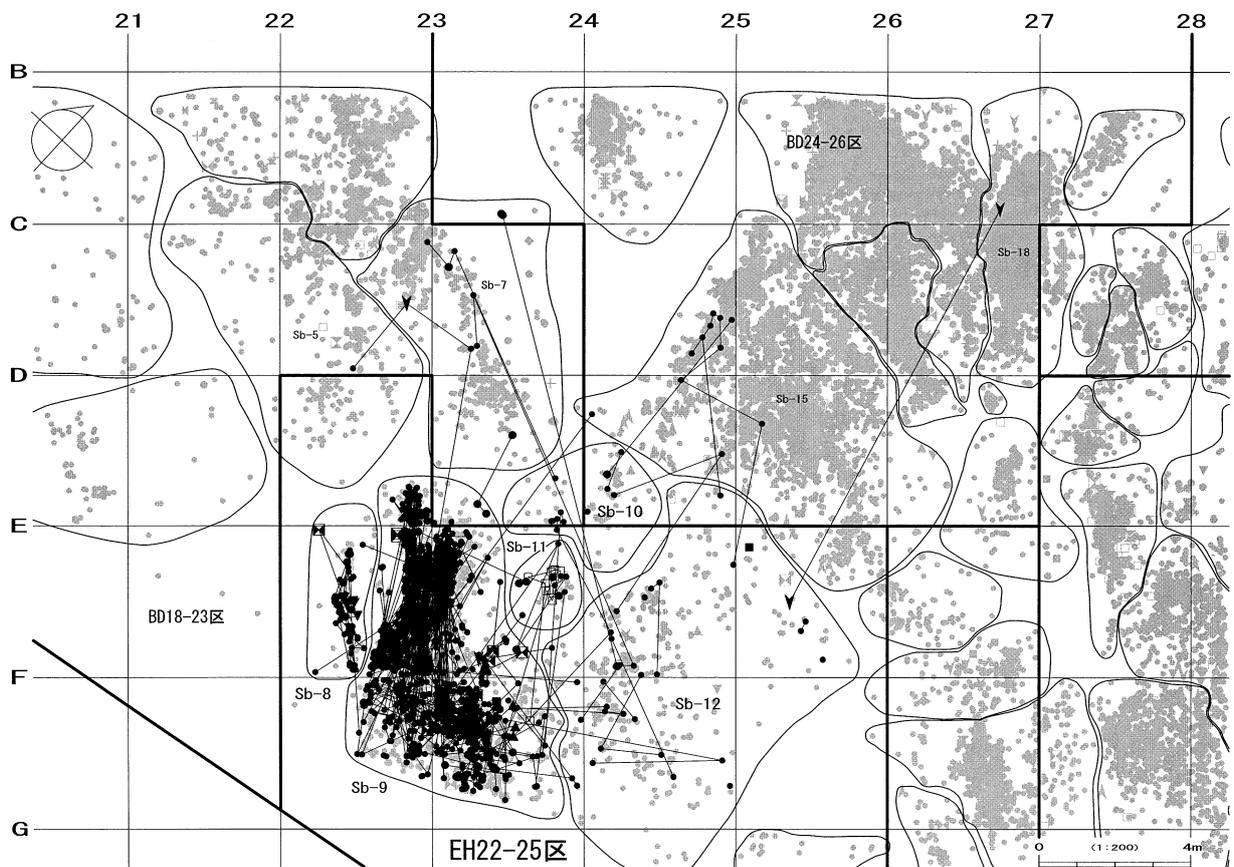
剥離面接合関係を持つ資料は全体で62点(46.3%)に及び、剥片では45点(42.1%)、石刃・縦長剥片では11点(57.9%)にみられる。

**Sb-9** (図Ⅲ-85~87)

Sb-9はEH22-25区西部に位置し、規模は9.9×5.5m、面積は35.1㎡を測る。遺物分布はE・F22・23区に7mほどの濃密な集中域が認められる。ブロックは斜面方向とほぼ調和した帯状を呈しており、斜面末端のF22・23区では間層を挟んで上下2枚の遺物包含層が確認できる。しかし、両者は同様の石器群で接合関係も認められるため、ソリフラクション等周氷河現象による顕著なマスムーブメ



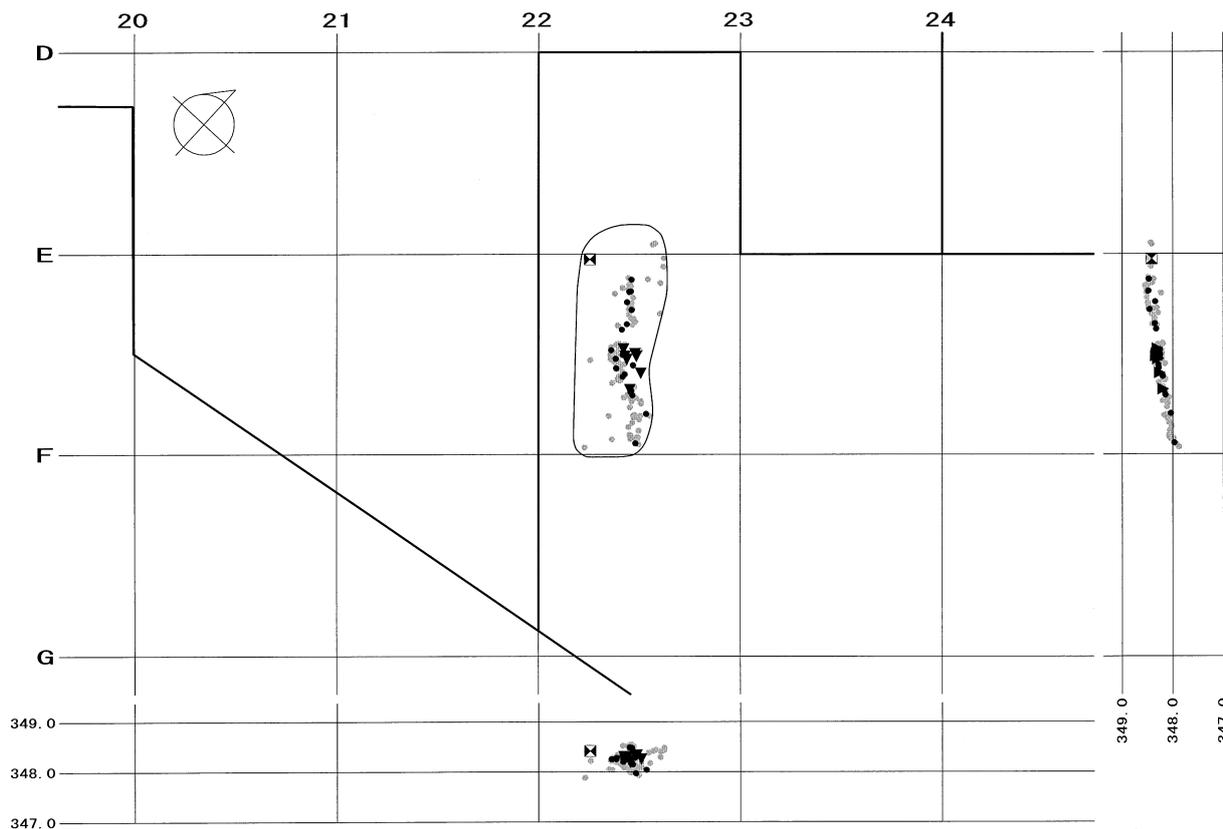
折れ面接合のみ



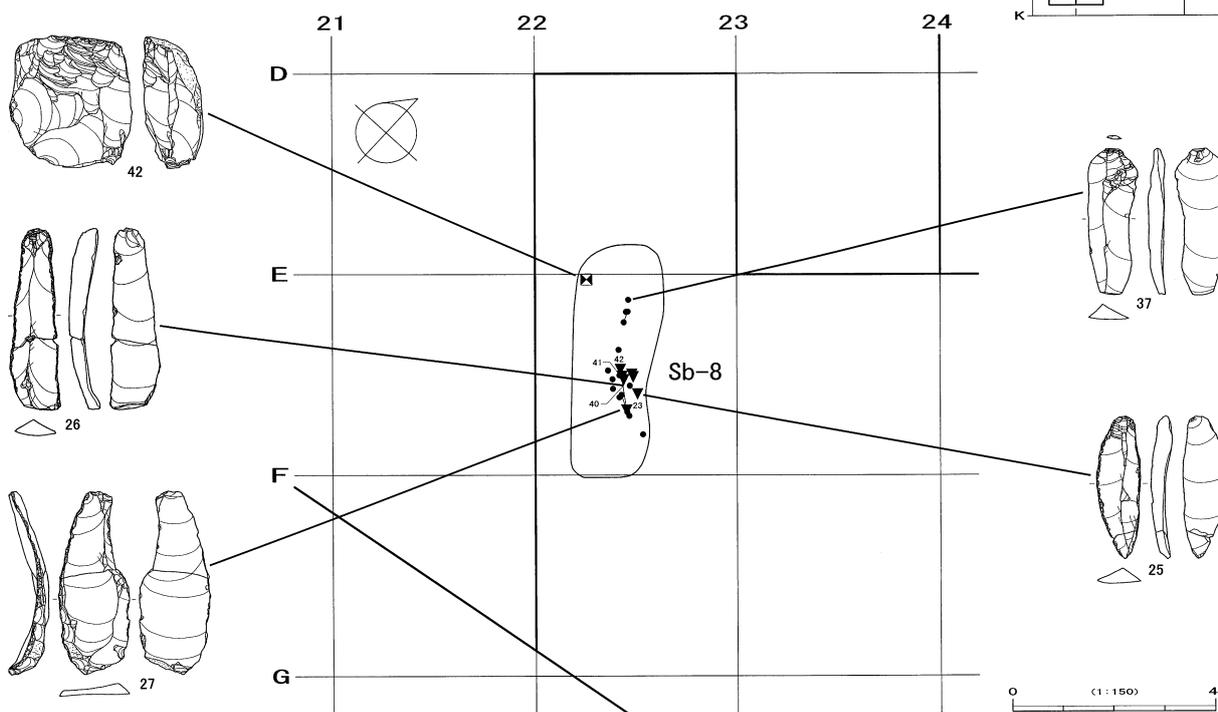
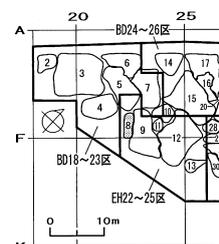
剥離面・折れ面接合

図III-83 EH22-25区 接合資料分布図

Sb-8

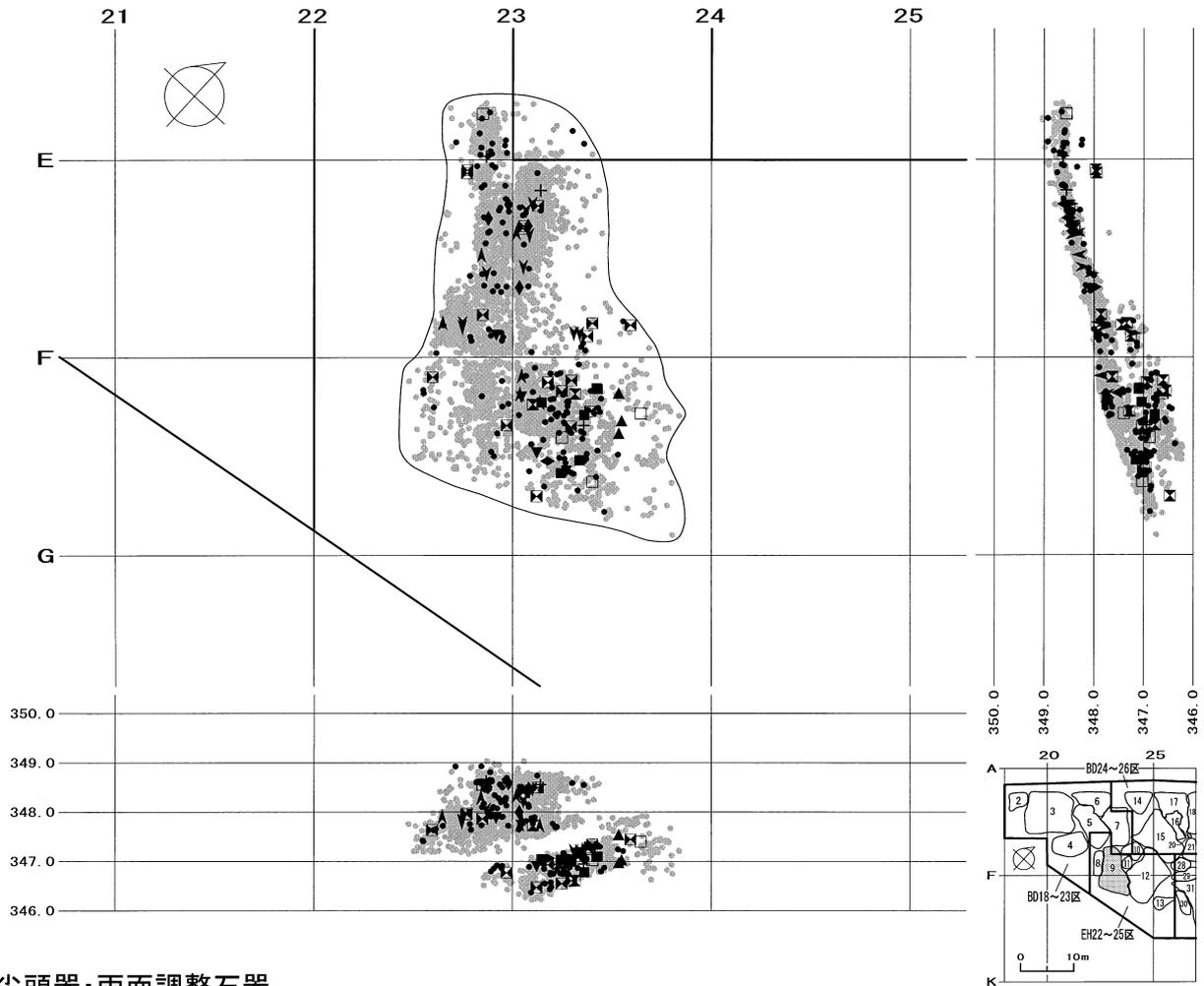


Sb-8		
シンボル	内容	点数
▼	削器	7
●	石刃・縦長剥片	19
○	剥片	107
⊠	石核	1
計		134

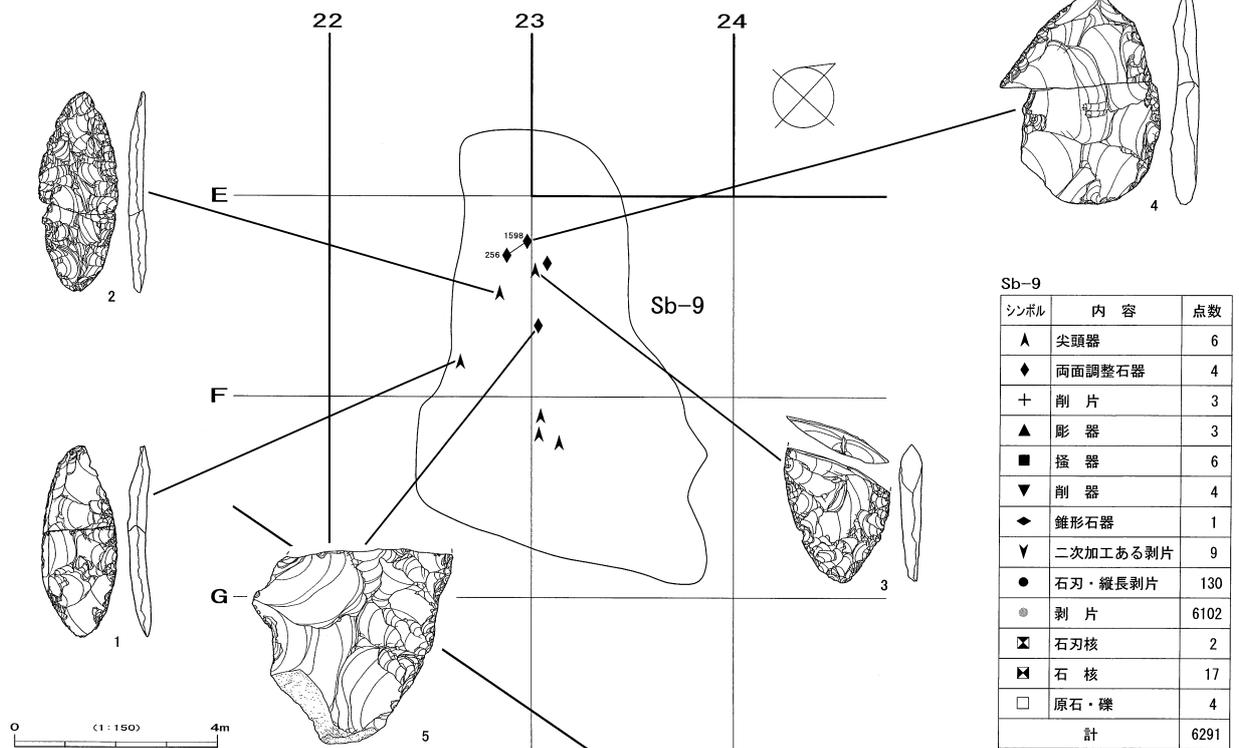


図Ⅲ-84 Sb-8分布状況(平面・断面図)

Sb-9

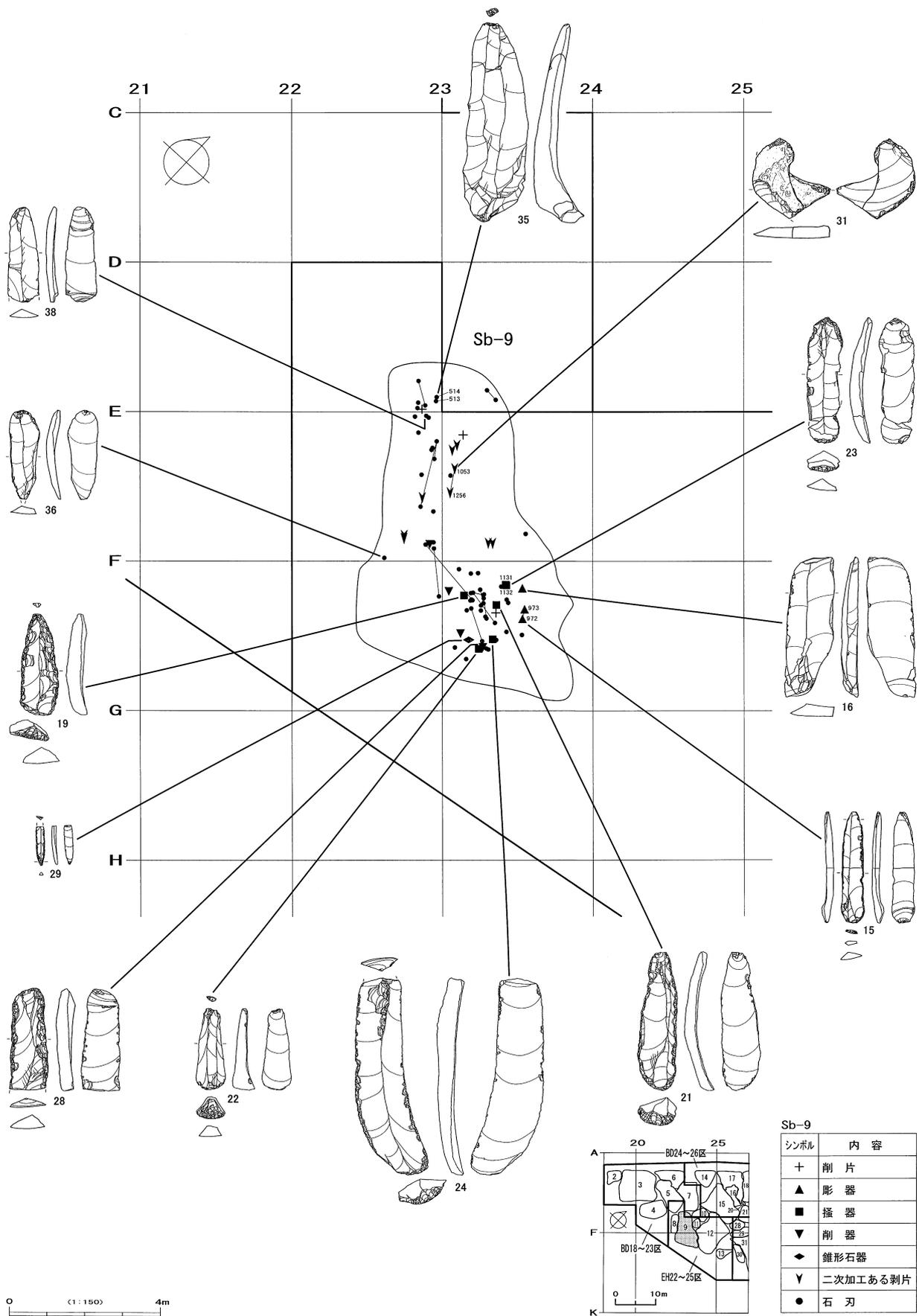


尖頭器・両面調整石器



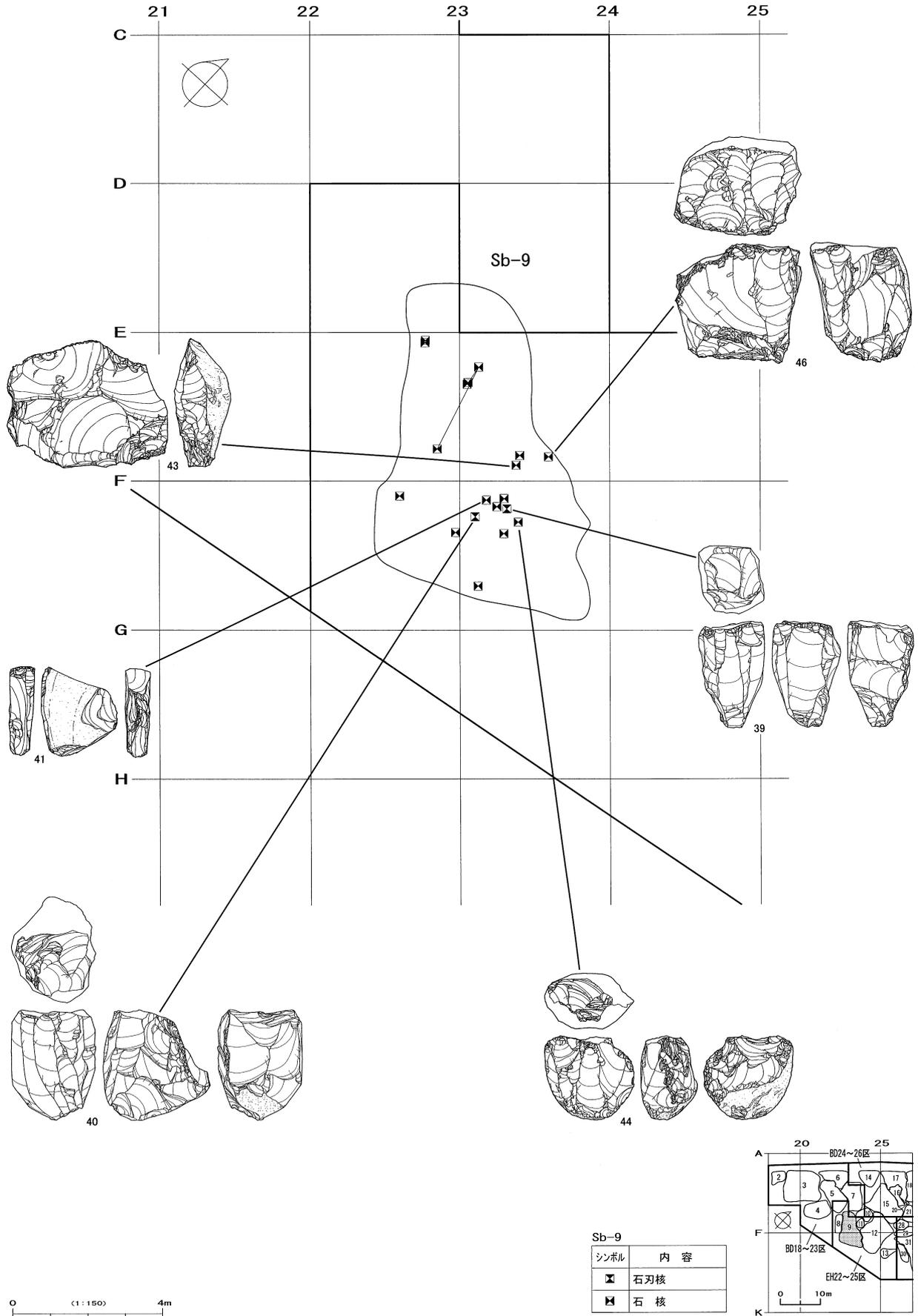
図III-85 Sb-9分布状況(平面・断面図)

削片・彫器・搔器・削器・錐形石器・二次加工ある剥片・石刃



図Ⅲ-86 Sb-9出土遺物の分布(1)

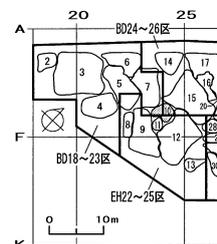
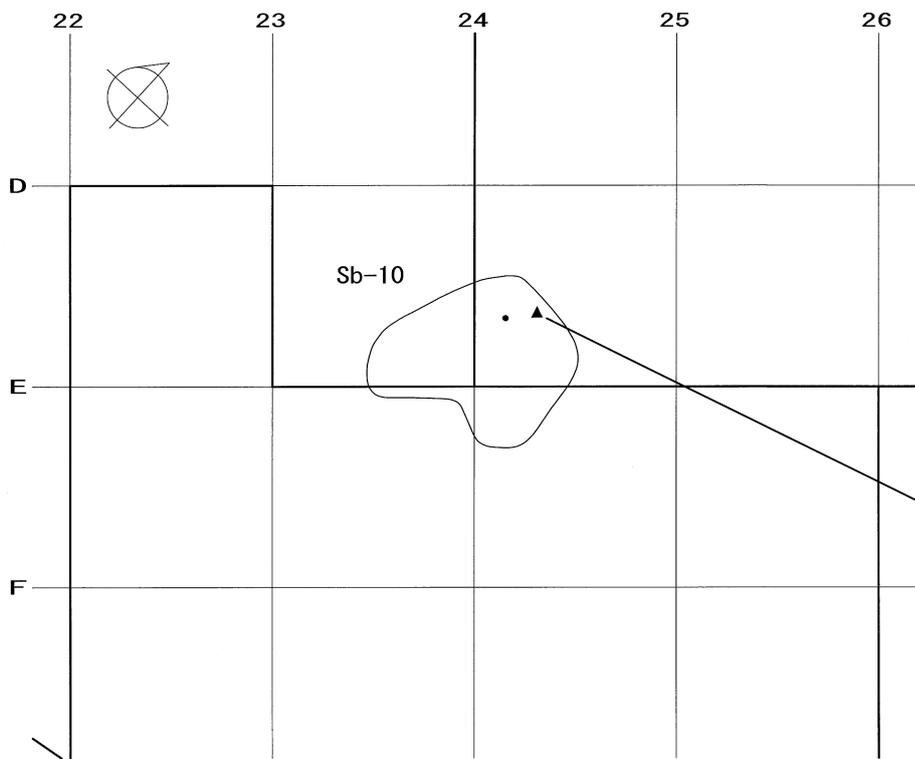
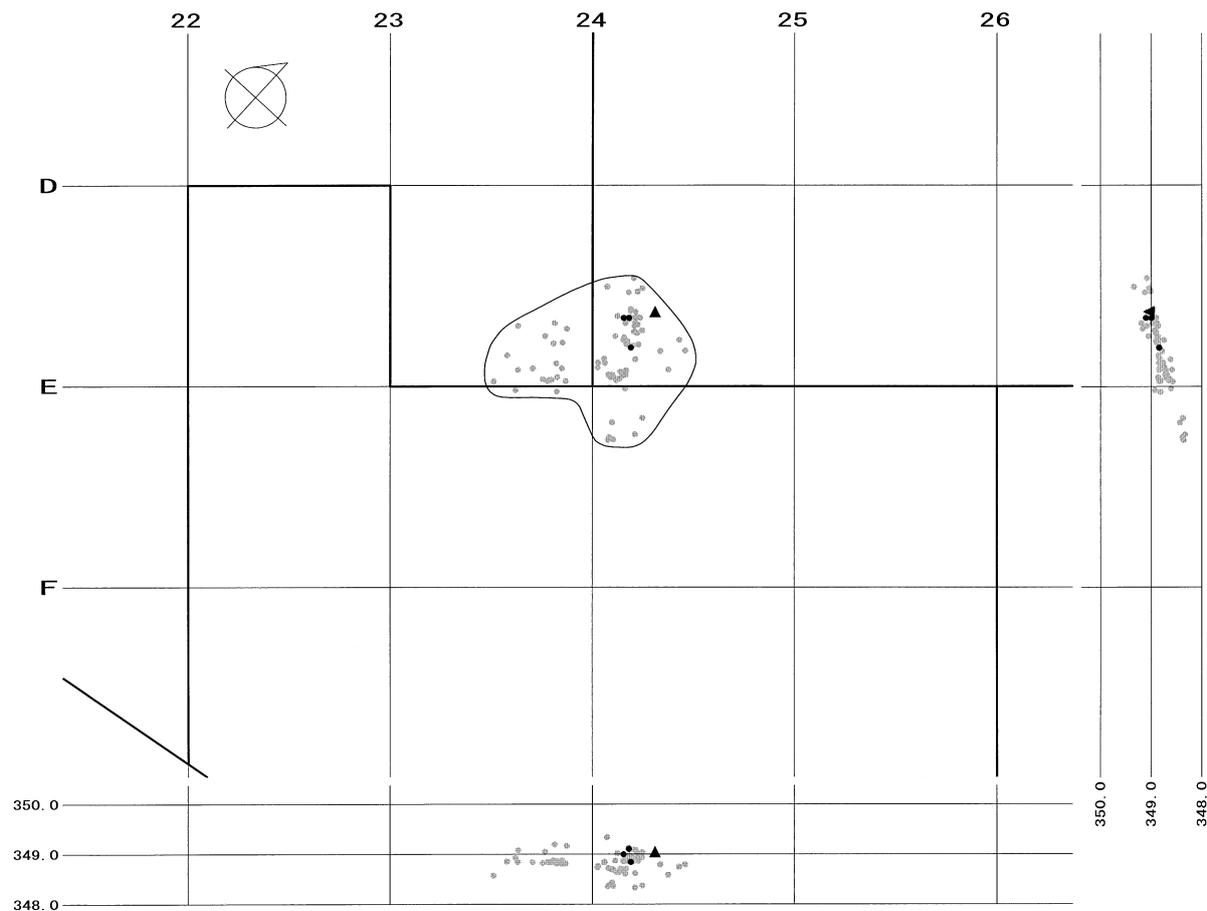
石刃核・石核



図III-87 Sb-9出土遺物の分布(2)

2 遺物

Sb-10



Sb-10

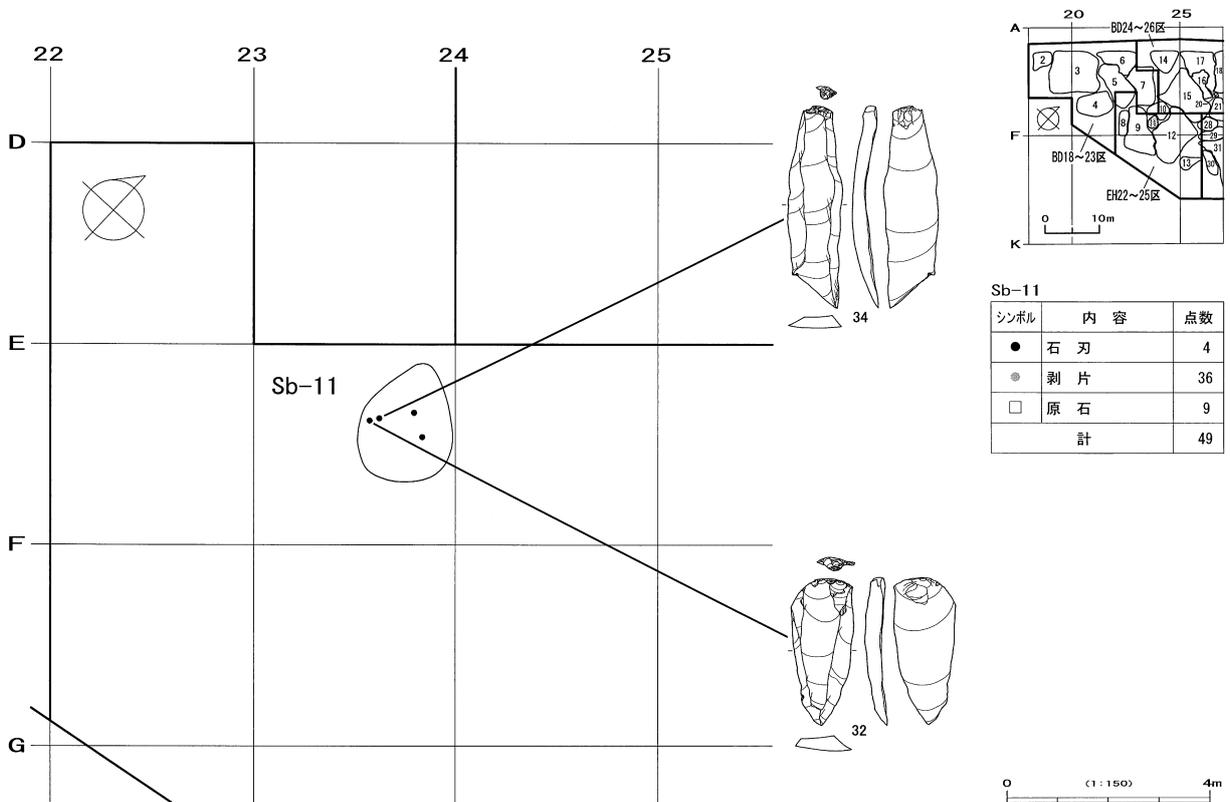
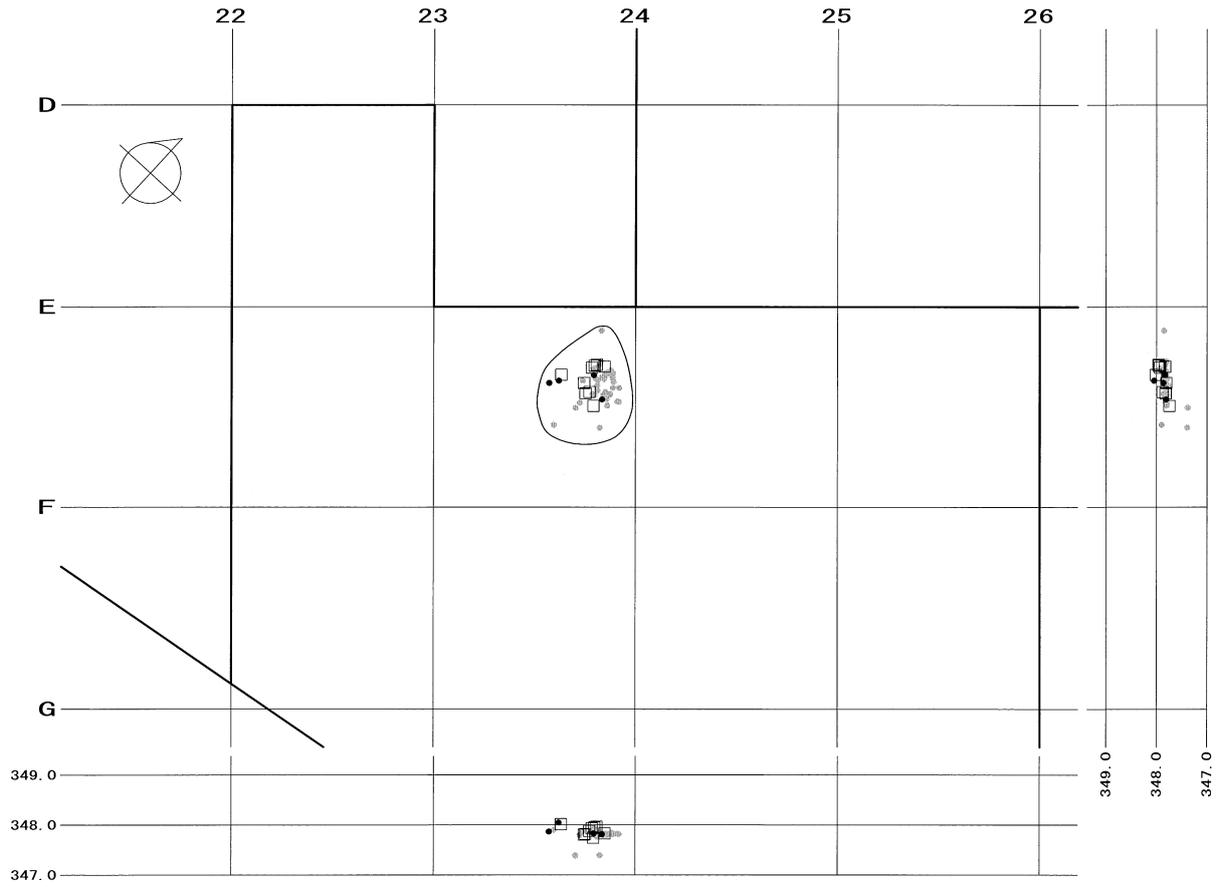
シンボル	内容	点数
▲	彫器	1
●	石刃・縦長剥片	3
◎	剥片	74
	計	78



0 (1:150) 4m

図Ⅲ-88 Sb-10分布状況(平面・断面図)

Sb-11

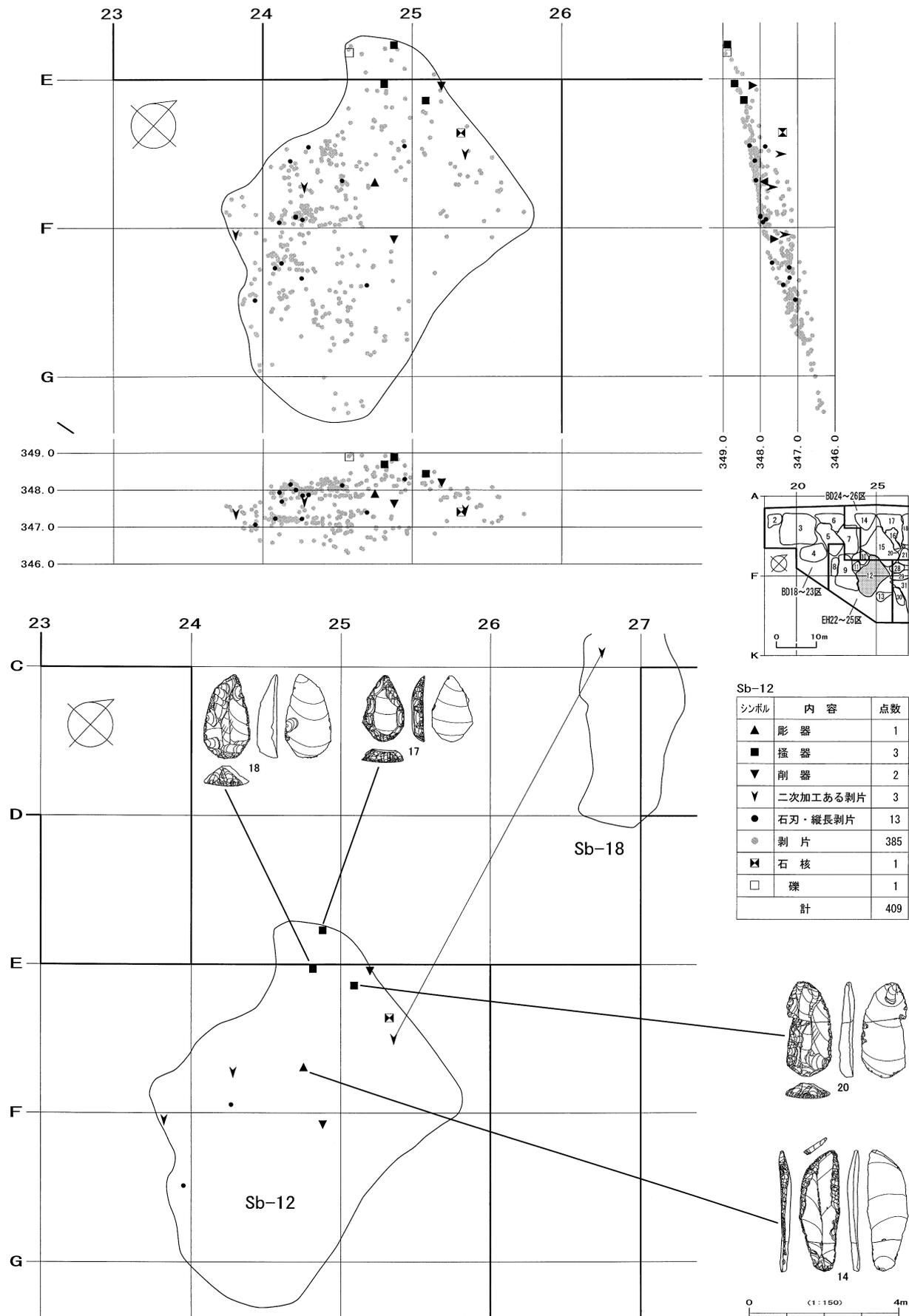


Sb-11

シンボル	内容	点数
●	石刃	4
⊙	剥片	36
□	原石	9
	計	49

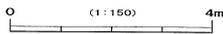
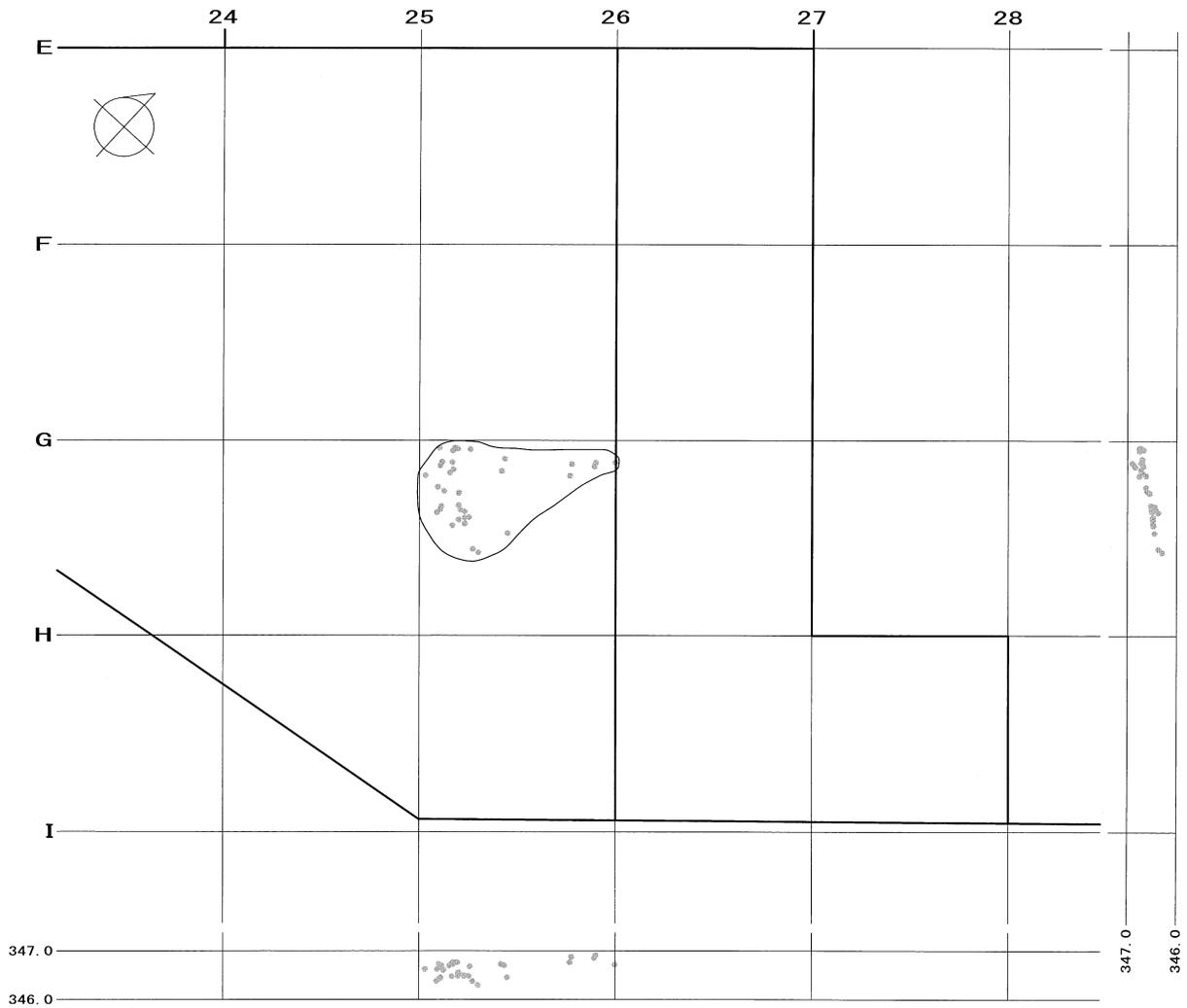
図III-89 Sb-11分布状況(平面・断面図)

Sb-12



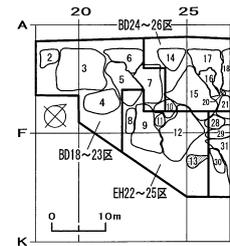
図Ⅲ-90 Sb-12分布状況(平面・断面図)

Sb-13



Sb-13

シンボル	内容	点数
●	剥片	35
	計	35



図III-91 Sb-13分布状況(平面・断面図)

## 2 遺物

ントにより重なり合ったものと思われる。出土総数は6,291点・57,934.0 gで、その内剥片が6,102点・97.0%、石刃・縦長剥片が130点・2.1%を占める。遺物は有舌尖頭器石器群のものが主体を占め、川西型石刃石器群の可能性のあるものも僅かに含まれる。主な石器には尖頭器(6点)、両面調整石器(4点)、削片(5点)、彫器(3点)、搔器(6点)、削器(4点)、錐形石器(1点)、二次加工ある剥片(9点)、石刃核(2点)、石核(17点)がある。

剥離面接合関係を持つ資料は全体で1,327点(21.1%)に及び、剥片では1,234点(20.2%)、石刃・縦長剥片では73点(56.2%)にみられる。ブロック間接合では周辺のSb-8・11・12との関係がみられる。

### Sb-10 (図Ⅲ-88)

Sb-10はEH22-25区北部に位置し、規模は4.2×3.4m、面積は9.2㎡を測る。遺物分布はD23・24区にやや散漫な集中域が認められる。出土総数は78点・625.4 gで、その内剥片が74点・94.9%、石刃・縦長剥片が3点・4.0%を占める。主な石器には彫器(1点)がある。

剥離面接合関係を持つ資料は全体で8点(10.3%)に及び、剥片では7点(9.5%)、石刃・縦長剥片では1点(33.3%)にみられる。

### Sb-11 (図Ⅲ-89)

Sb-11はEH22-25区中央部に位置し、規模は2.4×1.9m、面積は3.4㎡を測る。遺物分布はE23区に小規模な集中域が認められる。出土総数は49点・3,410.7 gで、その内剥片が36点・73.5%、石刃が4点・8.2%を占める。

剥離面接合関係を持つ資料は全体で10点(20.4%)に及び、剥片では6点(16.7%)、石刃・縦長剥片では4点(100.0%)にみられる。

### Sb-12 (図Ⅲ-90)

Sb-12はEH22-25区東部に位置し、規模は10.4×8.3m、面積は50.3㎡を測る。遺物分布はE・F24区にやや散漫な集中域が認められる。出土総数は409点・4,024.6 gで、その内剥片が385点・94.1%、石刃・縦長剥片が13点・3.2%を占める。主な石器には彫器(1点)、搔器(3点)、削器(2点)、二次加工ある剥片(3点)、石核(1点)がある。先端が尖る搔器(17・18・20)がブロック北側縁部から出土している。

剥離面接合関係を持つ資料は全体で29点(7.1%)に及び、剥片では28点(7.3%)、石刃・縦長剥片では1点(7.7%)にみられる。

### Sb-13 (図Ⅲ-91)

Sb-13はEH22-25区東部に位置し、規模は4.2×2.5m、面積は6.2㎡を測る。遺物分布はG25区に散漫な集中域が認められる。出土総数は35点・213.9 gで、全て剥片である。また、ブロック内を含め周辺ブロックとの接合関係も認められなかった。

## ② 出土石器 (表Ⅲ-2～16)

出土した遺物は表土・Ⅱ層を合わせ、尖頭器(12点)、両面調整石器(5点)、舟底形石器(2点)、彫器(6点)、搔器(10点)、削器(15点)、錐形石器(2点)、二次加工ある剥片(12点)、細石刃(2点)、石刃(89点)、縦長剥片(91点)、石刃核(2点)、石核(21点)、削片(28点)、剥片(215,765点)、原石(23点)、礫(2点)がある。総点数は216,087点、総重量は85,605.0 gである。層位・取り上げ方法別の内訳はⅡ層点取り遺物6,997点・68,634.9 g、表土一括遺物1,561点・4,311.3 g、Ⅱ層一括遺物207,528点・12,597.0 g、ボサ遺物1点・61.8 gである。

石器石材には黒曜石(216,016点)、頁岩(65点)、めのう(4点)、泥岩(1点)、砂岩(1点)が

みられる。黒曜石が圧倒的に多く、99.9%以上を占める。石質細分できた黒曜石（7,124点）をみると、黒曜石1（2,012点・28.2%）、黒曜石2（4点・0.06%）、黒曜石3（699点・9.8%）、黒曜石4（2,830点・39.7%）、黒曜石5（1,579点・22.2%）の割合となる。

EH22-25区では有舌尖頭器そのものの出土はないものの①有舌尖頭器石器群に特徴的な石器（石刃核母型を作成し、打面調整と頭部調整を行う石刃技法のあり方と剥片素材の尖頭器）、②小型舟底形石器石器群に特徴的な石器（平坦打面で頭部調整の施されるやや小型の石刃）、③川西型石刃石器群に特徴的な石器（頭部調整が微弱で粗い打面調整を施す打面部の厚い石刃）が認められ、①が大部分を占める。分布状況では①がSb-9を中心として隣接するSb-8・11・12・13に僅かに広がり、②がSb-8の一部に、③がSb-9の一部に少量みられる。このような混在する出土状況であったため、①～③の明確な分離は困難であった。これらのことから当該区は上記①有舌尖頭器石器群を中心とし、②小型舟底形石器石器群、③川西型石刃石器群の出土区域として認識した。

#### 尖頭器（図Ⅲ-92-1～3、図版84）

尖頭器は表土・II層を含め12点・10個体が出土し3個体を図示している。全てI類（舌部・削片剥離のないもの）である。1は折損した完形品で、正裏面とも素材面が大きく残存している。削片素材で、素材の打面部および右側縁を中心とする加工が施されている。2は裏面に素材剥片の腹面が大きく残存している。裏面は打面側への加工が中心である。3は上部折損品で、器体の中央部に最大幅部を持つ形状が復元できる。正裏面とも薄手の平坦剥離が全面的に施され、裏面の一部に横方向の素材腹面が残存している。

#### 両面調整石器（図Ⅲ-92-4・5、図版84）

両面調整石器は表土・II層を含め5点・4個体が出土し2個体を図示している。4は折損した完形品で、正裏面とも素材面が大きく残存している。削片素材で、素材を横位に利用している。尖頭器製作の最初期段階で破損しており、破損後素材の打面部に急角度の加工が施されている。5は折損品で、正裏面に岩屑面が残存する石核素材のものである。裏面左側縁からの加工のみ薄手の平坦剥離で、その他は粗い加工となっている。

#### 削片（図Ⅲ-93-6～11、図版84）

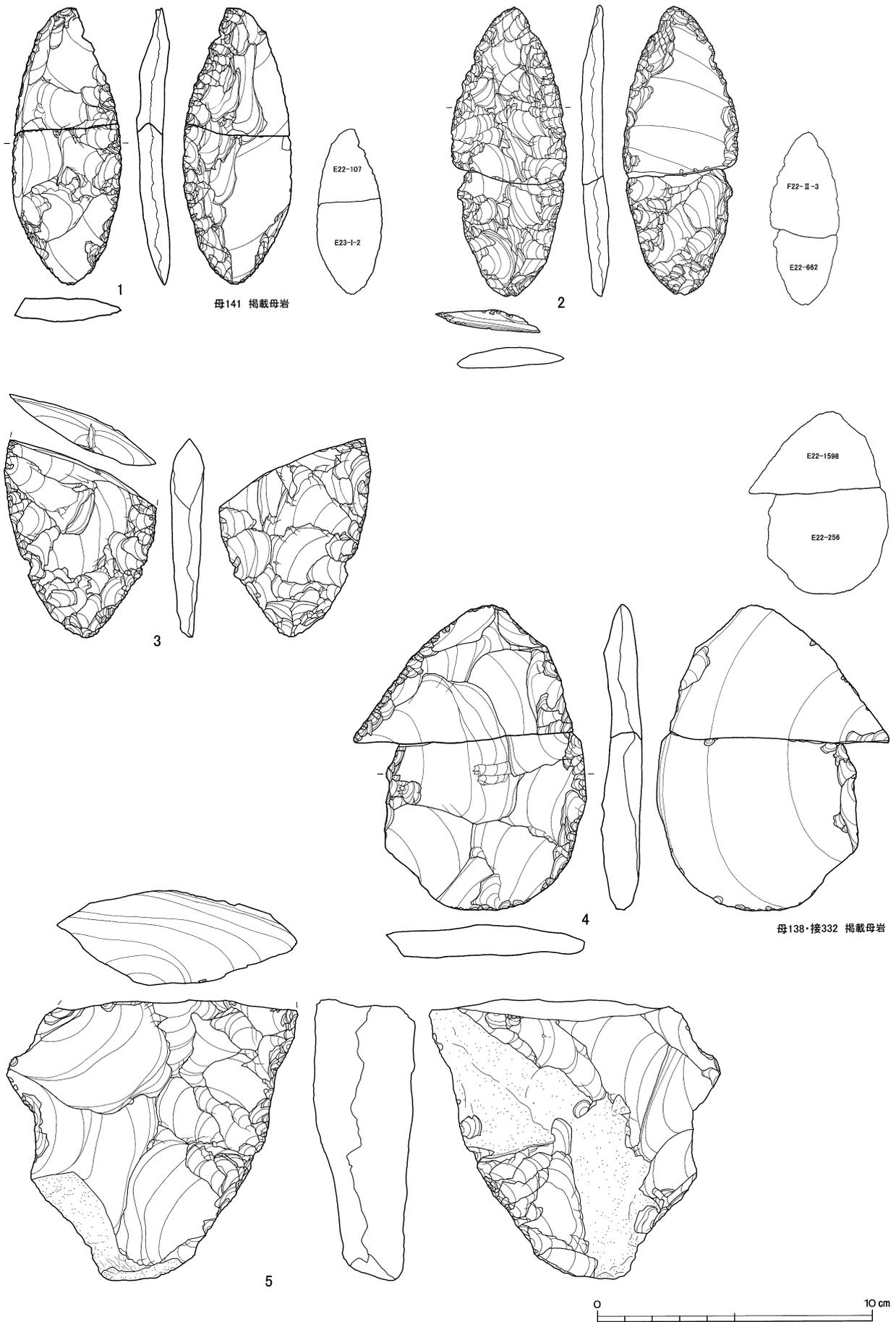
削片は表土・II層を含め28点・28個体が出土し6個体を図示している。いずれも左刃の彫器削片で、7・8が頁岩製、それ以外は黒曜石製である。作出された彫刀面傾斜角は6～8が彫器の腹面側、11が彫器の背面側に傾くもので、9・10は末端側が彫器の背面側にねじれる形状を呈している。6は一次削片で旧彫刀面の縁辺部に連続した細かな加工が施されている。7は中央部に背面先端部加工が施されている。9は旧彫刀面に微細剥離がみられる。10は背面先端部調整が施されている。11は幅が8mm程あり、他の削片に比べ幅広である。

#### 彫器（図Ⅲ-93-12～16、図版84）

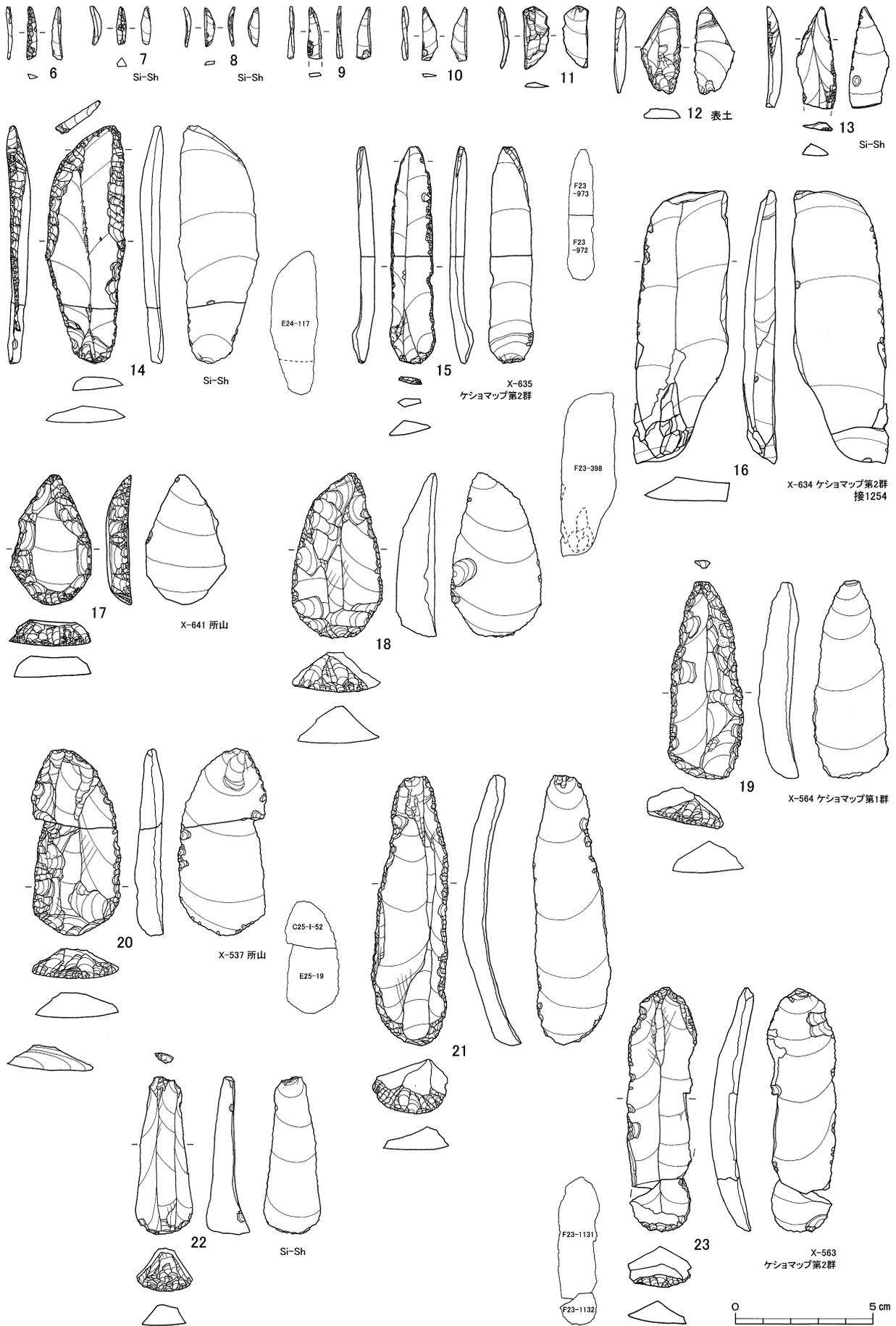
彫器は表土・II層を含め6点・5個体が出土し全て図示した。いずれも石刃素材で、12～14が左刃彫器、15が交叉刃、16が右刃で側刃型のものである。石材は13・14が頁岩で、その他は黒曜石である。後者の内15・16は縞状の筋模様が入るもので、産地分析の結果両者ともケショマップ第2群と判定されている。彫刀面の傾斜角は12・13が背面側に傾き、14および15の左刃は腹面側に傾き、16は90度前後となっている。12・13は忍路子型細石刃核石器群に伴う彫器と類似する。

12は小型品で基端部が収斂するように両側縁に急角度加工が施されている。腹面の彫刀面と接する範囲には彫刀面に対してほぼ直行する線状痕が認められる。13は右側縁の下部のみに側縁調整がなされている。裏面には被熱による焼け弾けが見られる。14は両側縁とも中央部が突出する形状で、

2 遺物



図Ⅲ-92 EH22-25区の石器(1) 尖頭器・両面調整石器



図III-93 EH22-25区の石器(2) 削片・彫器・搔器

その上下で加工の種類が異なる。上半部は薄手の平坦加工でさらに右側縁には左上がりの斜平行剥離が施されている。下半部は急角度加工となっている。素材の打面部が残存しており、平坦打面で打点頂部を突出させるような頭部調整が施されている。**15**は細長い形状で、両側縁には急角度で細かな側縁調整が施されている。打面調整の施された素材打面部が残存している。**16**は先行する彫刀面剥離がウートラパッセを起こしている。

#### 搔器 (図Ⅲ-93-17～図Ⅲ-94-24、図版84・85)

搔器は表土・Ⅱ層を含め10点・8個体が出土し全て図示した。いずれも石刃素材で21が頁岩製、その他は黒曜石製である。後者の内17・19・20・23・24は産地分析を行っており、17・20が置戸所山産、19・24は灰色の石質でケショマップ第1群、23は縞模様の石質でケショマップ第2群と判定されている。**17**は先端部が尖る形状で、急角度の加工が全周している。左側縁と刃部の境が明瞭に屈曲している。素材面と二次加工面ではパティナが異なり、前者は不規則な傷がありガラス光沢が鈍い。**18**は先端部が尖る形状で、側縁加工は全周に及び、左側縁の先端側は平坦加工でそれ以外は短い急角度加工となっている。**19**はほぼ全周する側縁調整が施され、平坦打面と岩屑面が残存している。刃部加工の末端部と素材の稜線との交点付近は敲打による潰れがみられる。**20**は折損後、左側縁に入念な側縁調整が再度行われている。それにより左側縁と刃部の境が明瞭に屈曲する形状となっている。素材面には不規則な傷が多く、稜線も潰れており、ガラス光沢が鈍っている。**21**は側縁全体に短い急角度加工が施されている。**22**は末端部に最大厚があり、素材の打面は調整打面である。**23**は刃部のみの加工で、薄手で鋭い刃部が作出されている。**24**の素材は長大で末端が右に湾曲している。縁辺には短い急角度加工が部分的に施されている。

#### 削器 (図Ⅲ-94-25～28、図版85)

削器は表土・Ⅱ層を含め15点・11個体が出土し4個体を図示している。いずれも石刃素材の黒曜石製である。**25**は末端部が尖る形状で、縁辺全体に短い急角度加工が施されている。素材の打面は調整打面で頭部調整がみられる。**26**は両側縁がほぼ平行する形状で、縁辺全体に短い急角度加工が施されている。素材の打面は平坦打面で粗い頭部調整がみられる。**27**は側面観が大きく湾曲する形状で、特に右側縁に短い急角度加工が施されている。素材の打面は調整打面で、頭部調整がみられる。**28**は上下端部が折損している。右側縁は長くやや粗い平坦剥離によって加工されている。両側縁とも上端の折れ面を切って加工が施されている。

#### 錐形石器 (図Ⅲ-94-29・30、図版85)

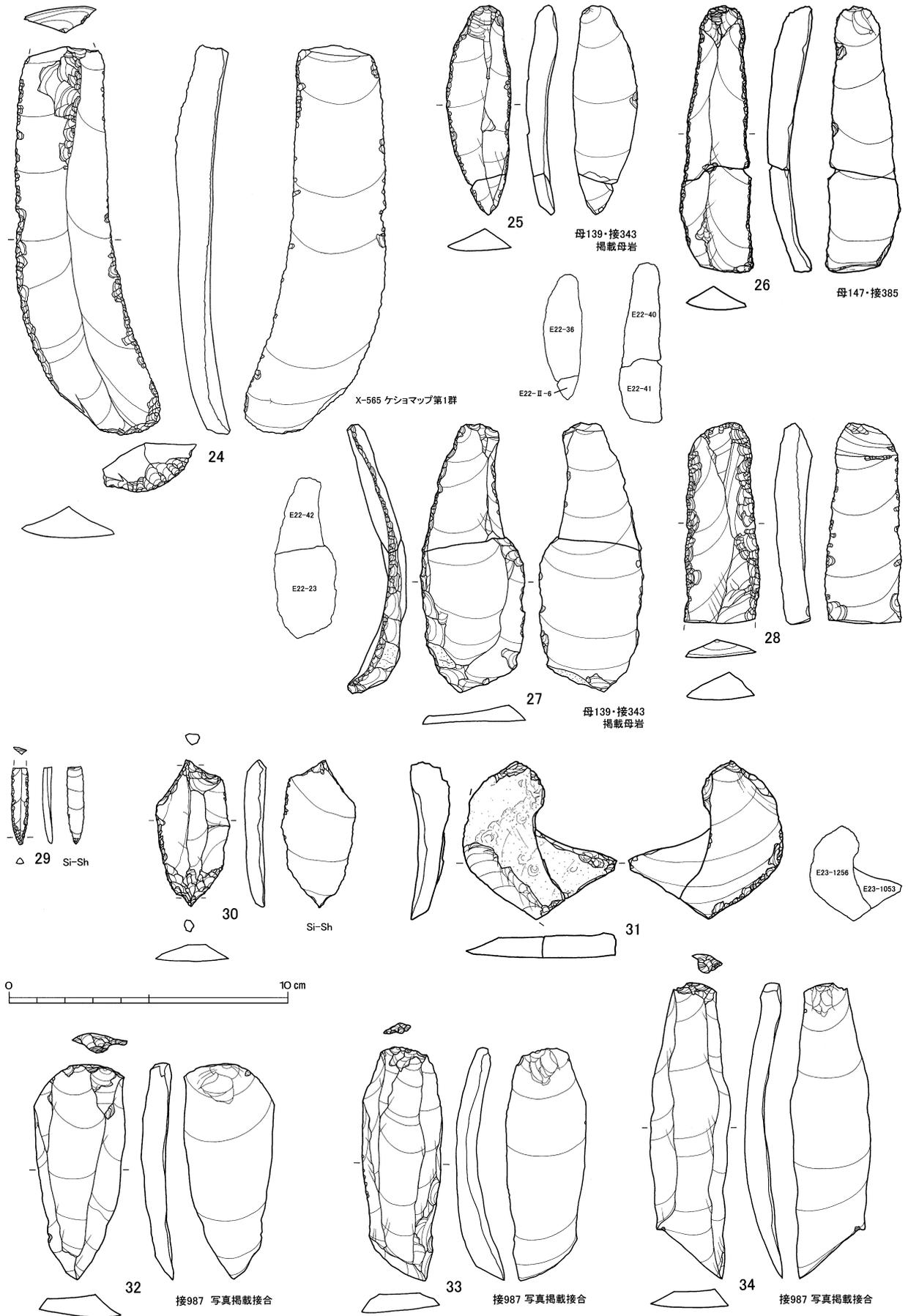
錐形石器は表土・Ⅱ層を含め2点・2個体が出土し全て図示した。いずれも石刃素材の頁岩製である。**29**は細長い形状で、突出部は急角度加工によって形成されている。突出部の裏面には使用痕の可能性のある横方向の微細剥離がみられる。**30**は上下両端にノッチ状の加工により厚手の突出部が作出されている。

#### 二次加工ある剥片 (図Ⅲ-94-31、図版85)

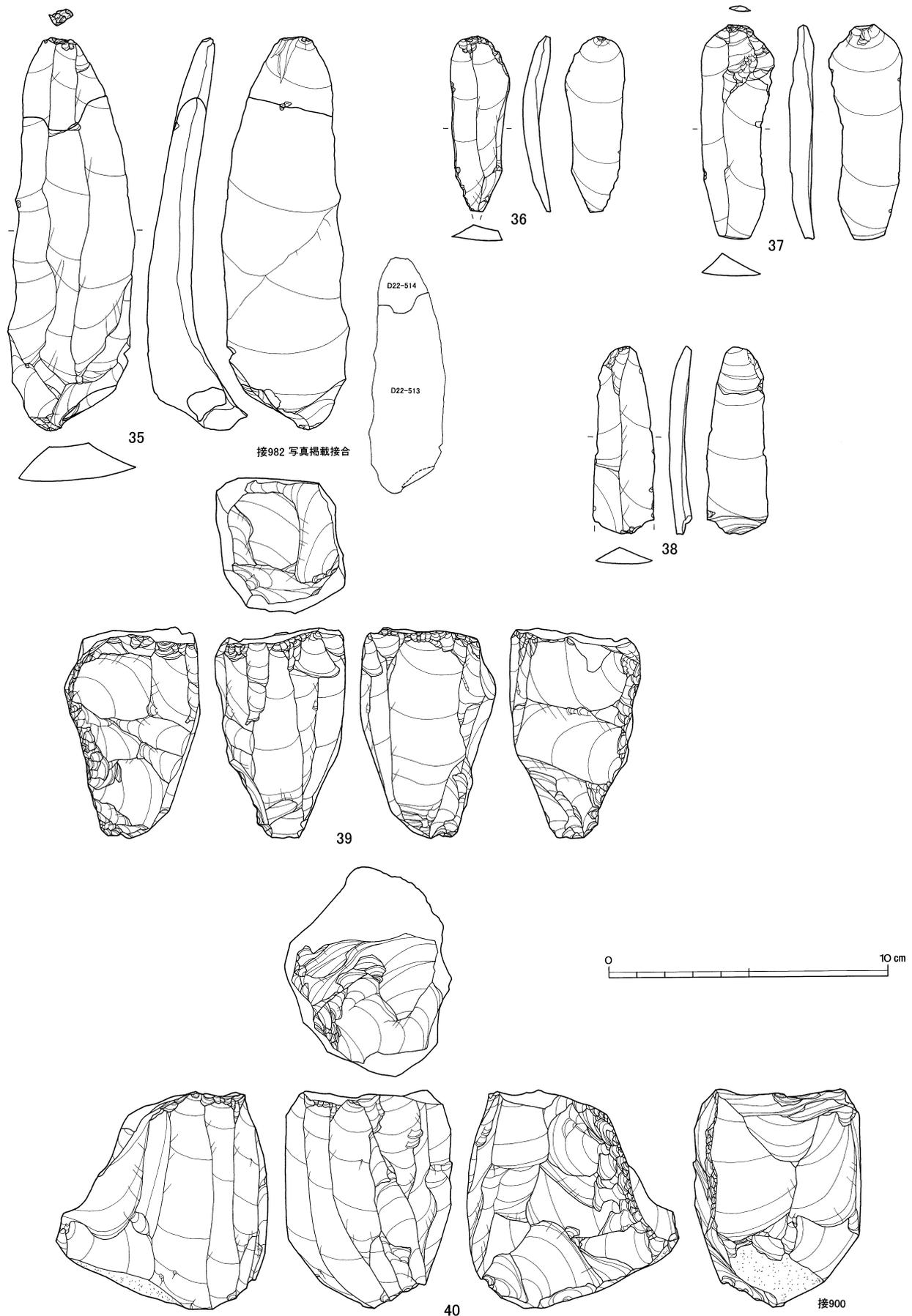
二次加工ある剥片は表土・Ⅱ層を含め12点・9個体が出土し1個体を図示している。**31**は被熱により破損しているもので、素材の裏面に細かな加工が連続して施されている。正面には平滑な原石面が大きく残存している。

#### 石刃 (図Ⅲ-94-32～図Ⅲ-95-38、図版85)

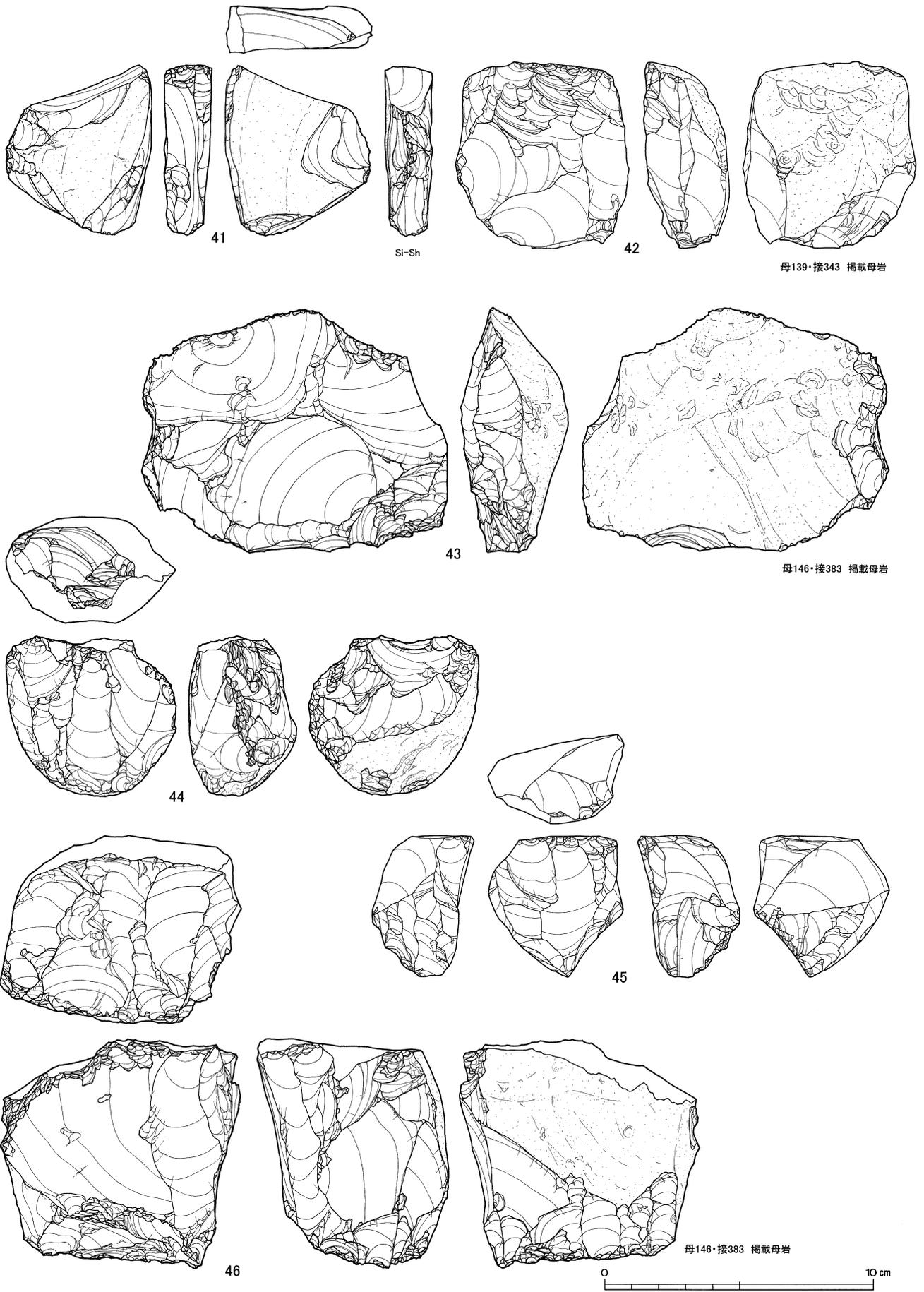
石刃は表土・Ⅱ層を含め89点・72個体が出土し7個体を図示している。**32～35**は打面調整が施されるものである。さらに、**32・34**は打面が大きく、打点部が不明瞭で剥離開始部がリップ形状を呈している。これらの特徴は川西型石刃石器群(北埋調報286・302)の石刃と類似する。**32**は末端部が



図Ⅲ-94 EH22-25区の石器(3) 搔器・削器・錐形石器・二次加工ある剥片・石刃



図Ⅲ-95 EH22-25区の石器(4) 石刃・石刃核・石核



図Ⅲ-96 EH22-25区の石器(5) 石核

収斂する形状で、打面部付近に最大幅部を持つ。打面調整により打面縁辺部と背面との角度が鈍角となっている。**33**は右側面に裏面方向からの石核調整痕がみられる。**35**は背面側の打面縁辺に長軸方向の擦痕が認められる。**36**は複剥離打面で頭部調整のあるものである。**37**は平坦打面で頭部調整のあるもので、頭部調整は入念に施されている。**38**は上下端が折損しているものである。

#### 石刃核（図Ⅲ-95-39・40、図版86）

石刃核は表土・Ⅱ層を含め2点・2個体が出土し全て図示した。**39**は複剥離打面で頭部調整の施されるもので、正面と右側面を中心に石刃剥離が行われている。裏面は横方向の石核調整により平坦化され、左側面には裏面からの側面調整の痕跡が残る。**40**は打面調整・頭部調整の施されるもので、正面と左右の側面に石刃剥離が及んでいる。両設打面だが正面で行われる下からの石刃剥離は部分的である。右側面には裏面からの側面調整の痕跡、下面には転礫面が残存している。

#### 石核（図Ⅲ-96-41～46、図版86）

石核は表土・Ⅱ層を含め21点・16個体が出土し6個体を図示している。**41**は扁平な頁岩製原石を素材とし、小口面で石刃剥離が行われている。部分的に背稜が形成されているが、片側が急角度なため左右に均等な交互剥離となっていない。**42**は裏面に大きく転礫面が残存しており、正面上からの打面も原石面となっている。石刃剥離の後、横方向の剥離によりバルブの発達した寸詰まりの剥片が剥離されている。**43**は剥片素材で、素材腹面の平坦面を主な作業面として上下からの粗い剥離が行われている。裏面は転礫面に覆われている。**44**は小型の石核で、正面での石刃剥離が進行し小型の剥片剥離に至ったものと考えられる。裏面は横方向の石核調整によりなだらかに湾曲している。左側面には転礫面が大きく残存する。**45**は小型の石核で、正面上からと裏面斜め下からの剥離が主な作業面であったとみられる。正面の剥離には縦長剥片も含まれるが最終的にヒンジを起こしている。**46**は上面への剥離が連続的に行われた後、正面と右側面との角部を利用して縦長剥片が剥離されている。上面への剥離は部分的な打面調整と粗い頭部調整が施されている。下設の調整打面から裏面側に剥離が行われているが、石核の半ばまでしか達しないものが大半である。

### ③ 母岩別接合資料

EH22-25区では216,087点が出土し接合作業の結果、200個体、1,527点の剥離面接合資料を得ることができた。接合率は0.7%である。さらに母岩分類作業によって、母岩別資料19個体（遺物点数2,026点、内剥離面接合資料79個体・1,056点）と非母岩別剥離面接合資料121個体（遺物点数471点）に整理され、この内8個体を挿図と写真図版、3個体を写真図版のみの掲載とした。

母岩別接合資料を作業内容別にみると、尖頭器・両面調整石器製作12個体（747点）、舟底形石器製作1個体（10点）、石刃技法関連6個体（273点）、剥片生産6個体（289点）が認められる。個体比率では尖頭器製作が48%、舟底形石器製作が4%、石刃技法が24%、剥片生産が24%で、尖頭器製作が主体的な作業と認められる。なお、上記した母岩別資料の個体数と点数は、2種類以上の剥離技術類型に属する場合はそれぞれの類型で集計されており、その合計は実数よりも多く算出される。EH22-25区では可能性のあるものも含め3つの石器群が認められ、川西型石刃石器群（非母岩別資料2個体）、小型舟底形石器石器群（2個体）、有舌尖頭器石器群（13個体）がある。

母岩別資料の掲載は尖頭器・両面調整石器製作（図Ⅲ-97～109）、石刃技法（図Ⅲ-110～116）、剥片生産（図Ⅲ-116・117）の順序とした。また一部の資料は写真図版のみの掲載とした。各作業の中では剥離技術の内容で大別したが、挿図割付の関係上若干の前後がある。母岩・接合番号により図版を検索する場合は本章末に掲載の表Ⅲ-39「母岩番号順挿図・図版一覧表」（第4分冊）を参照願

いたい。

### 尖頭器・両面調整石器製作の母岩別資料 (図Ⅲ-97～109、図版87～93)

4個体(母岩138・141・142・143)を図示し、1個体(母岩144)を写真のみ掲載した。尖頭器・両面調整石器製作母岩は主に転礫から石核素材および剥片素材の尖頭器を製作するものがあり、①原石・両面調整石器の状態で遺跡内に搬入し、②25cm以上の大型尖頭器と10cm前後の小型尖頭器を製作する、等の特徴がある。大型尖頭器は石核素材、小型尖頭器は剥片素材のものが多。分布から有舌尖頭器石器群に伴うものと判断している。

#### 母岩別資料142、接合資料369 (図Ⅲ-97～99、図版87)

母岩別資料142は接合資料369・372～374・1276～1278、折れ接合資料50144・50145および非接合剥片26点で構成され、総点数は110点、総重量は2,137.4gである。

**素材** 47は接合資料369で65点(46個体)が接合し、重量は1,920.5gである。石質は黒曜石1で、転礫を素材とし、粗割した両面調整石器の状態を遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 石核素材の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。

【工程1～6】工程1は正面への部分的な平坦加工、工程2・3は裏面への大型の急角度加工で、特に工程2に器体の中軸を越える加工が含まれ、器体の厚みを減じている。工程4は正面への平坦加工である。工程5・6は両者とも裏面への同方向の加工であるが、打面に段差があるため区別した。この工程間に正面側への加工が行われていたとみられる。

【工程7】工程7は器体の分割ないし折損である。上下に二分し(個体A・B)それぞれ再び尖頭器の再加工がなされている。

【個体A】個体Aは上半部にあたり、工程A-1・3・5の正面への右からの加工と工程A-2の裏面への右からの加工が急角度加工となっている。特に工程A-1・5に中軸を越える剥離が含まれ、器体の厚みを減じている。工程A-4・6は裏面への左からの平坦加工で、前者と対照的である。製作尖頭器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された尖頭器の大きさは長10.7×幅3.5×厚3.3cm程度である。

【個体B】個体Bは下半部にあたり、工程B-1の裏面への右からの加工の後、工程B-2の正面への左からの加工が連続的に行われている。中軸を越える剥離も多く、器体の厚みが大きく減じている。工程B-3～6は裏面側への左右からの平坦加工である。製作尖頭器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された尖頭器の長軸は折損前に比べ斜めに傾き、大きさは長11.9×幅5.1×厚1.8cm程度である。

**分布** 個体部分も含めSb-9の遺物集中範囲の南西端から帯状にまとまって出土している。

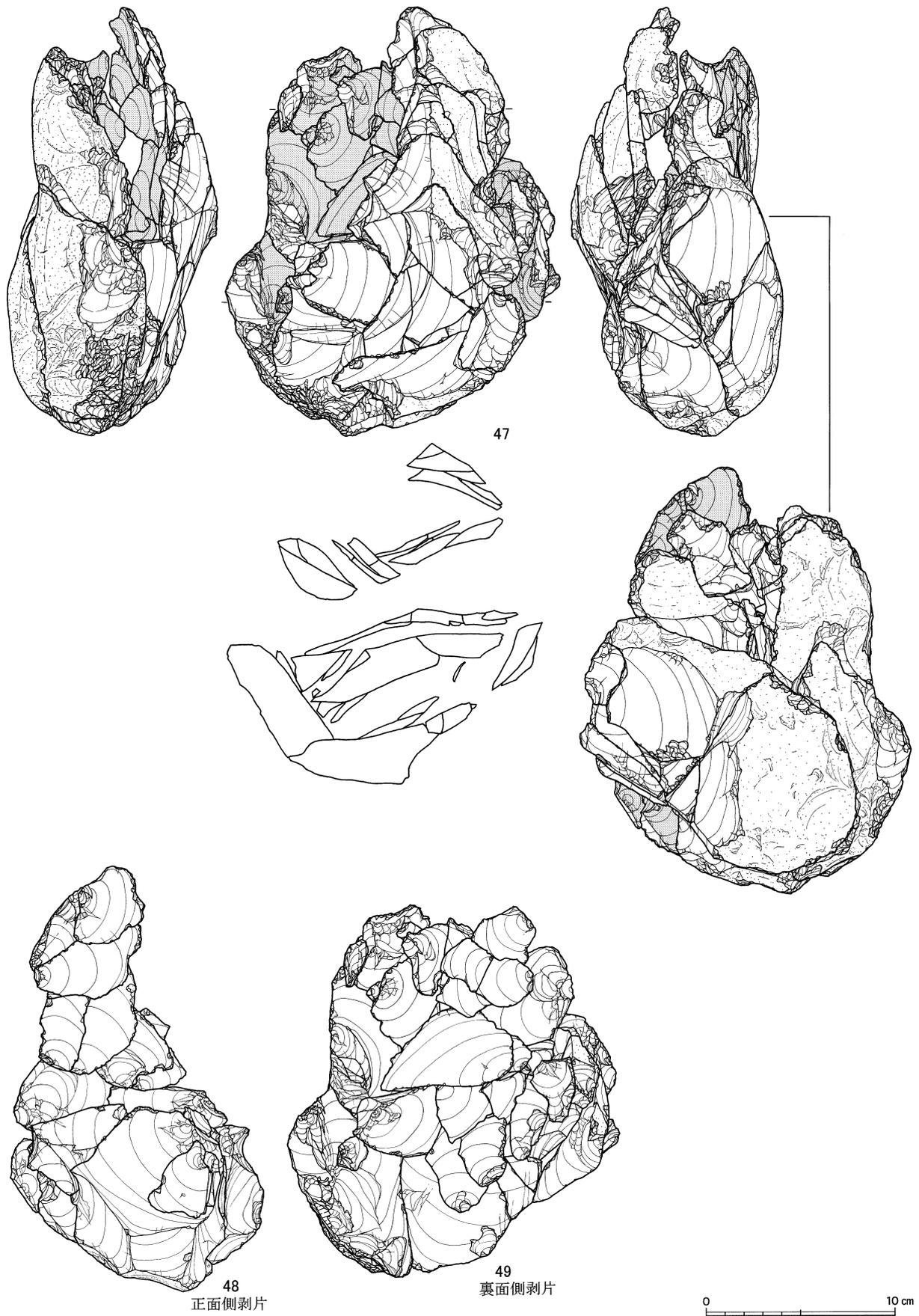
#### 母岩別資料143、接合資料375・1113 (図Ⅲ-99・100、図版88)

母岩別資料143は接合資料375・1113・1114・1279、折れ接合資料50284・51723および非接合剥片31点で構成され、総点数は95点、総重量は1,368.5gである。

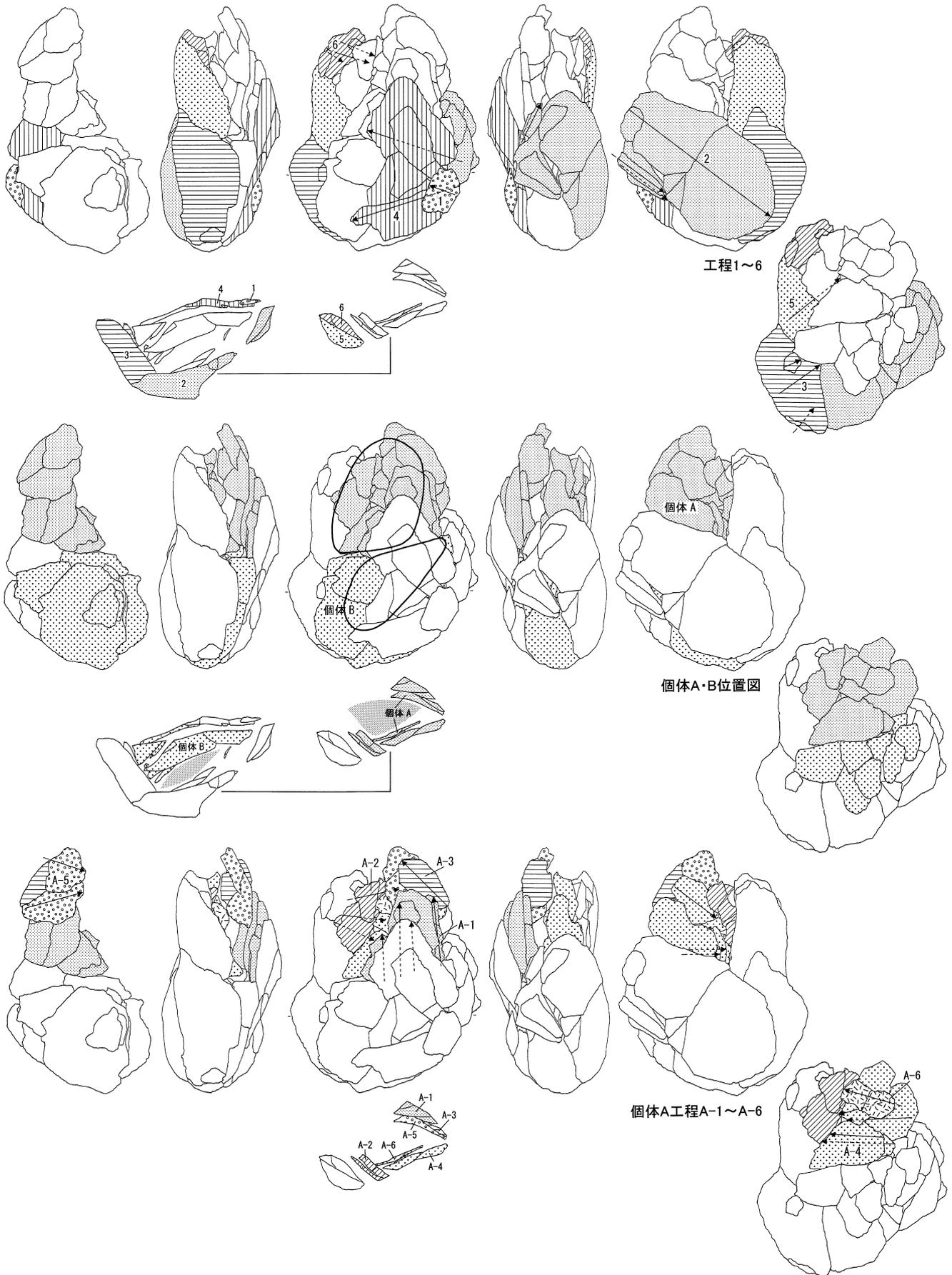
**素材** 50は接合資料375で42点(29個体)が接合し、重量は755.6gである。51は接合資料1113で、14点(12個体)が接合し、重量は406.8gである。石質は黒曜石4で、角礫を素材とし、粗割した両面調整石器の状態を遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 石核素材の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。図示した両接合資料は対向する面同士の関係と思われる。ここではそれぞれの接合資料に工程番

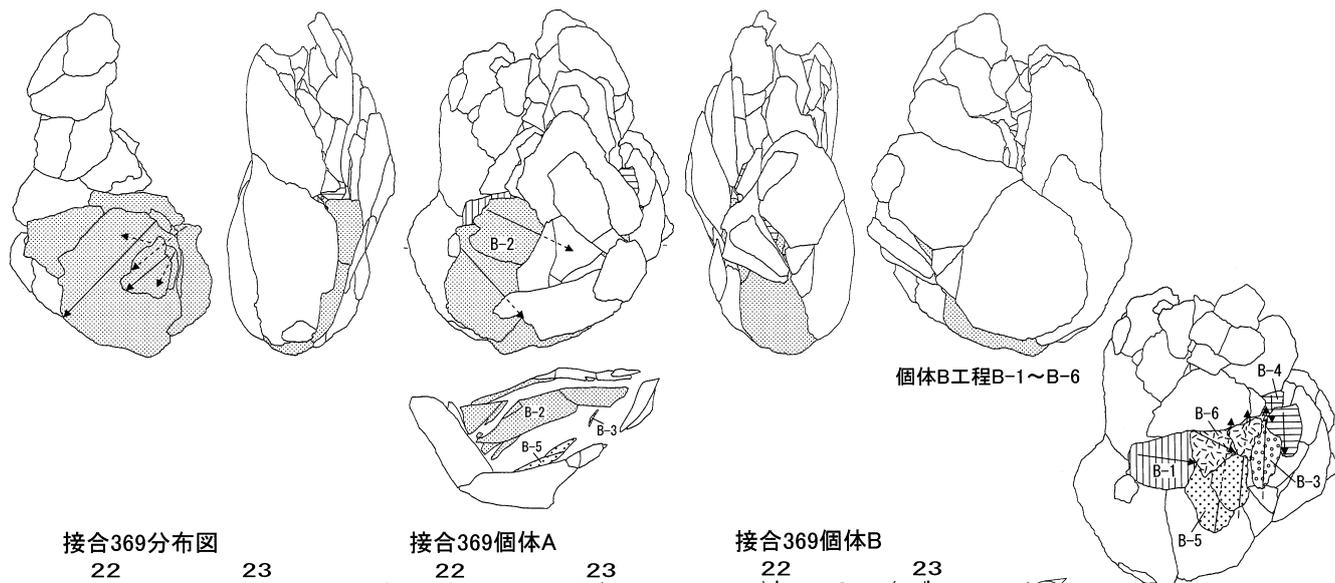
母岩142 接合369



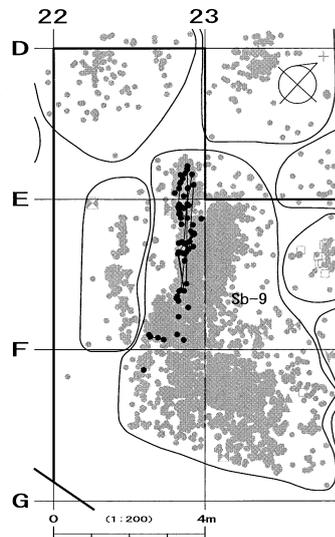
図Ⅲ-97 EH22-25区の石器(6) 母岩142 接合369(1)



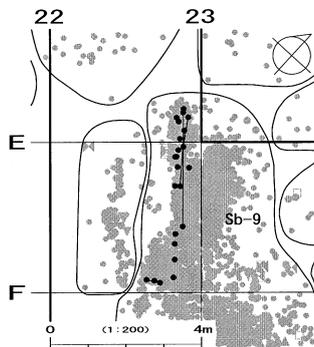
図Ⅲ-98 EH22-25区の石器(7) 母岩142 接合369(2)



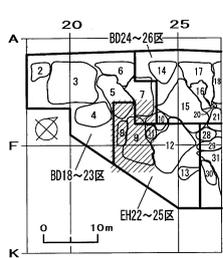
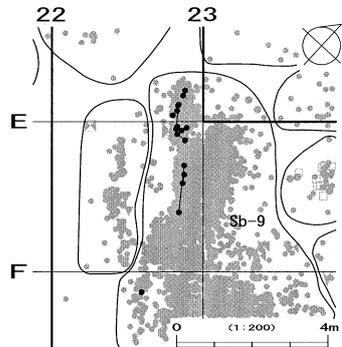
接合369分布図



接合369個体A



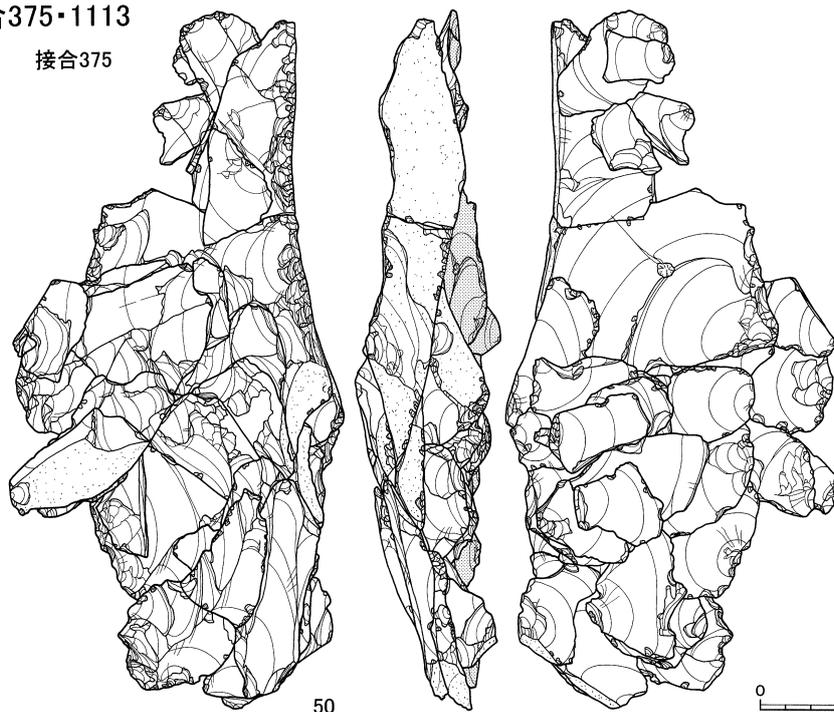
接合369個体B



地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)			石質	接合点数	重量
			河内山採石石	尖頭器製作	I			
EH22-25区	142	369				1	65点	1920.5g
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態			搬入時の大きさ(長×幅×厚)		
Sb-9	転礫	22.6 × (18~) × 11.0 cm	粗割両面調整石器			22.6 × 17.5 × 11.0 cm		
搬出石器個体数						遺跡内遺棄石器個体数		
BF・PT:2								

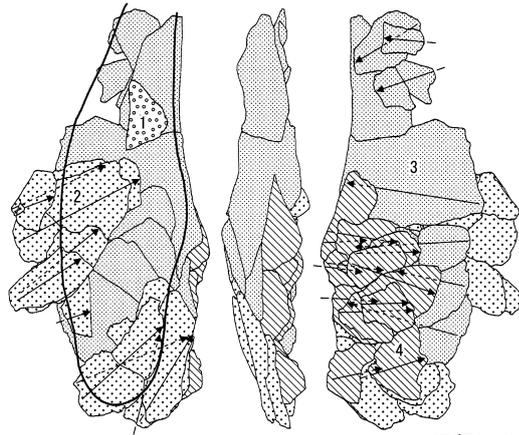
母岩143 接合375・1113

接合375

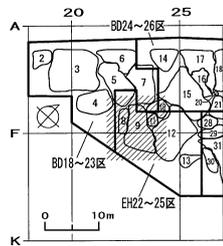


0 10 cm

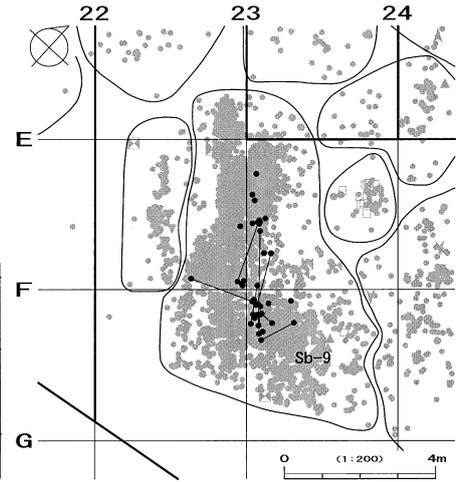
図Ⅲ-99 EH22-25区の石器(8) 母岩142 接合369(3)、母岩143 接合375・1113(1)



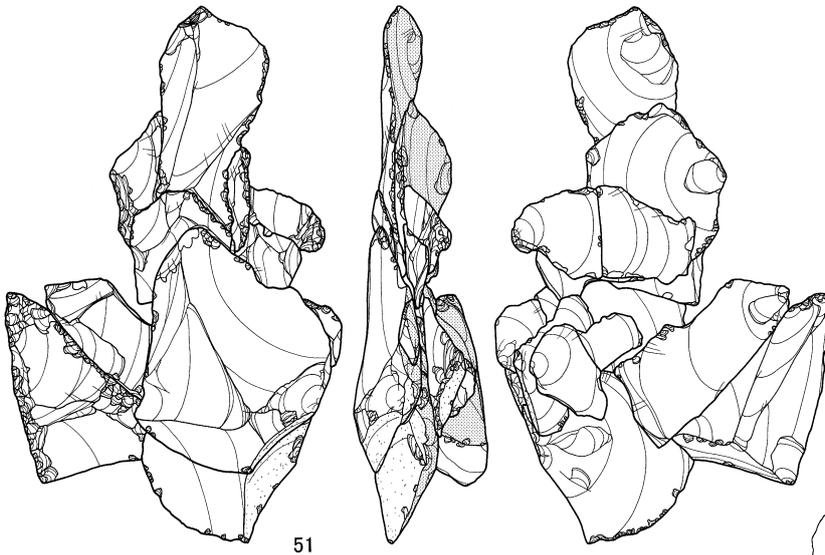
工程1~4



接合375分布図

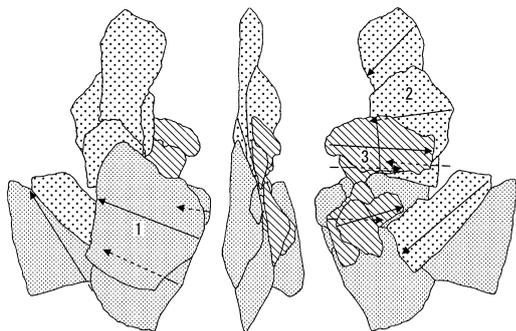
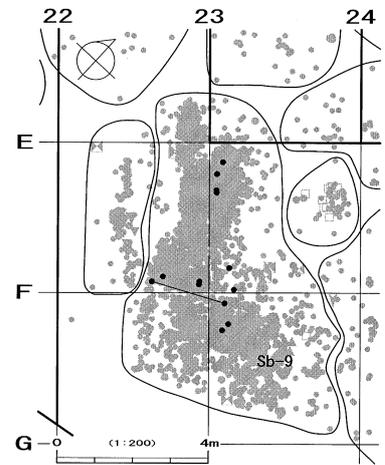


接合1113

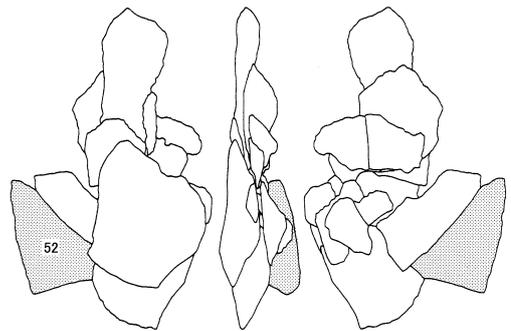


51

接合1113分布図

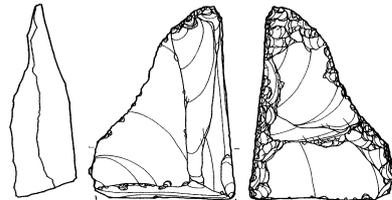


工程1~3



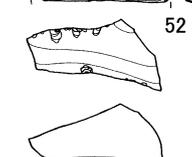
52

工程1



52

掲載資料位置図



地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)	石質	接合点数	重量
EH22-25区	143	375・1113	片面調整石器 尖頭器製作 片面調整石器 尖頭器製作	1 A i 1 A ii	4	56点 1162.4g
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	撤入形態	撤入時の大きさ(長×幅×厚)		
Sb-9	角礫	(27~) × (13~) × (6~) cm	相對両面調整石器	(27~) × (13~) × (6~) cm		
撤出石器個体数			撤入内遺棄石器個体数			
BF・PT:1			BF:1			



図III-100 EH22-25区の石器(9) 母岩143 接合375・1113(2)

号を付け説明する。

【接合375 工程1～4】工程1は先行する大型剥離のバルバスカ一部分が剥落したものである。工程2は左側からの加工で、やや斜め下からの揃った加撃がなされている。工程3も左側からの加工で、縁辺全体に及び前工程とは打面に段差がみられる。工程3では一部に厚手の剥離があるものの、全体的に薄手の加工で、中軸を越え反対端部を取り込む剥離も多い。工程4は右からの加工で下半部を中心に施されている。

【接合1113 工程1～3】工程順に右→左→右と加工の方向が入れ替わって加工がなされている。工程1で得られた剥片を両面調整石器の素材としている。初期段階のわずかな加工を施した時点で折損し、両面調整石器52が遺棄されている。

本体部分の製作尖頭器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。両接合資料の接合状態から復元された尖頭器の長さは27cm以上で幅が8.3cm程度である。

**分布** いずれの接合資料もSb-9の遺物集中範囲の中心に帯状に広がって出土している。

### 母岩別資料138、接合資料332 (図Ⅲ-101～104、図版89・90-1)

母岩別資料138は接合資料332・334～337・339～342、折れ接合資料50128～50131・51726および非接合剥片137点で構成され、総点数は295点、総重量は2,470.8gである。

**素材** 53は接合資料332で126点(61個体)が接合し、重量は1,987.3gである。石質は黒曜石4、原石形状は不明で、両面調整石器の状態に遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 石核素材の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1A i類に分類される。

【工程1～5】工程1は正面への部分的な平坦加工、工程2～4は裏面への両側からの加工である。特に工程2・3に器体の中軸を越える加工が含まれ、器体の厚みを減じている。工程5は正面下部への平坦加工で、次の工程の末端部を抜けやすくする効果があったものと思われる。

【工程6～9】工程6は正面への上からの長軸方向の剥離である。これにより台形状であった正面側の断面形状の角が取れ、かまぼこ形に近い形状となっている。工程7・9は正面への両側からの加工で間の工程8は裏面側への加工である。いずれの加工も縁辺全体に及び、加工もまだ粗い。中軸を越える加工が多く、器体の厚みを大きく減じている。工程7の剥片を素材として、両面調整石器4が製作されている。4は初期段階で折損し、下半部に急角度の再加工がなされるが、最終的に遺跡内に遺棄されている。

【工程10～13】工程11・13が正面側の加工、工程10・12が裏面側の加工である。いずれも平坦加工で、特に正面側の平坦化が進行している。製作尖頭器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された尖頭器の大きさは長26.7×幅10.1×厚2.0cm程度である。

**分布** Sb-9の遺物集中範囲から幅2m程の帯状に広がって出土している。

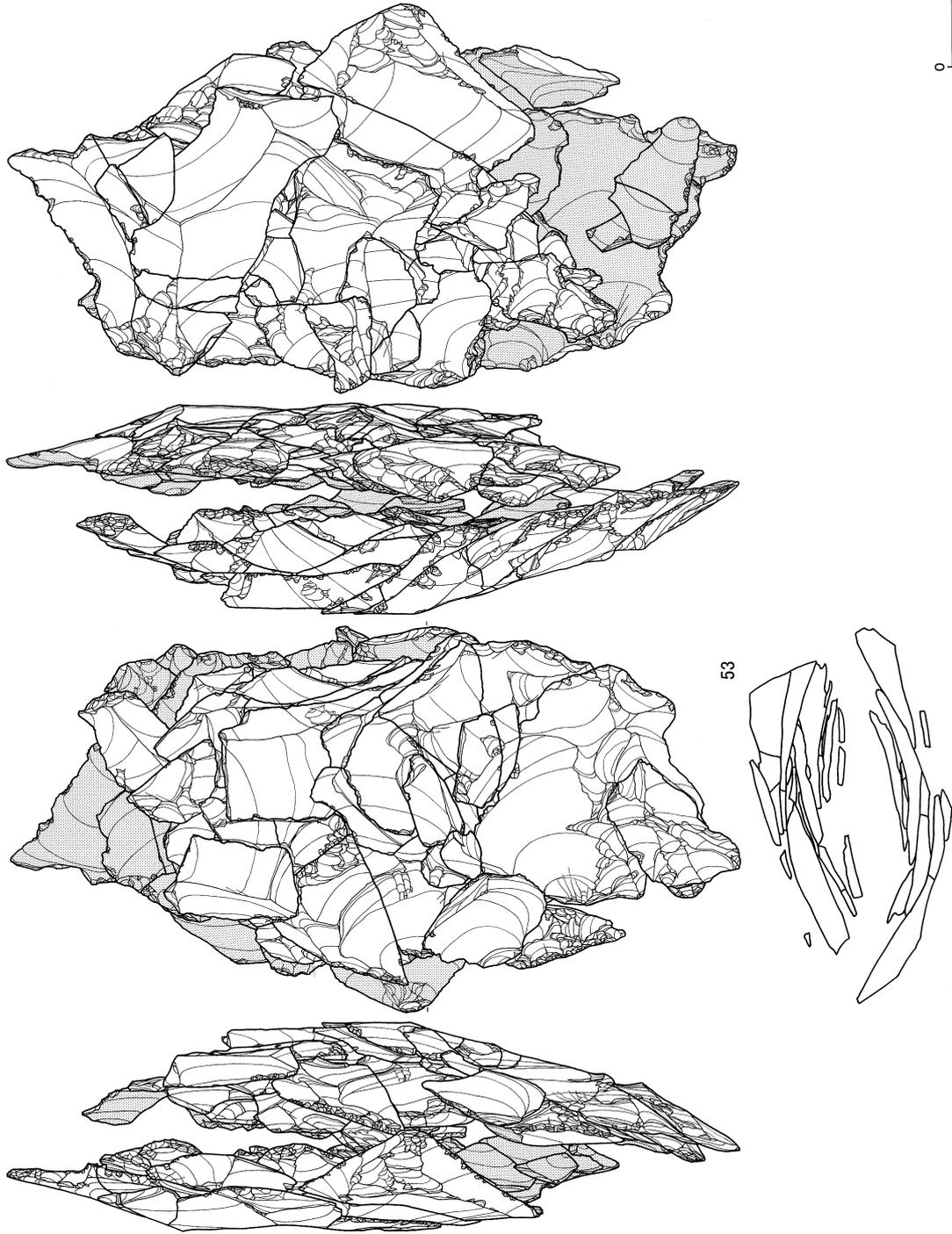
### 母岩別資料141、接合資料351・352 (図Ⅲ-105～109、図版90-2～図版92)

母岩別資料141は接合資料351・352・354～361・364～368、折れ接合資料50134～50143・50282および非接合剥片325点で構成され、総点数は581点、総重量は4,179.2gである。

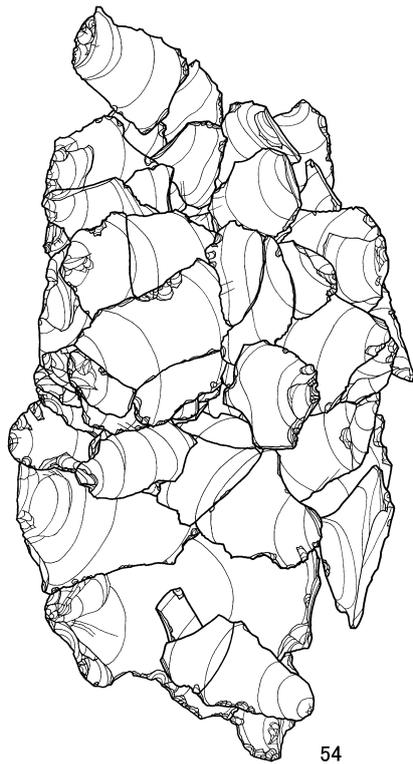
**素材** 56は接合資料351で142点(82個体)が接合し、重量は1,985.4gである。61は接合資料352で、41点(29個体)が接合し、重量は696.6gである。石質は黒曜石1で、転礫を素材とし、粗割した原石の状態に遺跡内に搬入した可能性がある。

**剥離工程** 剥片素材の尖頭器・両面調整石器を複数製作した資料で、剥離技術類型は全体が5E類、個体が1A ii類に分類される。接合352は剥片素材の尖頭器を製作した個体の接合資料で、接合351中

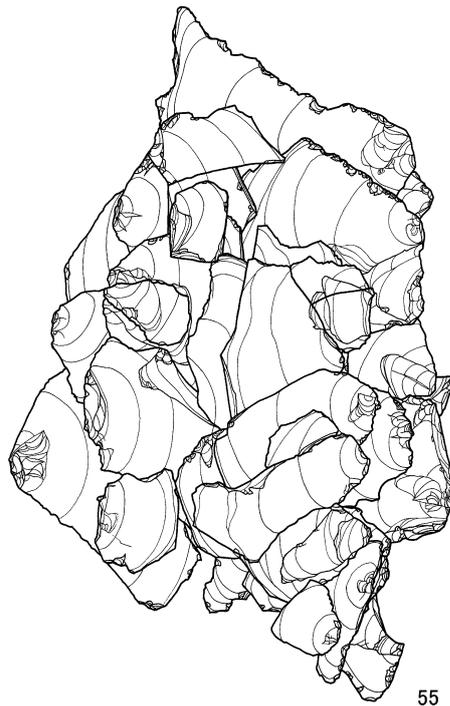
母岩138 接合332



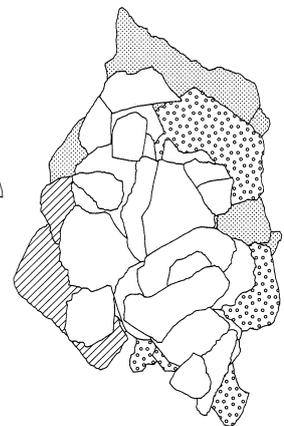
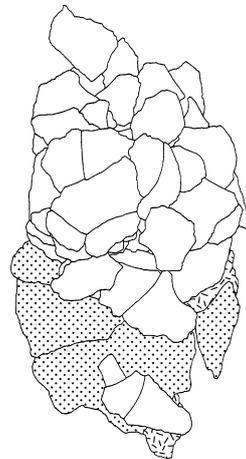
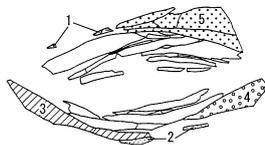
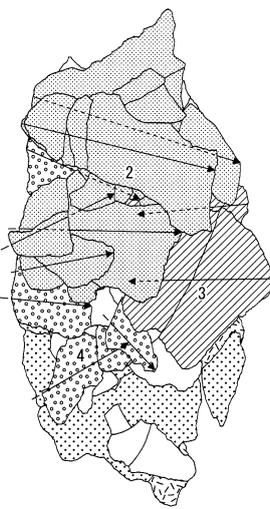
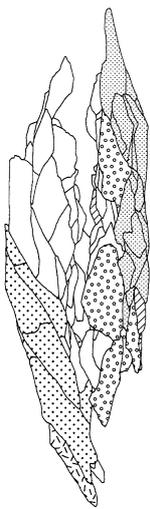
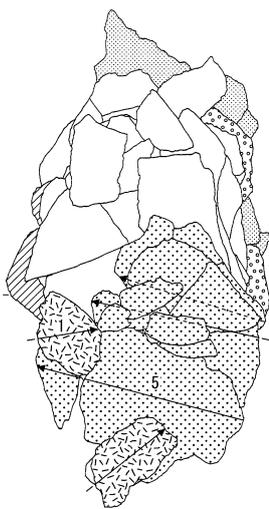
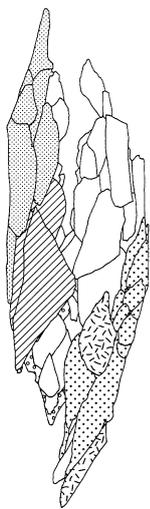
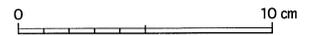
図III-101 EH22-25区の石器(10) 母岩138 接合332(1)



54  
正面側剥片



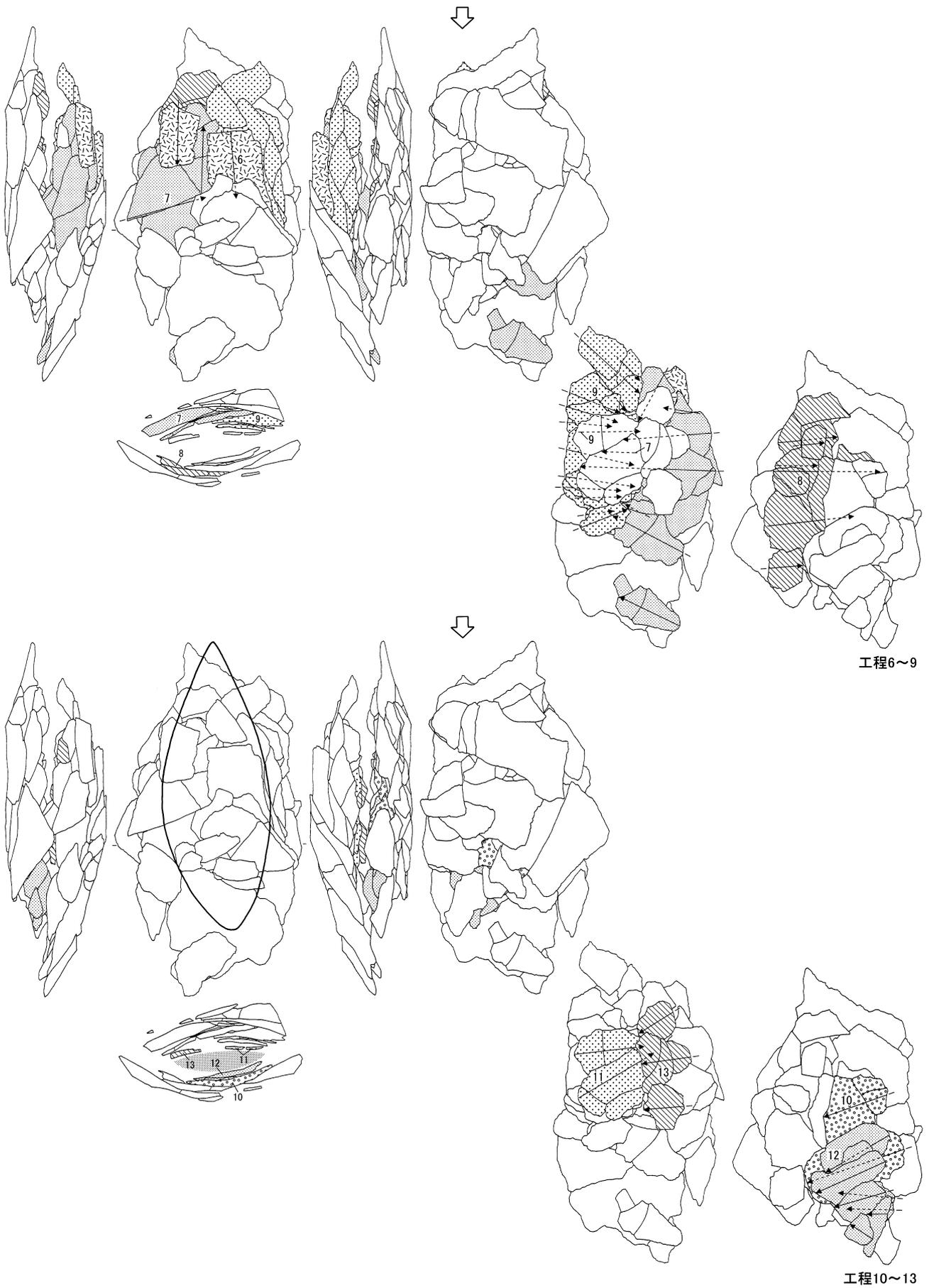
55  
裏面側剥片



工程1~5

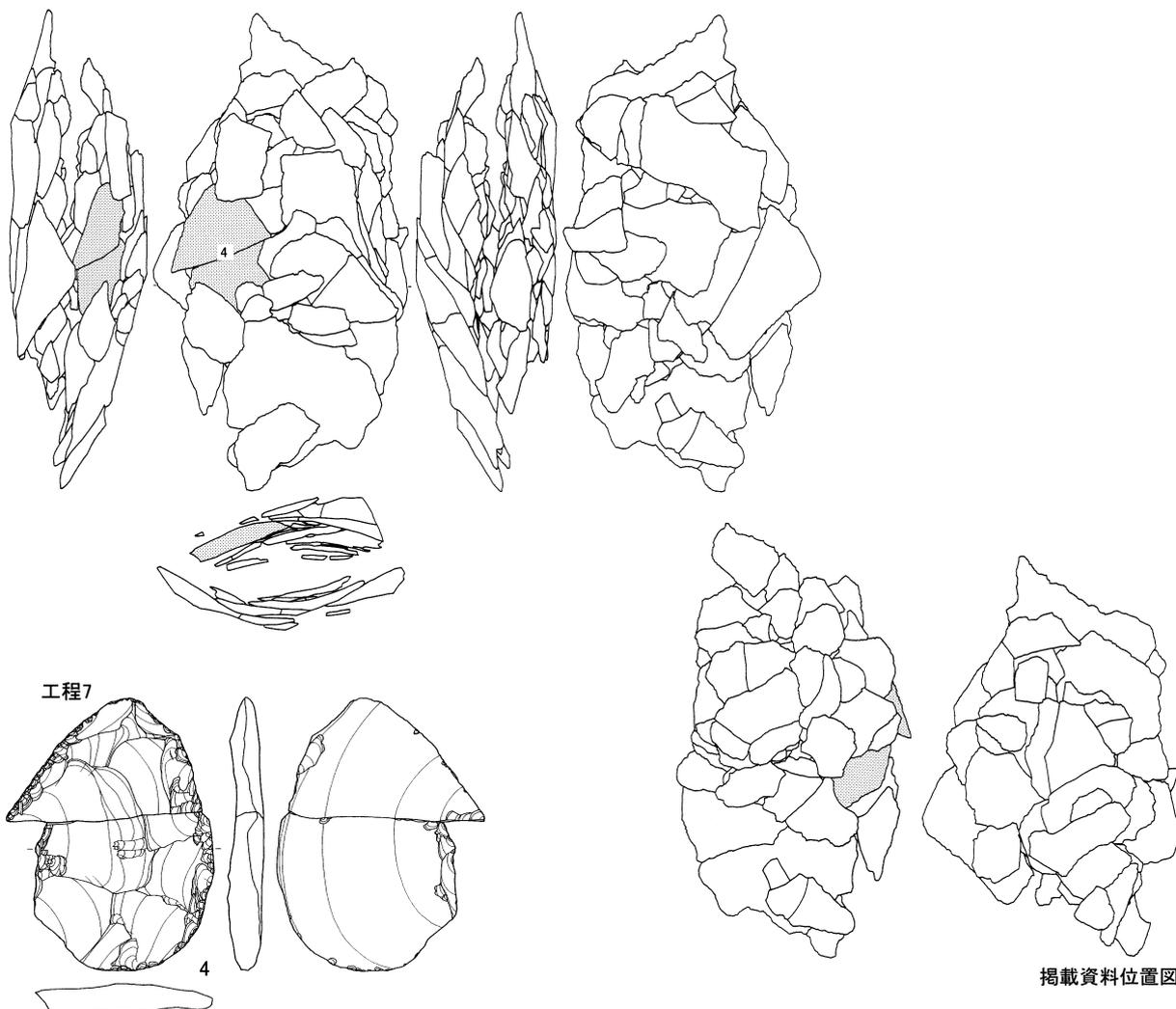


図Ⅲ-102 EH22-25区の石器(11) 母岩138 接合332(2)



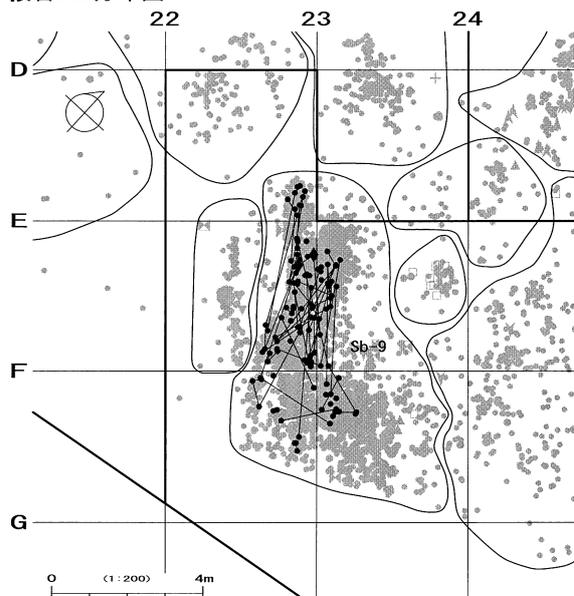
図Ⅲ-103 EH22-25区の石器(12) 母岩138 接合332(3)

2 遺物

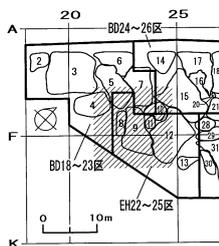


掲載資料位置図

接合332分布図



0 10 cm

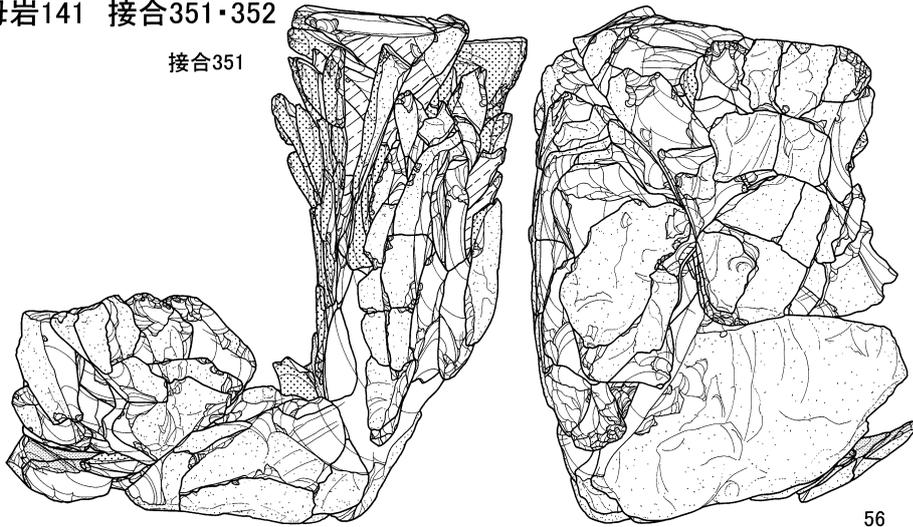


地区名	母岩	接合	作業内容(刺撃技術類型)	石質	接合点数	重量
EH22-25区	138	332	両面調整石器 尖頭器製作	I A i	4	126点
			両面調整石器 尖頭器製作	I A ii		
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)		
	Sb-9	不明	(32~) × (17~) × (10~) cm	両面調整石器	(32~) × 17.2 × 9.5 cm	
搬出石器群体系			遺跡内遺棄石器群体系			
BF-PT:1			BF:1			

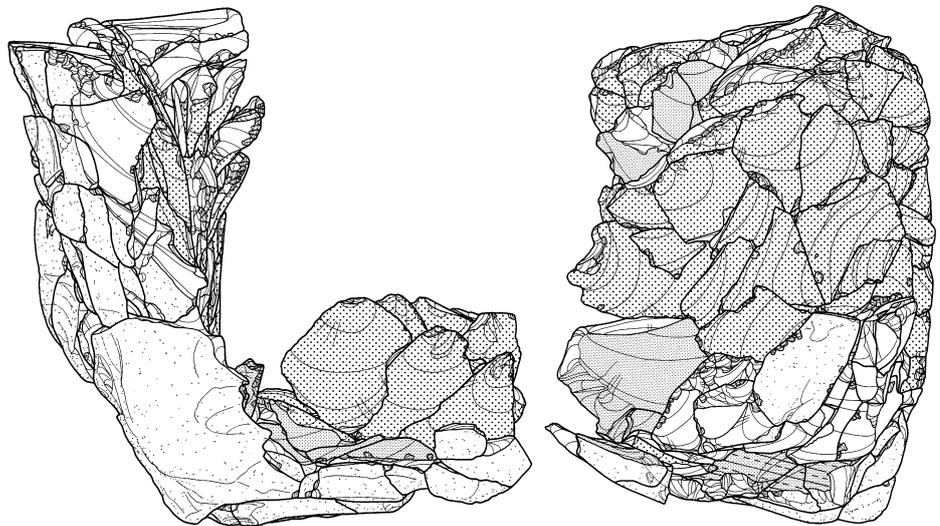
図Ⅲ-104 EH22-25区の石器(13) 母岩138 接合332(4)

母岩141 接合351・352

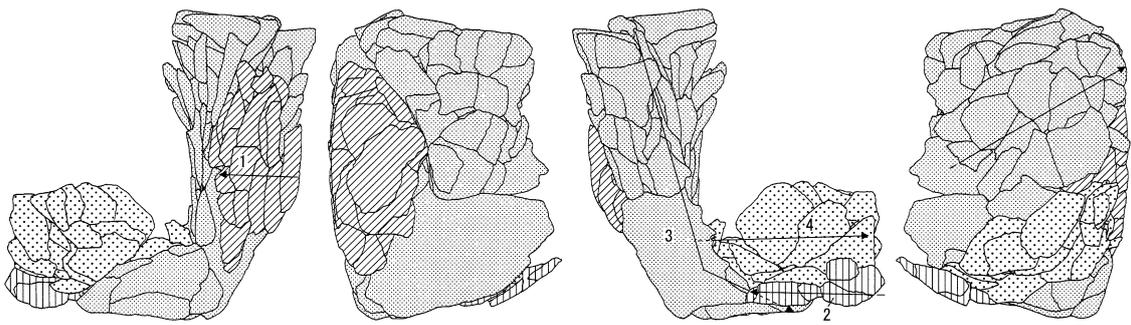
接合351



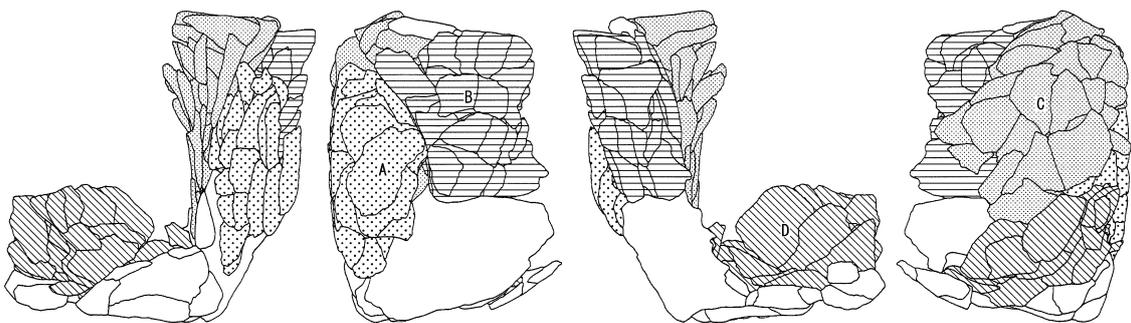
56



0 10 cm



工程1~4



個体A~D位置図

図III-105 EH22-25区の石器(14) 母岩141 接合351・352(1)

に含まれる各個体と同様のものと位置付けられる。

【接合351 工程1～4】主に正面と下面へ大型で厚手の剥離がなされ、石核部分は原石面の除去がなされ立方体に近い形状となる。工程1は左側面への剥離で個体Aの素材となっている。工程2は下面への剥離である。工程3は正面への石核下端まで届く上からの剥離で、下半部が折損し、上半部が個体Bの素材となっている。二度目の剥離は横方向にずれたものとなり、個体Cの素材となっている。工程4は下面への剥離で個体Dの素材となっている。個体A～Dではいずれも尖頭器を製作している。石核部分は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元される石核の大きさは15cm以内の立方体を呈していたものと思われる。

【接合351 個体A】57は個体Aの接合状態である。工程1で剥離された厚手の横長剥片を素材とし、素材の剥離軸と直交方向に尖頭器の長軸を設定している。工程A-1は正面への左からの加工で縁辺全体に及んでいる。工程A-2・3は正面への長軸方向の剥離で上下から加撃されている。工程A-4は部分的に接合した裏面側の加工である。製作尖頭器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された尖頭器の大きさは長138×幅7.5×厚2.4cm程度である。

【接合351 個体B】58は個体Bの接合状態である。工程3で剥離された折損剥片の上半部を素材とし、素材の剥離軸方向に尖頭器の長軸を設定している。工程B-1は折損した下半部である。工程B-2は折れ面からの長軸方向の剥離で、端部の厚みを減じている。工程B-3・4は正面側への左右からの加工、工程B-5・6は裏面側への加工である。基本的に正面側への加工が厚く、工程も多い。その後も正面を中心に加工が進み（工程B-7～9）、中軸を越える剥離により厚みを減じている。製作尖頭器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された尖頭器の大きさは長15.8×幅7.5×厚2.1cm程度である。

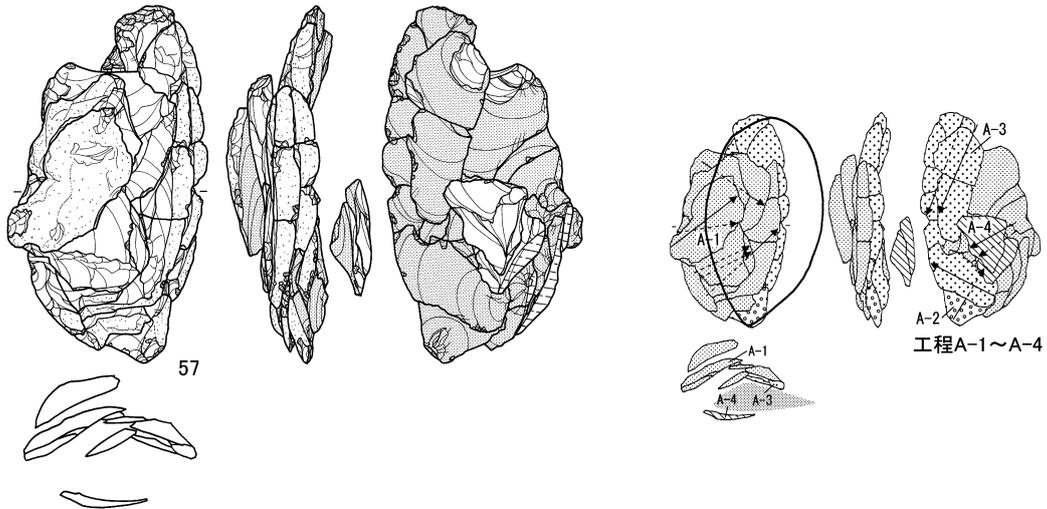
【接合351 個体C】59は個体Cの接合状態である。工程3で剥離されたもう一つの剥片を素材とし、素材の剥離軸方向に尖頭器の長軸を設定している。正面側の剥片のみ接合した。初期の工程C-1～4では分厚い下端部を中心とした加工となっている。工程C-1～3は左からの加工だが、特に工程C-2は急角度の加工となっている。工程C-4は下端からの長軸方向の加工で、これらの剥離により下半部の厚みが大きく減じている。工程C-5・6は左右からの平坦加工となる。製作尖頭器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された尖頭器の大きさは長17.3×幅9.3cm程度である。

【接合351 個体D】60は個体Dの接合状態である。工程4で剥離された剥片を素材とし、素材の剥離軸方向と斜交する尖頭器の長軸を設定している。工程D-1・2・4・5は正面側に接合した剥片で、左右からの加工である。いずれも急角度加工で、特に工程D-1・2は打面が大きく粗い加工となっている。工程D-3は裏面側への部分的な加工である。製作尖頭器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された尖頭器の大きさは長14.7×幅8.0×厚2.6cm程度である。

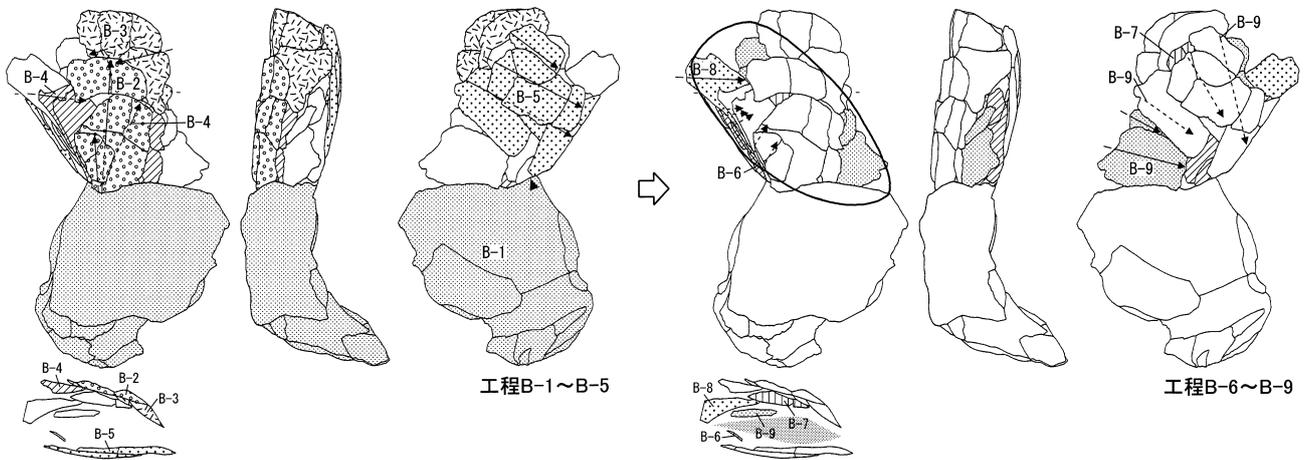
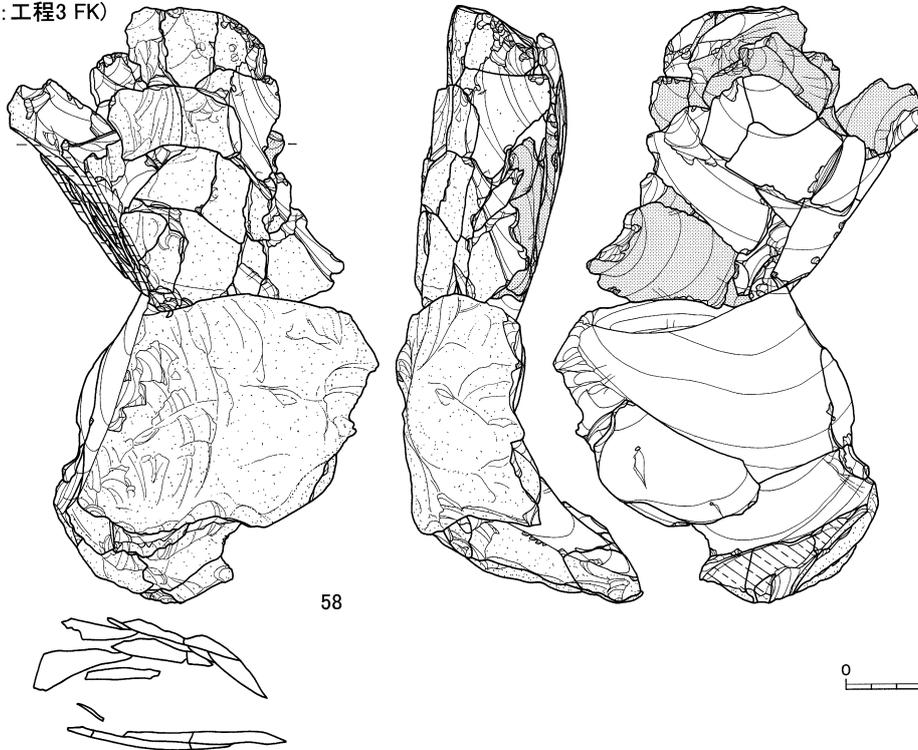
【接合352 工程1・2】工程1は正面側への横方向の連続した剥離である。その中に厚手で横長の大型剥片が含まれ、個体Aの素材となっている。工程2は上面への横方向の剥離で、入念な頭部調整が施されている。最終的な石核は出土しておらず、復元される形状は接合351の想定と同様に15cm以内の立方体を呈しているものと思われる。

【接合352 個体A】61は個体Aの接合状態である。工程1で剥離された横長剥片を素材とし、素材の剥離軸と直交方向に尖頭器の長軸を設定している。工程A-1・2・4は裏面側への横方向の加工で、工程A-1は分厚い素材の打面部を除去するように急角度でウートラパッセを起こす剥離となっている。工程A-3は正面への斜め上からの揃った加工である。中軸を越える剥離が多く、器体の厚みを減じている。その後は両面への左右からの加工が続くが、工程A-8・9時点の打面は以前から比べ

個体A (素材:工程1 FK)

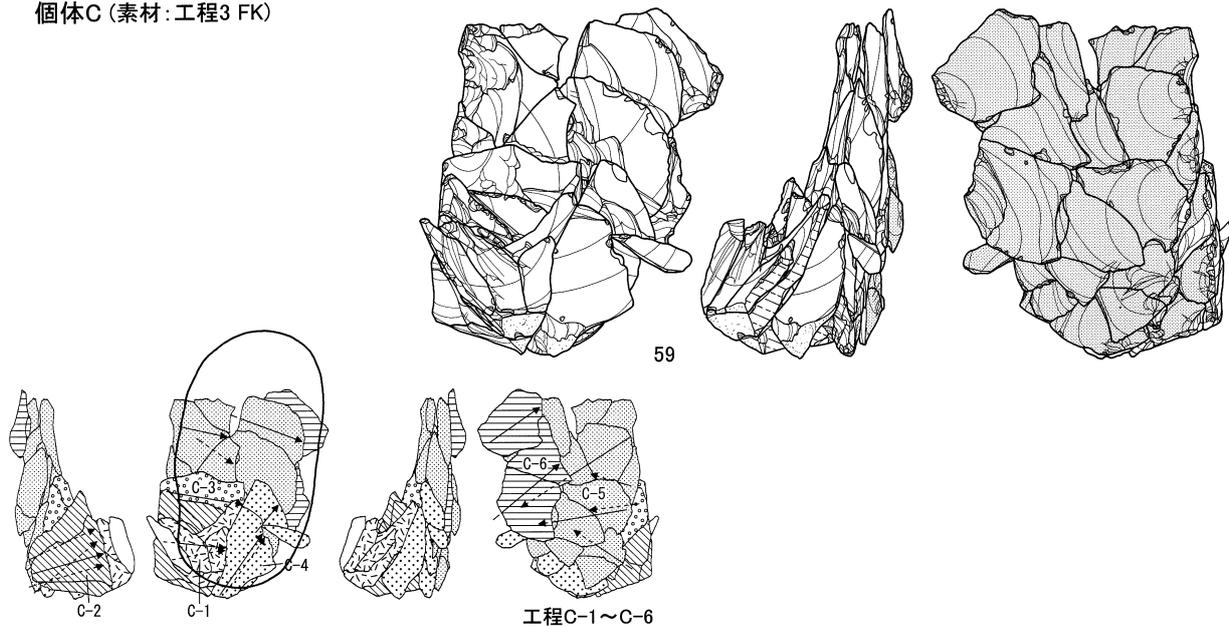


個体B (素材:工程3 FK)

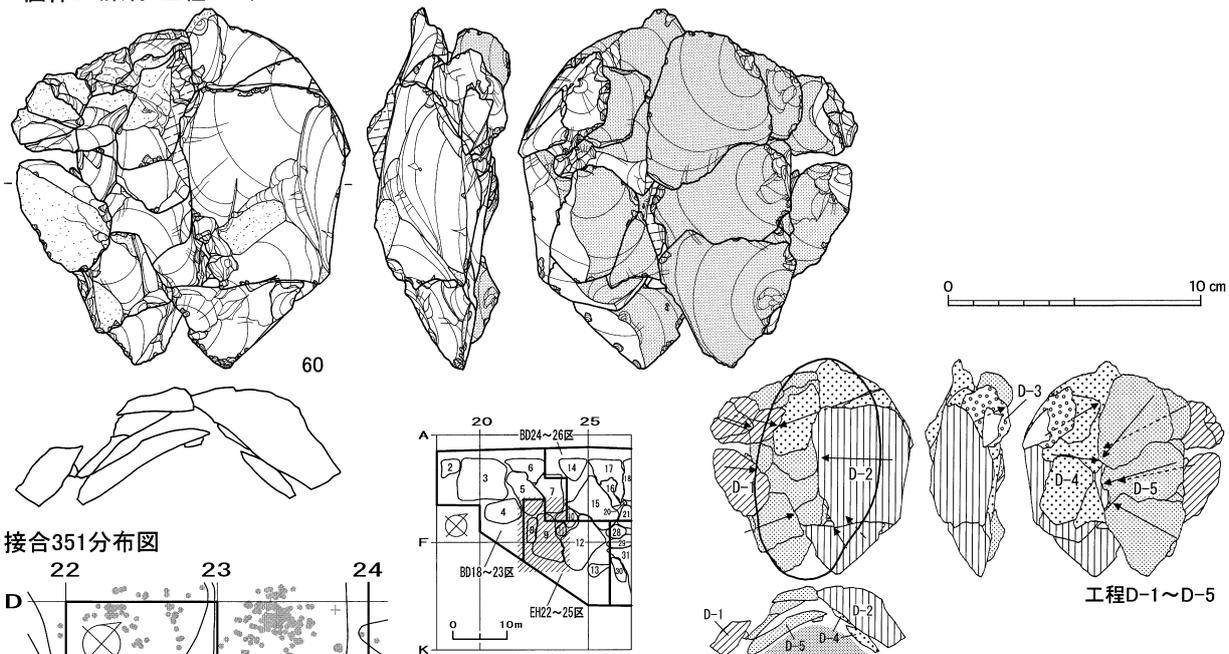


図III-106 EH22-25区の石器(15) 母岩141 接合351・352(2)

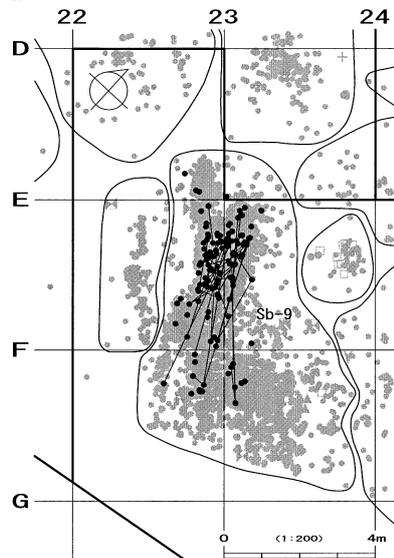
.....  
 個体C (素材: 工程3 FK)



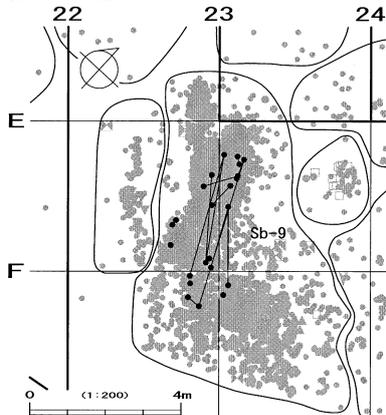
個体D (素材: 工程4 FK)



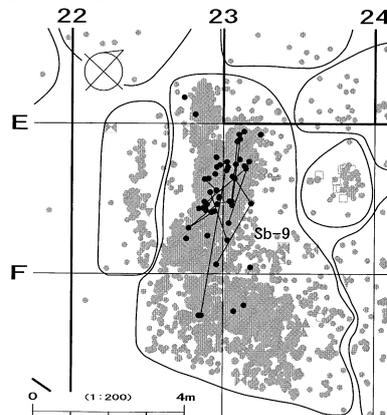
接合351分布図



接合351個体A

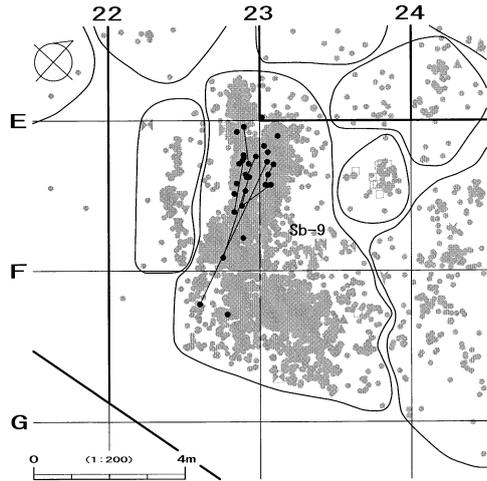


接合351個体B

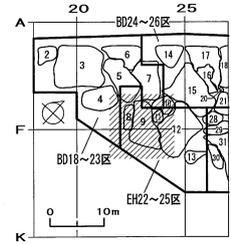
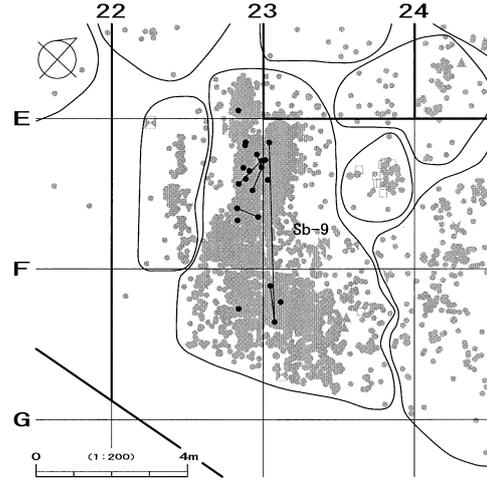


図Ⅲ-107 EH22-25区の石器(16) 母岩141 接合351・352(3)

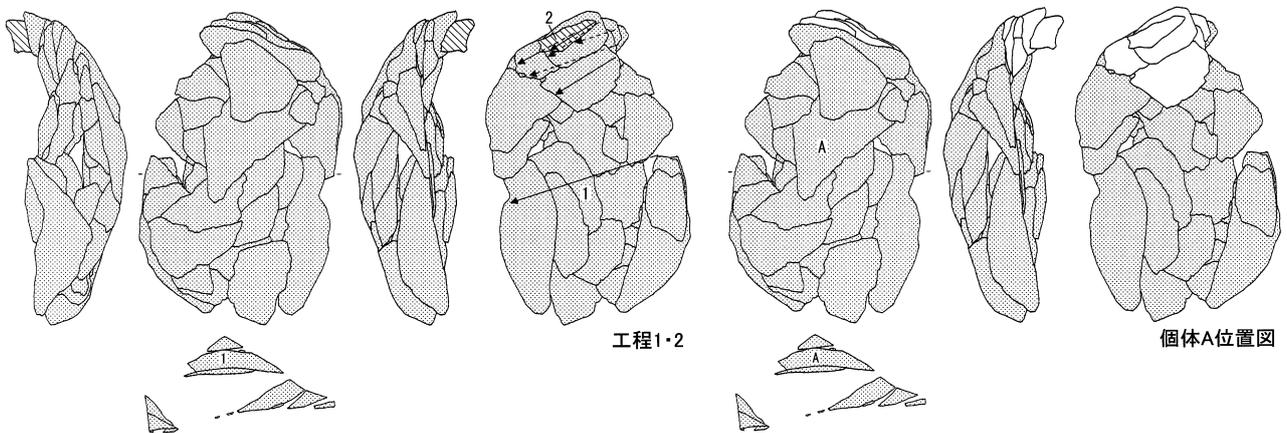
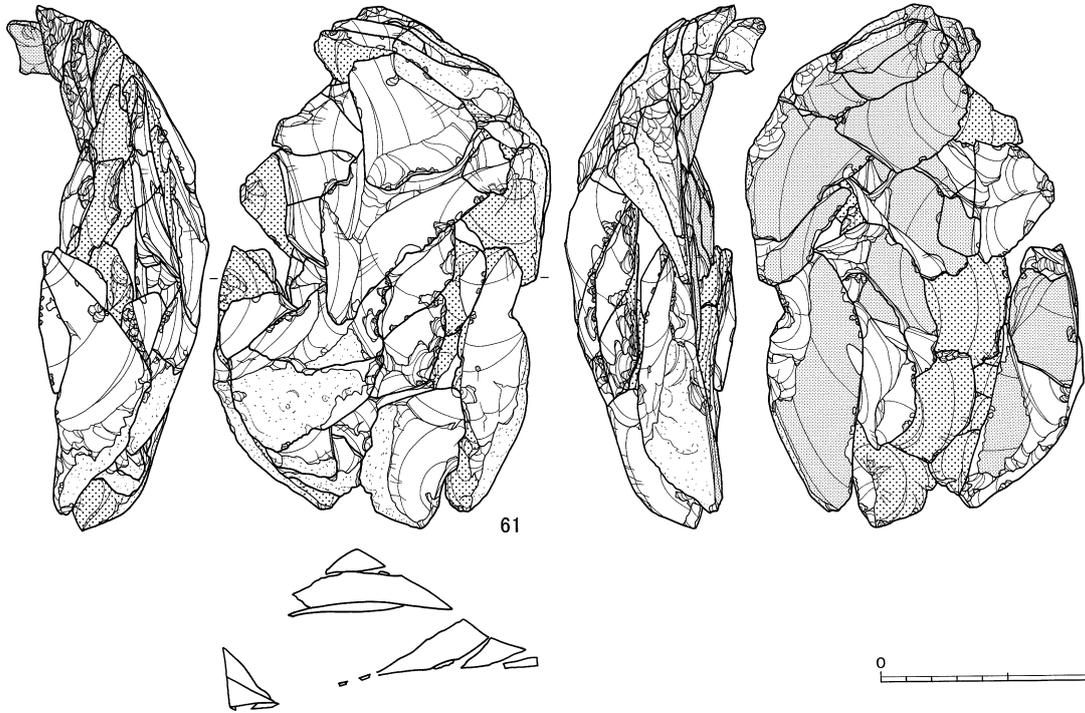
接合351個体C



接合351個体D

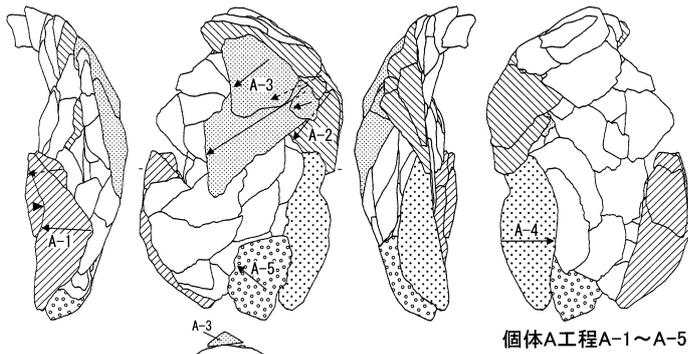


接合352

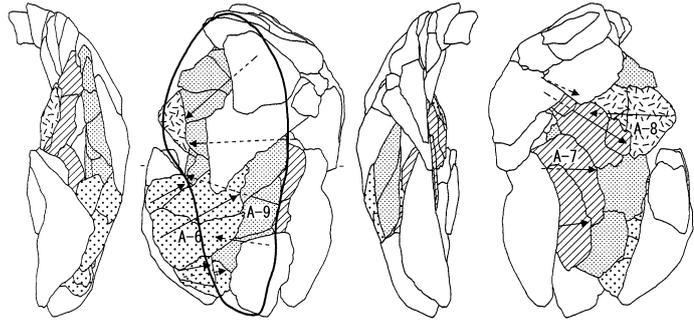
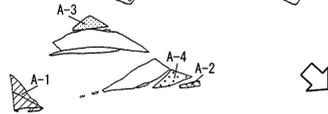


図III-108 EH22-25区の石器(17) 母岩141 接合351・352(4)

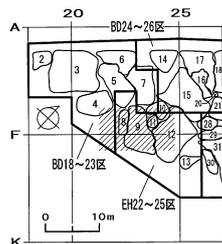
2 遺物



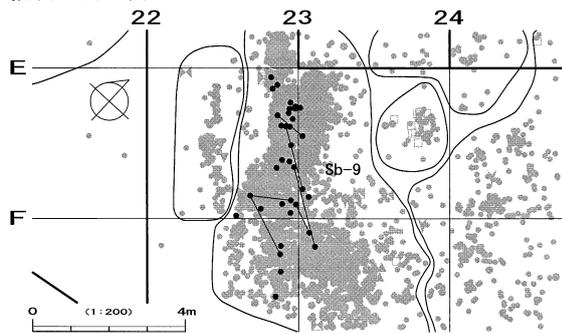
個体A工程A-1~A-5



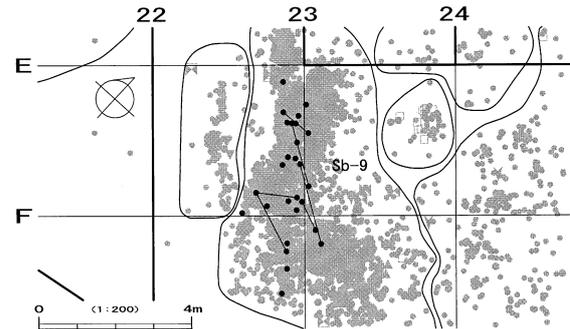
個体A工程A-6~A-9



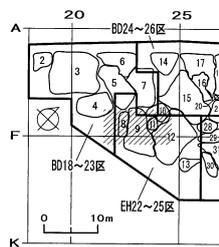
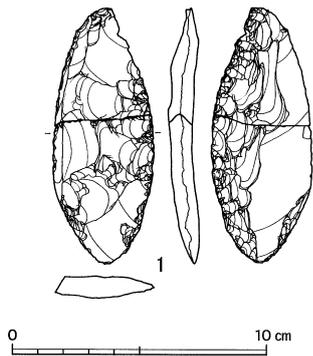
接合352分布図



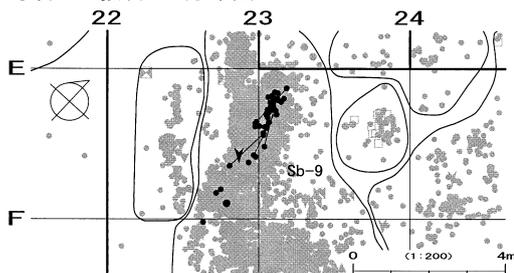
接合352個体A



同一母岩資料



母岩144 接合376分布図



地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)	石質	接合点数	重量
EH22-25区	141	351・352	剥片生産 5 E -	1	183点	2682.0g
			両面調整石器 尖頭器製作 1 A ii			
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)		
	Sb-9	転蹠 (21~) × 15.1 × (19~)cm	粗割原石	20.5 × 15.1 × 19.1 cm		
搬出石器個体数				遺跡内遺棄石器個体数		
BF・PT:5, BC・CO・MC:1				(同一母岩 PT:1)		

地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)	石質	接合点数	重量
EH22-25区	144	376	両面調整石器 尖頭器製作 1 A i	4	47点	640.1g
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)		
	Sb-9	不明 (27~) × (7~) × (14~)cm	両面調整石器	(27~) × (7~) × 13.5 cm		
搬出石器個体数				遺跡内遺棄石器個体数		
BF・PT:1				RF:1		

図Ⅲ-109 EH22-25区の石器(18) 母岩141 接合351・352(5)、尖頭器関連写真掲載

ると小さなものに変化している。製作尖頭器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された尖頭器の大きさは長20.0×幅8.4×厚2.3cm程度である。

**分布** 個体部分も含めSb-9の遺物集中範囲にまとまって出土している。

### 尖頭器・両面調整石器製作関連母岩・写真図版掲載資料 (図Ⅲ-109、図版93)

#### 母岩別資料144、接合資料376 (図Ⅲ-109、図版93-1)

母岩別資料144は接合資料376・377、非接合剥片8点で構成され、総点数は58点、総重量は683.7gである。

**素材** 73は接合資料376で47点(34個体)が接合し、重量は640.1gである。石質は黒曜石4、原石形状は不明で、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 石核素材の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1A i類に分類される。片面のみ接合したもので、交互に左右からの加工が繰り返され、器体の厚みを減じている。上部付近の加工の際、端部を取り込む剥離が含まれ(74)、4cm程長さが減じ端部の形状が崩れてしまう。製作尖頭器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された尖頭器の大きさは長22.0cm以上×幅10.5cm程度である。

**分布** Sb-9の遺物集中範囲のほぼ中央からまとまって出土している。

### 石刃技法の母岩別資料 (図Ⅲ-110～116、図版93～97)

3個体(母岩139・140・145)を図示し、2個体(接合982・987)を写真のみ掲載した。石刃技法母岩は、①母型形成がなく主に平坦打面で頭部調整のあるもの(図Ⅲ-110、母岩139で4A iv類)、②母型形成を行い打面調整と頭部調整のあるもの(図Ⅲ-111～116、母岩140・145で4C類)、③母型形成がほとんどなく部分的な打面調整と頭部調整のあるもの(図版97、接合982・987で4B v類)に区分できる。①は小型舟底形石器群、②は有舌尖頭器石器群、③は川西型石刃石器群に属するものと判断している。

#### 母岩別資料139、接合資料343 (図Ⅲ-110、図版93-2・図版94-1)

母岩別資料139は接合資料343、非接合剥片23点で構成され、総点数は54点、総重量は624.9gである。

**素材** 62は接合資料343で31点(26個体)が接合し、重量は542.6gである。石質は黒曜石5で、転礫を素材とし、粗割した原石の状態を遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 石刃を製作した資料で、剥離技術類型は4A iv類だが、最終的に剥片剥離の5B i類に変化している。

#### 段階1 (打面の作出、原石面の除去段階)

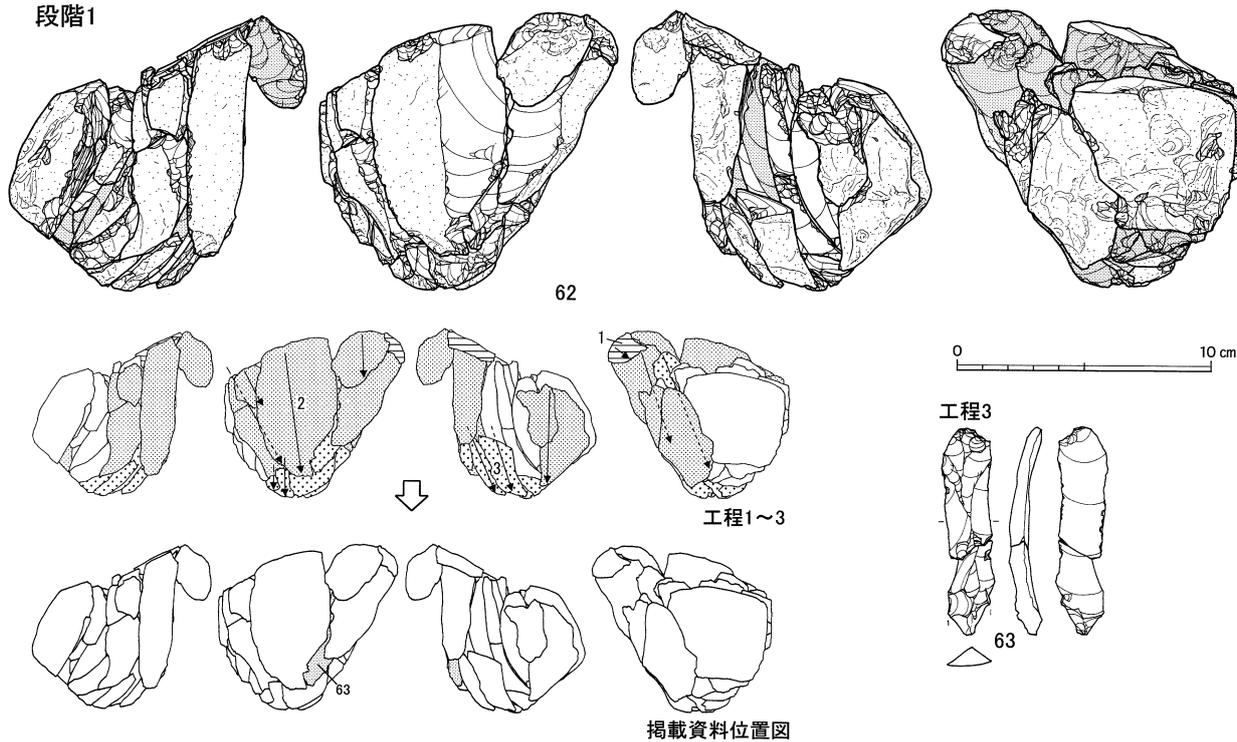
【工程1・2】工程1は打面再生剥離の一部で、正面側から行われている。打面は裏面に向かって傾斜する形状となっている。工程2は原石面を除去する上からの加工で、正面と右側面で厚手の剥離がなされている。

#### 段階2 (石刃剥離の段階)

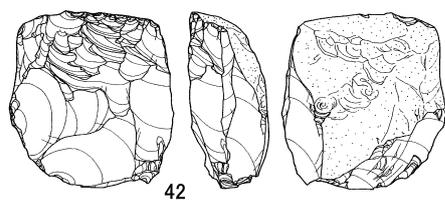
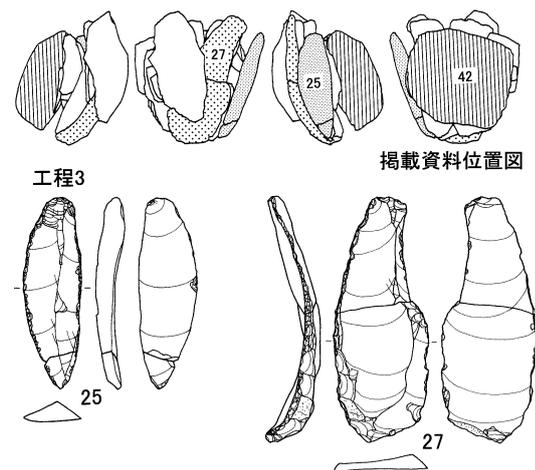
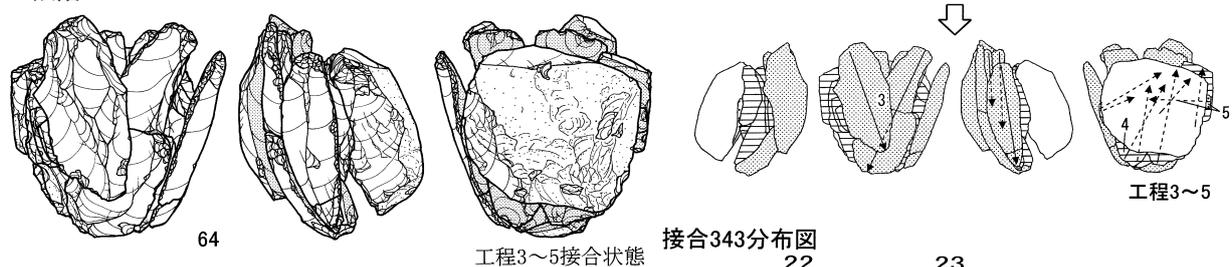
【工程3～5】接合状態を64に図示した。工程3は上からの石刃剥離で、主に正面で作業を行っている。石刃の打面は平坦打面で頭部調整がなされている。石刃を素材として削器25・27が製作されている。工程4は下から連続した剥離である。原石面打面でバルブの発達する不定形な剥片が多くみられる。工程5も同様の剥片を横方向から剥離したものである。最終的に石核42が遺跡内に遺棄されている。

母岩139 接合343

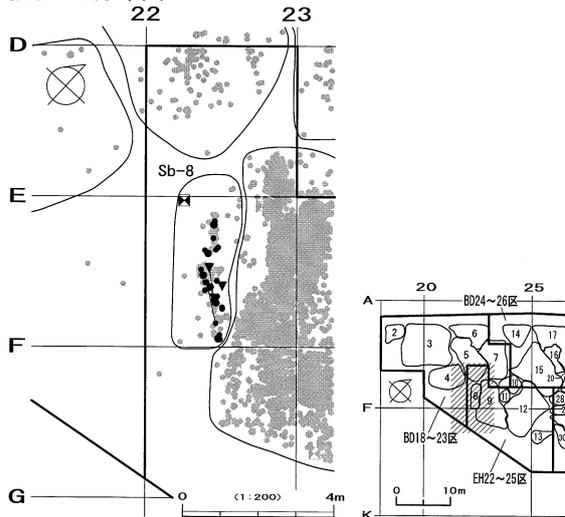
段階1



段階2



接合343分布図



地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)			石質	接合点数	重量	
EH22-25区	139	343	石刃技法	4	A	iv	5	31点	542.6g
			剥片生産	5	B	i			
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態		搬入時の大きさ(長×幅×厚)				
Sb-8	転礫	(11~) × 11.9 × 11.8 cm	粗割原石		11.0 × 11.9 × 11.8 cm				
搬出石器個体数					遺跡内遺棄石器個体数				
					SS:2, CO:1				

図Ⅲ-110 EH22-25区の石器(19) 母岩139 接合343

**分布** Sb-8の帯状の遺物集中範囲からまとまって出土している。石核42がブロックの縁辺部から離れて分布している。

**母岩別資料145、接合資料378** (図Ⅲ-111～113、図版94-2・図版95-1)

母岩別資料145は接合資料378、折れ接合資料50149および非接合剥片9点で構成され、総点数は114点、総重量は2,291.8gである。

**素材** 65は接合資料378で102点(65個体)が接合し、重量は2,253.2gである。石質は黒曜石5で、転礫を素材とし、原石の状態に遺跡内に搬入している。

**剥離工程** 石刃を製作した資料で、剥離技術類型は全体の工程が4Cv類、個体の工程が4Ev類である。

【工程1～6】上半部の加工が中心である。工程1は左側面を上から加撃し、厚手の大型剥片を剥離するもので、石核の素材となっている(個体A)。工程2は打面作出で、両側面から行われている。工程3は正面下端の突出部を除去する横方向の石核調整である。この加工により石核下部の側面観が湾曲する形状となっている。工程4は左側面・正面・右側面にかけての上からの剥離で、上半部の原石面がほとんど除去されている。その後、左側面からの打面再生(工程5)、横方向の石核整形(工程6)がなされている。

【工程7～11】下半部の加工が中心である。工程7～9は石核下部に対する横方向の石核調整である。工程10は正面からの下設の打面作出で、工程11は右側面での下からの剥離である。工程11は単発的で、縦長剥片が1個体含まれる。

【工程12～18】工程12・14・18は上設の打面からの石刃剥離で、工程14にはヒンジを起こした剥離が含まれている。打面部の残るわずかな石刃を観察すると、打面調整と頭部調整が施されている。途中の工程13・17は打面再生である。工程15・16は石核整形で、工程15が石核下端から、工程16が横方向の調整で工程14で発生したヒンジの除去を目的としている。最終的な石核は調査区内からは出土していない。

【個体A】個体Aは工程1で得られた大型の剥片を素材としている。工程A-1は素材腹面からの打面作出の加工で、工程A-2は稜を形成する石核調整となっている。その後、石刃剥離を行い(工程A-3)、再び部分的な稜調整がなされている(工程A-4)。最終的な石核は調査区内からは出土していない。

**分布** Sb-9・11から出土している。個体以外の遺物はSb-9の遺物集中範囲の東部にまとまっている。個体Aの遺物は工程A-1と工程A-2の後半の剥片がSb-9のブロック縁辺部に、工程A-2の前半の剥片と工程A-3・4がSb-11に離れて分布している。

**母岩別資料140、接合資料344** (図Ⅲ-114～116、図版95-2・図版96)

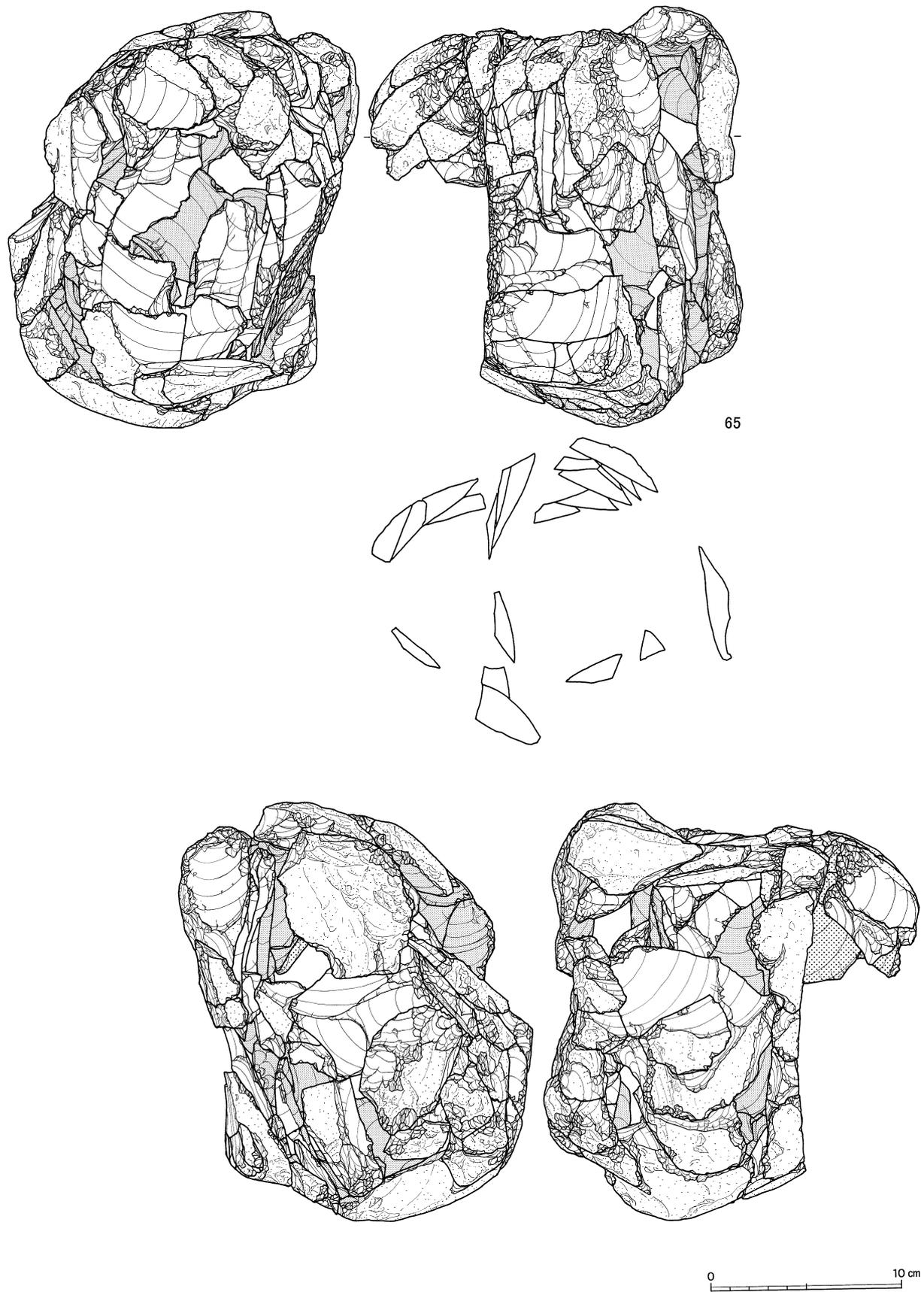
母岩別資料140は接合資料333・338・344・345・347～349・1275、折れ接合資料50132・50133・51721および非接合剥片33点で構成され、総点数は114点、総重量は4,828.2gである。

**素材** 68は接合資料344で56点(35個体)が接合し、重量は3,944.7gである。石質は黒曜石5で、転礫を素材とし、粗割した原石の状態に遺跡内に搬入している。

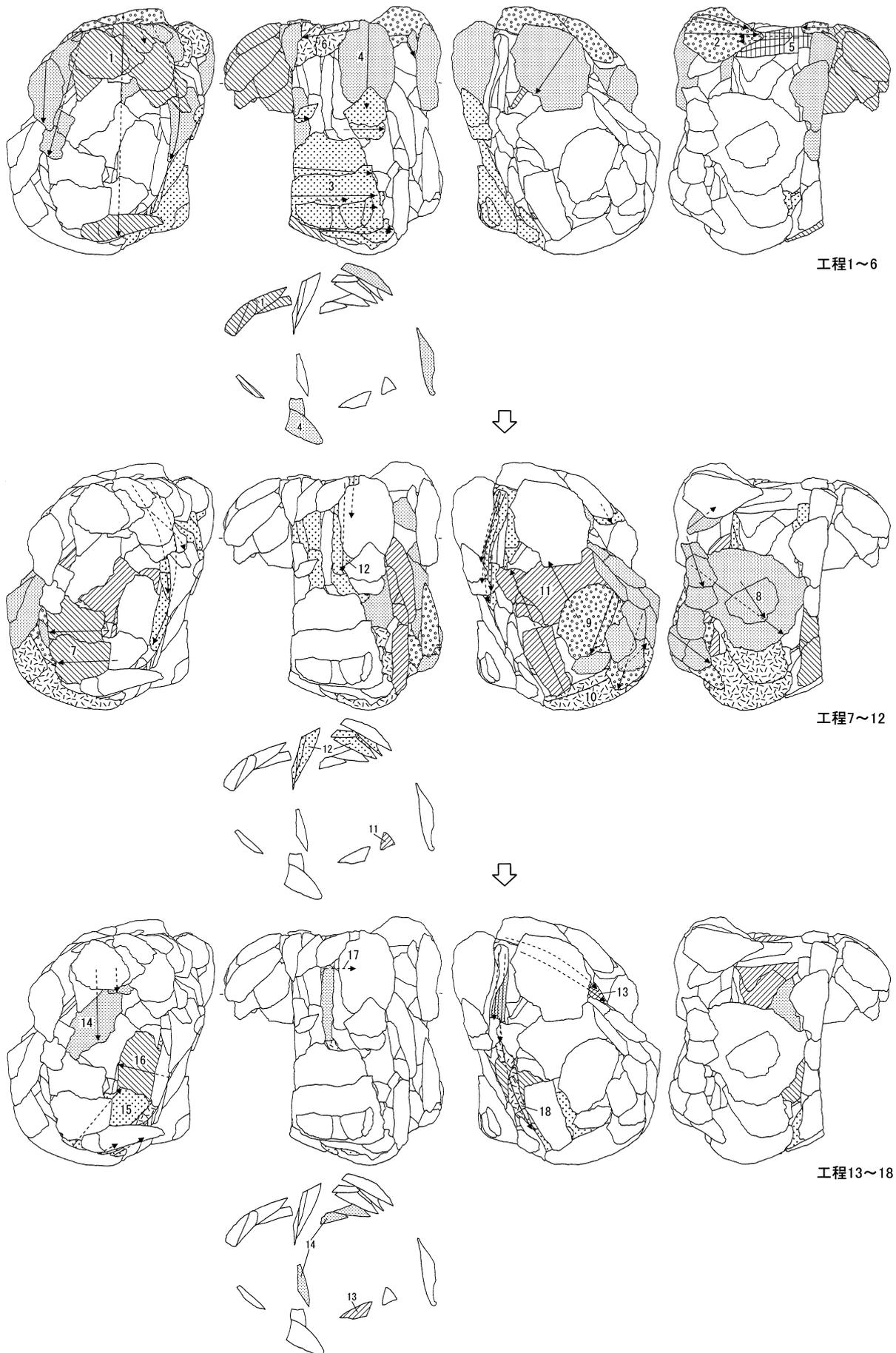
**剥離工程** 石刃を製作した資料で、剥離技術類型は4Cii類である。

【工程1～7】石核整形の工程が中心である。工程1は石核の裏面を平坦化する横方向の石核調整である。工程2・3で上下端に剥離面を作出後、工程4は右側面で斜め上からの原石面を除去する加工である。工程5・7は横方向に行う交互剥離状の加工で、工程5が左側面と裏面、工程7が左側面と正面との角部に稜を形成している。途中の工程6は下面への加撃で、下設の打面を作出している。

母岩145 接合378

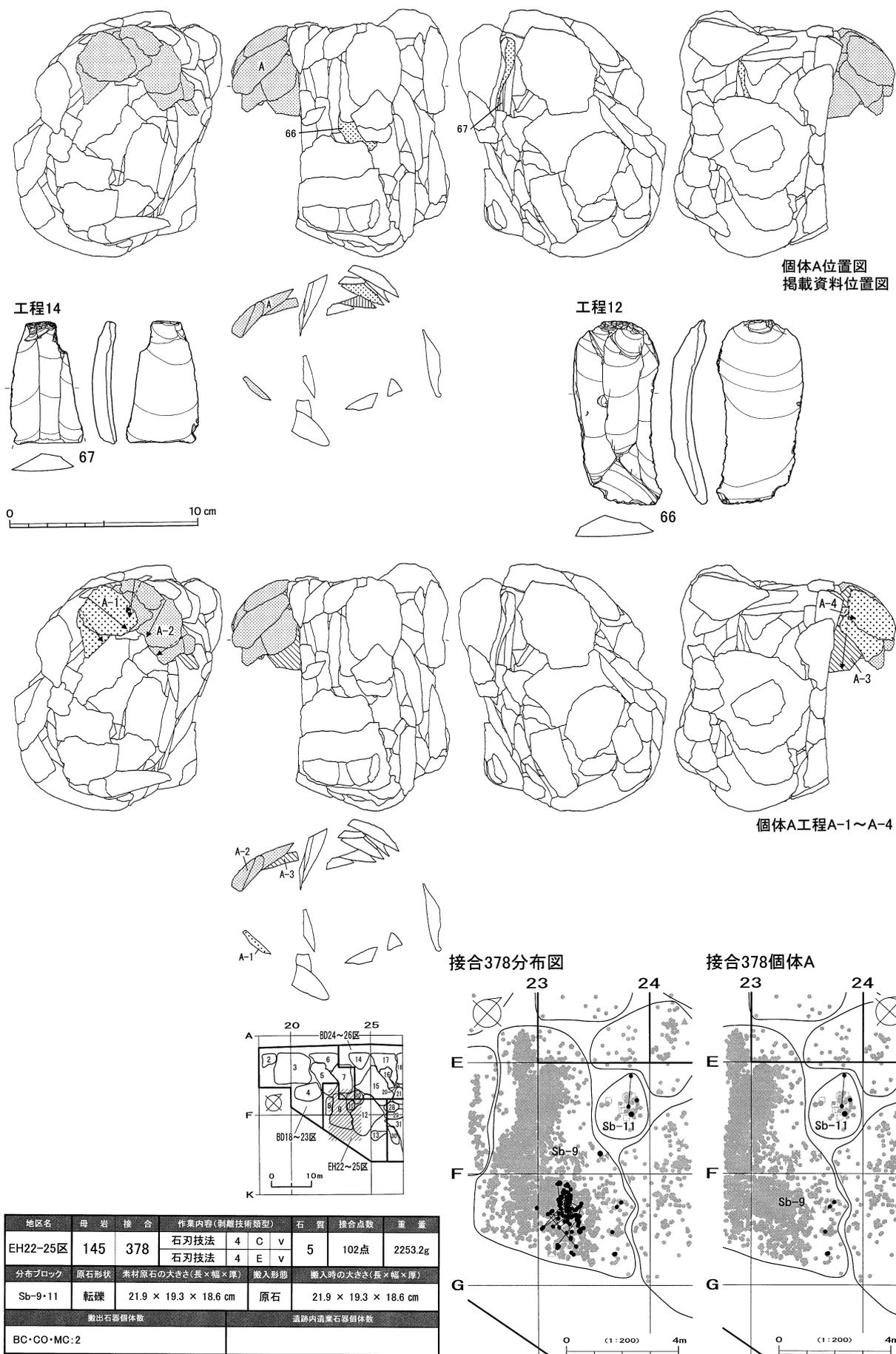


図Ⅲ-111 EH22-25区の石器(20) 母岩145 接合378(1)



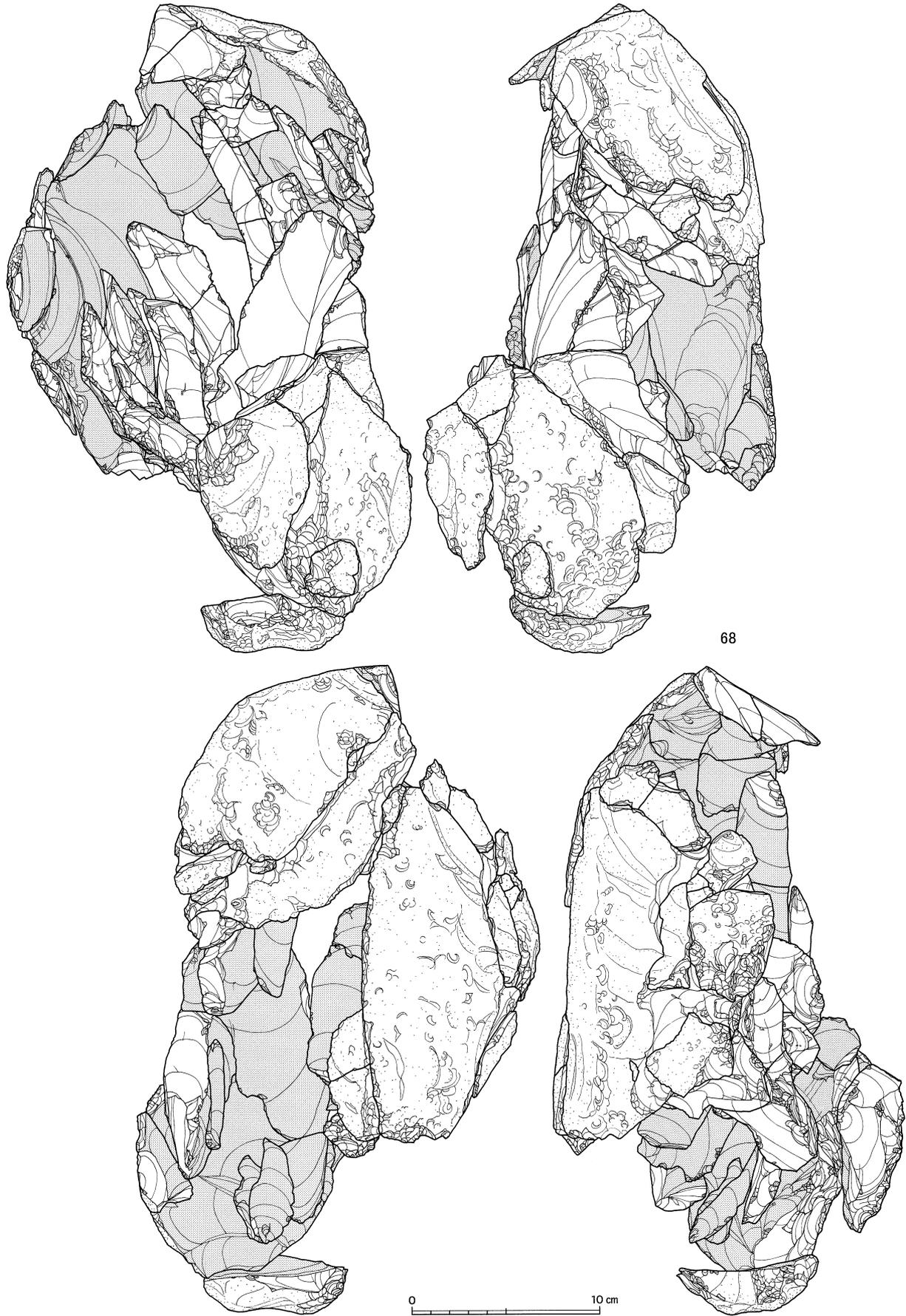
図Ⅲ-112 EH22-25区の石器(21) 母岩145 接合378(2)

2 遺物

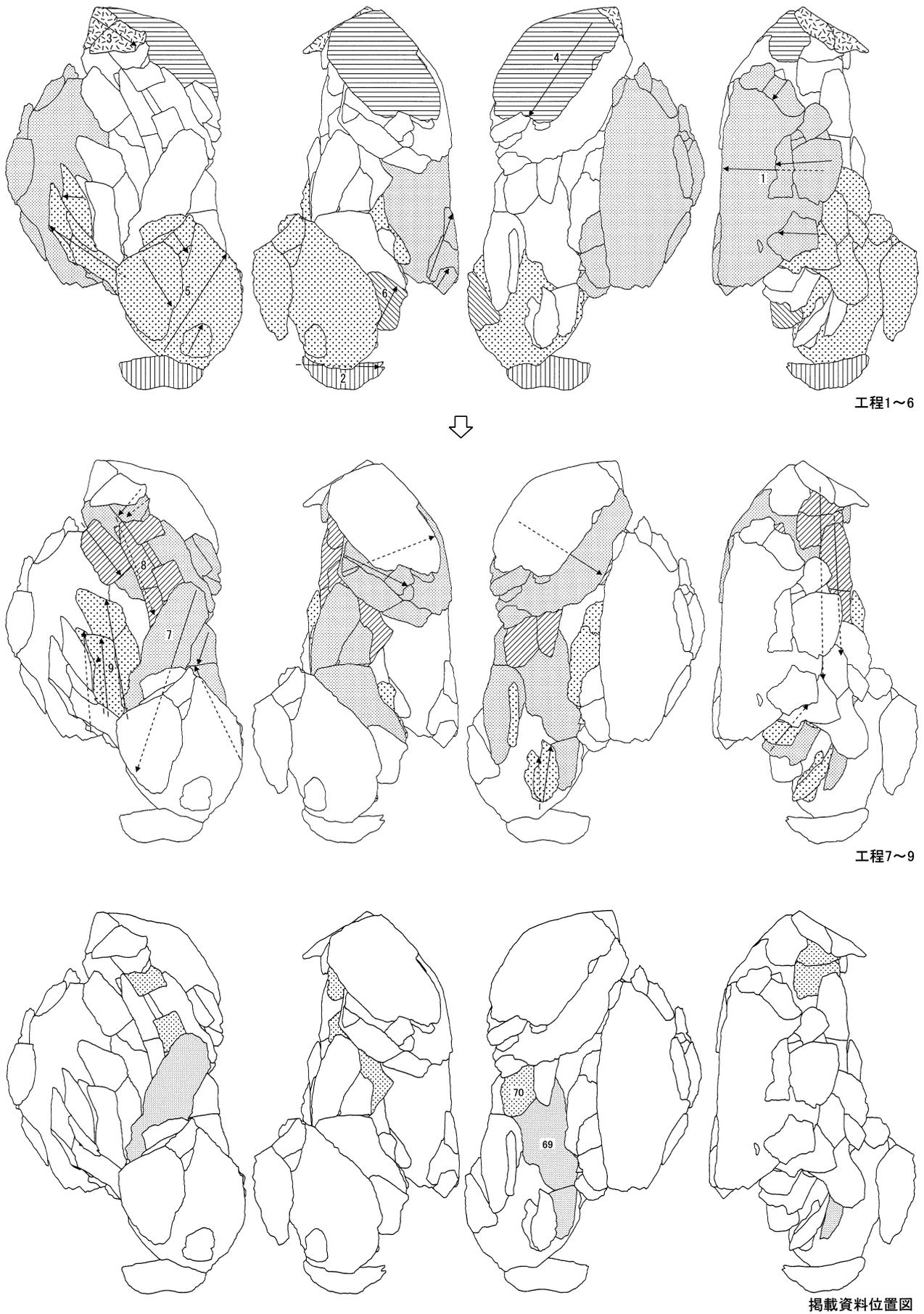


図Ⅲ-113 EH22-25区の石器(22) 母岩145 接合378(3)

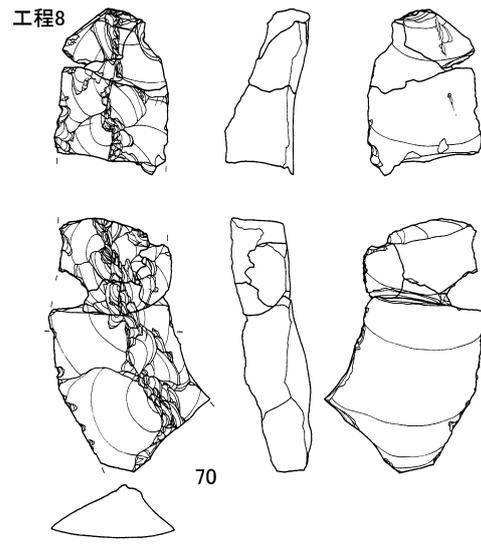
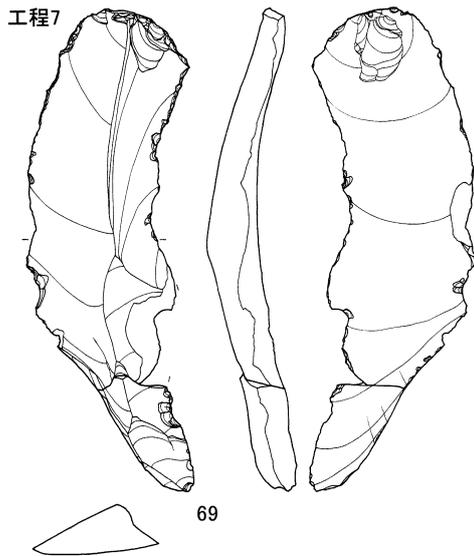
母岩140 接合344



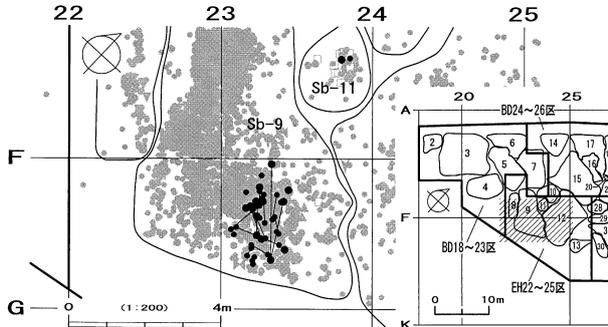
図Ⅲ-114 EH22-25区の石器(23) 母岩140 接合344(1)



図Ⅲ-115 EH22-25区の石器(24) 母岩140 接合344(2)

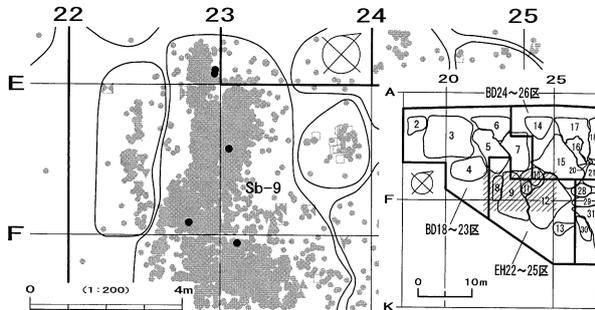


接合344分布図

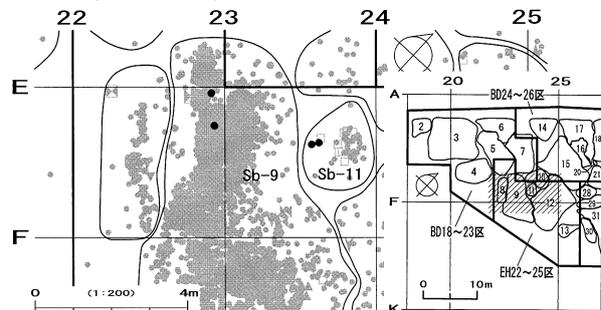


地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)			石質	接合点数	重量
			石刃技法	4	C ii			
EH22-25区	140	344	石刃技法	4	C ii	5	56点	3944.7g
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)				
Sb-9-11	転礫	(35~) × 19.1 × 21.3 cm	粗割原石	34.8 × 19.1 × 21.3 cm				
搬出石器個体数				遺跡内遺棄石器個体数				
BC・CO・MC:1								

母岩 - 接合982分布図



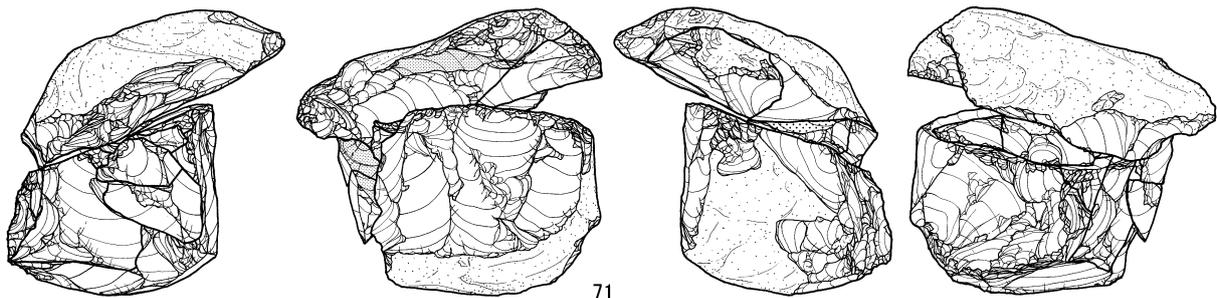
母岩 - 接合987分布図



地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)			石質	接合点数	重量
			石刃技法	4	B v			
EH22-25区	-	982	石刃技法	4	B v	5	5点	242.1g
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)				
Sb-9	不明	不明 × 不明 × 不明 cm	石刃核	(~14) × (~8) × (~7) cm				
搬出石器個体数				遺跡内遺棄石器個体数				

地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)			石質	接合点数	重量
			石刃技法	4	B v			
EH22-25区	-	987	石刃技法	4	B v	5	6点	118.0g
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態	搬入時の大きさ(長×幅×厚)				
Sb-9-11	不明	不明 × 不明 × 不明 cm	石刃核	(~11) × (~5) × (~5) cm				
搬出石器個体数				遺跡内遺棄石器個体数				

母岩146 接合383



図III-116 EH22-25区の石器(25) 母岩140 接合344(3)、石刃技法写真掲載、母岩146 接合383(1)

【工程8・9】石刃剥離を行う工程である。工程8は工程7で作成した稜を作業面として正面で上から行われる石刃剥離である。工程9は工程5で作成した稜を作業面として左側面で下から行われる石刃剥離である。両工程を含め打面部が残存するのは稜付石刃である70のみであるが、打面調整と頭部調整が施されている。最終的な石刃核は調査区内からは出土していない。

**分布** Sb-9・11から出土している。大半の遺物はSb-9の遺物集中範囲の東部にまとまっている。工程2の剥片と工程9の石刃91がSb-11に離れて分布している。

### 石刃技法関連母岩・写真図版掲載資料（図Ⅲ-116、図版97）

#### 母岩別資料一、接合資料982（図Ⅲ-116、図版97-1）

**素材** 92は接合資料982で5点（4個体）が接合し、重量は242.1gである。石質は黒曜石5、原石形状は不明で、石刃核の状態に搬入している。

**剥離工程** 石刃を製作した資料で、剥離技術類型は4Bv類である。搬入された石刃核には横方向の石核調整の痕跡と左側面に下からの石刃剥離の痕跡が認められる。遺跡内では正面と左右の側面で石刃剥離作業が行われている。正面の石刃35のみ打面部が残存しており、前面角が鈍角となるような打面調整のみが施されている。最終的な石刃核は調査区内からは出土していない。

**分布** Sb-9の遺物集中範囲に散在している。

#### 母岩別資料一、接合資料987（図Ⅲ-116、図版97-2）

**素材** 93は接合資料987で6点（6個体）が接合し、重量は118.0gである。石質は黒曜石5、原石形状は不明で、石刃核の状態に搬入している。

**剥離工程** 石刃を製作した資料で、剥離技術類型は4Bv類である。搬入された石刃核には右側に裏側からの石核調整の痕跡と正面に下からの石刃剥離の痕跡が認められる。遺跡内では正面を中心に石刃剥離作業が行われているが、途中厚手の打面再生がなされ、打面位置が1～1.5cm程度減じ、再生前に比べ傾斜する打面となっている。それに伴い、以降の石刃剥離も反時計回りに軸のずれたものとなっている。残存する打面部は打面調整が入念に施され、一部に頭部調整がみられるのみである。打面は厚く剥離開始部はバルブとリップの発達する形状となっており、川西型石刃石器群のものと同様とする。最終的な石刃核は調査区内からは出土していない。

**分布** Sb-9・11から出土している。石刃32・34はSb-9の遺物集中範囲の北西部に分布し、Sb-11の石刃はブロック縁辺部から出土している。なお、石刃33はE23区から出土したⅡ層一括遺物である。

### 剥片生産の母岩別資料（図Ⅲ-116・117、図版98）

1個体（母岩146）のみ図示している。頻繁な打面転移を行う小型の母岩で、石器群は不明である。

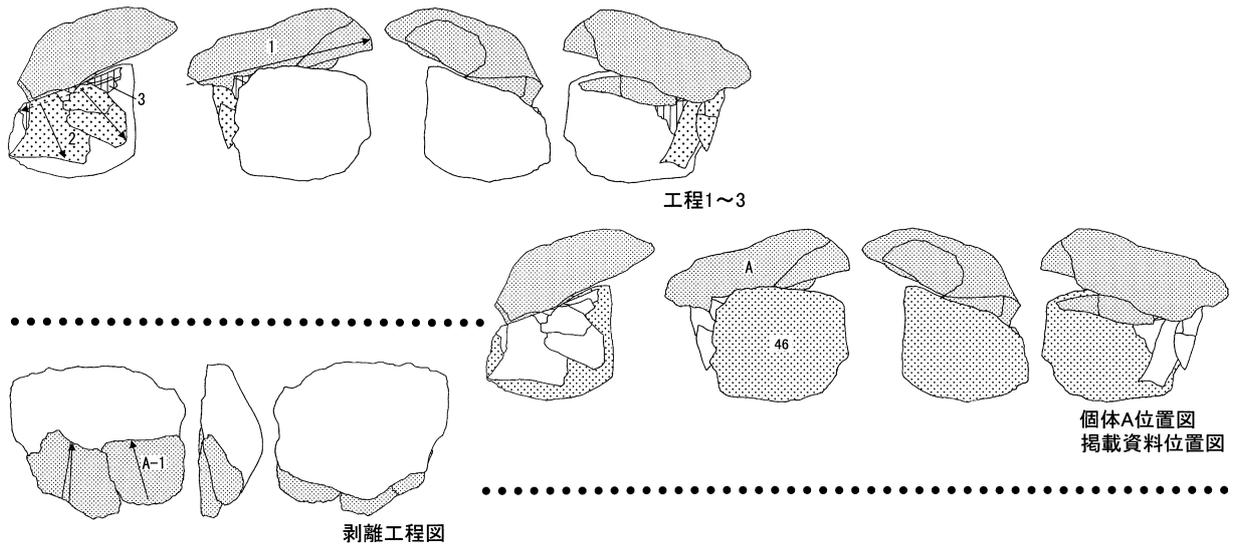
#### 母岩別資料146、接合資料383（図Ⅲ-116・117、図版98）

母岩別資料146は接合資料383のみで構成され、総点数は11点、総重量は1,067.7gである。

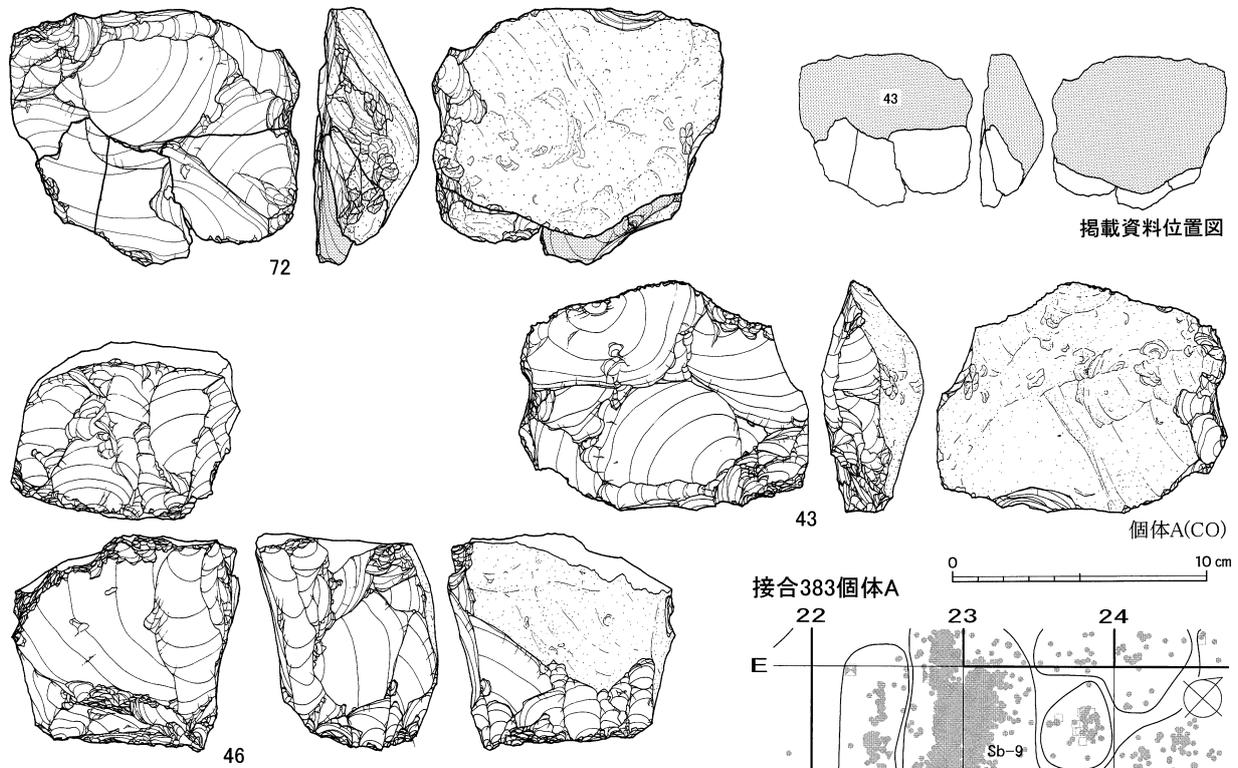
**素材** 71は接合資料383で7個体が接合している。石質は黒曜石5で、転礫を素材とし、粗割した原石の状態に搬入している。

**剥離工程** 剥片生産を行う資料で、剥離技術類型は全体が5Di類、剥片素材の工程が5Bi類である。

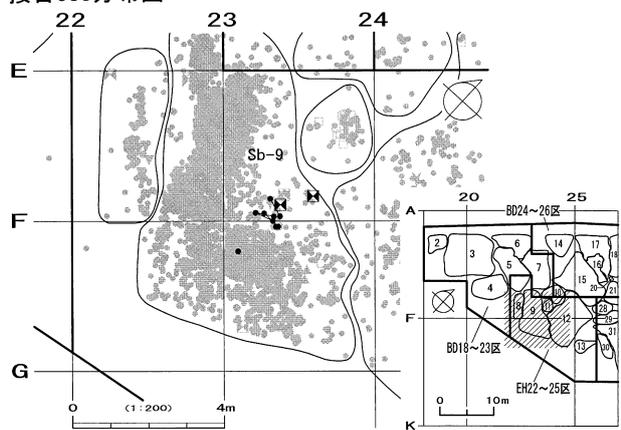
【工程1～3】工程1は上面への大型剥離で、個体Aの素材となっている。工程2は工程1で作出した面を打面とする左側面への作業である。工程3では上面と左側面との角部を利用して縦長剥片が剥離されている。46は残核で、正面に工程3の作業面が残存している。



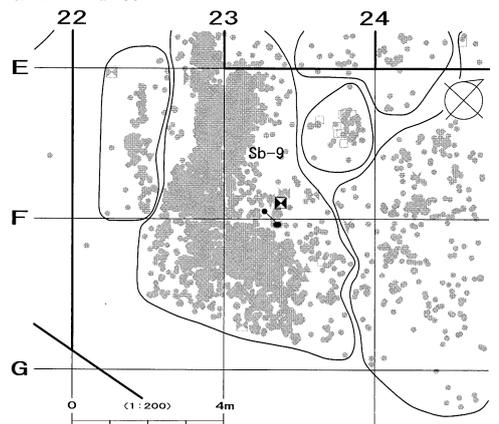
個体A(素材:工程1 FK)



接合383分布図



接合383個体A



地区名	母岩	接合	作業内容(剥離技術類型)		石質	接合点数	重量
EH22-25区	146	383	剥片生産	5 D i	5	11点	1067.7g
			剥片生産	5 B i			
分布ブロック	原石形状	素材原石の大きさ(長×幅×厚)	搬入形態		搬入時の大きさ(長×幅×厚)		
Sb-9	転礫	11.4 × 12.0 × (11~)cm	粗割原石		11.4 × 12.0 × 10.8 cm		
搬出石器個体数					遺跡内遺棄石器個体数		
					CO:2		

図Ⅲ-117 EH22-25区の石器(26) 母岩146 接合383(2)

## 2 遺物

【個体A】72は個体Aの接合状態である。工程A-1は平坦な素材の腹面を主な作業面として上下からなされる剥片剥離である。43は残核である。

**分布** 個体Aの遺物も含めSb-9北部のやや散在な範囲からまとまって出土している。

---

---

(公財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第311集

白 滝 遺 跡 群 XIV

遠軽町 旧白滝3遺跡

旭川紋別自動車道遠軽町遠軽地区埋蔵文化財発掘調査業務報告書

平成27年2月27日

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685番地1

TEL 011(386)3231 FAX 011(386)3238

印 刷 中西印刷株式会社

〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号

TEL 011(781)7501 FAX 011(781)7516

---

---